多岐川恭

江戸の一夜

新潮文庫

多岐川恭

Takigawa Kyô

(1920－1994)

1920（大正９）年、福岡県北九州市生まれ。東京帝国大学経済学部卒業。'58年『濡れた心』で江戸川乱歩賞受賞。'59年『落ちる』で直木賞受賞。'89年紫綬褒章受章。主な著作に『ゆっくり雨太郎捕物控』シリーズ、『氷柱』『用心棒』『色仕掛　闇の絵草紙』『暗闇草紙』『春色天保政談』『レトロ館の殺意』等多数。

カバー装画　百鬼丸

多岐川恭

江戸の一夜

新潮文庫

江戸の一夜

多岐川恭

た 48 8 新潮文庫 640

9784101099187

1910193006408

定価640円（本体621円）

江戸勤番になった実直な侍が出会った妖艶な女。まんまと財布をすられながらも何となく憎からず思っていた。偶然か罠か侍は逢瀬に誘われるが……。「江戸は怖いところだから、お気をつけになるんですね」。生き馬の目を抜く大都市でたくましく生きる女と武骨な侍の妖しくも爽やかな交歓を描く表題作など十六編。江戸の街を舞台に色と欲に狂奔する人々の姿を活写した時代小説短編集。

ISBN4-10-109918-9

C0193 P640E

新潮文庫
多岐川恭の本

用心棒
色仕掛　闇の絵草紙
色仕掛　深川あぶな絵地獄
暗闇草紙
春色天保政談
江戸の一夜

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

江戸の一夜

多岐川 恭著

新潮社

江戸の一夜

多岐川 恭著

新潮文庫

江戸の一夜

多岐川恭著

新潮社版

5603

目次

江戸の一夜……九
出戻りぐせ……三一
ペテン師たち……六五
笑くぼの女……一〇五
淪落……一四三
不義の部屋……一七一
ある御落胤……一九三
隣りも妾宅……二三七
みれん……二五五
渡し場……二八三
酔眼の友……三〇七
夜逃げ家老……三四三
権八伊右衛門……三八一
欺し欺され……四一三
夫の首……四五一
蛇……四七三
解説　縄田一男

江戸の一夜

江戸の一夜

一

大名は参勤交代の義務を課せられていて、一年は江戸の藩邸で暮し、次の一年は領国の居城で暮すというふうに、江戸と国の間を行ったり来たりしている。出府、御暇の時期はみな決まっている。

九州久留米の有馬家では、出府が四月、御暇は翌年四月になっている。

秋野又兵衛は天保のはじめ頃、江戸勤番になって、主君有馬慶頼の御供をし、江戸三田の上屋敷に入った。

又兵衛は二十六歳になる。二十四の年に妻をめとり、男の子が去年生まれている。

江戸勤番は、大体順番になっている。又兵衛が属する御先手組でもそうで、又兵衛は別に上役に頼み込んだりしたわけではない。順番がきただけのことだった。

この機会を逃したら、一生江戸を見ることはあるまいというので、江戸勤番は羨やまれる。

又兵衛は人並みに、江戸に行きたいとは思っていたが、妻子と離れたくない時期でもあったし、気苦労の伴う長い旅がおっくうでもあり、だれかに代ってやってもいいつもりでいた。ところが、ぐずぐずしているのをしゅうとにとがめられ、主命をなんと心得ている、と叱られた。

妻のとめは、親や又兵衛に従順で、一年間、空閨を守らなければならない不満を表には出さず、いそいそと旅支度などをしていた。又兵衛が江戸で、吉原の女を買ったり、性悪な女にひっかかったりするような場面を、想像している気配はなかった。

とめはまだ十九歳で、そんなことにあまり気が回らないところもあるが、又兵衛が元来、堅い男なので、すっかり安心している気味である。

はじめての江戸勤番というのが、又兵衛のほかに何人かいる。道中の旅籠などで寄り集まり、まだ見ぬ江戸の話に花を咲かせていたが、彼等の期待はほとんど女であった。

又兵衛は適当に話に加わっていたが、浮気をする気はなかった。それより、せいぜい江戸を見物して回りたい。広い都会だから、まだまだと思っているうちに、一年がすぐ経ってしまい、多くの場所を見残してしまう結果になっては残念だ。

女は妻のとめで十分である。悪所の女とかかわりを持ち、悪い病気でももらえば、とめに相済まぬことになる。そうでなくても、いかがわしい女をさんざん抱いた体のままで、とめを抱く気にはなれない。

勤番侍の住む所は、上屋敷の邸内である。家老や用人、番頭など重職の者は、邸内でも玄関付きの独立家屋に住んでいるが、又兵衛など平の侍は長屋住いである。現代の単身赴任のようなもので、ただ、掃除洗濯、煮たきそのほかをさせるため、小者か女中を置いている。

又兵衛は国の家から、六助という男を連れてきた。六助は又兵衛の少年時代から居ついていて、又兵衛のことはみな心得ている。

長屋と言っても、裏長屋のようなものではなく、二階建で、部屋は三つあった。

慣れないこととて、長屋に入ってしばらくは多忙だったが、半月も経つと落着いてきた。

勤めは大したものではなく、登城や遠乗りの際に御供をするほか、屋敷内では警衛、宿直をやる。殿様の外出はごくまれであり、屋敷内の勤めは、まず形式であって、あくびを噛み殺すことが多い。

江戸の名所案内の本は、沢山出ている。又兵衛は本屋に行って、二、三、よさそうなものを買い、見物の計画を立てた。

見物は独りで、気ままにすることにした。仲間と連れ立てば、何かとうるさいし、すぐ酒や女ということになりそうである。

屋敷には定府と言って、代々江戸詰めという家来がいる。これは全くの江戸者だから、案内を頼むのにはもってこいだが、案内にかこつけて、たかられる恐れが十分にある。実際、親切めかして売り込む者もいたが、又兵衛はやんわりと断わった。

六助は江戸が気に入らない様子である。見物などという気を全く起さず、一年辛抱して、御暇が出たら、飛んで帰ろうと思っている。

従って、又兵衛の江戸見物にも、あまり賛成ではなかった。江戸の者はみな悪賢くて、油断がならない。田舎者がうろついていれば、かっ払いやスリが目をつけるだろうし、悪い女が袖を引くかもしれないから、出歩くなら、用心しすぎるほどに用心をしろ、食いもの屋などにうっかり立寄ると、目の玉が飛び出すほどの金を取られるから、飲み食いは外でするな、などと老婆心を発揮していたが、案内を頼まず、単独に行動するのは、いい考えだと言った。いよいよ、計画に従って見物を始めたのは、六月も半ばを過ぎてからである。暑い盛りになってしまったが、そんなことは意に介しない。暑いと言っても、久留米にくらべればしのぎやすい。

見物は上屋敷の周囲から始めた。六助に弁当をこしらえてもらい、朝早く出て、夕刻に帰る。一日に十里内外は歩くが、健脚なので平気だ。

三田、芝、高輪から、品川、目黒辺りまで見て回るとなれば、意外に日数がかかる。それに、毎日出られるわけではない。

又兵衛は六助の言葉を守り、昼食をする時にも、なるべく茶店などに寄らず、社寺の境内の木陰や、眺めのいい高台の草っ原などで済ませた。茶も、冷えてはいるが、竹筒を用意している。

一目で勤番者とわかる若い男が、道端のようなところで弁当を使っているのを、通行の男女が馬鹿にした顔で、ジロジロ見て通るが、又兵衛は平気であった。武士は戦陣では、野天で飯を食うもので、さげすんだり笑ったりするほうがおかしいと思っている。茶店でわざわざ茶を飲み、代価を払うのは無駄である。

それにやはり、囲りの目がわずらわしかった。茶店に娘連れなどがいたりすると、目引き袖引きで、クスクス笑う。なるほど、着ているものは粗服で、ゴワゴワした手織り木綿だが、ペラペラしたまがいものより、よほど丈夫で良質だ。

江戸の女は美しい。顔立ちのいい女なら、国にもたくさんいるが、髪型、化粧、変化に富んだ服装、姿のよさなどでは、到底江戸の女には及ばない。江戸では、おさんどんさえスッ

キリ見える。

又兵衛は通りを歩く女たちに目を奪われた。しかし、それはただ無邪気に感心しているので、進んで江戸の女と親しくなりたいとまでは思わない。

同僚は吉原の安い店に上ったり、岡場所の女を買ったりしているようだった。又兵衛も若い男だから、女の肌が恋しくないはずはないが、わずか一年の禁欲ができないようでは、武士とは言えないと考え、やせ我慢をしている。とめも辛抱しているのだと思う。

それに、金は節約して使わなければならない。又兵衛は三十石取りである。江戸勤番の間は、さらに三十石分だけ、金でくだされることになっているから、国にいる時よりもふところは豊かでいられるが、もともとの家禄が少ないのだから、大したこともない。

酒や女に使い捨てるより、たとえ高価でも、とめや、両親、しゅうとに土産物を買って帰ったほうがいい。

長屋では、又兵衛は変り者、付き合いにくいやつということになったが、当人は別段気にかけなかった。

見物の仕方は要領がよくなった。

江戸城の廓内から見付の諸門を見終り、芝口から東に移って、日本橋、外神田辺を見回っているうちに、秋のいい時候になった。

浅草、山谷、吉原という辺りは、両国も含めて、江戸見物の眼目の一つである。又兵衛はゆっくり日数をかけることにして、見物を始めた。

両国の広小路には、ありとあらゆる娯楽が集まっている。両国橋をはさんで、西両国、東両国と、盛り場が二つあり、芝居、見世物、講釈、義太夫、軽業と、ないものはない。水茶屋、料理屋のほか、屋台の食いもの屋がある。居合抜き、独楽回し、手品など、大道芸もやっている。

又兵衛は見世物をのぞいたりするのは好きである。寄席もいいし、小芝居も面白い。のぞいて歩くのは、話の種にもなるので、彼は金を惜しまなかった。

もっとも、木戸銭は十五文、十六文というので、安い。小芝居ではその倍ほど取られるが、葺屋町、堺町の芝居に比べれば、タダのようなものだ。いわゆる江戸三座を見に行こうという気は、又兵衛にはない。

安く物を食うことも覚えた。そばなら十六文、少しいいのでも三十文はかからない。

ほかに屋台の握り、稲荷ずしもあり、一膳めしもある。又兵衛は盛り場見物の時には、弁当を持っていかないことにした。

五日も通うと、東西両国の目ぼしい興行物は見尽した。

又兵衛は両国橋の手すりにもたれ、軽い疲れをいやしていた。汗ばんだ体に、涼しい川風が快よい。

下を見ると、ゆるやかな大川の流れに棹さして、大小の舟が行き交っている。荷舟があり、屋根舟があり、猪牙がある。すだれを垂らした屋根舟の中から、弦歌が洩れていることもある。

いかにも広々とした眺めで、両岸の景色もすばらしい。又兵衛は満足していた。

アッという女の声がしたので、又兵衛は驚いて振り向いた。目に飛び込んできたのは、女の着物だった。

どういう柄なのか、又兵衛にはわからないが、白地に藍の大柄であった。又兵衛は瞬間、朝顔を連想した。

それから女の素足が目に入った。

二

女は小石かなにかにつまずき、下駄の鼻緒を切らしたらしい。足をもつらせ、裾を乱している。女の足は真白だ。

又兵衛は一瞬の間に、それだけを見た。

女は前に膝をついた。その時に、上半身から顔が見えた。

又兵衛は手すりを離れ、倒れかかる女を支えてやろうとしたが、間に合わなかった。

「ああ痛い」

と、女は顔をしかめていたが、そばに来た又兵衛を見て、はにかんだ笑顔になった。

又兵衛は女の美しさに驚いた。ズバ抜けている。肌が真白なのを雪のようだと言うが、その通りだった。それも素肌で、白粉によるものではない。

「怪我はないか」

と、又兵衛は女に聞いた。

「いいえ、膝小僧をすりむいたくらいのものでしょう。ありがとう存じます」

と、女は頭を下げた。年はとめと同じくらいであろう。

「鼻緒が切れては、困るだろう」

又兵衛は鼻緒の予備を持ち歩いているので、それを出してやろうと思ったが、女にも用意があった。端に寄ってすげ替えるため、女は立ち上って歩こうとしたが、膝をいためたのか、足首をくじいたのか、動けない。

又兵衛は肩を貸してやった。

「ご親切に」

と言って、女は目で笑った。最も美しいのは目だな、と又兵衛は思った。彼は女が美しければ、「美しい」で済ましてしまうところがある。細かなところまでは、注意が及ばない。それで人にひやかされたことがあるので、国へ帰ってきょうの出来事を話す時に、女は目がことに美しかった、と言うつもりである。

女を助けて、端に寄りかけた時、小走りで通りかかった男が、又兵衛にぶつかった。それが激しい勢いで、又兵衛は思わず、体の平均を失った。

「往来の邪魔だ。気をつけろ」

と、男は怒鳴ったが、相手が侍だと気付くと、

「済まねえ。お侍だとは知らなかったもんで」

と言いながら、又兵衛を抱き止めるようにした。
「いや、邪魔になったかもしれん。こちらこそ済まん」
と、又兵衛はあいさつを返した。
「お気をつけなさって」
男は笑顔でそんな言葉を残し、また小走りで行ってしまった。
女は器用に、下駄の鼻緒をすげ替えた。又兵衛は横に立って、なんとなく女の手先を見ていた。この女の亭主は果報者だな、という気がする。
「お武家さんはどちらのお方です?」
と、女が聞いた。もちろん、勤番侍だと見抜いている。筑後久留米で、有馬の家中だと又兵衛は答え、江戸見物の中途だとも話した。見物は思いのほかにはかどって、もう半分は見た……。
なにがおかしいのか、女は遠慮気味ながら、声を立てて笑った。
「色っぽいところも、見物なすったでしょう?」
「いや、そっちには行っていない。どうも女遊びは気が向かんので」
「おや、勤番のお侍は、それが第一の目当てじゃないんですか? だれに気兼ねもなくって」
又兵衛はあいまいに苦笑したが、とめのために禁欲しているのだとは言いにくかった。
「奥様がいらっしゃるんですね?」

と、女が聞いた。又兵衛が口に出さなかったことを、推察したのかもしれない。又兵衛はうなずいた。
女は鼻緒を立て終り、下駄に足指を入れ、爪先立(つまさきだ)ってトントンと橋板を踏んだ。膝小僧や足首の痛みはなくなったようだ。
「それじゃあ旦那……江戸は怖いところだから、お気をつけになるんですね」
「お前の名を聞かしてくれんか」
「おや、どうして?」
「こういうことがあったと、覚えておきたいからな。名もわかっていたほうがいい」
「覚えてくださるんですか?」
お園と言うのだと、女は名乗った。又兵衛の名は聞かず、お園はサッサと歩いて行った。その元気な足取りで、さてはと気付かなくてはならなかったのだが、又兵衛はなにか物足りない思いで、ぼんやりとお園の後姿を見送っただけだった。
財布を抜き取られたと知ったのは、長屋に帰ってからである。するとあの時……とすぐに見当はついたが、油断を悔んでも遅い。
だから、ちょっとの隙(すき)も見せないようにと、あれほど念を押したではないかと、六助に叱られても一言もない。
確かに、最初のうちは油断していなかったのだが、何事もないので、つい気がゆるんだのだ。ことにあの時は、お園を助けて歩かせるのに一心になり、ふところの用心はすっかり忘

れていた。そこを狙われたので、もちろんお園と、ぶつかった男とは、組んで仕事をしている。

又兵衛は使い古しの革財布を帯の下に入れ、それとは別に、小銭入れをふところに入れていた。

小銭入れは無事だったが、一両ばかり入った財布は、まんまと取られたのだ。財布に強い紐かくさりを付け、それを帯に巻きつけてでもおけばよかったのだが、スリに財布を抜かれるほど、うっかりしてはいないつもりだった。これも油断だろう。

一両を持ち歩くのは多過ぎるようだが、どんなことで、不意の金が要るかもしれない。その時に文なしでは、恥をかかなければならない。

それにしても、ぶつかった男の捨てゼリフが妙だったと思い当たる。お園も同じことを言った。気をつけないと、またきょうのような目に遭うぞというのだろう。

やはり、山出しの勤番侍は、彼等のいいカモなのだろう。

くやしいのはくやしいが、お園たちのやり方は、こちらの虚を衝いていて、巧妙だ。もとはと自分の不覚だという気持もあって、又兵衛はそれほどお園たちを憎む気にもならず、これも江戸土産だと思った。

見物は相変らず続けた。

六助がうるさく言うので、不意の用に当てる金は胴巻に入れ、安い布製の財布を買って、それに一分以下の小粒や銭を入れた。

両国の次は浅草、花川戸、山谷から吉原、小塚っ原、千住である。

その辺の見物が済むと、上野の山下から寛永寺、不忍池、谷中、根岸から本郷、湯島にかかる。本所、深川は、その次になる。

あれから十日ほども経ったある昼下り、又兵衛は浅草寺境内の水茶屋で休んでいた。

浅草界隈は見るところが多い。浅草寺にしても、広い境内には本堂や五重塔のほかに、三社権現をはじめ、いろいろな堂宇があり、いちいち参詣して丁寧に見回っていれば、それだけでも時間がかかり、疲れる。

水茶屋には、美しく粧った看板女がいる。

又兵衛が休んだ茶屋にも、水際立った女がいて、客に愛嬌を振りまいていたが、又兵衛はふところの寂しい田舎侍と見られたらしく、女はつっけんどんで、しかも口許にいかにもさげすんだような笑いを浮かべている。

しかし、そういうことには、もう慣れている。

若い女客が一人、又兵衛の横に腰をかけたようだが、気にせずにいると、

「旦那、久留米の旦那」

と、肩を叩かれた。驚いて女を見ると、それがお園だった。艶然と笑っている。

「お園ではないか」

と、又兵衛は言った。

「あら、わたしの名を本当に覚えていてくだすったんですね」

と言う。

怒ってお園の腕をとっつかまえ、自身番へでも突き出すべきなのだろうが、腹は立たず、なつかしさのほうが強かった。

「こんなところでお前に会うとはな」

「広いようで狭いでしょう、お江戸は」

「それにしても、どうしておれに声を掛けた。ひっ捕えるぞ」

「そうはしないってお顔ですよ。とにかく、この通りです、旦那」

お園は改まって頭を下げた。

「あの金はどうした」

「もうとっくになくなっちまいました。悪いことをしたと後悔しているんです。あんまりお金がないんでしょう、旦那は」

「あの男はお前の亭主か」

「とんでもない。時々組んで、あんなことをするだけの仲です。なにか埋め合わせをさしてくださいな」

「そんなことはいい。金はあきらめた。お前を知ったので、埋め合わせはついているよ」

「おや、見掛けによらない、乙な殺し文句だ」

と、お園はきれいな声で笑った。目と唇が美しい女だ、と又兵衛は思った。鼻も美しい。いや、それではみんな美しくなる。

看板女が厭な目付きで、こちらを見ている。お園と又兵衛を見くらべるようにしながら、唇をゆがめているが、看板女もお園の前ではすっかり色あせて見える。

「旦那のお名前を聞いておこうかな」

「秋野又兵衛だ」

「苗字はやさしくって、名前は豪傑だね」

「親は豪傑になれと願ったのかもしれんが」

と、又兵衛は笑った。その笑顔をお園は見つめている。

三

「見物は相変らず？」

「着々、やっている。この進み様なら、ことし中に、まず大抵のところは見終るな」

「吉原は？　ここから近いじゃありませんか」

「きょうは無理かもしれんなあ。ちと疲れた。吉原はむろん見物する。上りはせんが」

「秋野さんの見物は、素通りだからハカが行くんだね。江戸の女の味を知らずに帰るおつもりですか」

「おつもりだ」

又兵衛は楽しくなっていた。

それからしばらく、二人は黙って茶を飲みながら休んでいた。

「埋め合わせにはならないでしょうが、わたしに付き合ってくださいな」
と、お園が言った。
「付き合う？　どこへ」
「わりにおいしいものを食べさせるところがありますから。いいでしょう？」
おごってくれるつもりらしい。断わる気にならなかったのは、相手がお園だったからかもしれない。金をひったくったのだから、おごってもよかろうという、いたずらっ気もある。
水茶屋を出ると、お園が先に立った。連れとは見えないように、離れ離れになっている。どこをどう通ったのか、又兵衛にわかるはずもないが、お園が案内してくれたのは、ひっそりした路地奥の、塀に忍び返しのついた茶屋だった。狭い部屋に通されたが、町中とは思えないほど静かだ。
お園は顔見知らしい女中に、何やかや注文していたが、運ばれた料理は、又兵衛が口にしたこともないような、立派なものだった。
又兵衛は正直にそう言った。国の家でも、長屋でも、至って粗食である。
「大変だねえ、お侍さんは。お腹いっぱいにあがってくださいな」
と言いながら、お園はしきりに酒をすすめた。酒の味も極上である。
又兵衛はあまり酒を飲み慣れていない。さされるままにどんどん盃を干しているうちに、したたか酔ってしまった。ごろ寝をすると、お園が女中を呼び、次の間に寝床を用意させ、又兵衛の懐中物を預らせた。枕探しはしないというのだろう。

又兵衛は茶屋の寝間着に着替えて寝たが、お園が手伝った。
一眠りして目が覚めると、お園が長襦袢姿で、横に坐っていた。長襦袢は大きな花柄のようで、濃い藍の絞りである。又兵衛は両国橋でのお園の藍の着物を思い出した。やはり朝顔の感じであった。
きょうのお園の上着は黄八丈だったが、下にやはり藍を使っている。その色が好きなのだろう。襟は白い。
「大分眠ったのか」
と、又兵衛は聞いた。それほどでもない、いまは七ツ（午後四時）前だとお園は答えた。
又兵衛が身を起そうとするのを、お園が上から、フワリとかぶさって押えた。
「わたしの名前だけ覚えて帰ったんじゃあ、つまらないでしょう。中身も覚えてくださいな。自慢じゃないけれど、わたしの体はきれいですよ。悪いことはしているが、体を売る女じゃないんですから」
お園は又兵衛の耳許に口を寄せて、そうささやいた。
「埋め合わせのつもりなら、要らんことだぞ」
「そうじゃありませんよ。好きだからさ」
問答無用が一番だと思ったのか、お園はするすると腰紐を解き、長襦袢を肩から滑り落した。下には何も着ていない。
又兵衛は息を呑んでしまった。肌は白い微光を放っているようだ。とめには悪いと思うが、

肌と言い形と言い、お園がよほど勝っている。

ここまできて、お園を拒む気はない。又兵衛にしても、お園は好きだった。恋々と追駆け回すような始末にさえならなければ、お園を知るのは、いい思い出になる。上々の江戸女を知ることができたという経験は、またと得難いだろう。

又兵衛はそれほど、しかつめらしく考えたわけではない。事実はごく自然に、滑らかに、二人が結ばれただけのことだった。

「秋野さんは、江戸の女に言い寄られたり、色目を使われたりしたことはないんですか」

「あるものか。みんな田舎の勤番侍とばかにしている」

枕を交しながらの話だったが、例えば……と、又兵衛は浅草寺境内の水茶屋女のことを言った。

「ああ、あいつ。あいつは秋野さんの気を引こうとしていたんじゃありませんか。そんな時はわざと邪険にするんですよ、女は」

お園は又兵衛の首筋や背に、しきりに手を這わせながら笑った。

「秋野さんはいい男なんですよ」

床の中でのお園は、とめと全く違っている。どう違っているのか、又兵衛に細かい分析はできないが、とにかく、甘い毒に満ちていた。それに、受身ばかりではいなかった。そうこうしているうちに、夜になってしまった。屋敷の門限は暮六ツ（午後六時）だから、それはとっくに過ぎている。上役に大目玉を食うことを覚悟しなければならない。

もういっぺんだけ会ってくれ、とお園が言った。

「それで、きれいにお別れってことにしましょうよ」

又兵衛は承知した。会いたいのは又兵衛も同じである。もういっぺんきりなら、とめにそれほどやましい思いをせずに済む。

又兵衛はお園に、浅草寺から茶屋までの道順をくわしく教えられた。

三田の有馬家上屋敷に帰り着いたのは、四ツ（午後十時）も大分回った頃である。塀でも乗り越えようかと思っていたが、一応潜り戸の前までくると、戸があいて、仏頂面の門番が顔を出し、黙って入れてくれた。門番のうしろに六助がいて、しかめっ面をしていた。門限後、ずっと待っていたらしい。

六助には油を絞られたが、お園のことは話さなかった。

お園との約束は、三日後の八ツ（午後二時）になっていた。同じ茶屋の同じ部屋だ。道に迷うこともなく行き着くと、顔を見覚えた女中が出迎えたが、なんとなくモジモジし、まあこちらでお茶でも一服、などと言って、部屋に案内しようとしない。お園は来ているのかと聞くと、あいまいにうなずいている。

又兵衛も、女中の妙な様子に気付かないほど鈍くはない。胸騒ぎがして、勝手に部屋に押しかけた。

お園はそこにいたが、男の膝の上だった。お園の胸は引きはだけられ、男は乳房に食らいついていた。お園の裾前もひどく乱れ、男の手が、むき出しになった太腿をつかんでいた。

又兵衛は敷居際に突立ったままでいた。体中が燃えるように熱くなった。男はびっくりして顔を上げ、又兵衛を見ると、

「お前さん、人の座敷に」

と言いかけたが、又兵衛の形相がよほど凄かったのだろう、お園を畳の上に突き転ばすようにすると、あぐらのまま、ジリジリとあとずさった。

お園は丸くなって顔をかくし、又兵衛のほうへ手を合わせて、震えている。

又兵衛は、自分が逆上気味なのを自覚していたが、こういう場合でも、お園や男を斬ろうという考えは毛頭なく、刀の柄に手を掛けもしなかった。

男がお園を真似て、ペコペコと頭を下げだすのを尻目に、又兵衛は部屋をあとにすると、まっすぐ茶屋を出た。すると、横合いから女中が出てきて、

「秋野様、どうぞこちらへ……いえ、わかっておりますから、とにかくどうぞ」

と、又兵衛の腕をしっかり捕えた。女中の腕を振り払わなかったのは、お園がなにか、細工をしたなと悟ったからである。あのお園が手を合わせて、ぶるぶる震えるわけがないし、又兵衛と待ち合わせているその時刻に、ほかの男と乳繰り合うというのもおかしいのだ。

女中に案内されたのは、茶屋の筋向いにある古道具屋の二階である。窓の格子越しに、茶屋が見下せる。

「お園さんは、あのお客さんとはなんでもありません。すぐわかります」

と言って、女中は引返した。しばらくすると、その客が茶屋から出て、あわてた様子でどこかへ姿を消した。そのあとからお園が出てくると、又兵衛がいる二階に顔を向け、ニッコリして近付いてきた。

結局又兵衛は、ツツモタセというものの片棒を担がされたわけである。客は又兵衛がよほど怖かったと見えて、お園に有り金五両を渡した。お園は又兵衛のことを客に、夫同然の人だと言ったそうだ。

「あんなヒヒ野郎から、いくらひったくったって構やしませんよ。お金を全部あげてもいいけれど、秋野さんは厭でしょう。それでも一両は取ってくださいな。埋め合わせなんだから」

と、お園は言い、一両を紙包みにして、又兵衛のふところにねじ込んだ。

「江戸の女ってこんなものですよ秋野さん。油断をしてると、何をされるかわかったものじゃない。いい土産話になるじゃありませんか。あんなやつに肌身を許す気はないんですよ。危なくなったら、ひっぱたいたり噛みついたりで、ツツモタセは御破算さ」

又兵衛はもう一度茶屋に戻り、お園と酒、食事を共にしただけで、きれいに別れた。お園は遠慮したのだと思われる。客と交りはしなかったが、あんなところを又兵衛に見られたのだ。又兵衛にすれば、そんな遠慮は無用なのだが、お園に触れなかったのは、ここで目をつぶって手を切らなければ、大変なことになるという気がしたからだ。

又兵衛にもとめにも、何かあげたいが、わざとあげないことにする、と言ってお園は茶屋からどこかへ行ってしまったが、両国橋の時と同じように、アッサリしたものだった。

又兵衛はそれからも、江戸見物を続けた。しかし、お園に会うことはもうなかった。それでも、どこかでお園が見ている、という気がすることはあった。

出戻りぐせ

一

末高半之助の娘喜代は、小久保新一郎という者へ嫁ぐことになった。

「伯父貴には頭が上らんから、それがせっかくすすめる話を、いきなり断わるわけにもゆかねえ。一応受けておいたが、お前がどうでも気に染まぬからってことにすりゃあいいだろう」

半之助はまず、喜代にそう伝えた。

「わたしは何も、気に染まぬのなんのと、言っちゃあいませんよ。第一、相手に会ったこともなし」

「いや、口実さ。それともお前、そいつがいい男なら、行ってもいいつもりか？」

と、半之助は不足そうな顔をした。

「そいつの親父は五百石取りのコチコチだぜ。新一郎は跡嗣ぎだ。お前は侍なんぞ、厭じゃなかったのか？」

「そりゃあ厭ですよ。でも、お父つぁんは気が早過ぎると言ってるんです。会ってからのことなら……」

「そうか。会うだけは会うか。なるほど、そのほうが、角は立たねえな」

末高半之助は八十俵取りの小普請で、湯島横町の小家に住み、売り物の植木を庭に育てて、盆栽も造っている。刀を錆びつかせまではしないが、まずちゃんとした植木職で、先代からの家業だから、年季も入っている。

蔵米の八十俵などは右から左だが、植木のほうは、かなりのみいりになる。

理由もなく刀を捨てるわけにもゆかないところから、盆暮くらいは、支配向きに顔を出すが、本人は役に付こうなどとは露思わないので、侍仲間の付合いはほとんどない。

家には系図も伝わっていないし、先祖がどうで、どんなお役についていたか、半之助は一向知らず、また知ろうという気もない。

半之助の父半助は、町人風の暮しに終始し、根が好きで、植木職人、盆栽師についてみっちり修業した。それを半之助に伝えたのである。

家には五十年を越す盆栽がいくつもあるが、みな半助の若い頃からの丹精だ。そんなものは後生大事に伝えたが、血筋、家柄といったものについては、息子に何一つ言い聞かせなかった。つまらぬことだと思っていたはずで、その思いは半之助も同じだった。末高の武家嫌いは、どうやら彼の祖父の代から続いていそうである。

祖父について、半之助がわずかに聞き知っているのは、いい家から来ていた妻、つまり半之助には祖母だが、これを離縁したということくらいのものだ。離縁の理由ははっきりしないが、要するにしっくり行かなかったのだろう。祖父の身分や禄高は明らかでないが、かなり奔放で、じだらくな男だったらしく、杓子定規には納まらない。ところが妻は、里親を笠に着ている上、武家気質の凝り固まったような躾を受けてきた。合わないのは当然で、祖父が禄を削られ、小普請入りをしたのは、その離縁がもとだろうという。

その話を半之助にしてくれたのは、母親のりゅうで、りゅうは町家から嫁に来ている。喜代には祖母に当るりゅうは、いまも健在だが、武家の娘を嫌ったところは、半助も親譲りなのだ。

半之助の妻は同じ小普請の御家人の娘だったが、これとて、町家の女と同様の育ち方をしていた。考え方も、物言いもそうである。

夫婦が町人そのものなら、喜代もそのように育つのは自然だった。

喜代の母親は病死したが、りゅうがいる。喜代が出入りする家、付き合う友達も、みな町人であったし、だれもそれをおかしいとは思わない。

客の応対はみな喜代がした。お上手も言うし、愛嬌も使う。それで商売は忘れない。

「わたしが出戻りだって知っているのかしら」

「そりゃあ知っている。知った上のことだから厄介だぞ。大分熱を上げているらしいからの」

と、半之助は笑った。

喜代は十八の年に、町内の瀬戸物屋の総領で、幾太郎という者の許へ嫁いでいる。幾太郎の父親を五助といい、半之助とは植木鉢の関係で取引があり、釣り友達でもあった。

夫婦仲がうまく行かず、二年後に喜代のほうから出る形で離縁になった。

親の五助夫婦が何度も迎えに来たが、喜代は首を縦に振らなかった。弁解めいたことは、だれにも言わなかったが、半之助が推し量ったところでは、幾太郎がどうも煮えきらぬ男で、

遠慮する必要もないのに、小禄の御家人ながら、武家の娘だというので、下手に遠慮をし、それだけなら取りなし様もあるが、憂さ晴らしのつもりか、喜代にかくれて女遊びをするようになった。そのやり方が男らしくないから愛想を尽かした。……ウジウジして、と喜代が洩らした言葉から、それは察しられる。

また、幾太郎のためには、ここで別れたほうがいいとも喜代は思ったのだろう。要するに、幾太郎は喜代にこれという不足もないが、なにか気押されて、持て余したことになろう。幾太郎はその後嫁をもらい、こんどはいいようで、喜代はホッとした。末高と瀬戸物屋の間柄は従来通りで、気まずさはほとんどないし、喜代は時たま幾太郎に出会っても、平気で話をすることができる。

当分再縁などはせぬつもりで、喜代は家業の手伝いをし、二年経った。そこへ半之助の伯父、芝田寛介からの話であった。

使いが来て、半之助は赤坂の屋敷に呼ばれた。あまり顔を出さぬので心配している、碁でも囲みに来いというのだが、急にそんなことを言ってくるのも妙だ。父半助の兄で、二代にわたっていろいろ世話になった伯父だが、半之助は武家屋敷などへ行きたくはない。侍の世界と、なるべくかかわりを持ちたくないのだが、使いを寄越されたのでは、重い腰を上げざるを得なかった。

「喜代を嫁にと望んでいる者がある。良縁だぞ」

屋敷へ行くと、寛介は性急に切り出した。

寛介は六十を少し過ぎた年で、弟の半助にはそれほど似ていないが、大柄で達者な老人であった。御勘定を勤めていたが隠居し、代って長男が出ている。百五十俵取りだが、内福であったし、屋敷も広い。

「そりゃあ、どなたです？」

「小久保と言って、当主の多平は御小納戸衆。家柄じゃ」

家柄と聞いて、半之助は露骨に厭な顔をした。

「伯父上のせっかくのお話ですが、とんでもない。喜代は一度町家へ嫁入り、しかも出戻って来た娘ですからな。ましてお歴々の家とあっちゃあ」

「だからこそ願ってもないではないか。半之助、いったい貴様は、家を興そうという気はないのか。貴様の父がそうだったが、植木屋のような仕事にばかり精を出しおって、根性も町人のようになりおって、それでは祖先に相済まぬとは思わぬか」

思いませんな、と答えたいのは山々だが、口には出せない。

喜代が小久保にもらわれれば、末高の家もそのうちに浮かび上る機会があろう、半之助の長男嘉一は、もうすぐ十五歳だが、小久保の縁で、何か役目に就けるはずだ、と寛介は考えている。嘉一には有難迷惑だろう、と半之助は笑いを覚えた。喜代よりずっと町人らしいの下手で、自分の代になったら、もっと手を広げるのだと言っている。

「小久保殿は、喜代をどこで？」

「あれがうちに来ておったことがあろう。小久保が息子の新一郎と同道で、たずねてくれたことがあったが、その折に見たのよ。ひどく気に入ったらしくての」

「そんなことがありましたか」

喜代がふた月ばかり、芝田に手伝いに行っていたことがあった。忙しいからというのだったが、これもいま考えれば、だれか家のいい武家の息子をあてがおうという魂胆だったのかもしれない。

小久保多平と芝田寛介は、若い頃学問所で知り合った仲だった。親しくなってみると、遠いが姻戚のつながりがあることがわかった。のちに寛介がめとった妻は、多平のいとこに当っている。

「新一郎は容儀もよし、若いに似ず落着いた男じゃ。学問もできる。身持ちは正しい。難を言えば、少々おとなし過ぎようかな。じゃが、わしの見るところ、まず折紙をつけてもよい婿がねだ。それが是非、喜代が望みじゃと言う」

「あんな者がね」

と、半之助は困惑気味に言った。むろん、断わるつもりで、その口実を見つけるのが骨なのだ。喜代の気持は、聞く必要もないと思っていた。

新一郎も、多平はじめ家族も、喜代が一度町家へ嫁入った者であることを知っている。家族から多少不平は出たようだが、真面目一方で、普段は嫁取り話などに耳も傾けない新一郎が、めずらしく進んでいること、それに、小身だが直参の娘ではあるので、芝田の身寄りで

はあり、もらい受けたいということに決まった。

「わしもよい娘じゃとすすめておいた。確かによい娘じゃからな。気性者で、曲ったところがない。美しい。あれで相当の躾さえ受けておったらな。それは貴様などの怠慢で、いまさらどうにもならぬが」

「ともかく、喜代にも言うてみませんと」

「そんな要があるものか。貴様が決めればよかろう。娘は親に従っておればよい。どうもその辺が、貴様も町人じみてきたのだ。喜代に、まさか言い交わしたような男があるのではあるまい？」

「ございません。男には、離縁以来懲り加減のようでして」

「まあよい。話すなら早速に話せ。わしの立場もあることを忘れるな」

二

喜代が小久保新一郎へ嫁ぐ決心をしたのは、父半之助や、大伯父芝田寛介の立場を考えたからではなかった。芝田との親類付合いが絶えようと続こうと、一向構うことではない。半之助がどんな仕打ちを受けようと、痛くもかゆくもないわけだ。武家の世界とは縁を切っても同然で、実のところは程々に繁昌している植木屋なのだ。

すると、新一郎という若者に好意を持ったので、行く気になったということになるが、嫌いな武家の家に入ってもいいと思うほど、新一郎を好ましく思ったのかどうか、その辺のところは、喜代自身にもよくわからないのだった。

当人同士が会うなど異例で、先方にも無礼になる、と芝田寛介が苦り切ったのも押して、喜代は新一郎と芝田の家で会った。余人を交えない。それが聴かれなければ、この話はお断わりする、と言うのでは、寛介も喜代の希望を通してやるほかはなかった。

「あなた様のお宅では、そんな無茶を言う女なら、この縁談はやめにせいとはおっしゃいませんでしたか？」

「は、まあそんなことも」

と、新一郎は苦笑まじりに、喜代の推察が図星であったことを認めた。

「あなた様はどうお思いになります？」

「面白いと思った。当然でもあろう。大事なのは本人同士がこうして面談し、互いの気持を知り合うことですからな」

「わたしは本当は、お武家さんは厭なんです。むずかしい行儀作法も、言葉遣いも、さっぱり知りませんし、いまさらおちょぼ口で、小笠原流をやる気もないんです。下卑た女だとお思いでしょう？」

「お前さんだってお武家さんじゃないか」

と、新一郎はくだけた言葉になり、笑った。

「それは名ばかりで、植木屋ですよ」

「決して下卑てはいないよ。そうでなければ、わたしが望むわけはない。町家の女になり切

っているようで、そうでもないんだな」
「おや、そうでしょうかしら」
「そんなものさ。こちらだって、五百石の旗本で、威儀堂々としているように思われるだろうが、内へ入れば、いずこも同じ家さね。表立ってはしゃちほこ張っているだけのもので」
新一郎は陰のある顔でそう言った。男にしては顔色が白過ぎるが、のっぺりしているのではない。思いの外に目鼻立ちは荒削りで、厭味がなかった。
「わたしのような者が、どうしてお気に入ったんでしょう」
「……そんなことが、一口に言えるものか」
と、新一郎はまぶしそうに目を伏せたが、優しさと気の弱さがにじみ出たようだった。
「あきらめてくだされば助かるんです。わたしは瀬戸物屋に嫁入って、うまく勤まらず、離縁になった女ですから、傷ものです」
「聞いているが、よろしければ話してくれまいか。なぜ離縁に？」
「わたしのほうから出ましたが、なぜと言って、妻の務めが足りなかったのでしょう。どうやら、わたしを煙たがって……」
「なるほど、わかるようでもある。町家へ行くのが無理だったんだ」
「いえ、そうじゃないんです。わたしなんかは、そういう商売の家へ行くほうが似合っているんですから」
新一郎は微笑して、なんとも言わなかった。

別室には半之助が来ていて、喜代を待っていた。新一郎は半之助には会わずに帰った。寛介が新一郎を見送っての話では、新一郎は喜代と親しく会い、いよいよ諦めるわけにはゆかぬからということだった。
「どうじゃ喜代、いい若者であろうが。断わるなどとは申すまいな」
と、寛介がたたみかけるのへ、喜代は、
「参ってもようございます」
と答えた。半之助ははじめ、合点のゆかぬ顔をし、次第に不機嫌になった。
家では、祖母のりゅうも、弟の嘉一も驚き、不平だった。新一郎が三国一のいい男と言うのでもなし、何を好んで木っ端旗本などへ……という思いは、半之助も同じなのだ。
「喜代、もう一度よく考えてみろ。御小納戸衆の奥方というのに目がくらんだのでもあるめえが、それともお前もやっぱり女で、一度は召使いの女中から、若奥様なんどと呼ばれてみてえのか？」
「断わり切れないと思うんですよ。それだけ。それにわたしは、いつかはどこかへ片付かなきゃならない。どこだっておんなじじゃありませんか。町人だろうと侍だろうと、続く時は続くでしょうし、続かなきゃあ帰ってくるまでだ。見栄を張りたいからじゃありませんよ」
「どうやら、その人が気に入ったのかねえ」
と、りゅうは不満そうに首を振った。
「……楽しい暮しなんぞは出来っこないのに」

「出戻ることまで考えていやがる。くせがつくってね」
と、嘉一が憎まれ口を叩いた。

再嫁であるせいか、喜代は行くが行くまで、いつもと変らずに過した。急場仕立ての稽古事などは、すすめられても振り向かなかった。それほど気が進んでいるようにも見えないが、と言ってこの話はどうも……と泣きつきもしないのが、それを心待ちにしている半之助やりゅうを失望させた。

「喜代の考えはわからねえ」
と、半之助が吐息をつく。
「そりゃあやっぱり、ほれたのさ」
と、りゅうは言った。
「……勤まるものかね。じきに舞い戻るに決まっているよ」
小久保の屋敷は市谷御門内、表六番町にある。付近はまず大身の屋敷ばかりだ。喜代は支度も簡素に、小久保へ輿入れした。時候はちょうど春半ばで、庭の植木がさまざまな花を咲かせている頃だった。
五百石の禄高は、大したものではないが、御役料五百石、千石の身代であるし、家柄がいい。屋敷も庭も、びっくりするほど広大だった。
新一郎は思った通りの男で、家族に向ける顔と、喜代に向ける顔は違っていた。屋敷には

多平、いよの夫婦、長女とき、次男平二郎が住んでいる。新一郎は嗣子にふさわしい立居振舞で、両親には恭敬、弟妹には温和、時に厳格というふうだが、喜代と二人でいる場合には、窮屈なかみしもを取ってしまった。
「わたしがお辞儀の仕方も、あいさつの仕方も知らないものだから、あなたはさんざん恥をおかきになったでしょう」
「いや、あれでいい。別に恥なんぞはかかんよ」
と、新一郎は笑った。親類、上役、同僚へのあいさつ回りが大変な仕事で、なんとかやりおおせたものの、喜代はことさら武家流の固苦しさを避け、我流で通してしまったのだ。
万事がそうで、喜代はことに、古くから居着いた女中たちの軽蔑を買ったが、そんなことは覚悟の前である。
「……下手に大仰にやって、それが板につかないと、却って噴飯物だからな。しかし、お前も強情だなあ。意地で町人風を押し立てているようなところがあるじゃないか」
「わざとじゃありませんよ。御両親様には力めて合わせてはいるつもりなんです。それでも、ばかばかしいと思うことがあって」
「そんなことを言うなら、おれは物心つかない頃から、ばかばかしいことばかりやらされているんだ。いいかげんに厭にもなる」
喜代が二十二、新一郎は二十六で、年のへだたりもちょうどいいが、町人の二十六とは違い、新一郎にはまだ子供じみたところが多かった。喜代への心遣い、家族との間の取り持ち

などには、老成したところを示すが、いま一つ、女の気持がわからないような点もあり、性の要求は淡泊で、また喜代を抱く時の仕方は稚拙だと言ってよかった。これまで、女に触れたこともなかったようだ。

喜代にしても似たようなものだが、幾太郎と暮していた経験があり、すでに女らしい成熟に達してもいるので、閨房の生活には一日の長がある。姉さん女房のように、導く形になった。そういう折の新一郎は素直で、喜代に思い設けなかった歓びを与えた。

三月ほどが夢のように経った。当主の多平はともかく、義妹ときとの折合いは、新一郎の努力にもかかわらず、あまりよくなかったが、これは予期したことでもあり、町家に嫁入っても起ることであった。

ただ喜代の場合は、彼女が町人同然の家から、容色を望まれて来た、無教養、無覚悟の女であるという周囲の目があるだけに、ことさら厳しい境遇だったと言える。

ときはほとんど喜代を無視したし、声を掛けたり、何やら親しそうに寄って来たりする時は、困らせたり、笑い者にしようとする他愛もない目的があるからだった。喜代は腹の虫をおさえて、適当にあしらっていた。

義母のいよが、おそろしく権柄ずくの女で、喜代の言うこと為すことに、いちいち難癖をつけ、叱りつける。多平が見兼ねるような時もあったが、多くは女同士の問題だと思うのか、知らぬふりをする。

新一郎に聞いたところでは、いよの実家は父が元の勘定奉行の一門、母がさる大名の家老

格の者の娘であるということだった。おそらく多平は、頭が上らないのであろう。

いよは喜代の手が離せないような時を狙ったように、喜代を呼びつけては、ネチネチとした口調で、武士の妻たる者の心得などについて説き聞かせた。喜代を女中ほどにも認めていないような口ぶりなのである。

懐剣を持参したかと聞かれ、そんなものは持って参りませんと答えると、

「それじゃから、そなたらのような者は困る」

と笑い、さらに諄々と説教が始まる。喜代が家へ逃げ帰る気を起さなかったのは、理解のある慰め手を新一郎に見出したことのほかに、少々のことでは尻尾を巻かないという意地っ張りもあった。いま一つ、これは喜代ははっきり意識してはいなかったが、小久保での暮しを、さほど窮屈には感じなかったということもある。水仕事こそしないが、一日中すべき仕事は山ほどある。働いていれば夢中で、余分な考えごとをせずに済む。いよも喜代が骨身を惜しまず働くのにだけは、難癖がつけられなかった。

喜代は次第に、小久保家の若妻として認められもし、落着いても来た。町風の言語動作は改まらないが、女中がそれについて陰口を叩くことはなくなった。

三

六月十五日の山王祭の当日、喜代は朝から里帰りをした。帰るのは二度目である。新一郎と打合せていて、新一郎は一足おくれて末高を訪れ、一休みしたのち、町人姿になって、喜

代やその一家と、祭りの見物に行くというのである。それなら、だれに見とがめられることもないし、夫婦が連れ立って怪しまれもしない。

本石町一丁目に、半之助のなじみの料理屋があり、山王の山車の見物には毎年そこへ行く例になっていた。今年は一家に新一郎が加わったわけだ。

道へ少し張り出して仮設の桟敷が造られ、そこへ坐ると、常盤橋御門を出て、大伝馬町へ練って行く各町自慢の山車、踊り屋台、花駕籠などがよく見える。

山王の山車をこれほどよく見物できたのは、生れて初めてだと、新一郎は喜んでいた。町人の身なりになっているので、気持まで自由で、そばに喜代を置いて離さない。

新一郎の飾り気のない人柄がよくわかり、半之助はしきりに酒をすすめながら、喜代が小久保を出なかったはずだと思った。おそらく新一郎は、家柄の総領に生れたことを残念に思っているだろう。半之助の境涯も、ほめたものではないが、千篇一律の宮仕えで一生を送るのにくらべれば、なんの気兼もない植木屋暮しがよほどマシだと、羨ましいのかもしれない。武家の型にはまらない喜代をめとったのは、そういう気持の表われとも見られる。

だが喜代は、楽しい思いをしながらも、気にかかることがあった。

小久保から湯島の家に帰る途中、喜代は顔だけを見憶えている男に出会った。道の半ばを過ぎたところで、喜代は乗物と、付添いの中間を帰してしまい、あとは歩いたのだが、向うから来ていた男が立ち止り、わざと大仰な驚き様で反りかえって見せ、

「ほう、植木屋の姐さんか、出世したもんだな。どこの奥方かと思ったよ」

と言った。喜代はその男が、ちょいちょい庭をのぞきに来て、買いもせぬ植木を見て行っていたのを思い出したが、どこのだれともわからず、馴れ馴れしく声を掛けられるいわれもないので、構わずに行き過ぎようとした。

「ばかに急ぐねえ。里帰りかえ？　旦那になった果報者はどんな野郎か、面を拝みたいもんだね」

並んで歩くようにしながら、男はなおもしつこく話しかけてくる。言い方が、虫酸の走るように厭味だ。

「どなたかは存じませんが、往来で女にばかな言いがかりをつけちゃあいけませんよ。無礼ってことがおわかりにならないんですか？」

と、喜代はやり返した。

「へへ、やっぱり玉の輿には乗っても、植木屋の姐さんだ。鼻っ柱の強えこと。地は争えねえな」

喜代は構わずに足を早めた。これ以上からむと、許すことはできないと思った。懐ろには剣がある。その気配を察したのか、男はニヤニヤしながら、喜代を見送った。

二本差していて、身だしなみは悪くない。浪人のようではなく、御家人か、部屋住みで大分悪ずれした者と思われる。着物に派手な模様があった。

帰って半之助に聞くと、彼も男の顔は知っていたが、どこの何者かは知らない。

「お前に気があったのかもしれねえな。植木のひやかしは体裁で、実はお前を張りに来てい

たのだろうよ。まあ、ほっておきゃあいい」

と、半之助は問題にしなかった。

その男らしいのが、本石町一丁目での山車見物の時にも、群衆の中からチラと顔を見せたような気がした。大変な人ごみで、あわてて目で探してもわからない。気のせいだったかと、忘れる頃に、また違う方角から顔を出す。だが喜代は、だれにもそのことを話さなかった。そのうちに、祭礼の華やかな騒ぎと、新一郎とのくつろいだ一刻が、不快な出来事を喜代の頭から追い出した。

新一郎が人に襲われ、斬られたのは、それから三日後の夕刻である。五番町の友人を訪れての帰りで、その場所は友人の屋敷から三町ほどへだたった往来であった。道は細く、右左に曲って、見通しが悪い。あたりはみな屋敷の塀である。

新一郎が襲われたのを見た者は、だれもいない。当時の模様は、新一郎本人の口から聞くほかはなかったが、襲ったのは三人で、待伏せをしていたらしい。三人のうち、一人は浪人風の男で、残る二人はやくざ者のようだった。

浪人風の男は正面で通せんぼをし、いきなり雑言を並べた。その内容については、新一郎は口を鎖した。とにかく、聞き捨てにできないことになった。名を聞いても言わず、何の怨みかと聞いても、冷笑するばかりだ。

新一郎は相手に、刀を抜けと言った。自分も刀の柄に手をかけた瞬間、横合いから竿竹が振りおろされた。これは新一郎の油断と言うほかはない。二人の仲間が左右、ややうしろに

いて、新一郎をうかがっている……それは知っていたが、刀の届く距離ではなく、一人が六尺ほどの竿竹をかくし持っているのには気付かなかった。暮れ方の薄闇のせいでもある。

竿竹は新一郎の手首を打った。瞬間、しびれが来て、手は刀の柄を離れた。待っていたように、相手は抜き打ちにしてきた。

しびれは治らない。左手では刀が抜けない。何度か攻撃を避けたが、頭と肩先のほかに、数箇所を斬られた。その時にもまだ、右手は利かなかった。

浪人風の男は、新一郎を斬り殺しまでする気はないらしく、よろめいて地上に片膝をついたのを見ると、仲間に合図をして引揚げてしまった。そのあわてた様子は、やり過ぎたのを後悔しているようでもあった。

新一郎は独力で一町ほど歩いたが、そこで意識がうすれた。通りがかりの、供を連れた武士が、道ばたに腰を落した新一郎の血まみれの姿を見つけ、万事世話をして、戸板で屋敷に送り届けてくれた。

多平は世話をしてくれた武士にあいさつし、前後の事情を聞いたが、武士はもちろん知らず、名を告げただけで立ち去った。

新一郎は意識を取り戻し、はっきりした口調で話をした。

その男は全く見ず知らずである。従って怨まれる覚えはない。だが人違いではない。

「人違いでないと、どうしてわかるのじゃ、新一郎」

と、多平は聞いた。

「雑言ははっきりわたくしを指していましたから」
「それだから、どのような雑言なのだ」
「口にしたくありません」
「喜代のことではないのか？」
新一郎は首を振って答えなかった。
受けた傷は、いずれも深くはないが、失血がひどかった。新一郎は医者の手当を受けたあと、ずっとうつらうつらしていた。
喜代は義母のいよと共に、枕元に付き切りでいた。
「新一郎は人の怨みを買うような者ではないが」
と、いよは喜代へ当てこすり気味に言った。
「そなたに心当りはあるまいの」
「さあ。人相、風体などがわかりませんので」
と、喜代は答えたが、三日前のことが頭にある。あの男かもしれない。湯島の家から、本石町へ尾けていたことも考えられる。その後、新一郎の屋敷まで確かめたのではあるまいか。新一郎は浪人者のようだと言ったが、それは見誤りで、派手な着流しが、そう思えたのかもしれない。怨みというのではなく、理不尽な嫉妬の末の厭がらせが行き過ぎて、こんな結果になったのではあるまいか。
だが、心当りがあると、いまロに出すことはできなかった。不確かである。

いよは明らかに喜代を疑っている。ふしだらな男出入りもあったろうと曲解しているのは、日頃の言葉の端からも察しられた。
屋敷からは、用人以下数名が現場に行き、付近の家を訪れたりして調べたが、一件に気付いた者すらなく、通行人も出ず、一同は空しく引揚げた。
「……腑甲斐のないやつじゃ。抜き合せもできなんだとはの。刀が抜けねば、相手の刀を奪い取るほどでなくてどうする」
と、多平はしきりに口惜しがっていたが、何よりも気にかかるのは、この始末が公辺に知れることのようだった。不覚悟ということで、必ず何らかのとがめを受けるだろう。どんな理由にもせよ、喧嘩そのものがいけない。
喜代は小久保一家の者に、あくまで手を下した浪人風の男を突きとめようという意志がないのを知った。内密に事を済ませようというのだ。手掛りのないのが、むしろ幸いだったのかもしれない。
「あなた、わたしだけに聞かせてください。その男の顔は、細長いやせ形で、頬がくぼんで、ちょっとおデコじゃありませんでしたか。眉が太くて、鷲鼻で……」
「お前のように、そう細かには見ていないよ」
と、新一郎は弱い声音で、苦笑しながら言った。
「……だが、言われるとそんな顔だった。わたしより少し背が高い」
「着物は紺地の派手なかすり模様？」

「そうだ。思い出した。するとお前の……」

喜代は山王祭の日のこと、湯島にいた時のことを言った。

「手掛りはつかめます。うちに植木を見にくるお客で、その男と知合いか、友達という間柄の者がいるに違いないと思います。父に心当りがあるかもしれません」

「そのことを父上などに話したか？」

「いいえ、まだ」

「話さぬほうがいいだろう。話しても、取り上げてくれるかどうか」

「それはなぜでございます？」

「外聞が悪いからさ。抜き合せもせずに、名無しの権兵衛にやられたというのでは、家名に傷が付く。するとときや平二郎の縁組に響くし、小久保も御役御免になりかねない。なにしろ、足を引張ろうという連中がいくらでもいる。お前がいま言ったようないきさつだと、尚更悪い。だから、目をつぶろうというのさ」

「あなたの御無念はどうなるんです」

「御無念？　大して無念でもないんだ。ばかなやつと思うくらいで。喜代、黙っていてくれ」

四

新一郎が傷のために死ぬとは、だれも思っていなかった。事実、回復は早いようだったが、二十日経った頃から容態が悪くなってきた。高熱が続き、目に見えて体が弱ってきた。

喜代はほとんど眠らないようにして、新一郎を看取った。もし新一郎が死ぬようなことがあったら、その死は自分が招いたようなものだと思う。あの男を決して許すことはできない。最後の数日は、新一郎の意識は混濁していて、口も利かなかったが、ただ喜代が側にいることだけは知っているようだった。やや頭がはっきりした時に、彼は喜代のほうへ顔を向け、安心したように微笑した。

結局喜代は、新一郎の意志を聞くことができなかった。

新一郎は「病死」であった。葬儀が終った夜、喜代は多平といよに、胸に秘していたことを打明けた。

「何と言う。なぜそれを早く言わぬ。いまごろになって」

と、多平は蒼くなって怒ったが、怒りよりも著しいのは、困惑と狼狽だった。

「いまさらどうにもならぬわ。すでに病死の御届を出してある」

「そのようなことであろうと思うていた。何も知らぬ新一郎が哀れな……そなたは疫病神であったな」

と、いよは露骨な憎しみを顔に現わして言った。

「新一郎殿は、そのことを黙っているようにとおっしゃり、男にそれほどの無念は抱いていないともおっしゃったのですが、それは自分が治ると思っていたからでございましょう。最後はやはり無念だったろうと存じます。事はわたしから起りましたので、夫のために無念を

晴らさないでは、わたしも生きてはいられません」
「そう、そなたが仇討ちをするとお言いか。これは一興じゃが」
と、いよは白い目をした。
「芝居や絵空事ではそれもよし、勇ましいことと賞めてもよいが、真実のこの世では通じませぬぞ。また、出来ることでもない。……仇討ちなどと」
「それでは新一郎殿の御無念はどうなるのでしょう。そのままでございますか」
「そなたのような者が、似合わぬことを言うでない。控えなされ」
いよはたまり兼ねたように、金切り声を出した。ここにも喜代は、武家の女というものの嘘と卑怯さを見せられたような気がした。いよは心底から腹を立てているのではなく、単に怖れているのだった。
「わたしひとりででも、仇は討ちとうございます」
「また、そなたは……」
多平は取り乱した妻の姿を、さすがに恥ずかしく思ったのだろう、強くいよを制した。
「喜代、親として申し渡す。仇討ちなどを考え、企ててはならぬ。仇討ちは御禁止ということを、そなたも知っておろう。この父も、無念は新一郎に劣らぬが、いかんせん、仇を討つのは許されぬ。本人を搦め取れば死罪にでもなろうが、こちらもとがめを免れぬ。まして新一郎のざまは恥さらしじゃ。喜代、聞き分けてくれ。わしは小久保家の当主で、第一に家を考えねばならんのだ。病死ということならば、何事もなく済む。そなたも、打ち割って言えば、当家に来て半年にもならず、新一郎が不慮に死んだとて、義理立てをするほどのことはない。そなたの父も、そのようなことは望むまい」
「わたしからも頼みます、喜代殿。ただおとなしゅうしてくりゃ。他人同然のそなたが、新一郎のために身を亡ぼすことはない故」
と、落着きを取り戻したいよが口を添えた。柔らかく言ったつもりなのだろうが、この女の言葉には、どうしても針が含まれるようだった。
喜代は多平の申し渡しに従うと言った。
新婚の日々と同じように、服喪の日々が夢のように流れる。妙なことだが、死んでからのほうが、新一郎は一層身近に感じられた。
家族の喜代に対する処遇は一変した。だれもが喜代をはばかっていたし、いよですら、全く荒い言葉は掛けないようになった。他人行儀になったということでもあった。
喜代は別にその気でもないが、義妹のときや、新一郎に代って嗣子になった平二郎の様子を、面白く見ていた。
ときはいよいよ喜代から離れ、めったに位牌をおがみにもこなかった。ただ、いよと同様に、喜代を刺激しないように力めているのがわかった。ときには縁談が持ち上っていて、彼女はそのほうに夢中だと思われる。ここで家に風波を起されては一大事なのである。
平二郎はよく喜代の話し相手になった。慰めてやろうという気持に裏はないのだが、新一郎の死で家が嗣げるようになり、部屋住みの辛苦を免れたという喜びが、正直に外に出てし

まう。仇討ちなど、もちろん頭の隅にもない。

新一郎の死から二カ月後、喜代は小久保の家を出た。予期していたことで、何一つ未練はなかった。

まだ若いから、他家へ縁付くのが仕合せだとか、ずっと家の者になってもらいたいが、嫁に来てわずか半年足らずで夫に死別し、子もないのでは引き留めるのが気の毒だとか、様々に弁解めいた言葉を聞くのは沢山で、要するに、喜代を早く追い払いたいわけだった。物騒な考えをいつまでも胸に抱いて、居残られては困るのである。

「また出戻りかえ？　くせになると言った通りだったな。どだい、旗本なんぞへ嫁入って、裾をひきずるてえのが間違っている」

と、嘉一が憎まれ口を利いた。

五

元通りの暮しが始まった。喜代は二度出戻って、一段と美しく、顔に深味も増したようで、植木を見にくる客が、現金にもふえた。店の仕事、家内の仕事と、立ち働く喜代の姿は、ただ明るいばかりだった。

半之助は、娘が物騒なことを考えていようとは、露思っていない。新一郎はいい婿で、横死したのは気の毒だったが、結局はそのほうが喜代のためによかったと、胸を撫でおろしている。

「喜代、嫁に行くのはもうこりごりか？」

「そうでもありませんよ。あの人はいい人でしたもの。それでもここ当分はね」

と、喜代は笑った。

「そりゃあ当り前だ。しかし、いずれ行くのが厭でなければ、考えてほしい男がいるんだがね。お前も知っているだろう、よく鉢物を買いにくる男で、勝本次兵衛というんだが、看板書きや代書の内職をしながら、何か戯作のようなものを書いているんだ。これがぼちぼち売れているらしい。ずんぐりして、丸顔で、なかなか愛嬌がある」

「ああ、あの人」

と、喜代はうなずいた。親しみの持てる男だ。気が置けずにさらりと話ができる。ことさら、喜代に近付こうとはしないが、彼女を見る目には、包みこむような温かさがある。

半之助の話だと、同じような身分の御家人で、五年前に疱瘡で妻子を亡くしている。これも刀を邪魔っ気にしている一人のようだ。

「で、その勝本さんから話が？」

「まあ、そういうわけさ。ずっとお前の身の上を案じていたらしくてな」

「お父つぁん、ひょっとして、新一郎さんに斬りつけたやつは、勝本さんの知合いじゃなかったのかしらん」

「そうさな……一度か二度、連れ立って来たような気もするなあ。どうもそうらしい。勝本に聞いてみりゃあわかることだが、それなら勝本は厭ということか？」

「いえ、そうじゃないんです」

その男を見つけ出して討ち果すか、討つと同じほどの懲らしめを与えるかしなければ、自分の気持は納まらないし、新一郎への供養は済まないと思うこと、そうしてはじめて、嫁に行く気になるだろうということを、喜代は打ち明けた。半之助は唖然とした。

「とんでもない考えを起すやつだな。そんな剣呑なことはやめろ。仇討ちなんぞは、左様御尤もの侍共に任せておくんだ。ばかばかしい。第一、相手はいやしくも二本差しだろう。お前のヤットウも知らん細腕で討てると思うのかね？」

「死ぬ気なら討てると思いますよ。わたしはどうしてもそうしますから」

「困ったやつだ」

と、半之助は腕をこまねいた。

「小久保だってウヤムヤに済ませたじゃないか。それをお前が……」

「小久保なんて、あれは武家のかっこうをしているだけのものですよ。お父つぁん、言っておきますけど、わたしは小久保へ行って、武家風がうつったんじゃありません。あくまでも、わたしの気持なんですから」

「わかった。だれに似たのか、お前も一徹だな。やはり血かもしれねえと思うと、怖くなるよ。そう覚悟をされてみりゃあ、おれも止めだてはできねえようだな。仕方がない。やるがいいや」

「ありがとう」

と、喜代は言って笑った。

「わたしたちは武士を嫌っても、所詮は武士のはしくれなんでしょうか」

「どうだかね」

力を貸すとなると、半之助は熱心になった。勝本は本郷一丁目に住んでいて、そこを訪ねると、たやすく仇の名がわかった。木原延五郎といい、三百石の旗本の三男坊だった。無頼の仲間に入って、家から見放され、遠縁に当る医者の許に居候をしているという。勝本が言った。

「そうですか、そりゃあ初めて聞きました。なるほど、喜代さんの言う人相風体にピタリです。いろいろと悪事を働いて、あぶく銭を稼いでいる男ですがね。そんなやつを、どうして友人にしているとお疑いでしょうが、物書きの役に立つからです。木原のようなのを、ひとつ作の中に入れようと思いましてね。お話を聞けば、わたしも手をこまねいているわけにはゆきません。木原をお宅へ連れて行ったのが間違いの元だった。助太刀をさせてください」

「助太刀か。古い言葉だ。どうもこのところ、武張ったことばかり起って閉口だ。その助太刀はいいが、喜代がお願いしますと言うかどうか、わからないよ。ひとりでやっつけるつもりらしい」

「ほう、そうですか」

「何か工夫はあるまいか。木原って野郎を十分に懲らしめるのはいい。実はおれもその気だが、殺したとなりゃあ事面倒だ。小久保の家なんぞは、どうなろうと構わないが、喜代がか

わいそうだと思う」

「はあ。身を亡ぼすこたありませんね。いまの御時世じゃあ、夫の仇を討った貞婦の鑑というわけにはゆかず、小久保でもいろいろもみ消しをするでしょうから、悪くすると島送りにでもされそうだ。……わたしに任せてください。自慢じゃないが、工夫はお手のものだから」

木原延五郎は、何くわぬ顔で店にやってきた。喜代が出戻っていて、元気でいると勝本が告げたのである。木原は山王祭の折の無礼を詫びたり、「御亭主」への悔みを述べたりして、殊勝であった。植木も値の張るのを何本か買った。

喜代は好意のこもった応対をしたが、それが木原を有頂天にしたらしく、広い庭を肩を並べて歩きながら、自分の身の上話をした。

勝本の話とは違い、体裁のいい嘘を半分ほど交えたものだが、ここらでばかな暮しをやめ、医者の修業をして、身を固めようと思う、などと言った。

半之助も出てきて、木原へ愛想のいい応対をした。

木原が喜代をもらいたいと、遠縁の医者同道で末高に申込みに来たのは、十月末のことである。それまでに木原は、何度も訪れて、喜代に会っていた。

「御本人がどうのこうのと言うのじゃない。喜代はむしろ憎からず思っているようですが、なにしろ先夫に死に別れて間もなくだから、しばらくは行く気にならないようです」

「それは来年でも構いません。待ちます」

と、木原は勢いこんで言った。

「いい御娘御ですなあ。さすがは直参の……」

と、医者はほめた。喜代は茶を運んで引込んだだけである。

十一月になってから、半之助は木原を釣りに誘った。向島の料理屋で船を仕立ててくれる。白魚や鯉、鮒の類いだが、寒い頃で、喜代もいることだし、船で釣ったのはわずかの間に過ぎず、昼前には岸に上った。中食には間があるので、岸辺を散策した。半之助と喜代、勝本次兵衛と木原延五郎という連れである。男はそれぞれ、釣道具を手にしている。継ぎ竿は袋に入っている。

薄曇りだが暖かい日で、風も弱かった。喜代は簡素ななかにも細かく念を入れた装いで、ほんのわずか白粉をはたいただけの顔が冴えていた。

「あの辺がよく釣れるところだ」

と、半之助が一同を導いたのは、小さな半島のように突き出した場所だった。彼が木原に釣りの講釈をしている間に、喜代と勝本はややうしろへ退っていた。それを見定めてから、半之助は話を打切り、これも退った。半島の中央には木原だけがいて、あとの三人は根元の三方で、木原の退路を塞いだ形である。

水面をのぞきこんでいた木原が、不審そうに振り返った瞬間、勝本の手許の竿袋が伸びてきて、木原の右手首をピシリと打った。竹竿ばかりでは、それほどの力はないはずだが、袋

の中には、他に金棒のようなものが入っていたのだろう。
「あっ、何をする」
木原は苦痛に顔をゆがめ、うずくまるようにした。半之助が喜代に刀を渡し、喜代と勝本は同時に抜刀した。半之助は脇差を抜いた。
「木原、その手首の痛さには覚えがあろう」
と、勝本が言った。木原は手を上げ、何かしゃべろうとしたが、顎が動くばかりだ。喜代が刀を構えて前へ進んだ。木原は刀を抜こうとしたが、手首はまるで利かない。
喜代は名乗りかけなどはしなかった。いきなり斬りかけるのを、木原は辛うじて避けた。
「待ってくれ。おれが悪かった。あやまる。待って……」
と、木原はわめいたが、喜代は耳にも入れない。激しい気魄で斬り立てる。本当に斬るつもりじゃないか、と半之助、勝本は目を見合せた。
木原は素手で逃げるほかはない。男のほうへ逃げれば、一層危険だ。こけつまろびつ、喜代の刀を避け続けたが、すでに浅手を受けている。最後の手段は水に飛込むことであった。
水しぶきが上り、木原はしばらく浮き上ってこなかった。
「ここが一番深いのさ」
と、刀を納めながら、半之助が言った。
「あいつは犬っかきくらいはできるようだが、まず金槌に近いんでね」
と、勝本が言った時、ようやく木原の頭が浮き上り、流れだした。泳いでいるのかいないのか、わからない。水流は思いのほかに早い。
「思惑通りに行ったな」
と、半之助は笑った。
「……喜代、本気でやっつけるのかと思ったぜ」
喜代は蒼白かった顔に、少しずつ血の色を浮かばせながら、なんとも答えずに微笑していた。

木原の頭は見えなくなった。だが、溺れて沈んでしまったとは決められない。岸へ流れ着くか、船頭に助け上げられれば、生き延びる機会に恵まれるだろう。
「生きりゃあ生き得、死ねば自業自得ってわけだ。末高さん、腹が減りましたね。座敷へ帰りますか」
「よかろう。……おれとしちゃあ、死んでもらわねえほうがいいが、まあ生死は運だから仕方がない。だがあの医者には、ちゃんと事情を話してやったがよかろうな」
「それはわたしがやります。木原はどうせ助かっても、医者の家には寄り付けますまいよ。喜代さん、気分が悪いのじゃ？」
「大したことはないんです。すこし目まいが……やっぱり駄目なんですねえ、女は」
「いやいや。これからはもっと、駄目になってもらいたいもんだが」
勝本は喜代の体を、うしろから支えるようにした。

ペテン師たち

一

瀬能嘉兵衛は小普請旗本で、禄高は三百余石、赤坂溜池の南、新町四丁目に住んでいる。そのあたりは武家地で、小屋敷が並んでいるが、朽ちかけたような門塀が多い中で、嘉兵衛の屋敷のそれは、比較的、新しくて、ガッシリしている。敷地もけっこう広い。

嘉兵衛は五十に手が届くが、妻女のきたはまだ二十九歳、ふっくらとして、初々しさの残った女だ。三度目の妻である。

実子がなく、養子で伊織というのがいる。まだ妻帯していない。

家族はそれだけで、奉公人は用人の深尾源助、中間が二人、上女中が一人、下女が二人。ほかに弥市という料理人がいて、合わせて七人になる。用人も中間も、譜代ではない。

嘉兵衛のような身分で、奉公人を七人も置いているのは、内福である証拠だ。

嘉兵衛に、金を稼ぐような芸はなく、きたの実家が裕福なのでもない。侍が商売をやれないのは当然のことだから、先祖が営々と金を貯め、嘉兵衛がそれを守っていると考えるほかはない。

次第にわかってきたのは、やはり先祖の貯えが基であるということ、嘉兵衛の父親がひそかに金貸しを始め、財をふやしたということだ。

嘉兵衛は父親のやり口を踏襲した。金はもちろん、町人に委託するのだが、金を貸して利を取るばかりではなく、二、三の町人を雇って、商売をさせている。絵草紙屋、水茶屋、道具屋などだが、役人には知れぬように、万全を期してある。

嘉兵衛はこうして、父親の遺産をさらに大きくしたようだ。それだけ商才があり、抜け目がないということになろう。

嘉兵衛は蓄財だけが楽しみの、しわん坊なのではない。時たまは女遊びもし、茶屋酒も飲むようだが、女はまず、後妻のきたで済んでいるようだし、酒好きでもなく、博奕はやらない。

ただ食い道楽ではあって、料理人弥市を置くというぜいたくをしているのも、そのためだ。この弥市は柳橋の茶屋で板前をしていた男で、人柄はともかく、料理の腕はいい。

嘉兵衛にはこれという弱味がなく、取入りにくい男のようだが、ただ一つ、御幣担ぎ、つまり迷信家という変った点があった。

神棚、仏壇は立派なもので、灯明を絶やさず、庭には先祖代々という稲荷の社があって、毎日自分の手で供物をあげる。薬師、不動、地蔵尊など、御利益があると伝えられて流行っている社寺には、まめに参詣に行く。日常でも、あれは不吉だ、これは吉兆だと、うるさい。夢見が悪いと、数日ふさぎ込んでいる。

なにかうしろ暗いことがあって、そのおびえが御幣担ぎにつながっているのではないかという想像もできるが、これはあてにならない。

夫婦仲はよく、嘉兵衛はよほどきたにほれているようだ。きたはどちらかと言えば世間知らずで、おっとりしておとなしく、嘉兵衛に頼り切っている。

養子の伊織は二十四歳になるが、愚鈍とまではゆかないにしても、賢いほうではない。伊織は女癖が悪く、嘉兵衛の目を盗んで、安女郎や水茶屋の蓮っ葉女を、手当り次第に買うし、下女のみつにも手を付けた。

みつを部屋に連れ込んだのを、嘉兵衛が見付け、あくる朝になって叱責したが、伊織はふてくされていた。

その後、みつとの仲を嘉兵衛は黙許してしまったが、これは外で不行跡をやってくれるよりマシだと考えたからに違いない。現在、伊織は一時ほどの放蕩をしないが、嘉兵衛の見込どおり、みつで一応満足しているからのようだ。

みつは大柄で、はち切れそうな体をしており、力持ちだ。顔も十人並みで、越後生れというだけに、色が白い。伊織は人一倍淫欲が強いが、みつはその伊織の上を行く強さだ。

嘉兵衛は伊織に、早く嫁を迎えてやろうと思っているが、いい話がない。伊織もみつという格好の相手がいるせいか、乗り気にならない。

嘉兵衛と伊織の仲はさして問題がなく、嘉兵衛は伊織に、いずれ家督を相違なく譲る気持であると思われるが、それでも実の親子のようにはゆかない。

きたと伊織の間は、一口に言ってぎごちない。きたは露骨に態度には見せないが、伊織を嫌っている。

一方伊織は、きたに他人行儀で、避け気味にする。察するところ、伊織の目に、きたは養母としてではなく、色情をそそるいい女として映っており、それがかえって、遠慮という形

を取っているのだろう。

きたが嫌うのも、伊織の目付きからその胸の内がわかるからだろう。きたは時として、そのことを嘉兵衛に訴えるかもしれず、耳にした嘉兵衛は、やはり快くあるまい。

伊織は実は嘉兵衛の甥で、伊織の母親が嘉兵衛の妹だった。この妹は日本橋横山町の裕福な商家に嫁ぎ、伊織を生んだ。伊織は次男だったそうだ。

きたは嘉兵衛の三度目の妻だ。最初の妻は病死、二度目は暇を出している。二度目までで、嘉兵衛に子種がないことがわかった。

深尾源助は渡り用人ではあるが、ここ六年ほど勤めている。四十半ばくらい、根っからの小心者らしく、大過ないという勤め方だ。嘉兵衛の目をかすめ、少しは余禄にあずかっているだろうが、大きなことはとてもできそうにない。

料理人の弥市は、源助にくらべると油断がならない。柳橋の茶屋の板前なら立派なものだったろうが、そこにいられなかったのは、盗みかなにかしでかしたせいだという。

博奕も好きで、あてがわれた部屋に、同家の中間二人のほか、他家の中間小者も呼び込んで、手なぐさみをしている。

さて、嘉兵衛の身上はいったいどのくらいのものか。それはいまのところ、つかみかねる。

二

瀬能嘉兵衛家の内情を、客の伊織からこれだけ聞き込んだのは、おこんという二十三にな

る女で、嘉兵衛の屋敷にほど近い氷川明神前の茶屋女だ。

はじめは、この助平ったらしい部屋住みから、せいぜい捲き上げようというくらいの気持だったが、寝物語で、親父の嘉兵衛が大層な金を持っていると聞いて、なんとかならないものかと考えはじめた。

おこんが亭主同然にしている男は、榊原采女という、大層な名を名乗っている祈禱師で、麻布市兵衛町に小家を構え、家の内外をそれらしく造っている。

おこんが伊織のことを話すと、

「そいつは面白えな。もうちっと探ってみろ。一芝居打てるかもしれねえ」

と言った。

ところがその頃から、伊織はあまり茶屋にこなくなった。一月ぶりに来たのを、奥の小部屋に引張り込んだおこんが、怨みごとを並べたあと、有り様を聞いてみると、おやじがうるさいほかに、おみつというのがいるから……というのだった。

田舎っぺえの下女がどういいのだと聞くと、こっちがもみくちゃにされるほど勢いがよく、しかも好きで、二度三度と言わず、いつまでもいいので、終いには骨の髄まで吸い尽されそうだと、のろけを言った。

おこんとしても負けてはいられず、おみつが知っていそうもない寝床の手だてを、あれこれと見せてやり、ようやくつなぎとめることができた。そうして、根掘り葉掘り聞き出したのだ。

秋半ばの一夜、市兵衛町の采女の家に、小堀清三郎という若い男がやってきた。

清三郎は元上州安中藩の浪人の子だと自称しているが、実は芝の小商人の末っ子で、親が食いつめた挙句、円通寺坂の専修寺という増上寺の末寺へ小僧に出したものだ。本名は清吉と言った。

清吉は美童だったので、住職は彼の頭を丸めさせず、寺小姓にして寵愛したが、その時分から清吉は、大人に取入る術を身に付けていた。住職のおもちゃになるのは、最初からわかっていたことで、清吉は彼なりの秘術を尽して住職をもてなし、その代わりに金には不自由せず、いい思いをした。

清吉が十五歳になった年に、寺に転がりこんできたのが采女で、当時は直助と言っていた。直助は器用な男で、寺男並みに力仕事をするかと思えば、法事では伴僧に早変りし、ちゃんと経も読んだ。金の出し入れなどは、直助がキチンとし、納所坊主でもあった。

直助はもと、小寺の住職だったらしいが、身を持ち崩したと見える。

清吉と直助は気が合い、直助は三年ばかり寺にいて、暇を取ってしまったが、二人の腐れ縁は絶え絶えながら続いていた。

清吉は十八になるまで前髪を立て、美しい衣装を着た寺小姓でいたが、さすがにトウが立ちはじめ、さかやきを剃って、名も小堀清三郎と改めた。

そのまましばらく勤めたのち、住職から百両ほどの金をもらって寺を去り、もとより正業に就く気はないので、遊びに金を使いはたした末、碁打ちになった。

碁はくろうと並みの住職に仕込まれて、二目なら勝つほどになっていた。檀家の碁好きの家を回っていても、けっこう金になる。賭け碁で相手をまず勝たせ、甘く見させておいて、次にゴッソリふんだくるという手もよく使う。

女たらしは本業のようなもので、専修寺でも、信心よりも清三郎目当で通ってくる町女房や娘を手玉に取っていた。逢引の膳立をするのが直助で、住職ももうけのカスリを取る仕組みだった。

一方直助は、おこんの稼ぐ金を食い潰しながらゴロゴロしていたが、市兵衛町の借家にもっともらしい祭壇をもうけ、加持祈禱の看板を出した。昼間は神官の身なりで威儀を正しているが、夜は奥の茶の間で、おこんの浴衣の上にどてらをひっかけなどして、酒を飲んでいる。

名は榊原采女と改めた。山城守などと官名を名乗ろうとしたが、とがめられてはとおこんに止められ、思いとどまった。

直助改め采女は、抜目なく祝詞の類いもどこかの神道者から聞きかじって、覚え込んだ。祈禱は神式仏式、どちらもやれるわけだ。

客はけっこうある。その家に招かれると、場合場合で神官になったり坊主になったりする。頭は総髪にしているが、坊主になる時には僧正頭巾をかぶる。

もうけはそこそこだが、まだ大仕事というのがなかった。しかし、こんどおこんのもってきた話は、やりようでは大金がつかめそうだ。

折よく清三郎がたずねてきたので、采女は手を貸してくれと言った。

「筋書きをざっと考えたが、聞いてくれ。古い手だと言われりゃあそうだが、存外にシックリといくのじゃねえか」

「なるほど、嘉兵衛の縁起担ぎはいい都合だ。怨霊でも狐でもいいが、そいつが取っ付いて、よくねえことがありそうだと脅し、おめえの出番になるって寸法か」

「いや、それじゃああありきたりで、嘉兵衛は変らねえかもしれねえ。よくねえことを起すんだ、嘉兵衛の身によ」

「……と言ってもおめえ」

酒を飲みながらの相談で、男二人に酌をするのが、横坐りの裾前から、蹴出しや白い足をチラつかせて平気なおこん。采女は肌脱ぎで大あぐら、酒で朱をそそいだ顔は、取り澄ました時とは事変って、目が異様に光り、おこんとひと手合せしたあとで、髪はそそけ立ち、さながら山賊だったが、清三郎のほうは酔っても折目正しく、美貌と相まって、大名の御落胤が舞いおりたようだった。

大筋は、嘉兵衛が何度も、降ってわいた危難に遭いかけ、何かのたたりだとおそれおののくのを見計らって、采女が乗込み、祈禱の力で、たたりの根を絶ち、大枚の礼金をもらったうえ、以後は出入りとなって、嘉兵衛の身を守る、というのだが、まず嘉兵衛を実際にそういう目に遭わせなければならない。

これは、言うは易いが行い難い。何度もとなれば一層むずかしい。

おこんがいい案を出した。嘉兵衛の食べものに、何か入れようというのだ。石見銀山（黄燐剤）でもいいし、笑い茸のような毒きのこでもいい。ふぐの毒でもいい。体の調子をおかしくするのが眼目だから、効かなくては困るが、効きすぎては元も子もなくする。

「客に生薬屋がいるから、そいつに聞けば教えてくれようよ。手近にある草の根なんぞで、毒のあるのが大分あるそうだよ」

と、おこんが言った。

少しあとの話になるが、おこんは言葉どおり、客の生薬屋から、二、三の草木の名を聞き出し、取ってきて汁を搾ったり、煎じたりして用意した。その中には福寿草などもある。

薬を料理に入れるのは、料理人の弥市のほかにはない。

幸い、弥市はやくざな男らしいから、金の匂いを嗅がせれば、尻尾を振ってくるに決まっている。

たたりの根を絶つという細工はどうするか。薬を与えるのをやめれば、嘉兵衛は当然もとの調子に戻るから、それと合わせて、呪い、たたりの証拠というものを、采女がその霊能で見付け、これを除かなければならない。そうしてはじめて、采女のおかげで悪霊が退散した、となるわけだ。

「人形を嘉兵衛の寝間の床の下に埋めるのはどうだろうな。細工はむずかしくねえ。男の人形を手に入れて、嘉兵衛らしい着物を着せ、それに五寸釘を刺しておきゃあ、真に迫るぜ」

と、清三郎が言った。

「その仕事はだれがするのさ。弥市かえ？」

と、おこん。

「家に寝泊りをしているのは、やつだからな。厭だと言うなら、おれがやるほかはねえ。そもそも、おれが嘉兵衛の家に入らなくっちゃあ、話が始まらねえんだ。いい呪師がおりますと言って、直さんを連れてくるのが、おれの役目だ」

「入ると言ったって、伝手が」

「そうだなあ。伝手がねえ」

清三郎は笑いだした。

「おこん、嘉兵衛は碁は打たねえのか」

と、采女が聞いた。

嘉兵衛は碁を打つ。独りで石を並べていることもあり、下手な深尾源助を呼んで何目か置かせ、打つこともある。

「碁友達もいると言っていたが、詳しくは聞かなかったね。なんでも、どこぞのお寺に行くとか」

「それなら菩提寺だろうよ。こいつはいい風向きだ。まんざら清三郎と縁がねえわけでもねえ」

と、采女が合点をした。

そのことは、もう一度伊織に問いただすことになった。

「この仕事で、おれの身の振り方も決まりそうだな。なあに、深尾って野郎を追い出し、おれが用人におさまろうというのよ。好き放題にその日暮しをするのもいいが、そろそろ飽きてきた。宝の山に入って、さてどうするか、そいつはおれの才覚だ」

清三郎はそう言って、うっすらと笑ったが、冷たい笑みが白い細面によく映り、見慣れたおこんさえ、ちょっと見とれるようだった。

三

采女たちの計画には、一つ難点がある。嘉兵衛にもし、だれからも怨まれたり呪われたりするいわれがないとすれば、たたりの根拠がなくなってしまうのだ。いくら御幣担ぎでも、理由のないたたりなどは真に受けまい。金の亡者とは言え、武士だから一応の学、分別があろう。

しかし、覚えはありそうだ。確かに嘉兵衛は神仏にすがっているところがある。それはやはり、怨念から逃れたいからではあるまいか。

采女は伊織が養子になったいきさつに留意した。おこんの話では、伊織は箸にも棒にもかからぬでくのぼうで、嘉兵衛に迷惑の掛けどおしだ。そのうえ、養母に当るきたに、よからぬ思いを寄せているとなれば、縁を切って追い出しそうなものだ。

しかし嘉兵衛がその挙に出る様子はなく、心の中はどうだかわからないが、伊織との仲はかなりうまくいっているという。

それは、嘉兵衛が伊織に対して、なにか負い目があるからではないか。

あるとすれば、伊織の両親にかかわることのためではないか。

おこんはこのことを、伊織の口から聞き出す役目も仰せつかった。

もし伊織が知っているなら、嘉兵衛の蓄財がどれくらいのものか、白状させたいのだが、嘉兵衛が不肖の息子に、そんなことを教えているとは思われない。

……おこんは伊織がくるのを待ち構えていて、いつものように小部屋に連込み、枕を並べた。伊織はあまり元気がなかったが、下女おみつの精の強さを、とうとう持て余したのだとわかった。

おみつは毎晩、伊織の部屋に忍んでくるし、一儀となったが最後、真裸で伊織にまつわり付き、伊織も裸にし、上に乗せ、下に組敷きという工合で、一刻も休ませない。精根尽き果ててしまうが、昼間でもどうかすると、物欲しそうに部屋に入ってきて、それとなくうながす。嘉兵衛が黙認しているので、一層大胆になったのだ。

おかげでおこんは汗をかかずに済んだ。

伊織はそれから何日か置いて、またやってきたが、病気と嘘をついて、おみつを寄せつけていないという。

まず、嘉兵衛の碁友達というのは、専修寺にほど遠からぬ法光寺という天台の寺であることがわかった。瀬能の菩提寺だ。

清三郎は寺小姓の時に、一度か二度法光寺に行ったことがあり、住職が上手ではないが碁

を打つと、師匠の住職が洩らしていたのも覚えている。

それなら、なんでもなく法光寺に行くことができ、碁を打っているうちに、嘉兵衛が訪れることもあるはずだった。

お前だけに打明けるのだが、と伊織は断って、実は親父のことを、よく思っていない、むごい人間だと言った。

采女の推察どおり、伊織の実父の甚右衛門という男は、嘉兵衛を怨んで死んだ模様だった。甚右衛門の家は繁昌した太物問屋で、伊織を瀬能の養子に出した時には、相当の金を持参させた。だがその後、家は左前になり、女房、つまり嘉兵衛の妹が病死したり、家人がボヤを出したりで不運が続いた。

立て直しを図ろうとした甚右衛門が、嘉兵衛に借金を申し込んだ時、嘉兵衛はすげなく断ってしまった。甚右衛門としては、伊織の持参金の額くらいは、貸してくれて当然だと思ったのだ。苦しい事情も話し、いま金が手に入らなければ店はつぶれると懇願したのだが、嘉兵衛は首を縦に振らない。

甚右衛門はそれから病みつき、二十日と経たぬうちに死んだが、当時はわざと食を絶ったというわさも流れた。

家は人手に渡り、一家は離散して、伊織は兄たちの消息も知らない。甚右衛門は息を引取るまで嘉兵衛の仕打に怨みごとを並べていたそうだ。

伊織は甚右衛門の死目に会わなかった。当時はまだ子供だったが、嘉兵衛は伊織に何も知らせまいとしたようだ。しかし、うわさはどこからともなく耳に入ってくる。

甚右衛門の葬式は盛んだったが、これは嘉兵衛が万端の金を出し、故人の怨念を和らげようとしたのに違いない。

これで、人形を床の下に置いたのを、伊織の仕業にすることができる。そうする理由が十分にあるのだ。

深尾源助の行状について、伊織は耳寄りのことを教えてくれた。源助は律義者のようでいて、案外に小ずるいところがあるという。

これは弥市がおみつに教え、おみつが伊織に言いつけたのだが、水茶屋や道具屋を嘉兵衛に任されている者と結託し、売上げをごまかし、その分を山分けしているのだという。どこまで本当かわからないが、あり得ることだろう。清三郎のためには、いいネタだった。

嘉兵衛の蓄財の高について、やはり伊織は知らなかった。千両はあるだろうと言ったが、そこが伊織の鈍なところで、それどころではないはずだ。

聞込みはそのくらいで十分だから、いよいよ取りかかることになる。しかし、この計画は気長にやらなくてはならない。清三郎が瀬能の家に食らいつき、嘉兵衛の気に入りになるまでは、少くとも一年はかかる。

「清三郎の野郎、家を乗取るつもりだぜ。あのやさ男が、考えることは図太いや。だが、うまくいくかどうかな」

「伊織と用人を追ん出してから、嘉兵衛の女房でもろうらくするつもりかねえ」

「まずそうだろう。女にかけちゃあ腕に覚えのある清三郎だ。女房を自由にした末には、嘉兵衛を殺そうってお定まりだ。その女房が難物かもしれねえ」

「清さんのうぬぼれも、ちょいと気に障るじゃないか。わたしは清さんが女房に振られたほうが、胸がすくよ」

「ははは、欲のねえことを言うじゃねえか。嘉兵衛の家が清三郎のものになってみろ。こっちだって左団扇にならあ」

「弥市ってやつがいるよ。邪魔だねえ」

「いずれは、カタをつけなくっちゃなるめえな」

采女とおこんは、そんな寝物語をした。

十二月に入ってから、清三郎は手土産をもって専修寺を訪れ、昼下りから夕刻まで、ゆっくりしていた。

住職は大分年を取り、足もやや不自由になっているので、他出などは弟子の僧に任せている。だが子供好きの癖は止まぬと見え、十二、三歳ばかりの稚児が世話を焼いていた。

清三郎は住職と碁を囲みながら、さりげなく法光寺のことを話題にのぼせた。法光寺とはあまり行き来がないが、それというのも、碁が下手で面白くないからだ。お前が行って教えてやるがいい、お前のことは、ひょっとして覚えているかもしれぬ、と住職は言い、念のためにと、ざっとした手紙を書いてくれた。

清三郎は数日後に法光寺に行き、叩き据えるような碁の打ち方をして、住職をくやしがらせた。そうしながら、一方では機嫌を取るのも忘れない。またこいということになった。その年のうちに、清三郎は出入り自由になり、碁を教える形になった。もちろん教授料などは取らない。

法光寺庫裡で瀬能嘉兵衛に会ったのは、翌年の松の内だった。

四

清三郎はおとなしやかで、しかも物言い、立居振舞にキッパリしたところがある。嘉兵衛にはあくまで恭敬の態度を崩さない。碁を打っても無茶勝ちはせず、三局に一局は勝を譲った。ここはこうしたほうが……と、教え方も遠慮を旨としている。

嘉兵衛にすっかり気に入られ、信用されるのに、大した手間は取らなかった。

どうせ遊んでいるような身の上だからと、身軽に雑用を果してやる。

自分は年少の頃からひねくれて、悪いやつの仲間に入り、無頼な暮しもした者で、ようやく目が覚め、まともになろうとしているところで、お買いかぶりになっては困りますと嘉兵衛に話したが、これは空々しい嘘をつくより、嘉兵衛の心を動かしたようだった。

妻女のきたは、最初は清三郎の男ぶりに驚き、やや気を許さぬふうだったが、これも次第に打解け、清三郎を歓迎する様子を見せはじめた。

清三郎は伊織のように、胸の内を見透かされるようなヘマは決してやらず、思わせぶりな遠慮もせず、明るい顔できたに接するので、きたも彼の男くささを忘れてしまう。

それに、清三郎は世上の変った話をいろいろ知っていた。きたは話を面白がった。

嘉兵衛はきたにとって、かなり退屈な男のようだから、清三郎がくると、その退屈がまぎれる。

嘉兵衛は中肉中背、顔の輪郭は丸く、温顔だった。話しぶりは少しせわしなく、粗忽者のような感じもあるが、よく動く目に、抜け目なさがうかがわれる。

きたは二十九だというが、せいぜい二十四、五にしか見えない。豊頬に薄い血の色が差し、髪の生え際などに、色香が匂っている。立姿がよく、すんなりとたおやかな肢体が想像される。ともかく、清三郎が見当をつけていた以上の女っぷりだった。

弥市とも顔なじみになり、深尾源助にはこちらから親しみを見せ、進んで用を足してやったが、そのうちには金集めなども含まれている。嘉兵衛は持ち金を十人以上に貸しており、源助ひとりでは手が回り兼ねることがあるのだ。

清三郎は嘉兵衛の碁の相手ばかりではなく、手伝いのために、頻繁に瀬能家を訪ねて、だれもそれを怪しまないようになった。

「そのようにばかりしていては仕方がないのう、清三郎。仕官の口でも世話をしてやりたいが、なにしろ当のおれが無役でブラブラしているのだから、これは無理だ。と言って、当家に奉公というのもなあ。そなたの食扶持くらいはなんでもないが、はたがうるさい。貧乏旗本が、奉公人を抱えすぎると、吹聴するやつがあるので」

「ありがとうございますが、お心遣いは無用に願います。そのうちに小金を貯め、刀を捨てて商人になろうと思っております」

「そうか。何を始めるか知らんが、その時は何分の助勢はするぞ」

二人の間に、そんな話が交されたりもした。

金貸しに回している金が、合わせて千五百両、町人に出させている店が五店で、沽券が合計八百両、屋敷内に納まっている金が千両で、すべて三千三百両だ、と清三郎はあらましの計算をした。月々のもうけは三十両を越すかもしれない。当らずとも遠からずだろう。

六月末のある夜、夕飯を振舞われての帰り、清三郎は弥市を連れ出し、永坂の小料理屋に入ったが、そこに栄女とおこんがきていた。

やはり弥市は呑込みが早かった。

「どうもうさんくさい野郎だと思っていた」

と、弥市は清三郎を指さして苦笑いをした。

「まかり違えば首が飛ぶが、やるかえ」

と、栄女が聞くと、それは分け前次第だと弥市は言った。

「百両にはするつもりよ。嘉兵衛には百両なんぞ、屁でもなかろう。だがまあ、百両として、四人だから二十五両ずつ。それで文句はなかろう」

「冗談を言っちゃいけねえ。二十五両で命を捨てられるものか。かんじんの仕事はおれがするんだぜ」

「二百両なら二倍の五十両になるじゃねえか」

「嘉兵衛は財布の紐の堅えやつだ。二百両も出すものか」
「だがな。こうして打明けた上からは、是非とも仲間に入ってもらわなきゃならねえんだ」
と、采女の声がやや凄味を帯びた。
「わかっていらあ。もうちっと色をつけてくれ」
「わたしの分から十両譲ろうじゃないか。三十五両ならいいだろう」
と、おこんが言った。
「礼金の高はどうでも、おめえの分は必ず三十五両。それでウンと言いなよ。勘付かれるおそれはまずねえからな」
と、清三郎。
弥市は承知した。
「まだ帰るのは早いだろう。わたしに付いておいでな。うちで、いい女を抱かしてやるから。揚げ代も酒代も、わたしが持つよ」
「そいつはありがてえ。同じことなら、姐さんのほうがいいんだが」
「おめえもよく言うぜ。こいつはおれの恋女房で、こいつはよくっても、おれが不承知だ」
「なるほど、そんなこととは知らねえもんだから。おっかねえ面をしなさんな」
弥市は笑っていた。いかにも板前らしい、苦味走った男で、引緊った五体と浅黒い肌色をしている。まともに渡り合っては、采女などには分がなさそうだ。
弥市がおこんから預かった毒薬を使い出したのは、秋口からだった。はじめの頃は試しで、

薬は毎度違ったのを使い、その分量を多くしたり少なくしたりした。
料理作りの最中には女を寄せ付けないので薬を入れるところを見とがめられる恐れはなかった。料理でも味の濃いものに入れる。味が変ったり、苦味、辛味が出てはならない。
嘉兵衛は薬入りを食っても、おおむねケロリとしていた。少量ではまるで効果のないのが多いようだ。
思い切って量をふやすと、たちまち効きめが出た。症状は胃痛、吐気、目まいなどを起し、胸が苦しくなる。気がたかぶり、夜眠れなくなる。
薬によって、同量でも効果が強かったり弱かったりする。
ようやく要領がわかるまでに、嘉兵衛は二度ばかり工合が悪くて寝た。二度とも数日で回復したが、病気の原因は医者にもわからない。食当りだろう、で済んだ。
すぐ胃にくるものは避けたほうがいい。胸苦しさ、悪寒、目まいや熱などを起させる薬のほうが目的に適っている。弥市は薬を選び、その適当な量を、続けて嘉兵衛に与えはじめた。
嘉兵衛は目立って元気がなくなり、落着きもなくした。食が進まなくなり、弥市のうかがったところでは、きたとの夜の事も跡絶え勝ちになった。
怒りっぽく、不安そうになり、夜はなかなか眠れず、眠ってもうわごとを言う。
ちょっとした物音、人声、犬の啼き声にもひどく驚き、おびえを見せるようになった。
様子を見て、しばらく薬をやめると、夢から覚めたように元気を取り戻す。
また薬をはじめる。すると同じ症状が再び起る。何日か続けて、やめる。そういう操作を

弥市は繰返した。

弥市に疑いはかからなかった。きたはなんともないのだ。これは嘉兵衛の汁や菜にだけ入れるのだから、当り前の話だった。

清三郎は相変らず、ちょいちょい訪れて、嘉兵衛が見込みどおりになってゆくのを確かめた。

碁を打っても全く身が入らず、中途でやめてしまったりする。頭が重く、耳鳴りがすると言って、突伏すこともある。清三郎が急に咳でもすると、飛び上りそうになる。目の色がふつうと違ってきた。

「夜などは胸が妙に苦しくてな。このまま死んでしまうのではないかと思うこともある。死霊にでも取り憑かれたような」

と言って、嘉兵衛は目玉を落着きなく動かした。

「おかしゅうございますね、御壮健なお方が……召し上るものに何か」

「いや、弥市の作るものにソッはないはずじゃ。毒味もしてくれるからの。怨霊ということもあるまいが」

嘉兵衛は言葉を濁したが、もしやと思い始めたのは間違いなかった。

果して嘉兵衛は信心に狂奔しだした。方々の社寺、稲荷にきたや奉公人を代参にやり、護符をもらってくる。自分も茅場町の薬師や目黒の不動に出掛ける。法光寺に祈禱を頼むほか、伊織ときたを伴って青山の高徳寺に行き、その墓地に葬られている伊織の実父甚右衛門の墓

前で経を上げてもらった。甚右衛門の命日というのではない。

これは嘉兵衛が、彼に怨みを残して死んだ甚右衛門のたたりが身に及んでいると思い込んだことを裏書している。

師走の半ば頃、弥市が采女の家に忍んできた。清三郎も来合わせていた。

「潮時だぜ。嘉兵衛は妙な婆あや山伏なんぞを呼込みはじめた。法光寺も高徳寺もてんで役立たずよ、ふふふ。そろそろ千両役者の出番じゃねえか。ところで例の人形はどうした？」

と、弥市がうながした。

「抜かりはねえ。見ろ、妻えだろう」

采女は丈一尺ばかりの人形を、押入れの行李の中から取出した。髪は銀杏で、黒の紋付に袴を着ている。胸に小柄が深くささり、着物は血の色に染まっている。人形の顔が真に迫っていて、苦しそうに白目をむき、色あせた唇から血が垂れている。

「どこでこんなものを……人形とは言いながらゾッとするぜ」

「どこだっていいやな。こいつを床の下に埋めりゃあ、用意万端整ったってもんだ」

弥市は気味悪そうに人形をつかみ上げ、ふところに仕舞った。胸はふくらむが、人形の頭はなんとかかくれる。

「なんだか臭えじゃねえか、この人形は」

「ちょっとまじないをしてある。気にするな」

と、采女は言った。

五

「さし出たことを申しあげるようで、恐れ入りますが」

と、清三郎が榊原采女の話を持ち出したのは、暮れも押し迫った二十一日のことだった。このところ雪はないが、寒気がきびしく、嘉兵衛は火桶にかじり付き、着ぶくれした体を縮めていた。顔色が悪く、頬がこけ、目はうつろだ。

憑きものを落したり、怨霊を退散させるのに、榊原采女は妙を得ていて、頼みにくる者も多いが、気まぐれな変り者だから、自分の意に添わなければ、大官の頼みも聞かず、金をいくら積んでも動かない。また法外な礼金を吹きかけるから、彼の法力を知っている者でも、二の足を踏む。しかし、祈禱に験のあることについては、例えばある商家の旦那が病みつき、頭も上らないようになったが、何かのたたりだろうとは思われるものの、一向心当りがない。

そこで采女を呼んで祈禱をさせたところ、一心に祈ったあと、どうも庭に面妖な悪気があると言い、庭に出てあれこれ見回っていたが、この楓の古木の根元を掘ってみるがいいと言った。家の者が半信半疑で掘ったところ、猫の死骸が出てきた。そのしゃれこうべに傷がある。調べてみると、一年前に行方知れずになった隣家の猫で、塀を越えてきては悪さをするので、奉公人がつい叩き殺してしまい、外に捨てに行くわけにいかないので、庭に埋めてしまったというのだ。

猫を殺した奉公人は病死しているが、それだけでは猫の怨みはおさまらず、次に旦那を呪いにかかったのだと、事情が明らかになった。そこで旦那は猫を改めて厚く葬り、隣家にも詫びを入れた。そうすると、旦那の病気は薄紙をはぐように快方に向った。

清三郎の作り話は語り口が巧妙で、嘉兵衛の気が動いたようだった。

「あまりあてにはなるまいが、そなた、知るべなら迎えに行ってくれるか。たたりがやめば、礼金は思いのままに取らせると言うてな」

「はい。しかし、万一効験がありませんと、わたくしが……」

「よいよい。溺れる者は藁をもつかむということよ。この何とも言えぬ工合の悪さは、余人にはわかるまい」

一方弥市は、床下に人形を埋める仕事を終えていた。骨も凍るような深夜、吹きさらしの床下にもぐり、音のせぬように穴を掘るのは、容易なことではなかった。三日かかってなんとかしおおせた。人形は桐の空箱があったのへ入れ、蓋をした。

蓋をする前に、黒文字の小楊枝を一本中に落したが、この楊枝はおこんの茶屋で客に出すもので、頭に三本の筋を刻み入れてある。

これは清三郎の案で、楊枝を伊織のものと人に思わせるためであった。伊織なら、おこんの店の楊枝を襟元に挿していて不思議はない。人形を箱に入れる時に、襟から抜け落ちたのだということになる。

二十六日の昼過ぎに、采女はあんぽつ駕籠を雇って瀬能家に乗りつけた。駕籠脇には清三郎が付いていた。

采女は僧衣を着し、金襴の袈裟をかけ、同じく金襴の僧帽をかぶって威儀を正していたが、駕籠をおりて門内に入るとすぐ、何かにたじろいだように二、三歩後ずさりし、それから両手を高くかかげて数珠を押しもみながら、口には念仏を高らかに唱え、石畳の上を一直線に玄関に進んだ。

嘉兵衛は奥にいたが、きた以下の者が迎えに出ており、どぎもを抜かれたように采女を見ていた。采女の所作は、悪気の充満した中を突き進むといった趣きで、うめえもんだと、清三郎は舌を巻いていた。

采女はまず仏壇、神棚、かまど神に礼拝してから嘉兵衛の待ち受ける書院に通った。

ろくろくあいさつもせず、嘉兵衛に正対して、その顔を長い間熟視していたが、

「これは……容易ならぬ」

とつぶやいた。

「やはりなにか、わしに悪いものが」

嘉兵衛はうわずった声を出した。それにはわざと答えず、大きな空火鉢を奉公人に運ばせ、持参の護摩を焚きだした。異様な匂いと共に、おびただしい煙が立ちのぼる。嘉兵衛は煙にむせて、何度も咳をした。

書院は嘉兵衛一人にし、采女は数珠をもみ鳴らしながら、ダラニというものを唱えだした。これは全く意味不明の呪文である。

これを何度も繰返したあと、読経にかかった。大方の経文は暗記しているのが、采女の強

味であった。

采女の芝居は細かく、途中で声を跡切らせて、苦しそうに背を曲げたりする。

「きょうはこれにて」

と、采女が言った時には、祈禱を始めてから一刻半（三時間）ほども経っており、采女はふらふらとうつぶせに倒れてしまった。

嘉兵衛のほうがむしろしっかりしていたが、これも大声で人を呼ぶと同時に、体の重心を失って横倒しになった。書院には煙が一杯にこもり、息もできないようだ。

「まだ、しかとは申されませぬが、何者かの呪いがございますようで。呪いは強うございます。このままではお命も」

しばらく居間で休んでいるうちに、采女も嘉兵衛も回復したが、両者は疲れ果てた様子だ。

「やはりそうか。心当りがないでもないが、死者のたたりであろうかな」

「それが、まだなんとも……」

また明日、同時刻ごろにうかがうからと言い、采女は清三郎の肩にすがるようにして立ち上った。それから毎日、采女は通ってきたが、嘉兵衛の気鬱は一向直らず、采女はいよいよ、ひょろひょろしてきた。

五日目は大晦日の前日である。采女は祈禱のあと、沈思黙考していたが、邸内をくまなく案内してくれと言い出した。

寝間にくると、采女は雷に打たれたように立ちすくみ、しばらくは体をわななかせて、顔

色が死人のようになった。それから奇妙な呪文を発しながら、数珠を畳の上に投げつけた。

「床下をお改めなされ。何もなければ愚僧の誤りでござるが、あるいは怨念のみなもとが見付かるやも知れぬ」

と重々しく采女は言った。

畳を上げ、床下におりたのは清三郎だった。土のわずかに盛り上ったところがあり、そこを鍬で掘ると、桐箱が出てきた。蓋をあけると、例の人形が白眼をむいている。

「これじゃ。よろしゅうござった。祈った甲斐がござった」

と言うなり、采女は倒れかかり、それを嘉兵衛と深尾源助が支えた。弥市もやってきてのぞいていたが、どうしたことか、黒文字の楊枝は箱の中に落ちていないようだった。

人形は桐箱もろとも庭で焼いたが、焼く時になんとも言えぬ臭気を発し、青い鬼火のような炎がちろちろと燃えた。一同は言い合わせたように後ずさりし、怨念の強さに身ぶるいしたが、これは清三郎の細工で、わからぬところに硫黄を仕込んだものだった。

六

正月にはまだ嘉兵衛の工合はよくなかったが、八日にもなると見違えるように元気を回復した。

「なるほど、榊原采女は神のような呪師じゃな。それもそなたが引き合わせてくれたおかげじゃ。親身も及ばぬ世話をしてくれて、礼を言うぞ、清三郎」

と、嘉兵衛は喜色満面で言ってから、

「ところで礼をせねばならんが、少々の金ではゆくまい。榊原も必死の様子であったからの。どうだ、寝込んでおりはせんか」

「はい。疲労が甚だしかったようで、寝ておりましたが、もうよいようでございます」

「あのような仕事も、心身をすり減らして命がけじゃ。こちらもそれに報わねばなるまいが、礼金の高について、何か言っているか」

「いえ、思召しでけっこうと申しておりますが」

「それが困る。どれほど与えればよいか、見当がつかぬ」

「いつぞやお話しいたしました商家の礼が、たしか百両でございました。命を救われたからと」

「百両とは高いの。まあ止むを得ぬ。わしは五十両と思っていたが。五日の間、一生懸命に勤めてくれたのでもあるから、五十両増し、百両出そう。その上は出せぬが、これは吝嗇ではない。何事も相場だよ」

清三郎は二百両と吹きかけるのはあきらめた。出金となると、やはり嘉兵衛は甘くないのだ。

「殿様、いままでどなたにもかくしておりましたが、実はこのようなものを箱の中から拾い上げて、持っております」

と、清三郎は紙入れの中に仕舞っておいた、黒文字の楊枝を取り出して、嘉兵衛に手渡し

た。この楊枝がどうかしたのかと不審がるのへ、楊枝はどこかの茶屋に備えてあるもので、人形を床下に埋めた者が、襟元に挿していたのを落としたに違いないと説明した。

「なるほど、このようなものは安直な居酒屋などにはあるまい。茶屋に出入りをすると言えば……」

嘉兵衛の顔は次第に曇ってきた。

「伊織はおるか。呼んでくれぬか」

「殿様、まず……」

清三郎は嘉兵衛を制し、はじめにおみつに聞いてみてはどうかとすすめた。

呼ばれてきてかしこまったおみつは、楊枝を見せられて不思議そうにしていたが、ハッと思い当ったようで、堅太りの張りつめた体が小刻みにふるえだした。盛り上って、キチンとはそろいかねる膝頭もガクガクしている。

「この楊枝は伊織のものか。申せ」

口を利けないでいるおみつへ、言わぬかと嘉兵衛は怒鳴った。おみつは他愛なくなって、楊枝には見覚えがあり、伊織が時々通っている氷川門前の茶屋のもので、その茶屋には伊織のなじみの女がいるはずだと、泣きながら白状した。

「下ってよい。伊織には何も申すな」

と、嘉兵衛は釘をさした。

「伊織の仕業であったか。愚かなやつじゃが、これまでふびんをかけてきたのは、亡き妹の遺言で、くれぐれも頼むということであったからじゃ。何を逆怨みしたか知らぬが、現在の父の命を狙うとは思わなんだわ。許せぬな。……実を申せば持て余していたところじゃ」

「まさかとは存じましたが、容易ならぬことで、楊枝もあの時、人目に触れさせずに取上げました。ですが殿様、さし出口で恐れ入りますが、できますれば内々のうちに、おだやかに」

「言われるまでもない。意にかなわぬ、と離縁すれば済むことよ。まさかこの手にかけはせん」

と、嘉兵衛は余裕のある笑いを見せた。

「時に清三郎、当家に勤めてくれぬか。用人は深尾がいるが、大分多忙のようじゃからな。手を貸してもらいたい。きたもそなたを気に入って、抱え入れるようにすすめている。いつまでも浮草暮しでは、妻も持てぬではないか」

嘉兵衛の要請は渡りに船、おあつらえ向きである。両三日考えてから返事をすると、清三郎は勿体をつけた。

百両の礼金は清三郎が受取り、采女の家に運んだ。二百両を当てにしていた采女は不平を並べたが、それにしても大した元手もなしに、一人二十五両はボロかった。采女とおこんは夫婦同然だから、本来なら五十両である。このうち、十両は弥市のためにさかねばならない。

「その十両の穴埋めはおれがしてやる」

と、清三郎は度量のあるところを見せた。これからは清三郎の独り舞台で、伊織と源助を

追い出したあと、きたに言い寄って薬籠中のものにし、おもむろに嘉兵衛の命を縮める機会を狙うのだ。

ただ弥市はどうしても邪魔になる。采女の家におびき寄せ、ひそかに殺して大川にでも運ばなければなるまい。

清三郎は采女の金受取り証文を持ち帰り、嘉兵衛に渡したあと、瀬能家に抱えられることを承知した。早速引き移れというので、数日後に越してきたが、身一つのようなもので、家財道具などありはしない。

空部屋があってそこに入ったが、壁をへだてた隣りが伊織の部屋で、おみつが毎夜のように通ってくる。聞きしに勝るドタバタで、ことにおみつの鼻息がひどく、

「あれあれ、あれ、はあっ」

という声はかくれもない。伊織のほうはかぼそい悲鳴を上げるだけだ。

嘉兵衛はまだ、伊織に引導を渡していない模様だが、おそらくおみつが口止めの禁を破って耳打ちでもしているだろうと思われる。

それにしては、伊織の様子には変りがない。のろまなのか図々しいのか、それともヤケになっているのか、清三郎は見当を付けかねた。

弥市が突然いなくなった。だれにも、なんとも言い残していず、そのまま帰ってこない。清三郎は厭な気がした。暇を見て采女の家に行ったところ、采女が何者かに殺されたという騒ぎだった。すでに葬いは済んでおり、家は空家になっていた。

おこんは茶屋にいたが、客の前へは出ず、住み替えると言う。

「いったいどうしたんだ」

「どうもこうもありゃしない。先手を取られて返り討ちだ」

おこんはうそ寒そうな笑い方をした。

「弥市が何を血迷ったか、てめえらはおれを欺す気だなと猛り狂いやがってね。なんでも二百両もらったはずだと言うのさ。そうじゃない、これこれと話しても、耳に入れやしない。あの人は、面倒だからその場で弥市をやっちまおうとしたんだけれど、喧嘩じゃあ向うが一枚も二枚も上だった。包丁で一突きさ」

賊が押入り、采女を殺した上、有金をさらって逃げたことに、おこんは取りつくろったが、実際は弥市は思わぬ事の成行に仰天し、分け前も何もあったものではなく、風をくらって逃げて行ったのだ。これで弥市は二度と再び姿を現わすまい。

「とんだことになったもんだな。もっとも不幸中の幸いは、二人分の五十両が浮いたのだな」

「そう言えばそうだが、せっかく金にありつきながら死んだ直さんがかわいそうだ。大分あの人とは続いて、情が移っていたんだからね」

涙こそ流さないが、おこんはしょんぼりしている。験直しに住み替えるのだという。百両を清三郎と分けて五十両。それだけあれば茶屋勤めから足を洗ってもよさそうなものだが、おこんにはその気はないようだった。小商いを始めるなど、性に合っていないのだ。

「清さん、奥方はモノになったかえ？」
「これから腕にヨリをかけるんだ。根気仕事だぜ」
うまくやりなとおこんは言った。それ以来、清三郎がおこんに会うことはなかった。

七

伊織は神妙に離縁になった。自分は無実だと一応は嘉兵衛に訴えたのだが、ではほかのだれが彼に罪を着せたのかという段になると、一言もないのだ。
嘉兵衛は手切金をかなりはずんだようだ。
おみつが暇を取り、伊織といっしょに出て行った。伊織の話では、ひとまず越後のおみつの実家に行くという。まず食う寝るの心配はない。
伊織はそれほど落胆してもいなかったが、瀬能家の居心地が、あまりよくなかったせいでもあるだろう。それに養父の嘉兵衛に心服していない。おこんに話したように、実父の一件で、どうしても心の解けないところがあった。きたの扱いも冷たかった。
「サッパリしたようでもある」
と別れぎわに、伊織が清三郎に言った。
「おみつがおれを引受けてくれるのはいいが精を吸い取られて、早死にするかもしれん」
「別れたらよろしいでしょう」
「別れてくれない」

伊織は悲しそうな顔をした。
「好きな女がいたんだ。あの楊枝を出す店にいるおこんというんだが、久しぶりに行ってみたら、もう店にいない。どこへ行ったもんだろう？」
深尾源助を追い出すには大分手間取り、つまみ食いをほとんど洗いあげた時には、四月半ばになっていた。
源助の仕事を、手伝いながら次第に奪い取り、嘉兵衛の商法にすっかり通暁した。源助にはうまく言って骨休めをさせ、まめに歩き回って金の貸先の者と親しくなった上、やんわりと脅しをかけて、源助との腐れ縁を白状させた。嘉兵衛の信用はすでに自分にあり、源助は疑われていると匂わせたのが利いた。
やはり弥市が嗅ぎつけたとおりだったが、そのほかに、親玉の威光をカサに着ての小遣銭稼ぎをしょっちゅうやり、饗応などもさせていた。それというのも、彼らが例外なく帳面をごまかしているからだった。
「役に立つ男と思うていたが、これほどとは思わなかったぞ。やつら、相手が悪かったのう」
と、嘉兵衛は笑い、
「源助の所業は察していたが、わしが自ら探索するわけにもゆかず、どうしたものかと思案していたのじゃ。清三郎、でかした。以後は晴れて瀬能家用人。給金は二十両としよう。家事万端は任せる」

と言った。

「きさま、何を考えているのか知らんが、いいことばかりはないと思え。いまに吠え面かくぞ」

と、源助は捨てぜりふを吐いて、瀬能家を立ち去った。

新しい料理人と、おみつの代りが入った。

あとは妻女のきただけだ。すでに布石はしてある。話術できたの心を捕え、全くこだわりのない間柄になっていたのが、なんとなく、双方とも避け合い、ばったり顔を合わせればドギマギする、という段階になっていた。

切ない思いを秘しているのだという仕草は、清三郎の得意芸である。パッと顔を赤くするのも堂に入っている。ところがその頃になると、きたのほうでも頬を染め始めた。遠くから清三郎をうかがっていたり、目の前で吐息を洩らしたりするようになった。

機は熟したと清三郎は見た。ある時、庭でそっときたの手を握ってみたが、きたは上気した顔をそむけながらも、しばらくは手を振り放そうとしなかったばかりではなく、チラと媚びを含んだ微笑を見せてくれた。

六月初めの暑い日、嘉兵衛は御支配の屋敷へ暑中見舞に行ったが、その帰りに彼のやらせている茶屋に寄り、そこに他の借り主も集まって酒宴を開いた。

夕刻になって使いが来、殿様はこちらでお泊りになるからと伝えた。

しばらくして雨が降りだし、次第に吹き降りになった。寂しくて心細いから、みなでいっ

しょに夕飯を食べようときたが言いだし、酒も用意された。にぎやかな食事になり、一同は十分に飲み食いをして引取ったが、今夜が好機だと思い定めた清三郎は、座を離れずにいた。以心伝心というのか、きたは清三郎が残るのを当然と決めた物腰で酒をすすめ、はずかしそうにしながらも、寄り添ってきた。

目の前にきたの赤い唇があり、白く形のいい顎から首筋にかけての肌が、男心をグイグイと引き込む。黒い瞳が大胆に清三郎を見ている。

「奥様、わたくしはもう……」

清三郎はあえぎながら、きたの肩を抱きにかかったが、

「あれ、いけません」

と手を払われた。だが清三郎から離れようとはしない。そっと膝頭をおさえると、手の甲をつねられた。これはおっ伏せなければ駄目だと清三郎は思い、元気付けに酒を飲み続けた。

「それほどまでに思ってくださるなら」

と、きたがつぶやいた時、清三郎の体はだるくなり、眠気さえさしてきていた。しかし、ここでくたばっては、またいつ好機が訪れるかわからない。

それからの清三郎の意識は、かなりもうろうとしたものだったが、きたが彼を寝間に誘い、寝間には蚊帳が吊られ、中に布団が二つ並べて敷かれ、二人はもつれ合うようにして蚊帳のうちに入り、布団の上に倒れ込んだが、きたが間違いなく彼の手の中にあったのは覚えている。

だがそのあと、きたが、
「清三郎さん、少し休みましょう」
と言ったようでもあり、きたは何も言わず、彼がのしかかって、きたの唇を吸いながら、ややはだかったきたの襟元を、さらにくつろげたようでもある。乳房を掻き出したようでもあり、きたが悲鳴を上げ、その手をおさえたようでもある。
ともかく、それ以後清三郎は眠り込んでしまったのだ。
目が覚めると朝で、蚊帳はなく、きたはいず、代りに笑顔の嘉兵衛が立っていた。
このありさまではどう弁解もできまいと嘉兵衛は言った。
「きたもなかなかの役者だ。よくやった。そなたが他愛もなく眠ったのは、酒に薬を仕込んだせいだ。わしに毒を飲ませたお返しと言うかな」
清三郎は青くなって起き上った。
食いものに何か入れられたのはすぐわかったという。嘉兵衛は人並外れていい舌をもっている。カラクリはすぐ察しがついた。物の本に、同じような例がある。すると役者は清三郎、采女、弥市であろう。
「采女は命を落したようだが、自業自得だ。弥市に、呪師に遣わした礼は二百両であったと言うと、顔色を変えおったわ。しかし、一層の悪人はお前だな。野心が大きい」
嘉兵衛は坐った。
「伊織に罪をかぶせて追い払い、源助の悪をあばいて追放したのは、お前のためにもよかっ

たが、わしのためにもよかったのだて。手が省けた。だが、わしが伊織の実父に金を融通せず、見捨てたというのは事実と違う。伊織がそう思い込んだだけでの。甚右衛門は山師で、だれぞのもうけ話に乗り、まんまとひっかかった。大金を出したが返ってこぬ。わしはすでに、甚右衛門に金を貸し、貸し倒れ同様になっておったのじゃ。甚右衛門がいかに厚顔でも、そのわしにまた金を、とは言い出せぬ道理よ。甚右衛門の阿呆め、はずかしさの余り、すべてをわしにおっかぶせたらしい。伊織がそれを真に受けたのじゃ。軽々しく伊織の話などを信ずるのではなかったな、清三郎。わしが甚右衛門の怨霊にたたられるいわれはなかった。伊織もまた、わしを殺そうとするほど怨んではおらなんだはずじゃ。なんとなれば、わしは相違なく家を伊織に譲るつもりでいた。妹の遺言もある」
嘉兵衛は一息入れた。
「もっともな、それは昔のこと、伊織の前髪立ちの時分じゃ。成長して、とてもわしの跡を嗣げるやつではないとわかり、荷厄介であった。出来損いじゃ。あれにはおみつなどの婿が似合いであろうよ。……それに、もう一つある。きたが数年前、ある酒乱の男に、この屋敷内でいじまれたことがある。わしは留守であった。ちょうど、昨夜のそなたのようにの。きたは身を護るため、懐剣で男を傷付けた。そのところを伊織が見たのよ」
伊織は呆然としているだけだったが、男はあわてて逃げた。傷はさほどでもないが、脇腹を切り裂いていた。
男は二カ月ばかりも自宅に寝ていたが、もとより瀬能の家でのことは、だれにも言わない。

嘉兵衛たちも口をつぐんでいる。そうすれば両家とも無事だ。

しかし伊織が見ていたことが、嘉兵衛たちの弱味になった。ことに女の身として、はずかしいところを見られたので、きたは伊織をひどく嫌った。きたのためにも、伊織は出さなければならなかったのだ。

清三郎たちは、そのキッカケを与えてくれたことになる。

「よく考えた悪事だが清三郎、調べが足りなかったのう。わしは担ぎ屋には違いないが、死霊、幽霊などはあまり信じぬほうでな。その振りを見せたのは、お前たちの芝居に乗ってやったことになろうかな。おとなしく出て行くがよかろう」

「そうかい。そこまで見通していやがったのか。だが、このまま尻尾を巻くつもりはねえぜ」

と、清三郎は破れかぶれで居直った。

「てめえ、侍のくせに金貸しなんぞをしやがって……」

しかし、それまでだった。

嘉兵衛は飛び上って立つと、寝間の奥の半間床の上の刀掛けに走り寄り、刀をつかみ上げると、一気に抜いた。それは実に素早い動作だった。

清三郎はわっと叫びながら、這って逃げ出した。腰が立たない。

うしろでカチンと鍔の音がした。

笑くぼの女

一

「清次郎、よい話がある」
と、兄の友田順一郎が言った。清次郎の訪れを待ち構えていたようだ。兄の機嫌は悪くない。
「兄さんのよい話というのは、養子の口でしょう。それならお断わりだね」
「清次郎、まあ聞け。相手は五百石取りの旗本だ。その跡が嗣がれれば、文句はあるまいが」
「へえ。なるほど結構な話だが、結構すぎますな。なにか曰くのある家に違いない」
「曰くなどあるものか。いちいちタテをつくな」
と、順一郎はかんしゃくを起しかけたが、折りよく兄嫁のはつが茶を運んできて、
「お二人とも、もっとおだやかにお話しなされては。すぐにどうこうということではございませんから」
と、なだめに入った。
「佐野屋の一件では、こりごりしましたからね」
清次郎はなお釘をさした。あの二の舞は御免だ。
佐野屋は裕福な呉服屋で、その娘の婿にと望まれた。
婿になれば、身分は町人に落ちるが、大身代が嗣げ、友田の家には支度金などが転がり込む勘定だった。

ところが娘は、不義をして身ごもっていた。相手は奉公人か、それとも芸人のたぐいか、ともかく婿にできる男ではないので、急遽清次郎をあてがって、表面を糊塗しよう、というのが佐野屋の肚だった。
娘と清次郎を、料亭の一室でくっつける段取りまでは進んだが、結局男が忍んできて、娘と手を取り合い、逃げてしまった。
その茶番狂言も、すでに半年前になる。
「あれはこちらがうかつだったが」と、順一郎は苦い顔をし、「今度は違うぞ。ただし、娘は一度婿を迎えたが、折合いが悪く、離縁になっている。婿の出来が悪かったらしいな。子はない。当主が重病なので、向うでは急いでいる」と言った。
小関市之進、五百石取りの旗本で小普請、屋敷は、友田の家のある三味線堀からさほど遠くない御徒町筋にある。広い屋敷だという。
市之進はまだ五十二、三という年だが、六年前から病みつき、いまは重病で回復の見込みがない。病んでいるのは胃で、食物を受付けない。また心臓も弱っており、いつ命が尽きるかわからない。
妻の名がまち。夫より三歳年下で、市之進との間に三人の女子をもうけた。次女三女はすでに他家に嫁いでいて、長女のとよだけが残っている。
とよが石浜礼介を婿に迎えたのは、ほぼ三年前だが、二年で離縁になっている。当時は、

市之進の病気もそれほどひどくはなかったので、家のことはすべて、礼介や用人の寺岡主馬に任せてはいたが、隠居はしなかった。石浜の人物に一抹の不安を抱いていたのかもしれない。病気が悪化したのは、半年前からだという。

現在、家族は三人で、奉公人は用人の寺岡主馬のほか若党一人、中間二人、陸尺二人、門番一人がいる。女中は上下四人。

「奉公人が十人のうえか。五百石じゃあ、勝手は火の車でしょう」

「いや、なかなか内福のようだ。貯えがあるんだろう。別に悪い噂も聞かん。清次郎、お前はどうせ暇だろう。これから、おれといっしょに来い」

「どこへ？」

「知れたことだ。小関家だよ。先方では、いつでもおいでくださいと言っている。お前がうちに立寄る気になったのが幸いだ。この機を逃すと、いつつかまるかわからんからな。……ところでそのなりだが、どうにかならんものか。侍だか町人だかわからんような風をしおって。魂まで腐ったのじゃあるまいな」

清次郎は苦笑しながら、兄さんがぜひと言うのなら行きましょうと承知した。断われば、父の新助までが出てきて、うるさいことになろうし、はつにもチクチクと言われる。それはかなわない。

はつがいそいそと、着替えの手伝いをした。着るのは順一郎の衣服だ。幸い、きのう床屋に行ったので、ひげ月代は伸びていない。

「ねえさん、この話はだれが持ってきたんです？」

帯を結んでもらいながら、清次郎は聞いた。

「わたしの叔母ですよ。世話好きな人で、かねがねわたしが、清次郎さんのことを頼んでいたものだから。叔母は小関の奥様と知り合いで、やはりお婿さんのことを頼まれていたのですって。清次郎さんなら、おめがねにかなうと思いますよ」

「なるほど、そんなわけですか。しかし、前の婿殿がどうして出されたのか、気になるところですな。家付き娘で、威張っているのかもしれない」

「ほほほ、会ってみればわかるじゃありませんか。いいお人だと聞いていますよ」

それからはつは、表情をきつくして、

「清次郎さん、あなたももう、身を固めないと。五百石でも、お旗本なら言うことはないじゃありませんか。御徒風情とは違いますよ。あれは厭、これは厭と駄々をこねていたら、一生厄介者ですよ」

と言った。はつは清次郎を一日も早く身辺から追い払いたいのが本音だが、なお清次郎が旗本の当主になれるのなら、体面上からもこの上ないことになる。妙な風体で、まわりをぶらつかれるのが、一番困る。

「御徒風情はよかったな」

「いえ、そんな……口が滑ったんです。清次郎さん、言葉とがめをするんですか」

「別にとがめちゃあいませんよ。兄に言いつけはしないから安心なさい」

門番に案内を乞うて立っていると、間もなく侍がやってきて、用人の寺岡主馬だと名乗った。年の頃三十半ばの色白の男で、服装も物言いもくだけていて、愛想がよかった。

寺岡は先に立って案内し、玄関から上ると、

「奥へご案内申します。奥様がお喜びで、お待ちでございますから」

と言った。

聞いたとおり、屋敷は広い。長い廊下を通っていると、間数がいくらあるかわからない。杉戸があって、そこからは女中の案内になった。

庭に面した小座敷に通された。庭も広大で、地面には白砂が敷かれ、型通りの泉水、築山、石や灯籠、橋などが望まれる。楓がきれいに色付いている。

「大分違うな」

御徒風情の家とは……と言いたかったのだが、それは控えた。

「うん、違ったもんだ、さすがにな」

と、順一郎は素直だった。くやしがっても始まらないことだ。

さっきの女中が、茶菓子を運んでくる。待つほどもなく、内室のまちが、当の娘とよを伴って入ってきた。

とよまでがいきなりくるとは思わず、順一郎も清次郎もあわてたが、まちはニコニコして、

「お互い様、仰々しいごあいさつなどは抜きにいたしましょう。堅苦しくては、お話が進みませんから」

と言った。それでも順一郎は固くなってしまい、あいさつは紋切り型になったが、身分違いではやむを得ない。

清次郎は、まちの捌けたとりなしでホッとしていた。

まちは小柄で、聞いていた年より若く見える。丸顔で人が好さそうだった。ただ、どっしりしたところ、賢夫人といったところはない。

とよは母親によく似ているが、母親よりよほど顔が整っていた。全体ふっくらとしていて、親しみやすい。はずかしそうに伏目になっていて、家付き娘を鼻にかけるようなところはなさそうだ。

いまはどんな暮しをしているのかと、清次郎は聞かれた。友田の家に居付かないということは、はつから叔母を通じて、聞かされているのだろう。

町家の一室を借りて住み、そこの息子二人に読み書き、剣術などを教えていると、用意の嘘っぱちを清次郎は話した。

「不肖の弟でございますが、剣だけはよく使います。ところが、学問のほうはさっぱり……」

「それはいけませんね」

と、まちは笑顔で清次郎を見た。気に入った目付きである。

「ただ、悪い遊びだけはいたしません」

「それは何よりのこと。悪い遊びと申すのは、いろいろありましょうが、何より賭けごと……勝負ごとはいけません」

と、まちは言ったが、その時に顔が険しく、引き吊ったようになった。だがすぐに、人の好い顔に戻る。

離縁になった石浜礼介については、まちは触れようとしなかった。順一郎としても、初対面なのに、聞けることではない。

娘は何の取柄もないが、体だけは丈夫で、一応のしつけはしてある、わがままには育てていないつもりだ、とまちは言った。

とよはほとんど口を利かず、清次郎もまた言葉少なで、二人が話を交す折りはなかったが、とよは時々、チラと好意をこめた視線を、清次郎に向けてきた。

二

とよに会って、清次郎の心は動いた。とよは物柔らかで、優しそうだ。器量も悪くなく、高慢なところも見えない。母親がまた捌けていて、肩が凝らない。

実は、現在住み込んでいる上総屋に、そろそろ居辛くなっていた。

上総屋のあるじ種右衛門の娘のお千代は、板前弥之吉と、晴れて夫婦になった。だが、それで清次郎が邪魔にされるというのではない。夫婦には、ずっと居てくれと言われているのだが、種右衛門が清次郎に出て行ってもらいたい気配だった。

それはお千代の気持を考えてのことであろう。清次郎が転がり込む前は、お千代には、男と言えば、弥之吉しかいなかった。

ところが清次郎が現われ、お千代の心は清次郎に傾いてきた。お千代は自分ではそれほどに思っていないかもしれないが、さすがに親で、種右衛門が娘の心を読んでいるのだ。

いまのところ、波風は立たないが、弥之吉が勘付くと、そうもゆかなくなる。

清次郎が居続けると、お千代の心はますます、清次郎に寄り添ってくるかもしれない。

そうでなくても、弥之吉は清次郎に遠慮がある。弥之吉は夜盗を働いて、清次郎にその現場でとっちめられた。

清次郎はもちろん表沙汰にせず、お千代のために、盗みをキッパリやめることを誓わせてケリをつけた。

そのことを、弥之吉は恩に着ているが、一方ではどうしても、清次郎が煙たくなっている。お千代の態度いかんでは、弥之吉の気持がガラリと変り、清次郎を憎みだすかもしれない。

汐時というものだろう。さて、上総屋を出ると、さし当って清次郎は、行く所がなくなる。三味線堀に帰って小さくなっていたくはなし、猿江の金蔵の家に、またぞろ戻るのも気の毒だ。金蔵は友田の元中間である。

この辺で落着いたほうがいいのかもしれない。ぶらぶらと、あちこち渡り歩くのは、気楽そうでありながら、案外苦労がある。それに、いいことが待っていそうでもない。旗本の婿

殿におさまるのは、渡りに船とも言えそうだ。窮屈な暮しを我慢しさえすれば、食う心配は一生なし、いつどこで野垂れ死にするかもしれないような、いまの暮しよりはマシだろう。

「清さん、およしよ。その話は気味が悪いじゃないか。棚からぼた餅は、用心したほうがいいんだよ」

と、お千代は不承知で、必ず何かある、前の婿がどうして離縁になったのか、よく調べなければならないと言う。

弥之吉は賛成で、旗本の跡嗣ぎなら、ほかに何があろうと、得だから、クヨクヨ考えることはないという説だ。

「お千代、おめえ、妙に疑り深えな。前はこうじゃなかったが」

「疑り深いというんじゃないよ。こんな話は一生のことだから、大事に大事をとって」

「とりすぎて、おくれを取ることもあらあ」

「お前さん、ばかに乗気じゃないか」

「なんだと、お千代。妙な言い方をするじゃねえか」

「おれのことで喧嘩をおっ始めちゃあ困る」

と、清次郎はとめたが、やはり上総屋にはもういられないと思う。

小関家を訪れてから三日後、友田の中間で寅吉というのが、上総屋に清次郎を呼びにきた。小関の奥様が見えているから、すぐこいとの口上だ。

寅吉は渡り中間で、このところしばらく、順一郎に雇われている男だ。清次郎は寅吉に大

分心付けをはずんだが、一つは口封じである。居所は順一郎に教えたが、そこが一膳めし屋だとは言っていない。

「旦那、わっちら風情が口を出しちゃあ、お叱りを受けるかもしれませんが……」

と、道々寅吉が言い出した。

「お気を付けなすったがよござんすぜ。小関って屋敷のことは、ちょいちょい耳にしますが、派手な賭場になっているようで。仲間に、小関で大分せしめたの、巻き上げられたのって野郎がおりましてね」

「そうか。賭場にね。だが、そいつはあちこちでやっているんだろう。旗本の屋敷と言ったって、そんなものだろうさ」

「そりゃあそうですが、よそよりは盛んだって噂で。ご承知ならいいんですがね」

屋敷があれだけ広い上に、主人が寝たっ切り、婿は離縁で、あとはまち、とよ母娘がいるだけだから、賭場には格好だろう。盛大だというのもわかる。それほど乱れた家だから、貧乏御家人の次男などに目を付けるのかもしれない。何かありそうだったのは、そのことだろう。

友田に着くとすぐ、座敷に通された。順一郎とまちが待っていた。

「清次郎、失礼して、ずっとこちらへ寄れ。他聞をはばかるんだ」

と、順一郎が言った。

まちは緊張した顔付きをしていた。小関で、賭けごとはいけないと言った時、チラと見せ

た、あの表情である。

「清次郎、お礼を申し上げろ。奥様も、とよ殿も、お前に不足はないとのことだぞ」

と、順一郎が珍しく喜色満面だった。清次郎は何か口ごもりながら、不器用にお辞儀をした。

「清次郎殿、お前様はいかがです。とよはお気に入りましたか」

まちは堅い表情をゆるめた。

「はあ。わたくしにはなんの異存もありませんが……」

「それはようございました。このお話は決まったようなものですね」

「はあ、ただ、いましばらくご猶予を」

「清次郎、またそのような」

「いえ、猶予はこちらも望んでおりますので。さて清次郎殿、ぜひお願い申したいことがございます。当家の恥を申さねばなりませんが」

と、まちは声を低めた。

まちの願いというのは、寅吉の話から、清次郎がいくらか予期していたことだ。

邸内の中間部屋で、中間、小者が集まり、よそからもやってきて、手なぐさみをしていたのは、よほど以前からのことだ。旗本屋敷は、町方の手が及ばないから、賭博開帳にはもってこいである。従って、大抵の屋敷で賭博はある。主人は知っていても、見逃している。小関市之進もそうだった。あまり厳しくすれば、中間の類が居付かなくなり、なにかと仇をされる。賭博が中間部屋に限られていれば、目をつぶってもいい。

ところが、渡り用人の寺岡主馬を抱えてから、小関邸内での賭博は急に盛んになり、その場所も、中間部屋だけではなくなり、母屋に入ってきた。

寺岡の部屋が使われることもあり、他の空部屋が使われることもある。集まる人数は多くなり、職人、町家の旦那、二本差し、さては得体の知れない女も混る。動く金も格段にふえたようで、酒、肴が持ち込まれる。そういう一切の手配は、どうやら寺岡がしているようだった。

寺岡は奉公人みなを、仲間に引き込んだらしい。門番はもとよりそうだから、自由に外から客を入れる。寺岡の言い付けで、客を選ぶようにもなる。

奥を守るまちは、元来邸内での賭博などに気付かない立場だが、厭でも目に付く。驚いて夫の市之進に取締りを頼むと、市之進は寺岡を呼びつけ、叱責する。

ところが寺岡は、のらりくらりと言い抜けてしまう。証拠をおさえようにも、奉公人一同がグルでは、巧みにかくされる。

市之進は欺され、まちに、

「そなたが案ずるほどのことではない。捨てておけ」

と言う。あまり責め立てると腹を立てる。当時から市之進は病いがはかばかしくなく、短気で疲れやすくなっていた。

すべて寺岡の画策で、悪銭をしこたまふところに入れているはずだから、せめて寺岡を召

し放して……と言っても、これが容易にはできない。追い出せば小関家の内情を吹聴するかもしれないし、それが公辺の耳に入れば、家事の不取締りをとがめられ、悪くすれば家が潰れる。

寺岡はずっと居坐り、市之進の病いはだんだん重くなり、まちが賭博のことを持ち出せば、うるさそうに横を向いてしまうようになった。

石浜礼介を婿に迎え入れた時、まちは礼介に望みを託した。内情を打明け、家の災いである寺岡主馬を追放してもらいたい、拒めば手討ちにしても構わないと言った。石浜は清次郎同様、ある道場で免許を取っているという触れ込みだった。

しかし、これが裏目に出てしまった。石浜はまんまと、寺岡側に引き込まれてしまったのだ。悪いことに、市之進が悪化する病気のため、万事投げやりになっており、収支その他、家計のことをすべて、石浜と寺岡に任せてしまった。

これまでは、家の金がかすめられることはなかったが、婿が家計の全権を持ち、しかも寺岡と結託すれば、話は別である。

石浜自身が賭博に加わるようになった。家計に大穴があくのは当然だ。だが、巧妙に金を回していると見えて、まちが問いただしても、ボロを出さない。

「わたくしは空恐ろしい気がいたしました。博奕で金がふえるものではない。必ず減っております。それどころか、もう一文もないかもしれませぬ。あるのは、高利貸しへの借金だけかも……奥の入用も大分減りました。才覚がつかなかったのでしょう。それにあの婿殿は」

浮気をしていたという。相手は寺岡の縁続きとかで、名はお雪。お雪はちょいちょい賭場に顔を出す女で、色香で石浜を迷わせたと思われる。いずれ寺岡の差し金であろうし、お雪とのことが生じたため、石浜はずるずると寺岡の言いなりになるに至ったに違いない。

石浜はとよを粗略にするようになり、夫婦仲は冷たくなった。

浮気については、石浜は正直にまちに白状し、とよとうまく行きそうにないから、離縁してくれと、進んで申し出た。さすがに寺岡も、これを止め立てはできなかった。

「いまがよい折りです、清次郎殿」

と、まちは清次郎をにらみすえるようにした。

三

婚儀は先のこととして、まず小関に住み込んでもらいたい、そして寺岡一党を追い払ってもらいたいとまちは言う。そのためには、のっぴきならぬ証拠をつかまなければならぬ。そのためには……

「つまり、寺岡に与したように思わせろとおっしゃるんですな。わたしも賭博の仲間に入れば、証拠は歴然というわけで」

まちは、わが意を得たと言うようにうなずいた。

「それから清次郎殿、寺岡はまた、お雪という女をさし向けるかもしれませんよ。避けよとは申しません。ただ、心を奪われてはなりません」

「わかっております」

清次郎は苦笑を押し殺した。まちは暗に、お雪のわなにはまれと言っているのだろう。むしろそうしないと疑われるわけだ。

寺岡はよほど悪知恵の働く男だから、くれぐれも用心しなければならない。計略が功を奏し、寺岡が恐れ入り、なにもせずに退散すればけっこうだが、居直って脅したり、腹いせをしたり、ということも十分に考えられる。そこで、いっそ、寺岡を斬ってくれ、とまちは強い口調で言った。そのほうが、あとくされはない。

まちの願いを一口に縮めれば、斬れということだろう。それまでの話は前置きである。斬った代価が、旗本の婿ということになる。

「友田様、清次郎殿、勝手とお思いでしょうが、婚儀は何もかも上首尾に終った上のことにしたいと存じます。このままでは、こちらも清次郎殿に気の毒、万事済めば、清次郎殿も快く来ていただけましょう」

「しかし、漫然と住み込むというのは……」

と、順一郎が危ぶんだ。寺岡方の疑いを招くだろうというのだ。婚儀前の同居とは異例でもある。

「それは、なんとでも言い訳ができましょう。……こういたしましょう。住み込んでいただき、夫婦同然で、ただお届け、披露を先に延ばしているだけと」

延ばしているのは、清次郎の、たとえば姉の忌明けを待っているのだということにでもすればいい。

くれぐれもよろしくとあいさつして、まちは帰った。支度ができ次第、引き移ると取りきめた。

「どうせ、そんなことだろうとは思っていましたよ」

「用人の首と引換えか。それまでは、住わせはするが、婿にはせぬ。お前がしくじりをやっても、小関は責めを負わぬ。旗本も勘定高いもんだな」

と、順一郎はいつもに似ず辛辣なことを言ったが、

「うまく、しおおせろよ。逃げ出しなどすると、もうお前の世話はせんからな」

と付け加えるのも忘れなかった。

上総屋では、小関に住み込むことになった次第を話したが、用人を斬る件は言わなかった。

「とにかく、めでてえこった。清さんが御旗本とはなあ。祝いをしなくちゃならねえ」

と、弥之吉は浮き浮きしていたが、お千代は反対で、考え直したほうがいいのじゃないかと、相変らずの案じ顔だった。

「わたしは、そればっかりじゃないと思うよ。娘さんになにかあるって気がするのさ」

「まだ言っていやがる。なにがあるってんだ、千里眼じゃあるめえし」

弥之吉は面白くない顔をする。いや、娘のとよは尋常な人柄で、美人でもある、間違いはないと思うし、気に入っていると、清次郎はわざと誇張気味に言った。

「気に入っているのかい。ふうん」

と、お千代は応じただけだった。

一旦友田の家に帰ってから、小関に行くことになる。

上総屋を引揚げる前の晩は、家内で清次郎を祝ってくれた。宴も終り、種右衛門も弥之吉も、早々に寝床に引き取った。

清次郎は酔いざましに、夜風に吹かれに外に出たが、もうこの辺にも、めったにくることはあるまいと思うと、川のほとりのさびれた夜景も、なつかしい気がする。

「清さん」

と声をかけて、ひっそりと寄ってきたのがお千代だった。清次郎はつとめてさりげなくあしらった。

「まだ寝なかったのか。風邪を引くぜ」

「あした、行っちまうんだねえ」

「世話になったなあ、お千代さん」

「そんな、世話なんか」

お千代の声が湿っていた。

「この世の別れじゃない。ちょくちょくやってくるよ」

と言ったが、やってくるつもりは、清次郎にはなかった。

「清さん……わたしね」

「寒い。うちに入ろうぜ」

背を向けて、振り返ると、お千代はゆっくり足を踏み出しながら、

「そうだね」

と言って笑った。戸口のところでお千代がよろけ、清次郎はお千代の肩を抱く形になった。その時、お千代が手を握ってきた。清次郎も握り返し、しばらくそのままにしていた。先に手を放したのは、お千代のほうだった。

「清さんも早くお寝みよ」

と言い残して、お千代は土間に入って行った。

翌朝、上総屋を出たが、清次郎は手ぶらにひとしい。種右衛門にお千代、弥之吉夫婦、近所の者数人が見送ったが、お千代も弥之吉も、ニコニコしていた。

友田からは、順一郎夫婦が清次郎に付き添い、寅吉がわずかな荷を担いで供をした。玄関で父の新助が、これでようやく気苦労の種が消えた、と言いたそうな顔をして見送った。

小関家の門前では、寺岡主馬が紋付袴で待っていた。そしてまちは、玄関の式台まで出ていた。万事手軽である。

奥の座敷で一休みしてから、一同で主人小関市之進の病室にあいさつに行った。しかし市之進はもう、意識もおぼろげで、はかばかしい応答はない。

再び座敷に戻り、そこへとよも来て、酒肴が出たが、盃事のようなことは何もない。

やがて順一郎夫婦が辞去する。まち、とよは見送りに出て、しばらく清次郎は一人になった。これから、こんなところで暮すのかと、清次郎はやや心細くなった。上総屋に飛んで帰

りたいような気がする。

母娘が戻ってきた。まちはなんとはない溜息をついてから、

「清次郎さん、いらっしゃい。向うのお部屋に移りましょう」

と言った。

その部屋はまちの私室のようだった。中の様子はいかにも女の住いで、気持がくつろぐ。とよも同様らしく、微笑を浮かべた顔を清次郎に向けて、

「お疲れになりまして」

と聞いた。

「いやなに。いままで手狭なところにいたもんだから、勝手が違いましてね」

「すぐに慣れます」

と、まちが言って、

「清次郎さんのお部屋は、あとで案内します。よろしゅうございますか、お二人は夫婦のように、万事振舞ってください。ただし、本当はまだ、夫婦ではありませんよ。ことに清次郎さん、そのけじめを守ってくださらないと困ります」

「わかっております。ですが、部屋はもちろん、別でしょうね。寝所も」

「いいえ、別にはできません。怪しまれます。けじめを守ってくださいと申すのは、そのことですよ」

そりゃあ無理だと清次郎は言いたかったが、とよが笑い出した。はじめは軽い忍び笑いだったが、とまらず、とよは真赤になり、身をよじるようにしている。

「これ、とよ、はしたない。およしなさい」

と、あわてた様子で、まちが叱責した。

「ただ、昼間はとよはわたしといっしょに、奥におります。清次郎さんは表の居間にいてください。夫が常のお部屋にしていたところです」

それからまちは、声を低めた。

「そこには寺岡が顔を出します。うまく持ちかけてくださいよ。……あの男だけは、決して許すことができません」

四

十日も経つと、家の様子が大概わかってくる。小普請旗本の日常生活がどんなものかも、おおよそはつかめる。

清次郎はその退屈さに、悲鳴を上げたくなった。金蔵の家や上総屋では、けっこう手助けの仕事があったし、自由に気晴しもできたが、ここでは第一、することがなく、ぶらりと外出することもできない。供にくっつかれては、出る気も失せてしまう。

奥は女ばかりで固めており、これまた気軽に入って行けないことになっている。

夜になってようやく、とよと顔を突き合わせ、水入らずの体になる。

随分打ち解けはしたものの、とよは口の重い女である上に、話題の持ち合わせが極端に少

ない。勢い、間をもたせるために、清次郎ひとりがしゃべることになり、疲れてしまう。……ただ、とよは初対面の折りの印象そのままで、好ましい。それに、女盛りのなまめかしさが、身のこなしなどにもこぼれていて、清次郎を妖しい気持に誘う。

邪魔がなければ、清次郎はとよの布団にとっくにもぐり込んでいたに違いない。とよのほうでも、それを期待しているような色があった。すがり付くような目がそうだ。

情の深い女に違いない、と清次郎は思っているが、寝所の隣りに女中が一人、寝ているのだ。これが御目付役で、まちがそのように計らったのだろう。

聞き耳を立てていられては、清次郎の気も萎える。これはちょっとした責苦だった。

よく眠れないせいか、昼間は頭がぼんやりしており、坐ったままうとうとするようになった。

寺岡主馬の話によれば、小関市之進が元気だった頃は、午前は書見と槍、刀の稽古、午後は奥で休んだあと、庭木、鉢物の手入れや畑の世話、時には書画骨董の類をいじり回したり、習字をしたり、とかなり気ままに過していたそうだ。遠乗りに行くこともある。

外出はあまりないが、寺社の参詣や、友人訪問がある。月に一、二度は支配の許へあいさつに出る。たまに来客もある。

「なあに、そのうちにお慣れになりましょう」

「さあ、どうだろうね。おれのいままでの暮しが暮しで、慣れそうもないぜ。助けてくれよ。旗本って身分にひかれたのが間違いだったな。全く、これじゃあ死にそうだ」

清次郎は寺岡に、これまでの野放図な暮しを、多少の嘘を混えて物語った。

「……前の婿さんがおん出たのも当然だ。とよ殿には未練が残ったろうがね」

「未練が……」

寺岡主馬はおかしそうな顔をした。

「石浜さんのことは、奥様から詳しくお聞きになりましたか」

博奕のこと、お雪との不義のことを、清次郎は正直に話した。

「ほう、左様ですか。わたしはよほど悪人にされておりますな」

寺岡はあわてる様子もなく、そう言った。

「そうじゃないのかい？」

盛大に博奕を開帳しているという件だが、まちの言い分は一知半解だ、と寺岡は口を尖らせた。わがもの顔に振舞って、自分があぶく銭をかすめ取っているのでは、決してない。

「小関家のためにしていることでしてね。このところをよくわかっていただかぬと、わたしは立つ瀬がございません」

知行五百石、四つ物成で二百石。金にしてまず二百両だ。飯米を引くから、事実は二百両を下回る収入になる。これで一年、大世帯を切り盛りしなければならないので、どう節約しても、五十両は足が出る。

その補いをつけようにも、旗本では内職ができず、ほかに収入のあてもない。高利の金を借りるのは、墓穴を掘るようなものだ。

「わたしは中間部屋の小博奕に目をつけました。いわゆるテラ銭、場所代というものを取り込もうと思いましてね。そのためには客種をよくし、部屋も汚ならしい中間部屋じゃあいけないことになりましょう。接待にも気を配らなくちゃならない。あんまり負けさしてもいけないと……苦労しました」

寺岡の狙いどおりになったのは、ほぼ五年前からだという。最初は年に三十両ほどのもうけだったが、昨年はその二倍ほどになり、五十両を補って余りが出るほどだ。

「天地神明に誓って申しますが、わたしは金をわたくししてはおりません。小関家の貯えにするほかに、使ったと申せば、賭場のあれこれの入用だけですからな。なんなら、手控えをお見せしてもよろしい。奉公人共にも、趣旨をよく申し聞かせてあり、つまみ食いなどをいたす者はおりません」

現在、小関家の収支は、相つぐなって、少々ゆとりがある。それでなければ、これだけの世帯を支えきれるはずがない。

「そういう事情を、奥様は一向ご存じないのです。ご存じないから、わたしのしていることが、悪くばかり見える。大きな声じゃあ言えないが、奥様は衣装道楽でね。金の苦労がわからんから、どしどし買物をなさる。それから殿様……これはさっき申した書画骨董、ことに画幅に目がなかった。大分偽物もつかまされたようですが、中には雪村だの探幽だの、いいものもあります。当り前なら、そんなものを買えた身分じゃないんです。ただし殿様は、わたしの遣り繰りをほぼご承知だった」

「本当かい」

「知らぬ振りをなされただけですよ」

「なるほど。すると、婿殿の……石浜の立場はどうなるのかな。お雪という女を餌に、お前さんが味方に引き入れたってことだったが」

「石浜さんって人は困り者でね。ちゃんと話してあったんですが……」

石浜は博奕好きで、よく勝負に加わった。それだけならいいが、熱中すると小関の金に手を付けだした。金の出し入れは主人市之進の手を離れ、おおむね寺岡の管理に任されていたが、跡嗣ぎの石浜に、これこれの金を出せと言われれば、家来として逆らうわけにはゆかない。穴が明いたというまちの指摘は、ある程度当っている。

「お雪に石浜さんをろうらくさせたのも、その通りですが、目的が違います。おわかりでしょう、不義を狙ったので。つまり、離縁の口実を作ってやった。それを奥様の耳に入れるように計らったのは、わたしです。思惑通り、離縁の運びになって、一安心いたしましたよ」

「お雪はお前さんのなにかに当るそうだが」

「あれは長者町の質屋の後家で、もとは茶屋女です。わたしのコレが」

と、寺岡は小指を出して、

「同じ長者町におりましてね、親しくしております。わたしとは縁続きでも、わけのある仲でもないんでして。……ところで若殿」

「若殿はよしてくれ」

清次郎は吹き出した。

「若殿ですからな。まあよろしゅうございましょう。清次郎様、お嬢様とはもう、まことのご夫婦で？」

「そりゃあそうだ。いい妻に当ったと思っているんだがね。石浜って人はよっぽど移り気なのかな。それともお雪さんがそれほどいいのか」

「お会わせしましょうよ」

「それもいいが、とにかく退屈で、気がおかしくなりそうだ。用事をつくって、どこかへ連れ出してくれないか」

「よろしゅうございます。手なぐさみはお嫌いで？」

「嫌いなほうじゃないが、石浜の二の舞じゃあ、旗本の跡嗣ぎがフイだ。ようやく婿にありついたんだからな」

「切り上げ時さえ間違えなけりゃあよござんすよ。わたしが付いておりますから」

「金がないのさ」

「それはなんとかします」

「清次郎さん、どんなふうです？」

「なかなか手ごわいようです。博奕のことはあっさり白状しましたが、何事も御家のため、勝手許不如意を補う、やむを得ざる手段と申すのでして、決して金銭をわたくししてはいな

いと……」

「そんなことがあるものですか。嘘ですよ。わたくしにはわかります。清次郎さん、言いくるめられてはいけませんよ」

と、まちは柳眉を逆立てた。

「わかっております。また、浮気については……」

寺岡の話を伝えると、まちは言下に否定した。

「よくもそのような。忠義面とやらをした曲者です。斬っておしまいなさい、斬って」

「お待ちください。そうはゆきません。確証を得ませんことには」

まちは溜息をついた。

「早く片付いてくれないと、心配で心配で、夜もろくろく眠れません。主人の容態も気になります。また、このままでは娘がかわいそうで」

寝所では、ひっそりととよが清次郎を待っている。だが清次郎が来たところで、寝床の中で夫婦の語らいをするのではない。相変らず、女中が隣室にいる。清次郎も辛いが、とよは石浜を夫にしていた。空閨の悩みは清次郎よりも深いかもしれない。それがとよの立居振舞や、何気ない物言い、表情から読み取れるような気がする。

二人は並んだ布団の中で、しきりに寝返りを打つことになる。

五

博奕には中間部屋、寺岡の居室、書院の次の間などを使っている。客種によって部屋が違い、次の間にはふところの温かそうなのが集まる。お雪という女は、次の間の常連なのがわかった。

中間部屋の丁半博奕は毎日のようだが、次の間を賭場にするのは、ほぼ五日置きだ。

奥のまちや、その意を受けた女中が、ひそかに様子をうかがいにこようとしても、杉戸のこちらに男がいて、口笛で合図を送るから、一同は素早くかくれる。

寺岡は清次郎に五両くれた。自分が用立てたものだが、五両くらいなら、すぐ埋め合わせはつくと言う。

最初、次の間の博奕を見物するだけだったが、二度目からは加わった。それぞれの賭け金は大きい。五両が半分ほどに減った。

お雪は寺岡に知らされたのだろう。黙って頭を下げた。清次郎はお雪の正面に坐った。予想していたよりずっと美しく、その名のように、肌色が抜けるような白さだった。表情はあまり動かないが、どうかした時に笑顔になり、片頬に笑くぼができる。それが何とも言えない良さだ。

勝負が白熱してくると、お雪は伝法に腕をまくったり、立膝、さてはあぐらになったりするが、男に見せびらかしている、というのではなさそうだった。肌が露われても気にしない。

清次郎は酒に酔ったような心持になってきた。石浜が迷ったのも無理はない。

三度目は、お雪の横に坐った。寺岡にまた二両もらっていたが、有金をはたいてしまった。するとお雪が三両貸してくれ、運よくその金が十両余りになった。

酒肴がある上に、酌をする女も呼んであり、負けても快く遊んだ気分になれる。

「若旦那、わたしのうちへお出ましくださいな。きたないところですが、気兼ねだけはございませんから」

と、お雪が耳打ちしてくれた。

外出は、まちがよい顔をしないが、寺岡がもっともらしい口実を作ってくれる。清次郎が寺岡と親密になる必要があるため、まちとしても強くは言えない。

お雪が住む、長者町の質屋に出向いたのは、小関に住み込んで二月経った頃で、師走に入っていた。寺岡と中間一人が付いてきたが、二人は上り口で茶を飲んだだけで帰った。

店は休みで、奉公人は一日暇をやってあるという。お雪の居室は暖かく、こたつがしつらえてあった。酒の用意もある。清次郎はすすめられるまま、こたつに入った。

石浜と同じことになりそうだと、清次郎は思っている。だが、避けようとは思わない。

差し向いで、近々と見ると、お雪は一層あでやかに、色香にあふれて見える。

「清次郎さんとおっしゃるんですね。礼介さんよりずっとご立派だ。お会いした時からなんだか……」

と、お雪は自分の下唇を軽く噛むようにし、顔を少しそむけて流し目を使った。清次郎は

思わずゾクリとした。

「おれもどうやら一目ぼれのようだが、お前さんは怖いからな。石浜礼介を腑抜けにしてしまった。知ってるぜ」

と、清次郎は笑った。

「……それでまんまと、石浜は寺岡の言いなりになっちまった」

「いいじゃありませんか。礼介さんだって、そんなに後悔しちゃあいないでしょう。あなたも腑抜けにしてさしあげましょうか」

「そう願いたいね。旗本の家なんぞ、身震いが出る。二月で閉口したから、しばらく好きなようにしてからおん出ようと思っている。奥方には悪いが……」

清次郎はまちの依頼の内容をぶちまけてしまった。

「どうも奥方が考えているようなもんじゃないらしい。寺岡は小関の家計を支えているわけなんだ。そうすると、おれは余計な手出しをしないほうがいい。小関家のために、おれも賭場に出入りして、一もうけしなくっちゃならねえ。おれは意外に勝負運が強い。賭けごとは面白いもんだな。病み付きになりそうだ」

「そうですか」

お雪はナゾめいた微笑を漂わせて、

「それじゃあ、試してみましょうよ、どちらの運が強いか」

お雪はふところから巾着を出し、中からごく小さなサイコロをつまみ出した。清次郎がうしろを向いている間に、お雪はサイコロを耳の裏にかくす。左右どちらの耳の裏にはさまっているかを当てる、という遊びだ。

「賭け金は一分。よござんすか」

と、お雪は言った。その勝負は負けた。お雪は耳を清次郎に向け、はさまったサイコロを取ってみせたが、女の耳がこれほど色っぽいと思ったことはなかった。

手の平、襟の内側の左右などでも勝負をした。お雪はだんだん寄り添ってきて、膝小僧の内側で勝負をいどんだが、その時は腿まで裾をめくり、肢は開き加減にしている。

勝負は互角だった。お雪はしゃくり上げるようにして笑いながら、両腕を清次郎の首に搦んできた。

「これで、おれも石浜の轍を踏むのか」

と言いながら、清次郎はお雪のはだけた襟から手をさし入れた。手応えのある柔らかいものに触ると、お雪が唇を寄せてきた。

「白状しろよ。お前は寺岡の女だろう」

半刻（一時間）ほどののち、こたつの中で清次郎は聞いた。お雪の体が暖かい。

「あの人はそのつもりでしょうよ。ずいぶんと貢いでくれるもの。わたしはだれの女でもありませんよ。いまは清次郎さんの女。……とても好き」

「おれも好きだ。おれはとよ殿の婿になったんだが、実はお前の婿になったつもりでいるぜ。お前はどこからどこまで美しい」

「二月も辛抱していたんじゃあ、女のあばたも笑くぼに見えましょうよ」
「辛抱？　なんのことだ」
「いえ、退屈な暮しをさ」
お雪はなぜか、クックッ笑いだした。

清次郎の暮しは荒れだした。五日置きの次の間ばかりではなく、中間部屋に出掛けて博奕に加わり、サイコロも振るようになった。
お雪とは三日にあげず会った。場所は示し合わせた出合茶屋である。ひとりで勝手に飛び出すのを、もうまちはとがめない。まちには、いま少しで片が付くと言ってある。
やはりとよとは同衾しなかった。慣れてくれば平気になる。それに、お雪とのことがあるから、とよをほしいとは思わない。
年が明けた一日、清次郎は金を出してくれ、と寺岡に言った。博奕で少々もうけても、お雪のふところに消えてしまうわけだ。
「金は大分ご融通しました。これ以上、どうにもなりませんな」
「水臭いことを言うな。出せよ。おれは小関の当主になる男だぜ。石浜には出したじゃないか。いったい金はいくらあるんだ。おれに知らせぬという法はないぞ」
「そいつは駄目だね」
と、寺岡は乱暴な言い方になった。

「お前さんはまだ、小関の婿じゃあるまい。そんな人に金を出すいわれはないんだ。娘は手付かずだろう。ちゃんと知っているんだ」
「どうして知っている？」
「さてね。お前さんの取る道は、このまんま出て行くか、それとも名実共に婿になることだ。つまり、おとよさんを抱っこして、のっぴきならねえようにすることだ」
「そうすりゃあ金を出してくれるか」
「出すも出さぬも、お前さんの金だ。何から何までお渡しするよ」
「わかった。おとよのことは任してくれ。工夫はある。婿にはなるが、その間のつなぎがなあ。頼む、十両ほど。どうせおれの金になるんじゃないか」
「尻尾をつかむつもりか？　いけないね。お雪に借りたらどうだい？」
「寺岡、実を言えば、問答無用でお前を斬るように、お袋様から頼まれている。尻尾もくそもねえ、首だ」
寺岡と対談していた清次郎は、跳躍して寺岡をあおむけに突き倒し、寺岡がひっくり返った亀のようにもがいている間に、床の刀掛けの刀を取り、鞘を払って、寺岡ののど元にさしつけていた。
「殺せば万事、ケリがつくってわけよ。無礼があって手討ちにしたことになるんだ。逃げようと思うな。うしろから袈裟掛けだぞ」
「待ってくださいよ、清次郎さん。ひどいねえ、どうも」

寺岡は真青だが、唇を震わせながら、辛うじて笑顔を作った。
「仕方がない。こうなったら打明けたところを言いましょう。金がないんですよ。ちょいと目算の外れたことがあってね。師走の諸払いも、方々延ばしているほどで」
「使い込んだもんだな」
春になれば埋め合わせはつくのだという。
「清次郎さん、軸物を売りましょう。その戸袋に入っているんです。五、六本消えたってわかりやしない」
戸袋の中には、書画の軸を入れた桐箱が積み重ねてある。清次郎には絵の値打ちなどわからないが、寺岡は心得た様子で、五箱を選び出した。一つ十両には売れるだろうと言う。心当りの店が明神下にある。
「前から目をつけていたな」
「万一ってこともあるからね。こういうものは、奥の女共には見当がつかないんです」
おれをこのままにほっては置かないだろうと、清次郎は考えている。
売った軸は三十二両になったという。寺岡は、うち十五両を清次郎に渡し、あとは埋め合わせにすると言ったが、三十二両の値段がそもそも怪しく、十両程度は上前をはねたに違いない。
それから数日後に、次の間の博奕があり、お雪が、あした、うちに来てくれとささやいた。
「怖い泥棒でも入りそうだから」

と言う。聞き返そうとするのを、お雪は目でおさえた。
長者町へは一人で行ったが、お雪がこたつから抜け、台所に行って、清次郎が取り残されたところへ、寺岡と中間二人が、かくれ場所から飛び出した。清次郎を包み込むようにして、斬ってかかった。
清次郎は脇差をこたつの下に置いていた。一旦こたつの中に這い込み、攻撃を避けてから、這った姿勢のまま、敵の足を払って出た。中間一人が転び、寺岡が膝を折っている。残る中間を、清次郎は無造作に斬った。胴を割られたその中間は、声も立てずに倒れて動かなかった。寺岡と残る中間は、すでに戦意を失っている。
「三人殺せば大げさになる。殺せとは言われたが、それはやめよう。好きなところへ行きな。住み場所が変れば、また面白いこともあるぜ」
と、清次郎は言った。台所からお雪が出てきたが、眉一つ動かさなかった。
「ひとまずお帰りなさいな。この男は、わたしがなんとかします。……寺岡の旦那、お別れですね。この辺をうろついていたら、こんどこそ清次郎さんに本当に殺されますよ」
まちの喜びようは大変なものだった。その夜、寝所に入ると、いつもと様子が違った。隣室に女中がいない。晴れて夫婦ですね、とまちが言ったのを、清次郎は思い出した。
しばらくは布団を並べて寝ていたが、そのうちにとよの息遣いが乱れはじめ、とよは激しい勢いで夜具をひっぺがし立ってきた。寝間着の下に何も付けていないのがわかった。

とよは熱に浮かされたように、清次郎の布団に入り、上からしがみ付くと、身もだえを繰り返しながら、清次郎の寝間着をむしり取った。

清次郎は茫然となすがままで、とよの火照った体を全身で受けとめながら、これなら申し分ないはずだが、石浜はどうして……と考えていた。

清次郎は翌日、体一つで小関家を脱出した。行先は取りあえず、お雪のところだ。

「やっとわかった。ありゃあ大変な女だ。汲めども尽きせぬ、というやつだな。何度抱いてやっても同じことさ。前にも増して激しい勢いで……石浜礼介が逃げたはずだよ」

お雪は笑いを噛み殺していた。

「それで、もうお屋敷には帰らないんですか」

「役目は果したからな。お袋さんにはまた、新しい婿殿を探してもらうさ。おれは面目ないから、うちにも帰れない」

「ここにお住みなさいな、用心棒って役で」

「そいつは願ってもないが、虫がよすぎるようだな」

「夜はゆっくり寝ませてあげますよ」

「あの中間は？」

「辻斬りってことにでもなりましょうね。始末をしてくれる人があるんです」

清次郎は寝転がった。お雪は得体の知れないところのある女だが、それだけに、しばらくいっしょに暮すのも面白そうだ。ほれてしまった気持もある。

お千代がこの始末を知ったら、清さんはそんなふしだらな人だったのかい、と、真赤になって怒り出すだろう。

清次郎は目を閉じた。うとうとしていると、お雪がどてらかなにかを、そっと上に掛けてくれる気配だった。

淪(りん)

落(らく)

一

おたみが男をくわえ込んできた。男の声はしないが、おたみのにぎやかにしゃべっている声でわかる。これは惣助への合図になっていた。

惣助は裏から出た。空地を大回りし、三軒隣りの家の横を、体を斜めにしながら、表の通りへ抜ける。

おたみと男が、家の中へ入るのが見えた。あたりは暗くて、よく見定めることはできないが、男の身なりは悪くないようだ。中年のお店者だろう。

惣助は歩きだした。どこへという当てはないが、一刻（二時間）か、悪くすればそれ以上も、家には帰れない。

まっすぐ歩いて行くと、深川永代寺の門前町が続くことになるが、惣助は汐見橋を渡ってから、右に曲って小路にまぎれこんだ。

居酒のするが屋では、金はなくても安酒を飲ませてくれる。ツケが利くのは、おたみが払うからで、惣助の行ける店は、まずここしかないのだ。

「惣さん、追ん出されたかい？　おたみは景気がいいね。わたしゃサッパリさ」

おはつという女が、惣助に声をかけた。

おはつはおたみより五つ六つ年上だろう。すると三十四か五になる。おたみと同じようなことをしているが、客はあまり付かないので、するが屋でヤケ酒を飲んでいることが多い。

惣助はうるさいおはつを避けて、離れた場所に腰をおろしたが、おはつは飲みかけの燗徳利と、猪口代りの茶碗を手に、危ない足取りで寄ってきた。

「お前さん、こうやってよく見りゃあ、いい男だよ。おたみはあれで、お前さんにほれているんだなあ。手放さないよ、きっと」

おはつは倒れ込むように、グッと顔を寄せてきて、そう言うと大口をあけて笑い出した。その口臭は一種異様で、たまらないが、歯は白く、よくそろっている。

「うちにおいでよ。かわいがってやるからさあ。手空き同士、仲よくしようよ」

「惣さんは静かに飲みてえとさ。そんなにからみ付くもんじゃねえよ」

と、酒を運んできたおかみのおとりが言った。わりに気の利いた肴を添えているのは、なじみ甲斐だ。

惣助はおはつをほどほどにあしらっていたが、おはつの酔いがひどく、助けて家まで送る破目になった。

惣助も下地があったので、かなり酔っている。もつれ合いながらおはつの住む裏店にたどり着いた。

「惣さん、わたしゃ眠るからね。お前さん、わたしをどうでも好きにしなよ」

おはつは帯を解きかけたまま、ドタリと寝てしまい、目を閉じたままでそう言った。

「仕様がねえな」

とぼやきながら、惣助はおはつの帯を取り、腰ひもをゆるめ、胸をくつろげなどしてやっ

たが、本人も眠気がさし、体が重くておっくうだ。

一眠りする気になった。まだしばらくは、家に帰れないのだ。

部屋の隅に、乱雑に片寄せてある夜着を引張ってきて、おはつにかぶせてやりながら、自分も肌を合わせるようにして、横になった。

惣助はおはつの袖口から手を入れ、乳房をまさぐったり、裾を分けて、下腹から太腿の柔らかい辺りを撫でさすったりしていたが、抱こうというつもりはない。いたずらだが、おはつは眠ったまま、じゃけんに惣助の手を振り払った。

裸蠟燭の火を吹き消した。闇に目が慣れてくると、横におはつの顔がぼんやり浮かんでいる。明るいところではお化けのようだが、いま見ると意外に上品な目鼻立ちをしており、あどけないようなところもある。

惣助は眠った。

客が泊ることはほとんどない。ちゃんと家のあるような男しか、おたみはつかまえないのだ。大抵は四ツ（午後十時）時分にもなれば帰っている。

そのつもりで表戸をあけたが、男はまだいた。いまさら出て行くわけにもゆかないし、大したことでもない。

おたみは男の下になり、おっ広げた肢が蛙のようだった。その顔が惣助に向けられたが、

「気にしなくてもいいんだよ、うちの居候さ。さあ、しっかりおやりな」

と、男に声をかけた。どちらも素っ裸である。だが、男はすくみ込んだ。惣助の腰の刀が目についたのだろう。

男は前をおさえながら、おかしな腰付きでおたみから離れ、大あわてで着物を着はじめた。

惣助は畳に上り、

「悪かったなあ。遠慮には及ばなかったんだ、お客さん」

と言った。

よほど気の小さい男なのだろう、惣助が刀を腰から外すと、斬られるとでも勘違いしたのか、おびえて声を上げた。

おたみは大の字になり、紙で前の始末をはじめている。

男は何かモグモグ言いながら、しきりに頭を下げ、ふところから出した財布の中身を、すっかり畳の上にぶちまけるが早いか、惣助の脇をすり抜け、履物を手につかんだまま、表に飛出した。呼び止める間もなかった。

「ゆすられたつもりだ。ばかな男だよ」

と、おたみが言った。勘違いだと、追って呼び戻すまでの気は、惣助にもない。

金は一両と二分ばかりであった。

「こいつは思いもかけない大もうけだよ」

おたみは長襦袢を引っかけただけの姿で這ってきて、金をつかみ上げた。

「少しよこせ」

と、惣助が言った。

「いやなこった。こっちは元手が要るんだ。お前にはなんにも要らないはずさ。そうだろう？」

惣助は食わせてもらっている身分だから、確かにその通りだった。それに、金を手にすればすぐ酒に代ってしまう。

それでもいくらか気の毒には思ったのだろう、手からこぼれた分を、おたみはくれた。二朱銀一枚、あとは銭だった。

おたみの相場が、二朱か八匁。客をあと十一人も取った勘定になる。

「ヘナヘナしておとなしいやつは、曲者だ。しつっこいったら」

いまの客のことだ。

「ゆすりもいい手だな。臆病者でなくちゃいけないが」

「ところが、あいつには留吉がかかわっている。ゆすられたと、ねじ込むかもしれないねえ。そうなったら厄介だ」

おたみは横坐りで、髪に手をやりながら、さして気にもしないふうに、そう言った。面汚しをされたと、子分を寄越すかもしれない。「客の勘違い」で通るかどうか。

「勝手にしやがれだ。なるようにしかなりゃしないんだ。……お前、どこにいたんだい？」

「おはつの家だ。おはつと寝ていた」

「おやおや。そりゃあお前の勝手だが、おはつは病い持ちだろうよ」

「なに、あいつは酔いつぶれて眠っちまった。おれも眠った。それだけのことだ」

「どうだか」

おたみは金を古ぼけた長火鉢の引出しの中に仕舞ってから、また布団に横になった。

「抱くかい？　相手にはなれないが、勝手にしていいよ」

そう言った時だけ、わずかな笑いを頬に見せながら、おたみは肢を少し開き、片膝を立てた。裸になった惣助は、肌を合わせておたみの腰を招き寄せたが、それはいたわりを見せただけだ。

おはつと同じように、おたみはすぐ眠りだした。

二

「まあいい。済んだことは仕方がねえや。おれが先方には色をつける。金は取っておきな。その代りと言っちゃあなんだが、おたみに頼みがある。聞いてくれるだろうな」

と、留吉が言った。

「なにをすりゃあいいんです？」

「そいつはあとで話すが、おたみならなんのこともねえよ。惣助さん、おたみを四、五日借りるぜ」

「無事に帰してくれましょうね」

「当りめえだ。酒でもくらって、待っていりゃあいい」

話は急で、おたみはその場から連れ去られた。

昨夜の金はそのままだった。

留吉は四、五日と言ったが、おたみは十日経っても戻らなかった。

惣助は主に寝転がって暮していた。酒は絶やさず、うつらうつらしていると、時が早く経ってくれる。

三年前、行き倒れ同様になっているところを、おたみに拾われた。当時から寝ぐらは同じで、おたみは男をくわえこんで稼いでいた。

おたみの生い立ちなどはわからない。一時は留吉に使われ、茶屋や船宿で客を取っていたが、気が強く、金になる客でも、厭なやつは振って振り抜くというふうで、留吉やその子分にも、平気でタテをついたようだ。

いつ死んでもいいと居直っているから、留吉のほうでも扱いかねて、ほうり出した形だ。

だが、留吉の手から全く自由になっているわけではない。この界隈は留吉が勢いを張っている。

隣り町に真正寺という浄土宗の小寺があり、その門前に小松屋という茶屋があるが、これが留吉の根城で、妾のおこうが切り回しており、真正寺で法事をする時は、小松屋が仕出しをやる。

真正寺の住職は生臭坊主で、留吉の賭場はこの寺の本堂や庫裡で開く。

惣助も留吉に用心棒代りに使われたことがあるが、役立たずで、強そうな浪人者に取って

替られてしまった。浪人者はいま、留吉の片腕のようになり、小松屋の食客になっている。

おたみも惣助も、留吉に見放されたかっこうだが、妙な真似をすれば、たちまち締めつけられる仕組みだ。

おたみはどんなことをされているのか、このまま帰ってこないかもしれないが、それならそれで、やむを得ない。食い詰めて野垂れ死にをするのも成行で、是が非でもこの世にしがみつきたいとも思わない。

惣助は金を少しずつ持出し、飲み屋のはしごをして歩いていた。金があると、するが屋には足が向かないのだ。

少々値の張りそうな店にも行った。貧乏浪人と一目でわかる、みすぼらしいなりをしているが、金を見せれば断られはしない。渋皮のむけた娘が、鼻をおさえるようにして、酌をしてくれたりもする。

おたみが居なくなって十日目、茶屋女に持ちかけられるままに、その女を買ったが、愛想がよかったのは金をふんだくるまでで、帯も解かずに大の字になり、早く済ませろ済ませろとせき立てた。顔がいいので、ついその気になったのだが、肌は荒れて乾き、腰は細って肉がたるんでいた。おたみよりよほど若いだろうに、色気のすっかり抜けた女だった。

惣助はその女に心付けもやったが、かんざしを盗んで帰った。かんざしは二朱になったから、差引きで場代は一朱余りで済んだ。

空巣に入られたのがその日だ。隣り近所との付合いは一切なく、家を空けるにしても、留

守を頼む者がいない。地獄と呼ばれる女と、食い詰めの浪人者では、毛嫌いされるのが当り前だ。

それでも空巣に狙われるようなことはなかった。入った泥棒はよほど、切羽つまったやつだろう。

金はまだ三分余りあったはずだが、持ち去られていた。おたみの着物では、破れ屏風に掛けたままになっていた普段着が消えただけで、あとは無事だったが、空巣はあわてていたのか、思いがけぬ金で十分と思ったのか、あまり欲のない盗み様だった。どん底暮しには違いないが、衣装はおたみの商売には欠かせない。くたびれた代物ばかりだが、ひとそろいはある。

残った金といえば、かんざしを売った二朱銀と、あとは銭ばかりだった。このまま、おたみがずっと帰ってこなければ、干乾しになるのは目に見えている。

それから三日経つと、金は底をついた。三度の飯はほとんど食わないが、酒だけは絶やす気になれないのだ。

惣助はするが屋に入りびたった。だが、払いが溜りすぎたという理由で、おやじの六蔵から追立てをくってしまった。

「おたみが帰ってくりゃあ考え様もあるが。どうも惣さん、お前さん、捨てられたんじゃねえのかい」

と、六蔵はむずかしい顔をした。

おはつはこのところ、姿を見せないという。

「行ってみな、惣さん。おはつはお前さんに思召しがあったようじゃないか。食わせてくれるかもしれないよ。どこかの爺さんをうまくたらしこんだようなことを言っていたが」

親切気のあるおとりが、惣助の様子を見て、冷飯に香の物を添えたどんぶりを、そっと出してくれてから、そう教えた。

「長屋を叩き出されたのじゃねえか？」

と、六蔵が言った。

行ってみるとおはつはいなかった。代りに婆さんが出てきて、おはつが御番所に引かれて行ったこと、そのわけは、お尋ね者の賊をかくまったからだと話してくれた。

「運の悪い女さ。品のいい、ニコニコした爺さんで、小金もありそうな風体だったから、欺されたのも無理はない。こいつが、ここを隠れ場所にしたのさ。泊り続けで、金もたっぷりくれるから、本人は金づるにでもめぐり合った気でいたろう。知らなかったと、言い訳が通ったところで、隠し売女は吉原行きだ。コキ使われたあげく、夜鷹に落ちぶれるのが相場さ。ところでお前さんはなんだえ？　おはつのイロかい？」

惣助は橋の手すりにもたれていたが、目まいがひどくなり、立っていられなくなったので、その場に坐り込み、足を投げ出した。

少し離れたところに、子供相手の飴売りが店を出し、時々口上をしゃべりながら太鼓を叩

いていた。

三年前、おたみに拾われた時と同じようだ。あの時も空腹を通り越し、目の前が暗くなっていた。

小松屋に行って、おたみのことを聞いたが、相手にされなかった。顔見知りもいたが、惣助がいまにも倒れそうなほど空腹だとは、だれも思い付かないようだった。

乞食だって食っている。乞食にまでなれないおれは、乞食より劣る、というようなことを、惣助は考えていた。

日は暮れかかっていた。飴屋は店を仕舞ってどこかへ行った。帰らなければならないが、家まではるかに遠い道のりのような気がする。

通行人は気味悪そうに、惣助を避けて通る。酔っ払いと思っているのかもしれないが、いまの惣助には、酒の気は全くない。

供を連れた中年の女が通りかかり、惣助の前で足を止めた。供が惣助をけわしい目でにらみながら、女に歩くようにうながしたが、女は聞き入れずに寄ってきた。

惣助はようやく、女の気配に気付いて目を上げた。武家の妻女であろう。

三

女はあわれみとさげすみの混り合ったような顔をしていたが、すぐ怒った顔に変り、口の端をピリッと震わせた。気丈で怒りっぽい女なのだろう。下げていた袋から小さな金入れを取り出すと、小粒らしいのをつまみ上げ、しゃがんで、惣助の足先にそれを置いた。一分金だった。物乞いに与えるには、多すぎる金だ。

惣助はぼんやり女を見た。何か、間違えて一分をくれたと思ったからだが、そうではなさそうだった。女は惣助の腰の刀に目をやっていた。

惣助に侍らしさはほとんど残っていないが、刀だけはまだ差していた。だが、それも習慣のようなものにすぎない。柄は汚れ、鞘は塗りが剝げたり傷が付いたりで、見る影もなく、刀身は一面に錆が浮いていた。役に立たず、売物にもならなくなっていた。

女は惣助に何か言おうとしたが、思いとどまり、すっと立上がると、あとも見ずに歩み去った。恥を知りなされとでも、言いたかったのだろう。

金を投げ与えられて、これでおれも乞食になれたな、と惣助は思いながら、足先の一分金を眺めていた。

何人かの通行人が、また惣助の前で立止った。だれかが驚いたような声を出した。

惣助は急いで金を拾い上げた。一分あれば十日は食いつなげる。

顔を上げると、立っているのは皆武士で、一様に押し黙って、惣助を見ている。それぞれの顔を惣助は思い出した。

しかし、思い出してもどうということはない。彼等は惣助には、ただの通行人なのだ。

まず腹に何か入れなければならない。するが屋に行き、現金払いでしこたま飲みたい。

「山部じゃないか。この有様はどうした」

と、最初に声を掛けたのは狩野という男だった。
「それにしても、これほどに落ちぶれるとは。さきを行った女が、金を恵んだのを見たぞ」
と言った男の名を、惣助は思い出しかねたが、五年前に同志だったのだ。五年前がひどく昔のようだった。
「家中切っての俊才が、物乞いになったか。思いも及ばん」
大声でそう言った男は、木島というのだった。
「だが、こんな姿を衆目にさらされては、われわれの恥になる。よくもおめおめと、生き長らえているものだ。刀はなんのためにある」
「いやいや、この男はかつての山部ではないわ。行こう」
「そう責めるな。われわれも扶持を離れれば、こうなるかもしれん。しかし哀れな」
彼等はそんな話をしていたが、狩野が惣助に、
「その後のことを聞きたくないか」
と聞いた。惣助はあいまいに笑ってごまかした。
「皆さんはお達者で何より。何事も夢のようですな」
と言い、惣助はふらふらしながら立上った。踏み出した足もおぼつかない。
「どこへ行く?」
「家へね」
「家があるのか」

笑い声が起ったが、惣助は構わなかった。何より、天から降ったような一分がうれしい。そこここの屋台店で、たらふく食ったあと、するが屋に寄った。六蔵も金を見せれば文句はない。金は武家の女に恵まれたのだと惣助は話したが、六蔵とおとりも、彼がどこかで脅しか追剝ぎをやったと思っているようだった。
おはつのことが話にのぼった。
「おはつはちゃんとしたお役についている、御家人の娘だったと聞いたよ」
と、おとりが言った。
「よくあるやつで、おぼこ娘が男にコロリと欺されて駈落ちする。あとはお定まりさね。引っぱられたからには、吉原の河岸店でボロボロにされて、生き延びりゃあマシなほうだ。実を言やあ、わたしも同じような目に遭った女だけれど、この人にしがみついちまったからね」
と、おとりは六蔵を流し目に見た。
「なにをくだらねえ」
六蔵は苦笑して、
「おたみはどうしたろうな。しぶてえ女だから、留吉親分にもおさおさ負けちゃあいめえが……だが惣さん、この辺で身の振り方を考えなよ。おめえ、無精で欲のねえのがいけねえんだ。その気になりゃあ、男一匹どうとでもして食って行けるもんだぜ。悪いことは言わねえから、これを汐におたみと切れなよ」

「だんびらも捨てちまうんだね。そいつがお前さんを縛ってるようなもんだよ」
と、おとりが言った。
「こりゃあ、なんとなく差しているだけで」
いつでも捨てる、と惣助は答えた。確かにおとりの言う通りだ。
惣助は夜更けて家に帰った。久しぶりに食い、飲んだので、あとは寝るばかりだ。翌日の昼まで、前後不覚に眠っていた。
惣助は寝床を出ず、取りとめのない考えを追っていたが、思いがけなくおたみが帰ってきた。
「相変らずの怠け者だね。鼠に引かれなかったかい？」
上ってくると弾んだ声音でそう言い、いきなり帯を解いて、着ているものをみなかなぐり捨てた。惣助はまぶしい思いで、おたみの裸身を見上げた。あれほど、男相手の荒仕事をしているのに、体にたるみがなく、肌色が艶やかだ。
「ようやっとお暇が出たんだ、あの畜生」
と言いながら、おたみは惣助の横にもぐり込んでくると、下帯を外してやり、勢いよく乗りかかってきた。紅潮した顔が美しかった。笑いながら早い息遣いをし、口を吸うのといっしょに、身もだえをするように、下腹を押しつける。
留吉の頼みというのは、男との取っ組合いを、座敷で見せるものだった。男は牛のようなやつを選んであった。座敷はさまざまで、座敷が代るたびに見物も代った。

見物は侍、医者、坊主、商人、職人といろいろで、年寄りから若旦那ふうの男までいたが、彼等が厚かましく、つながったところをのぞき込んできても、覚悟を決めていれば平気だ。せいぜい、派手によがって見せた。ただ組敷かれるとつぶれそうだったし、その上、男が長々と続くやつで、一儀を終えると綿のようになった。
「そこまで恥をさらして、寄越した目くされ金が二分さ。生かしちゃ置けないよ、あいつは」
おたみはサバサバした口調で話していたが、負けん気で激しい気性の女だから、心の中では血の涙を流したのかもしれない。
例の金をすっかり盗まれたこと、着物も持って行かれたことを言うと、おたみは腹を立て、しばらくは何のかのと惣助をののしっていたが、ふと気が付いたように、
「それじゃあお前さん、どうして食っていたんだ」
と聞いた。惣助は別にかくさずに話したが、侍たちのことには触れなかった。
「気になってはいたんだよ。これからはひもじい思いはさせないから。乞食に見立てられちゃあシャクだね。そんな身なりをさしていたわたしが悪いんだ」
「いやいや……」
「もう、いいよ。こうやって一眠りしようじゃないか。地獄にだって極楽はあらあね」

四

……もうおたみの客は帰った頃だった。表戸の前に立つと、横合いから出てきた男が、橋の上で会った狩野で、話があるからそこまで出てきてくれと言った。どうやらあの日、だれかにあとを尾けさせ、その後、惣助がどんな暮しをしているかも承知したようだった。

「もうけ話には乗るが、堅い話はお断りだね。お前さんたちとおれとは、かかわりがなくなっている」

「もうけ話と言ってもいい。そうだな、お主さえよければ、この家の中でも」

狩野は引きさがる様子がない。惣助は仕方なく、狩野を連れ込んだ。

おたみは布団を畳んで片寄せ、寝そべってきせるを手にしていたが、

「だれだい、そりゃあ？　お客なら、わたしゃもう厭だよ」

と言った。

「いや、おれの客だ」

「二本差しだね。珍しいこともあるもんだ。……遠慮しないでお上りな、お侍さん。取って食やあしませんよ」

と、おたみは笑った。

惣助と向い合った狩野は、ささやき声で、

「池内紀十郎を斬ってくれ。十両出す」

と言った。惣助は笑い出した。

「そんな話は御免だね。金ずくと言っても、人ひとりを斬るのは……第一、おれの刀は錆びていて、斬るどころじゃない」

「では五両増す。山部、そんなことは言えぬはずだぞ。まだ往時のお主の気概が、いささかでも残っていればだがな。あれ以来、改革は成功したとお主は思っているかもしれんが、そうはゆかなかった。池内が江戸で、親玉に取入っている限り、主殿派の息の根は止まらん。それどころか、近頃ではわれわれのほうが窮地に立たされている始末だ。闇討ちは卑怯だが、ほかに手段がない」

「お前さんたちでやればよかろう」

「それができぬから頼んでいる。われわれ一党はみな、監視付きだ。江戸でも国許でもそうだ。われわれがやったと露見すれば、効果は逆となり、すべては水泡に帰する。藩のため、ひいては領民のため、引受けてくれ。かつての熱意が失せていても、金のためならよかろう」

「言うことは立派だが、虫がいいね。汚ない仕事は乞食同然のおれにやらせ、お前さんたちは手柄顔で出世の糸口をつかむわけだ」

狩野は怒りをおさえつけたようだ。

「いや、お主の功績は当然考える。見殺しには決してせん」

「ご心配には及ばないよ。おれは刀を捨てる決心をしかけたところだ。刀差しの最後の思い

出に、引受けてもいい。ただし十五両、前金だよ」

「それは困る。それこそ虫がいいではないか」

狩野はあわてたが、前金は五両というところに落着いた。池内紀十郎はよく忍びで遊びに出る。藩邸に戻るのが深夜になることも珍しくないから、道に要して斬ればいい。扶持を離れて五年でも、腕は鈍っていないはずだ。

急いでいるから、金は明日持参すると言って、狩野は帰った。

お主の女に洩らしてはならん、くれぐれもそれは守ってくれと狩野は言ったが、惣助はおたみにすぐ話した。

「草双紙でも読むつもりで聞きな。越後と信濃の境あたりに、青山摂津守と言って、四万石の領地がある。土地がやせている上に、これという産物もない貧乏な国で、年貢の取立てがきびしい。それでも台所は火の車で、藩士も扶持米を借り上げられ、青息吐息だが、江戸屋敷じゃあ、殿様、奥方をはじめ、みんながぜいたく三昧の暮しだ。それというのも、家老の青山主殿というのが、国の事情はお構いなしに、江戸に金を送るからだ。国の費用と、江戸の手当の割合は、年々江戸の分のほうが多くなる。それだけ、領民や藩士から借り上げているんだ。そんなことではいかんと、同志を語らって改革に取りかかったのが、同じく青山竜馬という家老だ。山部惣助という侍は、竜馬方だった」

「やっぱり草双紙だねえ。縁もゆかりもない話だ。お前さんは何をしたんだい？」

「山部は藩の学校一の出来物だと言われていた。勘定方というのにいたが、このままでは奸

物のために国が亡びると思って、竜馬方に加わって働いたんだ。竜馬の片腕と言われるほどで、江戸と国許の間をひんぱんに往復し、仲間を顎の先で使い、諜者を雇って主殿派の動静を探り、不正を曝き立てようとした。得意満面だったなあ、山部は。御家老、二、三の重役に、軽輩の山部だけが加わって、切腹覚悟で江戸の屋敷に乗込み、殿様の前で主殿派と対決の図だ。主殿派では用人の池内、留守居役の小野などというのがいた。……しゃべりまくったのは山部だ。なにしろ不正ののっぴきならぬ証拠をそろえていた。主殿派はグウの音も出ず、主殿びいきの殿様も口の出し様がない。殿様からして、無駄遣いの親玉だから、こっちの言うことがいちいちこたえる。勝負は竜馬派の勝。青山主殿は国で腹を切った。腹を切るとまでは思っていなかった。山部の落ち目は、それからだったんだ」

「お前さん、みんなに憎まれたんだろう、偉そうにした報いで。増上慢のかたきを討たれたんだ。その辺のところは、わたしにだってわかる」

「気が付くのがおそかった。主殿派からはもちろん、仲間うちからも嫌われてしまった。なさけ知らず、出世亡者と陰口も叩かれた。先頭に立って正しい改革をやっているつもりだったんだが。いい縁談もこわれる、親類、知人も遠ざかるで、おれは鬱病になった。すっかり人間が変った。おれのような男を叩き伏せるのは、なんでもない。些細な落度を大きくとがめればいい。だれもかばってくれる者はいないんだ。おれは暇を出されたが、こっちから藩や家を捨てるつもりでもあった。考えてみると、何もかもおれの至らなさからだ。弱虫が豪傑の真似をしていたようなものさ」

「それで、竜馬派とやらが勝ったわけでもなさそうじゃないか」
「主殿派の言い分も、一理あるからだな。御公儀では昔から、大名を潰してやろう、勢いを削ってやろうとしている。何のかのと、金のかかる仕事を言いつける。そんな仕事は山のようにあって、役人が頭を使ってひねり出す。そいつを、お前がやれと名指しされると、小藩はたまったものじゃない。文字通り潰れるような目に遭う。それで常日頃から、御公儀の重立った役人にまいないを贈り、芝居、茶屋酒と大盤振舞をしなくちゃならない。そうして、よろしくと頼んでおく。江戸屋敷では留守居役はじめ、そんなことばかりしている。見様では、ぜひそうしなくちゃならないが、また見様では、それをダシにして、おのれが藩金をいいように私していることになる。どうケジメをつけるかが、かんじんのところだが、おれが見たところじゃあ、なんと言い訳しようと、やつらはよろしくやっていた。……いまさら、どうでもいいが。草双紙はここらでお終いにしようぜ」
「それでお前さん、池内って人を斬る約束をしたんだろう？　ばかだねえ、どうしてそんな」
「斬るものか。五両をタダ取りって寸法だ。うまくゆかんと言って引き延ばして、そのうちにドロンだ。五両あればなんとかなる。お前はその時、おれに付いてくるなりなんなり、勝手にするがいい」
「おや、ずいぶんまた、つれない言い分じゃないか」
「おれがくっついているのは、お前のためによくないかもしれん。さっきお前の体を見ていて、そう思ったのさ、この女はきっと運を切り開くとね。おれはそうじゃない。底の底へと沈む一方だろうよ。疫病神だ」

五

「江戸にも御家老がいるんだろう、惣さん」
「いる。田坂と言って、家老が五人いるうち、新参のほうで、毒にも薬にもならん御仁だから、二派の争いを首をすくめて眺めているだけだ。どうしてそんなことを聞く？」
「そんなのが得をすることがあると思ってさ。お前さん知っているだろう、小松屋の居候の浪人。あいつはいま居候どころか、留吉の跡目が決まったようなものなんだ」
留吉はまだ五十過ぎで、見た目にはピンピンしているようだが、労咳が重なり、ここ二年生きるのがせいぜいだという。
それで跡目を定めておかねばならないが、留吉には子がない。身内のだれかということになると、勘三、三次の二人が勢力を二分している。勘三が年長で、古くから留吉の下にいたので、跡目はてっきり勘三と見られていたが、三次もおとなしく引込んではいない。告げ口その他、裏で泥仕合をやっていたが、勘三は留吉の妾、小松屋のおこうと通じていると、留吉に密告した者がある。匿名の手紙だったが、証拠はこれこれと書き並べてあった。
勘三とおこうは必死に無実を言い立てたが、証人が何人もいる。おこうは首をくくろうという騒ぎだ。勘三は留吉に盃を返し、身の危険を察して行方をくらました。追手をかけたが

無駄だった。

その後になって、証人が三次に金をもらい、嘘をついていたことを白状した。浪人者もおこうの潔白を請合ったので、すべては三次の細工とわかり、三次は利き腕を斬り落され、追い出された。

勘三、三次がいなくなると、あとは小粒ばかりだ。浪人者は留吉の信を得、兼ねてからおこうに頼られているので、すんなりとお鉢が回ってきた。

「わかるだろう、惣さん。筋書はみんな浪人者が書いたんだ。おこうがグルだ。留吉が死んだら、大っぴらにくっつく算段だろう。どうだえ、ちょいと似ていないかい、その江戸家老とさ」

「まさかあの人が、とは思うがね」

「お前さんが用人を斬ったとしてみな。お前さんがやったとわかる仕掛けじゃあるまいかね。待伏せかなにかがあって、お前さんはやられるんだ」

「おれがやられるか。そうか」

惣助は笑い出した。おたみが言うのは、当っているかもしれない。五年前の惣助の活動を知らぬ者はない。これで竜馬派は勢いを失う。一方主殿派は、用人池内紀十郎の死によって、命脈を絶たれる。池内は血縁の姉を主君の側室にしているが、おそらく姉は暇を出されよう。江戸家老の田坂が残る。なるほどこの男は長年、ひそかに爪を砥いでいたのかもしれない。

「あの浪人、何と言ったかな。刀を捨てたのか」

「とっくの昔だ。惣さんみたように、恋々としちゃあいないよ。身なりから物言いから、すっかり板についたよ」

茶屋の奥深い戸口から明るい光が洩れ、客が送られて出てきた。先導の提灯が飛石を伝ってやってくる。

客は門のところで見送りも提灯も断り、足早に歩き出した。惣助は少し離れて、あとについた。

「狩野だろう。山部だよ」

と声を掛けると、客はギクリとしたように立止まった。惣助はゆっくり前に回った。

「人違いだ。御免」

すり抜けようとする右腕を、惣助は捕えた。

「頭巾をかぶっていたって、お主とわかるよ。かくすことはあるまい」

狩野は逃げるのをあきらめたようだった。

「悪いところへ……お主はこんなところで何をしている。渡した五両に不足でもあるのか？」

「お主をずっと待っていた。忍び合いと言い抜けたいんだろうが、そうはゆかん。茶屋に残っているのは、御家老の田坂だ。人目をこんな場所に避けての密会となれば、お主がどういうことをしているかも察しがつく。田坂の犬だったわけだ」

「待て。見当違いをするな。御家老とはただ……」

「そんなことだろうと見当をつけてくれたのは、お主も会ったろう、おれの女のおたみだ。おれもいささか世ずれして、前よりは目が見える」

「話せばわかる。まず手を放してくれ。見通されては仕方がない。山部、改めて頼むが、手を貸してくれ。御家老に会わせる。田坂様は今後、一藩を背負われるお方だぞ。お主が加わってくれると心強い。帰参はもちろん、いいお役も思いのままだ。ちょっと待ってくれ。間もなく見えられよう」

狩野は振り返った。提灯の明りが揺れながら、門までくる。供も乗物もなしで、よほど用心しているのだろう。

そのほうへ惣助の気をそらせ、斬るつもりだとわかっている。抜打ちにしてきたが、一瞬先に惣助は狩野のふところに入っていた。同時に強く胸を押してうしろへよろめかせ、抜打ちのお返しで、左の脇下から斬り上げた。止めは胸の一突きだった。

田坂が小走りでやってきたが、この有様を見て立ちすくんだ。

「狩野はご覧の通り、斬り捨てました。錆び刀もけっこう斬れますものです」

と、惣助は言った。田坂は見すぼらしい浪人が何者なのか、すぐ知ったようだった。

「人斬りはやめるつもりでおりましたが、かつての仲間のためにも、このような男は許せませんのでね。御用人の一件は、ほかに人をお探しになるほかありますまい。御家老ならうまくやりそうだ」

惣助は少し笑った。

「思い出した。山部と申したな。一切を察したようだが、口を閉じてくれるか。金なら望み通りに与える。それとも殿に帰参を願ってやろうか。わしとしては、そちのような男がほしいが」

田坂はもう落着いていた。

海風が強く、波音もする。洲崎の浜がすぐ近くだった。闇ばかりだが、曇り空はやや明るみを持っている。

「お手許の金をいただきましょうか。それでけっこう。御家のゴタゴタなどに、わたくしはもうなんの興味もありません。人間より、金が正直で、役にも立ちます」

田坂がくれた金は三両余りだった。

「こう言えばそちは笑うかもしれんが、気持は分らんでもない。わしとて、つくづく厭になることがないでもない。権勢の座をめぐっての争いがだ。わしは悪人でよいが、悪人なりに、御家のためによかれと考えてはいるのだが」

狩野はもう動かなくなっている。田坂はそのむくろに目もくれなかった。

田坂と別れると、惣助は汐見橋まで戻ってきた。おたみは例によって、客を引張り込んでいるはずだ。

手すりにもたれて川面を見おろすと、雨の粒がはねているのがわかる。いつの間にか、降り出したようだ。

惣助は腰の大小を抜き出し、無造作に川に投げた。ボロボロになった刀だが、さっきの切味は悪くなかった。

おたみを連れて、土地を離れようと惣助は考えている。くっついているのは、おたみのためにならぬ、などと言ったのは、こちらの身勝手だったようだ。いや、そんなきれいごとではなく、おたみをうとましく思う心が微かにでもきざしていたのではないか。

あの時、おたみはふっと寂しそうな顔をした。この人はやっぱりお侍だ、わたしから離れて行く……そんな気がしたのではないか。

惣助は橋を渡って歩き出した。

留吉が死ぬ。わからないものだ。行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、淀みに浮かぶうたかたは、且つ消え且つ結びて……

惣助は口ずさみながら、するが屋ののれんをくぐった。

不義の部屋

一

抱擁が佳境に入ってくると、つやはひどく苦しそうにもだえ、小鼻が激しく動く。丸くなってかじり付くかと思えば、ひきつけたように、反りかえる。

口からの声は押し殺されているが、鼻からは洩れ続ける。しかし、歌うような、また泣くような鼻からの音声は、大きなものではない。

つやは小寺節之助と交わる前に、あらかじめ自分の口に「さるぐつわ」をほどこす。さらしの布を口中に詰め、さらに、しごき帯を短くしたもので、唇を覆い、首のうしろで結ぶ。

これはもちろん、声が隣室の夫、中沢祐介の耳に届かぬ用心だが、重病の祐介はほとんど人事をわきまえぬ状態なので、念のためというほどの処置である。

燃え立ってくると、つやはよほど呼吸が苦しいに違いなく、身もだえが、まるで殺されでもするようだ。

ふだんは抜けるほど白い顔が紅潮し、それが次第に体にまで移ってくる。

そういうつやに、節之助は一層欲情をかき立てられ、責め方が粗暴になる。

つやの体が大波を打ち、からめた足に、痛いほど力が入り、節之助の背に爪が食いこむ。最後の時、つやは呼吸を止めている。

つやの体内は熱い。熱い油のようなものが、節之助を包んでいる。

堅く抱き合ったまま、節之助はつやのさるぐつわを、手早く解いてやる。そうしないと、本当に気を失ってしまうかもしれないという危惧がある。

口が自由になって初めて、つやは深い呼吸を口でし続けながら、体の力を抜く。

つやの肌はすべらかだが、事が終ると、ドッと汗ばんできて、節之助の体に吸いつくような感じになる。

節之助には、つやの湿った肌が、なんとも言えずいいので、しばらくは離れる気がしない。あまり話すことはない。それより、互いに見詰め合って黙っているほうが多い。

その部屋に寝具などはなく、体を覆うものと言えば、それぞれの衣服くらいなものだが、はじめは覆っていても、夢中になればはねのけてしまう。つやははじめ、帯をゆるめ、前を開いているだけだが、節之助の手で、次第に裸同然にされ、三十二歳の豊かな体を男の目にさらしてしまう。

二人のひそかな交わりは、半刻（一時間）足らずあれば十分で、節之助が情を達するのは、大抵二度であった。つやがどのくらい堪能しているのか、それはわからないが、安らかな顔を見れば、不満は残っていないと察しられる。

「そろそろ……」

唇でつやの耳と戯れながら、節之助がささやいた。

「いえ、まだ」

男の下で、もどかしそうに体を動かしながら、つやがささやき返す。

「ここにはだれも来ませぬ。お客様も参られませぬ」

やがて節之助は、つやのかたわらに体を横たえた。

襖をへだてた隣室は音もない。中沢祐介は、いつに変らず、死灰のように仰臥しているに違いなかった。

屋敷は広く、これをめぐる庭も広い。祐介の病室は離れで、庭に面している。次の間で、つやと節之助は忍び会うのだが、離れにはもう一間、せまい部屋があり、湯茶の支度くらいは、そこでできることになっている。

家人はよほど急な用でもない限り、離れには渡ってこない。ただ、息子の数馬が朝と晩、きまった時刻に見舞いにやってくる。

つやはずっと離れで暮し、夫の看病に専念していて、夜は病室で寝る。

病人によくないというので、見舞いの客はほとんど離れに入れず、書院につやが出て、あいさつを受けることにしている。

例外があって、それは祐介が特に親しくしていたり、目をかけていたりした数人に限られており、その中に節之助も入っている。

節之助は住いが近くであり、頻々と見舞いに訪れても、不思議に思う者はない。

節之助が祐介の枕辺で見舞いの言葉をのべる時、祐介の目はうつろで、節之助をまるで見ていないことが多かった。

節之助だけではなく、ほかの者にも同様で、どうかすると、妻のつやさえ、それと認めることができないようだという。

抜け殻のように寝ているか、眠っている。

病室の隣りで、不義の男女がからみ合っていようとは、だれも考えない。それも祐介の五官が、常にもうろうとしているから、できることだった。

医師はすでにさじを投げている。衰死を待つばかりだと、つやに引導を渡しているが、それにしては症状はよくも悪くもならず、なんとか持ちこたえている気配だった。

食事は重湯、粥、野菜や白身の魚の類を、米と共にごく柔らかく煮込んだ雑炊などだが、かなり食べている。永らえているのは、意外に食が進むためだろうと、医師は言っている。

祐介はもとから胃腸が悪く、腹下しをすることが多かったが、一年半前に吐血して以来、寝込むようになった。

一旦は軽快したと見えたが、また病状が重くなり、ここ半年は寝たきりである。下のものの始末も、つやにしてもらわなければならない。

そのうちに、だれとも口を利かなくなり、話しかけても、ぼんやりしているばかりで、反応がないようになった。

祐介は御書院番組頭の職を辞したが、一人息子の数馬が、すでに十五歳になり、御目見得を終えて大御番に組入れられているので、小普請入りは免れている。数馬はいずれ、御書院番組に直されるはずである。

小寺節之助は祐介の組下にいた若い番士で、死んだ節之助の父親が、祐介と懇意であった。

祐介は年功のその父親に、何かと引き回してもらった恩がある。祐介が節之助に特に目をかけたのは、そういうわけがあったほかに、人柄を好んでいたからである。

節之助は一見、柔弱な感じの美男で、性質は温順だが、人の言いなりにはならない、頑固なところも持っている。

節之助は日頃から、よく祐介の屋敷に出入りしていたが、祐介が病気のために、勤めを怠り勝ちになると、出入りは一層頻繁になった。節之助の口から、勤め向き一般、組下の者の動静などを詳しく知ることができる。

つやも節之助には気安く会い、歓待していた。いい人だと祐介に言いもしていたが、密通に及ぶほどの仲になろうとは思っていなかった。

しかも密会は、病人の隣室である。病人は、つやにとっては夫、節之助にとっては恩義のある上司であった。

二

「隣りで、なにか音が」

と、節之助が言った。つやはギクリとした様子だったが、耳を澄ましても、何も聞こえない。わずかに音と言えば、庭木を風の渡る音、小鳥の声、遠くの物売りの声などである。

「臆病なお方。なんで音がしましょう」

と言いながら、つやは節之助の胸に体をのせてきた。乳房が豊満である。肌は湿っている。

忍び笑いの洩れる唇が、節之助の耳たぶをくすぐる。もう一度という催促であろう。

つやは日頃は控え目すぎるほどだが、交わりとなると、大胆に、節之助をグイグイ押してくる。

つやは人目をひく美貌ではないが、目鼻立ちは整ったほうであろう。それが、節之助に抱かれて恍惚の境にある時には、例えば夕陽を透かした楓葉のような鮮やかさになる。

「万一ということがあります。さあ」

節之助はつやをなだめ、その重い体をそっと横にかかえおろし、おのれの上体を起した。

「追っつけ、七ツ（午後四時）になりましょう。おいとましなければ」

「次はいつ？　五日も中があいては、厭でございますよ」

つやは両手で自分の乳房をつかみ、誇示するようにしながら、節之助に笑いかけた。

襖が動いた。

三

中沢祐介は、うしろ手に襖をしめた。右手に刀をつかんでいる。白い寝衣を着、足を少し広げて立っていた。

やせ衰えてはいるが、体が揺れるようなことはない。つやが手入れをするので、髪はそれほど乱れず、さかやきも剃ってあるが、頬から顎、口辺へかけての無精ひげは、かなり伸びていた。

つやは寝ながら、祐介が襖をあけて入ってくるところから見ていた。だが、信じられないことが起ったので、対応はひどく鈍かった。まぼろしとしか思えない。わけがわからないのである。

節之助は、祐介に背を向けた形なので、気付いていなかった。

祐介が刀を抜き、鞘を投げ捨てると同時に、

「両人とも動くな」

と、しっかりした声で言った。

刀の光が目に入ってはじめて、つやは短い悲鳴を上げ、飛び起きて節之助にしがみついた。節之助は身動きができない。

「不義を見届けた。覚悟をせい」

と、祐介はまた言った。

つやは辛うじて衣類を引っかけた姿だが、節之助は全裸であった。彼が一瞬、つやを突きのけようとしたのは、おのれのぶざまさを、とっさに恥じたからだが、つやは一層力をこめて抱きつき、顔を男の胸に埋めた。

つやの全身が震えだし、その波が節之助にも伝わった。節之助も胴震いを始めた。

「見苦しい。二人とも着物を着よ。その上で手打ちにしてやる」

と、祐介は言い、刀はそのまま持ち、ゆっくりあぐらをかいた。よろめきもしなかったが、立っているのが、さすがに辛かったのであろう。

節之助は魂が抜けたようになり、つやにピッタリ抱きつかれたままでいる。つやはしばらく離れなかったが、顔を上げてジッと祐介を見てから、抱擁を解いた。

つやのほうが、落着きを早く取戻していた。立上り、うしろを向いて、静かに腰のものから付け始めた。

節之助も震える手で下帯を締め、下着を着だした。

「若い男女は肌にたるみがのうて、美しいの。小寺は何歳になった?」

と、祐介が節之助に聞いたが、答えるゆとりはない。節之助の顔は、手打ちにされる恐怖でゆがんでいる。

先に着終ったつやが、正座して手を畳につかえた。

「お願いでございます。わたくしをお手打ちになされませ。……小寺様はお助けくださいまし。前途のあるお方でございます。こうなりましたのも、わたくしの罪で、お誘い申したのは、わたくしでございます」

つやはそう言って深い辞儀をした。

「それはならんぞ。不義者の成敗は、男女両人共じゃ」

「死にます前の、ただ一度のお願いでございます。どうかお慈悲を」

「ならんと申している。小寺も歴とした武士のはずじゃ。女の嘆願で助命されたとて、生き永らえる空はあるまい。のう小寺」

祐介の声は時々かすれた。だが、しっかりした調子は変らない。

節之助は首を垂れて答えなかった。
「口が利けぬか。死ぬのが怖いか、小寺」
「はい」
間を置いて、節之助は短い返答をしたが、その正直な返答で反って覚悟らしいものができたのかもしれない。自分は手打ちにされて当然だが、つやを許してくれと言った。
「かばい合いか。命を捨ててのう」
声にならぬ笑いが、祐介の口から洩れた。
「片手落ちはならんと言っている。今の今まで、抱き合うていたであろう。抱き合うたまま、あの世へ行け」
祐介のひげ面は蒼白だが、目が強い光を放っている。
「小寺様、お許しはいただけません」
と、つやは言い、節之助ににじり寄って、いたわるように、その両手を取った。
「あきらめましょう。ご一緒なら、死出の旅も楽しゅうございます。怖くはありません」
節之助は、なにかの熱いかたまりでも飲みこむように、ゴクリとのどを鳴らしてから、大きくうなずいた。彼は祐介に正対し、はじめて平伏した。
「死んでよいのか、小寺」
と、祐介が聞いた。微かに嘲弄の響きがある。
「ご存分に。ただ、あの世ではつや様を妻にもらい受けます」

「立派なことを申すが、当て外れ、しくじりではなかったのか」
「お言葉がよくわかりませぬが」
「まあよい、聞いておくことがある。好き合うたのは、いつの頃からじゃ。また、情を通じたのはいつからじゃ。誘うたのはつやか、小寺か。いまさら包みかくすこともあるまい」
答えたのは、つや、節之助ともどもであった。思い合うようになったのは、祐介が倒れる以前からである。思いは互いに秘めていたが、それだけ募る一方だった。
どちらが誘ったというのではない。はじめて帯を解いたのは、ほぼ半年前で、祐介の病状が重くなり、しばしば放心状態に陥りだした頃である。その時の交わりは、まだ隣室に気を兼ね、倉卒の味気ないものであった。
以後は、祐介の衰弱に従って、情交は濃密な、ただれたものになった。
「まず思うた通りじゃ。小寺はつやにうつつを抜かしたのが不運であったな。そなた、何歳になる？」
と、祐介はまた聞いた。
「二十四歳になります」
「若い。御書院番は名誉の勤め。加うるに美男。女などは選り取り見取りであったろうに。妻女も上玉を手に入れられたであろう」
祐介は俗な言い方をした。
「……それがつやとは。なんの意図で？」

「意図など、ございませぬ」
「そうか」
沈黙がきた。周囲は相変らず静寂そのもので、三人の息遣いがはっきり聞き取れる。
「わたくしも、伺いたいことがございます」
と、つやが言った。
「申せ」
「あなた様は、わたくしや、家内の者を欺いておいでになりました。それはなんのためでございますか。不義を見極めようと……」
「そのほかに理由はない。医者には金を遣わし、偽りを言わせた。重病人のふりは、苦しいものよ。第一、食いとうても食えぬのがな。じゃが、それも慣れてくる。やせ衰え、真実の重病人のようになる。とろとろと眠ったり覚めたり、身動きもおっくうになる。さまざまなことを考える。寝たきりでいるのも楽じゃと思うようにもなった。浮世のわずらわしさがない。このまま死んでもけっこうと……それはともかく、二人の睦言は前々から面白く聞いていた。もっとも、口数は少なかったの。よそで話し合うていたのかもしれぬが」
「それは面白うございましたろう」
と、つやは冷たく言った。
「……よそで何を。おかしなことをおっしゃいます。恋には口数は要りませぬ。それにしても、よう足腰が立ちましたなあ」

「そちは夜はよう眠る。おれが夜中、庭に出ていたのを知らぬ。昼間も、そちが居ぬ時に、布団を剝ぎ、手足を動かしていたのよ。食物は医者が運んでくれた。少量じゃが、常人の食うものをな」
祐介はなるほど、異常にやせているが、肌の艶はいい。元来色白で、いかにも重病人らしく見えるのも、偽装に幸いしていた。
「話しついでに、昔のことを話そう。因果は巡ると言う。そのような趣きがあってな」

四

祐介の家は代々、御徒であった。御徒は小禄の御家人である。祐介の組頭は上司に取入ることのうまい男で、御徒頭にしきりに進物をし、その使いに祐介を出す。また、手伝いが必要な時には祐介をさし出した。
御徒頭は進藤と言ったが、進藤の屋敷で、祐介はよく見知られ、気に入られていた。
進藤は四十半ばの年で卒中にかかり、寝たきりになった。当時祐介は若く、独り身であった。
御徒頭の職はそのままで、代りを祐介の組頭が勤める。進藤は病気恢復次第、職に戻るようにという、若年寄の指図がある。
これは進藤の内室、うたが小普請支配の戸田という名門の娘で、戸田が上層の者と親交があったから取られた、優遇である。

小普請支配は、無役の旗本・御家人を統制し、登用などの人事を扱う役目で役高は三千石と、格式が高い。しかし戸田の食禄は役高を越えていた。なお御徒頭は、役高千石で、やはりいい地位と言える。平の徒の祐介は七十俵五人扶持である。

進藤が倒れた時から、組頭は冷淡になったが、祐介は以前よりも、屋敷に出入りする度数が多くなった。

重宝がられ、様々な用を頼まれる。勤めて損はないという打算はあったが、野心とは程遠い。御家人が旗本に成り上る見込みは、まずない世界である。

祐介の運命が一変したのは、進藤の妻うたに愛されたからである。通常、祐介ごときとうたとは、顔を合わせる折もないはずだが、進藤が重病という変則の事態であった。

祐介は病室に入り、さまざまの用を足した。うたはその都度、祐介を引き留めて、話相手にした。頼まれる用は、ほとんどうたからのものになっていた。

病室は別棟になり、数室ある。そこにはうたと、側使いの女中一人が詰めているだけであった。

祐介はうたから、ねぎらいの酒をすすめられ、したたかに酔って倒れ伏したが、うたは介抱してやりながら、その手を次第に愛撫に変えた。うたの身も世もないような迫り方は圧倒的で、あらがう暇もなかった。

「夫は何もわかりません。安心なされ」

うたは祐介を堅く抱き締め、頬ずりをくり返しながら、そう言った。

そこは病室の隣りではなく、一室を隔てていたが、耳ざとい病人なら、気配でそれと知るはずであった。しかし、進藤は全身不随で、口さえ利けない。たとえ不義の音声を耳にしたとしても、おのれの意志を、人に伝えようがない。

一度そうした仲になると、うたは毎日でも祐介を引入れたがった。祐介は罪の発覚を恐れながらも、うたの体に溺れこんでしまった。

うたはもう四十に近い年で、子も三人あったが、肌の張りに衰えが見られなかった。深窓に育った女の、柔らかな肌であった。

密会の時には、側使いの女は用を命ぜられ、どこかへやられた。その女は頃合いを見たように帰ってきた。総じて、うたの屋敷内での暮しぶりは、気まま勝手で、家族も奉公の者も、ひたすらうたの意を迎えているという様子だった。

密会のことも、あるいは側使いや、二、三の家来に知られているかもしれない。だが、彼等は決して口外しないだろう、と祐介は思った。その安心が、うたとの情事を続けさせる因になった。

祐介に妻を迎える話が持上ったのは、うたと一年を越える密会を重ねた頃であった。祐介はうたとの交情にようやく倦んでおり、事が洩れる恐怖も増していたので、うたと切れるよい折だと思っていたが、うたは早くも祐介の心の動きを察しており、それを許さなかった。

妹のもとを妻にしてくれと、うたは言った。もとは妾腹で、うたとは腹違いの妹になり、年ははたちほども隔たっている。

もとは町家にいて貧窮していたが、これを屋敷に引取り、保護を加えたのがうたで、もとは何事も、恩人のうたの意に逆らうことができない。

祐介がもとを娶れば、うたはこれまで同様、自由に祐介と会える。戸田の屋敷内でもいいし、祐介の家に、うたが来てもいい。もとは決してうたを拒まず、人に訴えることもしないだろう。どんな手段を使っても、祐介を放すまいと、うたは考えていた。

祐介が承知すれば、立身を保証すると、うたは言った。腹違いとは言え、もとは戸田の娘である。それを御徒のままの祐介の妻にはやれない。身分は直参旗本、勤めは三番組の内でなければならない。三番組とは大番、小姓番、書院番の各組である。

祐介をそのような身分に引上げるのには、手段がある。父が万事計らってくれる、とうたはなんでもないように言った。

確かになんでもなく、それは実現した。事は祐介の与り知らぬうちに進行したが、要するに系図上の操作で、中沢の家は元来、三河以来の勲功のある家だが、それが絶えており、わずかに支流の中沢家が残っているだけなので、これに本家を嗣がせ、再興させようというものだった。一通り筋が通っていれば、それでいい。

祐介は御書院番組の末席に連なり、もととの祝言が挙げられたのだが、その前に、祐介の心胆を寒からしめることが起っている。

祐介は進藤の病床に侍していた。うたはちょうど、座を外していた。

進藤の目が動いて、祐介を見た。その目の動き、色がいつもと違っている。

進藤の口も動き、非常にのろい調子の言葉を綴った。祐介は一瞬、意識を失いかけた。心搏が胸壁を突き破るように打ちだした。

「わしは小普請であった。戸田に拾われた」

言葉は単調で、一語一語、区切られている。一語を発するのに、非常な努力を要するようだった。

「拾われたわけは、戸田の妻に取入った……」

進藤はそこで休んだ。進藤の目に怒りの色はなかった。むしろ悲しそうだった。

「きさまには、多くを言わずとも、成行はわかろう。念願の、立身はした。じゃが、わしは木偶人形になった。家のあるじは、うたじゃ。わしは、何もせぬ。してはならぬ。人形の生涯。それが、立身であった。それで、きさまに言う。やめるがよい。おなご共が、家を背に、網を張りめぐらし、われらを……」

進藤の口は、そこで閉された。うたが戻ったからである。進藤はもとの、呆然とした廃人であった。

進藤の言葉の終り頃は、祐介には聞き取れなかったが、進藤が伝えようとしたことは、よくわかった。

祐介は進藤の忠告に従わなかった。もととの婚儀のことが進み、もう引返せないところに来ていたからでもあるが、おれは違う、とおのれに弁明してもいた。

もとを妻に迎えたのち、祐介は家で、訪れたうたと交わった。もとはうたの目配せで部屋

を離れ、どこかにひっそりとかくれ、うたの帰りを見送る時にだけ、出てきた。

うたとのことについては、祐介ももとも決して口に出さなかった。もとは意志を失った女のようで、夜、祐介を拒むこともなかった。

六年経った。進藤は死に、うたはみずから祐介との交情を絶った。さすがに年を考え、もとの屈辱的な立場を気の毒にも思ったのであろう。

だが、祐介に寄せる好意は変らず、父親にしきりに祐介を推挙しているようだった。組頭への昇進が早かったのも、そのためであった。うたはやはり、祐介ともとを支配していた。

もとは一男一女を生み、家事の取締りもよく、妻の役目を過不足なく果していた。風波は何一つ起らなかったが、夫のために従順に体を開いても、決して開かぬ部分が、心にある。しかし、そのことを祐介は責めることができない。

さらに数年経ち、うたとは全く疎遠になった。気が付いてみると、もとが大きな力を持って、家に君臨していた。うたの支配力が、もとに移っただけのことであった。もとの背後には、いまだに健在で、小普請支配の役目を勤めている戸田があった。

加うるに、祐介にはひけ目がある。もとの従順さは以前に変わらないが、それがひっくり返り、威圧になる。子供はもちろん、もとの味方であった。祐介にとって、自由な空気はどこにもなかった。

もとが病死したのは、三年前の正月であった。もとは病床に祐介を近付けず、静かに息を引取った。

その後添いにつやが入っている。これも戸田と、うたの世話であった。妻を自分で選びたい望みは達せられなかった。

つやも大身の娘で、一度嫁入ったが、夫に死なれ、家に戻っていた。戸田の縁続きに当る。祐介はどうしても、網から逃れることができない。

五

「おれは進藤の真似をした、ということになる」

と、祐介は言った。

「おれは偽病人、進藤はまことの病人という違いはあるが、妻の不義を確かめていたのは同じじゃ。あの人が物を言うた時ほど、おどろいたことはない。い、ろ、は、と寝ながら稽古をしていたのであろう。女に頼る立身はやめよと、おれに言いたいばかりに」

祐介はつやに目を向けた。

「もとは、そなたには打明けたであろう。あのようなことを、だれにも打明けずに、死んでは行けまい」

「いいえ、何も」

と、つやは答えた。祐介に返した視線は、他人を見るようである。祐介は奇妙な笑顔になった。

「すべてを一場の夢にしてしまうこともできる。何もなかったことにする。小寺はこれまで

通り。つやも同じだが、家に残るなり、出るなり、それは勝手にしてよい。ただ、二度と会うてはならぬ。穏便の処置というものではないか」

節之助の顔に、生色がよみがえったように見えたが、つやをはばかっている。つやの表情は塑像のように堅い。

「死ぬのはだれしも厭じゃ。若い身空で、しかも不義者として斬られるのはの。そうであろう、小寺。つやにしてもそうじゃ。一花も二花も咲かせる年だからの。やせ我慢をすることはない。……ただし、包みかくさずに白状してくれれば、のことじゃ。つやはもとに打明けられたであろう。その式で、小寺を引きつけておこうと思うたであろう。それを小寺に話した。小寺は同意した。小寺に、人形同然の妻をあてがう。世間体を取りつくろい、末長く密通を続ける。一方、小寺を引立て、栄達を計ってやる。つやの実家も、それだけの力がある。あるいは戸田にすがってもよい。……そちらから白状する労を省いてやったぞ」

祐介は笑い、ぐらりとしかけた体を立て直した。

「わたくしはもと様から、何も伺ってはおりません。そのような相談を、小寺様とした覚えもございません。わたくしはうた様とは違います。小寺様も、あなた様とは違いましょう。ただ好き合うておりますだけのこと。おかしな企らみなど」

つやの口辺に、激しい怒りと、冷笑の影が射した。

「そうか。小寺はどうじゃ」

「つや様の申される通りでございます」

節之助は、絞り出すような声で言った。

「二人とも、命を助かりとうはないのか」

「覚えのない白状をいたすより、お手打ちになりましょう。……小寺様」

小寺節之助の顔は生色を失っているが、つやの目は輝き、顔は紅潮していた。祐介には、節之助の心が千々に乱れているのがわかる。しかし、つやには迷いがない。

「止むを得ぬ。覚悟をするがよい。小寺が先じゃ」

祐介は刀を取り直し、節之助にいざり寄ると、その背を抱きかかえ、刀の切先を乳下に向けた。節之助の体の戦きが、祐介に伝わる。

つやが突然、せぐり上げながら合掌した。

節之助は大きな息を一つ吐き、閉じていた目を開いて顔をつやに向け、

「つや様」

と声を掛けた。つやは合掌したまま、

「すぐあとに参ります」

と応じた。

祐介は切先をすすめた。だがそれは、わずかに節之助の脇腹の肉を削いだだけに終っている。

節之助は、夢から覚めたように、大きく目を見開いた。

「なるほど、つやはうたではない。小寺はおれではなかった。大分おれに似てはいるようだ

がの。おれの思い過しであった。もう手打ちはせぬ。安心せい」

祐介は刀を置いた。

「つや、手当てをしてやれ。そなたは離縁する。あとは二人の好きにするがよい。……命を助かりたいために、偽りの白状でもしておれば、間違いなく手打ちにしていた。危ないところであったな」

二人は言葉もない。祐介は病室まで這って行き、布団に横たわった。

何事もなかったように、周囲は静かである。どこかで、もずが鋭く鳴いた。

祐介は身動きをせず、振り向きもしない。

虚脱して坐っているつや、節之助の二人は、ほうり出された操り人形のように見える。

二人が吾に返り、許された恐ろしさを嚙みしめるまでには、間がありそうだった。

ある御落胤

一

按摩に体をもませながら、藤兵衛は夢見心地になっていた。酒もいくらか入っていて、雲にでも乗っているような快さだ。

按摩と取りとめのない話をしているうちに、藤兵衛は昔語りを始めた。自分はこうして、しがない煙草屋をしているが、実は身分のある者の子かもしれないというのだ。

藤兵衛はそれを信じているわけではなく、まさかと思っているが、そうあってほしいという願いがないわけでもない。

どうせ、按摩との無駄話である。ほら半分でも、当座の退屈しのぎにはなる。

話はこうだ。

自分は土佐の生れだが、高知城下の外れの百姓家で、六歳の頃まで育てられた。

その時分のことは、何もわからないが、父親はいなかった。名前もわからない。

母親はれんといって、幼な心にもやさしく上品な、美しい女だった。

百姓家のあるじの治作は、れんの兄で、一家は貧しかった。れんは何か事情があって、自分の父と別れ、自分を連れて、治作のもとに身を寄せていたものらしい。

四歳の時に、れんが病死した。その二年後に、治作も熱病を患って死んだ。治作夫婦は子沢山で、あとに残された女房が自分を構ってくれなくなったので、れんの親類で行商をしていた弥兵衛という者が自分を引取り、江戸に出た。

その後、さんざん苦労をなめたが、弥兵衛も死に、親類というものはなくなってしまった。

それで思い出すのは、れんのしつけがきびしかったことである。れんは自分をしかる時に、お前はただの百姓の子ではない、父親は立派な人で、その人の名をはずかしめるようなことをしてはいけないと、よく言った。

れんは美しい上に、礼儀作法を身につけた女だった。治作の家にやってくる女たちは、みなれんに一目置いているようだった。

父親のことを聞いても、れんは何も教えてくれなかった。治作も同じで、治作は聞くときまって怖い顔をした。

れんはきれいな鏡台と手箱をもっていた。どちらも朱の漆塗りで、何かの紋を散らしてあった。それに黒の蒔絵の櫛を大事そうに鏡台にしまっていた。

治作の女房が一度、自分に話したことがある。それは、れんがお城に奉公に出ていたというのだ。

いま思えば、鏡台その他は、御殿奉公をしていた時のかたみではあるまいか。それとも、身分のある父親に与えられたものだろうか。

治作の家には、槍や刀が仕舞ってあったが、もとは士分の者だったのではあるまいか。

れんは士分の者の娘として、お城にあがっていたのではあるまいか。

残念なことに、鏡台などはみな、置いてきてしまったから、もうなくなっているに違いない。もし手許にあったら、散らしてある紋所から、父親の素姓を探すことができたかもしれ

ないのに。

どうしてれんや治作が、自分の父親の姓名を教えてくれなかったのか、わからない。

想像すれば、父親はよほど身分の高い武士で、れんはむろん正妻でも側室でもなく、父親のなさけを受けて自分を生んだことが、決して世間に知れてはならないという事情だったのに違いない。つまり、自分は落し胤であろう。

自分をずっと養ってくれた弥兵衛も、お前の父親のことなど、何も知らないと言っていたが、それは嘘のようだった。姓名だけでも知らないかと聞くと、困った様子だったが、

「なんでも片桐とかいったな。それもうろ覚えさ」

と、あいまいな笑顔をした。

自分は物好きに、武鑑を調べたり、土佐の屋敷の勤番侍に近付いたりして、藩中に片桐という家があるかどうか、探ってみたが、やはり無駄だった。調べが行き届かないのかもしれないが、片桐という名はないのだ。

あの紋所がなんだったか、それを思い出せればいいのだが……。

藤兵衛の話には、だんだん熱が入った。本当であってくれたら、という思いが、強くなってくる。ほら交りに話しているつもりが、大真面目になってきている。煙草屋が、実は土佐の重職の侍の落し子だとわかったら、どんな心持がするものだろう。辛く暗いこの世が、にわかに黄金色に輝くかもしれない。

それも、全くの夢物語ではないのだ。

按摩は徳庵と言った。徳庵は藤兵衛の話にひどく引き入れられたふうで、頭を傾けながら聞いていたが、別になんとも感想をのべず、按摩が終ると、娘の千代が出してくれた茶を飲み、考え込むようにして帰って行った。

二

藤兵衛はごく当り前の男で、「御落胤」の夢に取り付かれているわけではない。ただ夢とはいえ、ひょっとしたら、という欲が付け加わっている。話に熱が入ったのもそのためだったが、あくる日になると、忘れていた。

藤兵衛は女房に先立たれ、十六になる千代との二人暮しだった。

千代は美しい娘に育っている。千代が店にいるために、煙草の売上げがいい。煙草が売れるのは、千代の顔を見て、言葉の二こと三ことも交したいという手合いが多いからだ。

あどけなくて美しく、近頃はめっきり脂が乗ってきて、親の藤兵衛さえ、ドギマギするようなことがあるが、考えがしっかりしていず、締りのないところもある娘だ。その抜けたところが一層、男の目には色っぽく映る。

次に徳庵が来た時、藤兵衛はあの時の話がまた、むし返されるとは思ってもいなかった。うかがった話が本当なら、大変なことになりそうだ、と徳庵は言った。

藤兵衛はめんくらった。あれは本当もあるが、嘘も交っている。れんが、父の名をはずか

しめるな、などと言ったのは嘘である。第一、れんが何を藤兵衛に言ったか、まるで覚えていない。

美しくて上品で、礼儀作法をわきまえていたというのも、いい加減である。藤兵衛のおぼろげな記憶では、ただ平凡な、やさしい母であった。

れんはきれいな鏡台、手箱、櫛を確かにもっていたが、朱漆、紋散らし、蒔絵などは出まかせである。子供心に、それらがきれいに見えただけのことだ。

弥兵衛が、父の姓を片桐だと教えたのは本当だが、それはでたらめかもしれない。

だが、そのほかはまず事実である。治作の家に槍や刀があったのも、藤兵衛はよく覚えている。だれも、父のことを話してくれなかったのも本当だ。

大変なこととは、なんなのだ、と藤兵衛はおそるおそる聞いた。おとがめを受けるのかもしれないと思ったからだ。

徳庵は声をひそめて、旦那様は土佐の殿様の落し胤かもしれない、いや、どうもそうらしいと言った。

「いや、それは」

と、藤兵衛が胆をつぶして口を出そうとするのを、徳庵は重々しい手付きで制した。

かついでいると思われるのも無理はないが、それは拠りどころがあってのことである。

実は話を聞いてから、なにか気掛りになり、無駄でもともとというつもりで、土佐藩にゆかりのある人のところへ行って、探ってみた。

自分は笛を吹いて流しもするが、得意客ももっている。顔は広いほうだから、伝手を求めやすい。

それで、いろいろ聞き回ったが、土佐では世嗣ぎの若殿様が病弱で、あれでは先行きがおぼつかない、といって、代りに立てる人もいないから、殿様の落し胤を探し出そうということになった。近臣が殿様にうかがったところ、女中へ子を生ませたことがあると仰せになった。殿様はお若い頃から、そちらのほうがなかなか盛んで、何人もの美女にお手をつけられたが、お暇になった女で、殿様の胤を宿して、若様を生み落したという例は、これまで探し当てたうちには無かった。

それで土佐藩では、落し胤探しを、半分あきらめかけている。……そういう事情がわかってきた。

このところ、御無沙汰をしていたのは、調べ回っていたからだ、と徳庵は言った。

「私を欺そうたって、そうはゆかないよ。真に受けられるものか」

と、藤兵衛は笑い飛ばそうとしたが、笑声は途中でプツッと消えてしまった。

あの話には、大分嘘が入っている。座興めいたものだったのだからと、藤兵衛は言い訳をしたが、徳庵は首を振って、嘘だとおっしゃるが、母親の名がれんで、治作という兄の家に身を寄せていたこと、れんがどこかのお屋敷に奉公していたこと、父親の名がかくされていたこと、などは本当だろう、また、鏡台そのほかについては、そういうきれいなものがあったのも本当なのだ。朱漆、紋散らし、蒔絵は、出まかせとおっしゃるが、出まかせではない

かもしれないではないか、幼な心の隅に焼きついて、残っていたかもしれないではないか、と熱っぽく言った。

数日後またくるが、その時にはかなりはっきりしたことがわかるだろう、と徳庵は言い残して腰を上げた。

藤兵衛はぼんやりしてしまい、何事も手につかなくなった。

三

徳庵は九日ほど間を置いてから、やってきた。言葉使いが少し変り、態度もばかに神妙になっていた。

藤兵衛はあれからずっと、落着かなかった。何もかも冗談にして、頭から追い払ってしまおうとしたが、そうすれば却って、こだわってしまう結果になった。

考えてみると、徳庵は自分をかつぎ、笑い者にしようとしているにしては、念が入りすぎている。当人は本気のように見える。

徳庵が言った通りなのかもしれない。自分がした話の半分は本当である。れんがお城か、どこかのお屋敷に奉公していたことも、間違いあるまい。殿様のお手がつくのも、よくあることだ。兄の百姓家に、ひっそり住んで、自分を育てていたという事情も、納得できるものだ。

女中や、何かの折りに一夜の伽をさせた女が懐妊した時、里に下げさせ、生れた子は一時

の手当をやって、だれかに養なわせ、関係を断って、お家のために後くされをなくする。これは、世間にザラにあるだろう。ちょうどそんなふうに、自分は治作の家で養育されたのだ。

鏡台その他についても、でたらめではなく、記憶にあったのだろうという気になってきた。そう言えば、もとからちょいちょい、お前さんはどうも人品がいい、根っからの町人ではなさそうだ、と人から言われていた。

物腰などにそんなところがあるとすれば、それは血というものかもしれない。

娘の千代についても、これがおれの子か、と思うことがある。町娘にしては、どこか違ったところがある。

藤兵衛はわれ知らず、夢の中にのめり込み、夢を信じ始めていた。

徳庵は藤兵衛が期待した通り、あなた様が土佐の殿様のお子であることは、間違いなさそうだと言った。

土州様の屋敷に古くから勤めている茶坊主で、良賀という人がいて、大方の話はこの人から聞き出したのだが、あなた様の話を取り次ぐと、びっくりしていた。よく合うというのだ。

もう四十年ほども昔、いまの殿様がまだ若君であられた頃、ご寵愛を受けた女がいて、懐妊したので暇を取らせたということがある。ご城下に程近い百姓家で、男子を生んだので、養育のために御手許金を下された。

そのことは、当然知られてはならないので、書きしるしたものなどは残っていないが、風聞を覚えている者がある。

国許ではその百姓家を探し出したが、すでに代が替り、当時のことを知っている者はいなかった。

ただ、近辺の者の間に、話は残っていた。それは、あなたが物語ったのと、ほぼ同じである。

残念なことに、殿様は女の名を覚えておられない。しかし、「れん」がそれであることはほぼ確実だろう。

良賀もその意見だった。紋散らしの紋というのはおそらく三つ柏であろう。

藤兵衛は三十九歳であった。年も合っている。

お墨付きがあるわけじゃなし、守り刀を下されたというじゃなし、証拠は何もないではないか、と藤兵衛がうわずった声で言うと、

「そんなもの下されるわけがございません。証拠と申せば、お顔でございますな。親子は争われぬもので、お顔が似ますので」

と笑った。

自分は土佐の殿様のお顔など、おがんだことはないが、お側の者なら、もちろん知っている。

それで、ここ四、五日うちにも、寺村小太夫という御用人がくるかもしれない。これは良賀から話を聞き、ごく内々でやってくるので、あなたのお顔を拝見するためと、じかにお話をうかがうためである。

このようなことは、事をごく慎重に運ばないと、邪魔が入ったり、潰しにかかられたりするものだ。お家の内情はいろいろと複雑で、お味方ばかりではないから、気をおつけにならなければならない。

徳庵はそういう話をしたあと、ついでにおもみいたしましょうかと聞いたが、藤兵衛は体中が火照り、それどころではなかった。

夢が事実になろうとしているのだ。

良賀、寺村などという実在の人が出てくるのだから、徳庵はやはり、自分をあざむいてはいなかったのだ、本当のことなのだと思う。

千代が徳庵に、お茶と軽い茶受けの菓子を出した時、徳庵が見えぬ目を開いて、

「お嬢様は実にお美しいお方だそうでございますなあ。無理もございません。わたくしは、一目おがめないのがくやしゅうございますよ」

と言って、ニッと笑った。

四

千代にはまだ打明けていなかったが、こうなっては黙っているわけにはゆかない。

「びっくりしちゃあいけないよ。途方もない話だからな。だが、本当のことだ」

と断わってから、長い話をすると、最初はてんで受けつけず、ばかばかしいと笑っていたが、藤兵衛の話ぶりがきまじめであり、話そのものがうわついたものではないため、千代は

だんだん真剣な表情で聞き入るようになり、おしまいには顔が上気し、目が輝いてきた。
「本当？　本当かい、おとっつぁん」
「おとっつぁんも、何度も疑ったが、本当のことだ。お前はお姫様だよ」
千代は長い溜息をつき、袂で胸を抱いた。
「おとっつぁん、あたいはなんにも知らない。なんにもできないよ。どうしたらいいんだろう」
「なあに、そんなことを気にすることはねえ。お付きがいいようにしてくれる」
千代は藤兵衛の話を、たちまち信じ込んでしまい、お姫様になったあとのことを考え始めているのだった。
そんな千代を見ていると、ちょっと不安を感じないでもなかった。とは言え、千代だけを責められない。自分も九分九厘、信じてしまったのだ。お千代がおかしそうに、
「おとっつぁんは土佐の殿様になるのかい？」
と聞いた。
「いや、お世嗣ぎはちゃんといるから、その人が死なない限り、殿様にはなれないが、とにかくこっちは先殿様の子で、お世嗣ぎとは腹違いの兄弟になるからな。やっぱり若殿と呼ばれる身分になる。相応の扶持をもらって、御殿暮しだ。家来や女中が何人も付くんだ。金の心配なんぞはなくなるぜ」
藤兵衛はそう答えた。小商いの煙草屋から殿様へ、という出世も、天にのぼるようにうれしいが、貧乏暮しから一足飛びに、極楽のような暮しに移るということのほうが、切実にうれしい。

徳庵の言葉通り、寺村小太夫と名乗る武士が、それから五日目にやってきた。忍びという様子で、草履取りだけを連れている。人品、身なり共に立派な、中年の男だった。
きょうあたり、お見えになろうというので、徳庵が来ていた。
寺村は、家が粗末で手狭なのに、少し驚いた様子で、藤兵衛に対面しても不信の色があり、物言いなどもひどくぎごちなかったが、それははじめのうちで、次第に藤兵衛を見る目が違ってきた。
藤兵衛は店をしめてしまい、酒、肴を出して寺村をもてなした。草履取りにも、店の間で酒食を出した。大事なところだから、粗末な接待をしてはまずかろうという、徳庵の入れ知恵に従って、酒も肴も、日頃は口にもできないようなものを買い調えていた。
徳庵も相伴した。千代がよそで借りてきた中振袖を着て給仕をした。
飲み食いの中途で、突然寺村は、上座からさがって両手を突き、
「あなた様は、若殿に相違ござりませぬ」
と言って、袖で涙を拭った。
顔が似ている。瓜二つというのではないが、額のあたり、口許が、殿様とそっくりである。
やはり、争われないものだ、と寺村は涙声で話した。
こうなってはできるだけ早く、殿と御対面あるように、事を運ばなければならないが、そ

れにはまた日を改めて、万事ご相談申しあげることにしよう、ついては、この徳庵が拙者宅を知っているから、その案内でお越し願いたい、と寺村は言った。

「くれぐれもご内密に。家中の者はみな、何事も存じません。しばらくのご辛抱を」

と、帰りぎわに、寺村は付け加えた。

「よろしゅうございましたなあ。これで決まったも同然でございます。いや、おめでとう存じます」

と、徳庵は喜色満面で言った。

「寺村様がおっしゃるように、他に洩れてはなりませんから、行くのは夜がよろしゅうございましょう。それに、町人のなりでは、もういけますまい。羽織袴に大小をお差しなさらねば」

そのようなものは、自分が安く調えることができるので、任せてもらいたい、十四、五両もあれば沢山だ。

藤兵衛の手許には、十四、五両といっても、あるはずはなかった。わずかの貯えは、きょうの饗応で消えてしまっている。

藤兵衛は、金がないとは言えなかった。そちらで出してくれないのか、という疑問は、自分で押し潰してしまった。のぼせ上っていたせいでもあり、見栄のせいでもあった。

五

徳庵を一両日待たせ、藤兵衛は親子の衣類のほか、金になりそうな家財道具を売り払って、金を造った。その金を徳庵が受取り、紋付きの羽織に上着下着、黒鞘の大小を調えてきた。それを身に付けると、なんとなく侍らしくなったが、髪は町人まげのままである。

いただいたお金で、ちょうど間に合った、と徳庵は言った。

寺村小太夫の屋敷には、徳庵が雇ってきた駕籠で行ったが、日が暮れてからである。駕籠の中で揺れているうちに、すっかり暗くなり、垂れの隙間から外をのぞいても、どこを通っているのかわからない。そのうちに門を通って、玄関におろされた。

式台を上ったところに、寺村小太夫と、家来らしいのが二人いて、藤兵衛を迎えたが、家の中は思いの外ひっそりしていた。

書院の床柱の前に据えられ、寺村がなにか、しかつめらしいあいさつをした。家来がまたいくらかふえて、平伏している。徳庵は末座にいた。

頭を丸めた男が、茶を捧げて入ってきたが、うやうやしく平伏して、自分が徳庵殿の口からお耳に入っている、良賀でございますと言った。

藤兵衛は一同から、若殿様として扱われている。座布団の上に黙って坐っているだけで、下手に口を利くことができなくなっていた。

それから、女たちが膳部を運んできた。家来は引っ込んで、座は寺村、良賀、徳庵の三人

になっている。酒をすすめるのは女たちで、いずれも裾長を着て、美しい。膳に並んだ料理は、みごとなものだった。

殿には、あなた様のことを、ひそかに申し上げておいたが、大層喜ばれ、早く会いたいとの仰せであった。殿はあなた様の母上の名が、れんであったことを思い出された、と寺村は言った。

無事ご対面の運びになるのは間違いないが、実は反対する者があるはずで、その力はあなどれない。反対する者とは、現在のお世嗣ぎの側近の者たちで、彼等にすれば、お世嗣ぎ以外に、殿の血筋のお方をお迎えするのは、面白くない。お世嗣ぎが病死されればもちろんのこと、重い病にかかっても、あなた様がおいでになれば、お世嗣ぎを外されてしまうだろう。だから彼等は、お家が乱れる基だと言って、反対するだろう。

しかし、正しいのはこちらである。お家を大事に思うからこそ、あなた様をお迎えするのだ。

そこで、彼等につけこまれてはならない。隙を見せてはならないから、土州家上屋敷に乗込みの節は、なるべく行装を整えたほうがよい。あとのことは、自分が命をかけても、うまく計らうつもりだ。

やはり、反対する者に対しては、いくばくかの金を使わねばなるまいが、その調達は自分に任せてもらいたい。

寺村はそんな話をした。良賀は屋敷へ上っての行儀作法のことなどを、くどくどと話して

いた。藤兵衛は頭がぼんやりしたまま、ただうなずくばかりだ。

帰りには、寺村以下が式台に平伏して、藤兵衛を送った。行きと同じく、駕籠に乗り、徳庵が脇に付いてきた。

「千代のことはなんとも言っていなかったが」

と、家に落着いてから徳庵に聞くと、むろん、お呼び寄せになるが、ごいっしょというわけにはゆかないかもしれない、と言った。

「あの寺村という人が、迎えに来てくれるのかい」

「はい。わたくしがまた、ご様子をうかがいに行きますが、もう近々でございましょう。それで、お支度でございますが」

身なりは一応整っているが、乗物がきょうのような駕籠ではまずい。相当な格式をもったものでなければならないから、寺村小太夫の乗物では間に合わない。どうしてもあつらえる必要がある。それに、絹夜具が入用だ。御屋敷に行けば、夜具などはいくらも用意があるだろうとお考えかもしれないが、身分の高い侍、ことに若殿と呼ばれるような方には、ご自分の夜具を、いつどこでも必ず用い、有り合わせのものは用いないものだ。

これは乗物も同様で、必ず自分のものを用いる。だから、乗物も夜具も、御屋敷に無事迎えられても、お用いになるものだ。

あなた様に散財をおかけするのは、誠に心苦しいが、一旦若殿様となられた暁には、何十倍にもなって返るのだから、決して無駄にはならない。ぜひ調えていただきたい。

乗物、絹夜具については、前と同じく自分がお世話をするから、安く手に入るはずだ。なお、できることなら、寺村、良賀をはじめ、働いてくれる人に、礼金のようなものを渡すのがいいだろう。気は心で、念には念を入れなければならないからだ。

そう言って徳庵は辞去した。寺村が迎えにくるのは、十日後かそこらであろうという。

六

徳庵は、乗物から夜具一式、それに、寺村や良賀ほか、力になってくれる者に渡す礼金や心付けを十両見当として、四十両もあれば十分だという。もうこれ以上の出費はない。

土州家に迎えられれば、煙草屋の店も、家財道具も不要になるのだから、みな売っておしまいになるがいい。それで調わなければ、小金のある者にひそかに話し、借用すればいいのだ。事が事だから、喜んで貸してくれるだろう。後日、その者に何か恩を施してやれば、返せとも言わないだろう。

なにしろ、はずかしからぬ支度で、堂々と乗込むことが肝要だ。金を惜しんでいると、敵の手が回って、門前払いを食わされかねない。

藤兵衛は考え込んだ。いまでさえ、親子は裸同然になっている。売るものは、あらかた売り尽してしまった。家は借りているのだから、金にならない。

金を融通してくれる者にも思い当らない。高利の金貸しに泣きついても、藤兵衛の話をまず信用してくれないだろうから、四十両などという金を回してくれるわけがない。

藤兵衛は細々と、世間を狭く生きてきた男で、金の貸し借りは、ほとんどしたことがないから、こんな時には途方に暮れるほかはない。

投げ出してしまおうか、と何度も迷った。土佐の殿様の若君になるなど、思えば空おそろしい。そうなったあと、なにが起るかわからないという気もする。やめてしまえば、故の木阿弥で、貧乏暮しを一から始めなければならないが、それには慣れているし、わびしいながら、太平無事でいられる。金をひねり出す苦労もない。

しかし、藤兵衛には思い切る勇気がなかった。玉の輿が据えられているのに、乗らない馬鹿はいない。これまでの徳庵や寺村たちの慎重きわまる動き様から見て、嘘で固めた話であるはずがない。

それに、もう金を出している。十五両を徳庵に渡したが、藤兵衛にしてみれば、血の出るような大金である。投げ出せば、十五両はフイになる。

なぜ殿様や、寺村が金を出してくれないのか、ということは、折にふれてちらちらと頭に浮かんだ。支度金をくれるのが当り前ではないか。だが藤兵衛は、その考えを打ち消した。金を出す名目がつかないのだろう。事は隠密なのだから、出し様がないのに違いない。殿様などというものは、金をお持ちにならないのだろう。口を出すこともできないのだろう。

寺村は然るべきところへ金を撒いているはずだから、こちらへは手が回らない。そして、藤兵衛は貧しくとも町人で、一応の店を構えているのだから、五十両やそこらの金は、苦も

なく造ることができると思っているのだろう。

藤兵衛の気持は、あちらに揺れ、こちらに揺れして、定まらない。おしまいには頭が動かなくなり、青い顔をして、ガランとした家の中で首を垂れていた。

千代が心配して、どうしたのかと聞いた。

千代は自分がお姫様だと聞かされた時から、言葉にも物腰にも浮き浮きしたところが目立ち、心なしか以前より美しく、上品になっていた。藤兵衛が金の工面に困り果てていることなど、まるで念頭にない。だから藤兵衛のふさいでいるのが不思議である。

藤兵衛の頭に、この娘を金にするという考えが浮かんだ。親孝行をしてもらおう。それは十二分に報われるのだ。金と引替えにして、捨ててしまうのではない。すぐに身請けをして、引取ることができるのだ。それも大名屋敷に。

「お千代、どうしても四十両ないと、おとっつぁんは土佐の屋敷に行けなくなる。若殿様と、お姫様も、夢になっちまうんだ。ところが、その四十両の当てがない。おとっつぁんはやっぱり、行くところまで行きたい。あきらめられないんだ」

お前が厭(いや)なら、無理強(むりじ)いをしないのはむろんのことだが、ほかに手段が思いつかない。勤めをしてくれる気はないか、と藤兵衛はもちかけた。

意外なことに、千代は二つ返事だった。おとっつぁんの出世のためなら、と言う。

藤兵衛のほうが驚いて、勤めとはどんなことか、知っているのかと聞いたが、千代は笑ってうなずいた。

親のために、娘が身を売るということは、よくあり、芝居にも出てくる。千代はそれを承知で、むしろ晴れがましい気持で、父の頼みを聞き入れたようだ。

千代はもう、体は大人だ。男を恐れるより、男を慕うような娘だ。遊里に身を沈めるのを、それほどのこととは思っていない様子がある。

藤兵衛は安堵(あんど)のために、ぐったりした。

七

徳庵が様子を見にきたので、藤兵衛は千代のことについて相談をもちかけた。千代を一時、身売りさせるよりほかに、四十両を調達する道がないと言うと、それはいいお考えだ、と徳庵はこともなげに同意した。

お嬢様は評判の美女で、年頃でもあるから、高い値がつくだろう。幸い、自分はいい店を知っており、あるじと懇意にしているから、早速そこへ、お嬢様をお連れしよう。その際、これこれだと打ち明けて、客分として預かってもらい、いきなり男を押しつけるなどということのないように、先方へくれぐれも念を押しておこう。

お嬢様も、御殿においでになれば、何不自由がないとはいいながら、世間とはかけ離れてしまい、男っ気ひとつない暮しになるから、しばらく色里にいて、羽根を伸ばすのも、かえっていい経験になり、お為(ため)になるに違いない。

先方に事情がわかれば、決してお嬢様を粗略に扱う気遣いはない。

藤兵衛は徳庵の言葉にうなずいて、安心した様子だったが、突然顔色を変えて、

「徳庵、これまでの話に、全く嘘偽りはあるまいな」

と言った。

徳庵はびっくりして飛びすざったが、平伏して畳に額をこすりつけた。

「滅相もございません。ご対面の段取りも、そろそろ整ったようで、寺村様のお迎えは、四、五日中にも参りましょう。それでこうして、急いでいるわけでございまして」

藤兵衛の煙草屋は、南品川の馬場町、通称南番場というところにある。品川一帯の妓楼に近いので、身売りをするといっても、遠くへ行ってしまうわけではなかった。

徳庵は忙しく立ち働いた。先方がよくわかってくれ、こちらの望みを容れたからというので、千代は徳庵に連れられて、店に行き、間もなくまた、連れ立って帰って来た。

万事うまく行ったと言い、徳庵は藤兵衛に、千代の身代金だと、四十両に少し足りない金を見せた。これは藤兵衛の手に渡るのではない。

千代は別段しおれてもいず、いつもの通りだった。藤兵衛のほうが辛い思いをしたが、これとて、間近になった土佐の殿様との父子対面を控え、気もそぞろになった上でのことである。

千代がいよいよ妓楼へ移る時、藤兵衛は付いて行きもせず、家の中にじっとしていた。若殿様が、身売りの娘に付き添って行くわけにはゆかない。

千代が連れられて行ったのは、北品川宿にある店で、構えもかなり立派だった。

徳庵から話をしてあるせいか、扱いはばかに丁重で、亭主は、気楽に、遊びに来たつもりでいてくれ、などと言い、上機嫌だった。

徳庵はしばらく亭主や女房と世間話をしたあとで、それではみなさん、よろしくお頼み申しますとあいさつして、帰って行った。

ゆっくり休んでいなさるがいいと言われ、女の案内で、千代は二階の一部屋に通されたが、そこがどんな部屋なのかわからなかった。客部屋のようでもあり、女郎が与えられている部屋のようでもあった。箪笥、鏡台があり、衣桁に女物の花やかな衣装がかかっていたりする。枕屏風が立ててあって、その向うに畳まれた夜具がある。

座布団に坐り、火あぶりに手をかざしていると、入り口の襖が細目にあいて、女たちが代る代る、のぞきにくるようだった。自分のことを聞いていて、物珍しいのだろうか、と千代は思った。

さまざまな物音、人声がする。客がにぎやかに迎えられる様子もわかる。

いつまでここにいるのだろうか、と千代は考えた。よく話に聞くような、ひどい扱いは受けないと聞かされ、たしかに下にも置かないようにされたが、やはり心細い。

客の酒の相手くらいは、しなければならないかもしれない。それくらいのことなら、苦にもならない。

せいぜい愛嬌よくして、客の心を奪ってやれば面白いだろう。ちょっと笑いを見せれば、男の目付きが変ることを、千代は知っていた。

客が一目ぼれをして、通ってくるかもしれない。その時、自分が土佐の若殿様のお姫様だとわかったら、どんなにびっくりするだろう。自分はたぶん、品川のどんな売れっ子の女郎にも負けはしないのだ。

千代は眠くなった。

八

うとうとしていて、ハッと気が付くと、目の前に僧体の男が坐って、笑っていた。

「お千代様、いや、千代姫様でございますな。わたくしは良賀と申す者で、土州様のお側近くに勤めております。父上様からお聞き及びでございましょう。このたびは、なんともおめでたいことで。やむを得ない仕儀で、お姫様がこちらにいらっしゃることを、徳庵から聞きまして、とりあえずご機嫌うかがいに参上いたしました」

と、良賀は言い、実はお姫様のお姿、お顔は、以前に拝見したことがあり、こんな美しいお方に、なんとかしてお近付きになりたいものだ、と心を焦がしたものだ、と笑った。

良賀が命じたのか、女が二人分の膳部を運び入れた。酒が付いている。

心ばかりのお祝いだから、酒を召し上ってほしいと、良賀は千代に盃を取らせ、酌をした。千代が飲みつけない酒を、断わったら悪いと思い、飲み干してしまうと、良賀は追っかけるように、また酌をした。

良賀は話の面白い男で、殿様の日常、奥方や女中衆の暮しぶりから、品川の旅籠、女郎屋の有り様、客の遊び様など、千代が知らない世界のことを暇なしにしゃべり続けた。

はじめのうちこそ、よく聞いていたが、わずかの間に酔いが回ってきて、良賀の話は耳に入らなくなった。坐っているのも辛くなり、千代は横になってしまった。

良賀が寄ってきて、上からのぞき込み、

「お酔いになりましたか。苦しそうでござんすな」

と言い、声は出さないが、酒で赤味の増した大口をあけて笑った。

「帯をゆるめて進ぜましょう、お姫様。そのままじゃあお風邪を召しますから、お床に入りなさると、よろしゅうございますぜ」

いつ部屋に入ってきていたのか、枕屏風の向うに女が立っていて、目を上げた良賀に合図をした。

良賀はぐったりして荒い息をついている千代を抱き上げ、屏風の向うへ運んだが、そこにはちゃんと夜具がのべられていた。

千代の目は糸のように細くなり、物はもうろうとしか見えない。そしてぐるぐる回っている。体は人のもののようだ。良賀に着物を剝ぎ取られているのはわかるが、手足はだらりとして動かず、されるままだ。

チラチラする目先に、裸になった良賀がいる。それが、まるでタコ坊主が踊っているようだ。

どうされているのか、よくわからない。ただ、下半身がひどく重い。

良賀がそのうちに、顔をゆがめて、おっかぶさってくると、千代の背に両手を回して抱きすくめ、生暖かい舌の先を、千代の口の中にこじ入れてきた。

良賀に何をされたのか、千代の霞んだ意識でもわかる。約束がまるで違う、なにかとんでもない目に遭っているのだともわかるが、千代は泣き叫ぶ元気もない。体中から、力が抜けてしまっているのだ。

それより、酔いが回って苦しい。早く良賀に離れてもらいたいが、上にぴったりはりついたままで、放してくれない。

「おとなしくって、いい子だ。さすがにお姫様だぜ。肌のよさも、下々とは違うようだぜ」

と言って、良賀が笑ったが、千代は聞いていなかった。どうともなれと思い、目を閉じたが、すぐに眠りの中に引き入れられた。

目を覚ました時は夜だった。部屋には、行灯の柔らかい光が満ちていて、千代の横にはやはり、良賀が横たわっていた。

酔いはすっかりさめているが、頭の芯が錐でもまれたように痛い。

千代は、身に何一つ付けていないのに気付いた。良賀も同じだ。茶坊主めかした身なりをしていると、殊勝に見えるが、裸になると筋骨たくましい男である。その毛だらけの肌が、千代の肌とくっついている。

千代は前後の考えもなく、床の中から逃げ出そうとしたが、薄目をあいていた良賀が、肢をつかんで乱暴に引き戻した。

「いまさら逃げたって、なんにもならないぜ」

と、良賀は言った。

「お千代、おめえの体は隅から隅までとっくり賞玩させてもらったよ。今夜は夜通し、あしたも昼夜、心ゆくまでかわいがってやるからな。男をどうしてやりゃあ喜ぶか、女郎の手練手管を、手取り足取りで教えてやる。これから先は、おれ様がおめえの男だから、せいぜい尽すがいいぜ」

良賀は千代の身体を撫でた。

「うめえことになったもんだ。こうやすやすと、煙草屋の看板娘が、おれの自由になるとは思わなかった。おめえの親に、礼の一つも言いてえほどだ」

おとっつぁんも欺されて、わたしも欺されて、わたしはお女郎さんになってしまうんだ、と千代は考えていた。

あまりのことで、涙も流れない。悲しい、くやしいという思いも湧いてこない。

良賀の手が千代のういういしい乳房を、グッとつかんだ。

九

立派な乗物が、藤兵衛の店の前に着いた。黒塗りの長棒で、駕籠も腰は黒塗りである。紺看板の陸尺が四人で、それを担いできた。

この乗物は、近所の者を驚かせ、見に集まってきて、店の中をのぞき込んだりしていた。

四人の陸尺は家に上って休んでいた。居間には藤兵衛と徳庵がいて、藤兵衛は先日あつらえた衣服を着、髪は侍の大銀杏に結っていた。

絹夜具が積み上げてある。これは、それほどいいものだとも、藤兵衛には思えなかったが、気にかけている余裕はない。

寺村小太夫が、間もなく迎えにくることになっている。

徳庵の話によると、金は四十両で足り、礼金や祝儀の分も、すっかりそれで済むということだった。

藤兵衛は寺村以下のために、仕出し屋に頼み、酒と肴をあつらえた。ちょうど寺村が着いた頃、あつらえたものも運ばれてきた。

寺村はこの間の草履取りを連れている。

徳庵が立ち回って、飲み食いが始まった。

その饗応の代金は、藤兵衛のふところから出たものではない。近所にあいさつ回りをしたが、餞別にもらった小金を集めたのである。

藤兵衛がさる高位の侍の落し子で、晴れてその屋敷に乗込むのだという話は、近所の者には寝耳に水で、騒ぎになっている。

嘘でない証拠には、大身の旗本か、大名が使いそうな乗物が据えられ、陸尺もいる。

飲み食いの間、町内の大家をはじめ、顔なじみが次から次へ、あいさつに来て、祝いをのべて行く。

そのたびに、藤兵衛は出て行って、応対しなければならない。奥の居間は、藤兵衛を抜きにして、陽気な宴会になっていた。

陸尺や草履取りは、傍若無人であった。寺村は時々たしなめるが、強くは言わない。

もともと彼等は、主人の寺村と同席すべきではない。まして藤兵衛は土佐の若殿だから、無礼きわまる。

だが藤兵衛は、いわば人形のようなもので、口を出すことができない。非常の際だから、こんなものだろうと思うほかはない。

藤兵衛は徳庵に、千代の消息を聞きたかったが、徳庵は知らぬ顔だった。寺村も、千代のことは忘れているようだ。そして寺村、徳庵はいつもと違う。どことなく空々しく、藤兵衛に対して、恭敬の態度を示さない。

藤兵衛はほとんど酒を飲まず、肴にも手を出さず、除け者になったように坐っていた。

気持がずんずん沈んで行く。胸に大きな、黒い穴が明いているようだ。

いやいや、そんなことはない、いままでのことが、みんな嘘だということはないと、藤兵衛はきざしかける疑念を打ち消しているのだが、すべてが「かたり」だということを、そもそもの最初から知っていたのだ、という気もしてくる。しかも、それが次第に強くなってくるのだ。

「どうなされました、若殿。門出のおめでたい席でございますぞ。元気付けに、一口いかがでございます」

と、藤兵衛の顔色をうかがった寺村が、銚子を取り上げて酒をすすめ、笑ったが、その笑いが嘲笑に見える。

徳庵は頭を振り、なにか下卑た歌をうたっていた。

藤兵衛は身内が寒くなってきた。膝頭が震えだした。

陽はまだ高い。早く出立すればよさそうなものだが、寺村の一行はすっかり腰を据えている。日暮を待っているのかもしれないが、それは不思議である。こうなってまで、コソコソする必要は少しもあるまい。父子の対面が公然と行われるのなら、藤兵衛のことは藩中に知れていなければならないではないか。

「徳庵」

と、藤兵衛は元気のない声で問いかけた。

「へ、なんでございますね？」

徳庵はおどけ顔で、白い目をしばたたいた。

「お千代はどうしているだろうか。お前、お千代を見に行ってくれたのだろう」

「はい。行きましたとも。いや、あでやかなもので。すぐにでも、男を手玉に取り……おっと。なに、ご心配はご無用でございます。徳庵にお任せくださいまし」

十

陸尺のうちの一人が、風に当たってくるというようなことをつぶやいて、外へ出て行った。

すぐあとで、いま一人が、乗物に悪さをするやつがいるかもしれないから見てくると言って、これも出て行った。

小半刻（三十分）も経ったが、二人は帰ってこない。

寺村が気にした様子で、残る二人の陸尺に、連れ帰るようにと命じた。

ところが、この二人がまた帰ってこない。

「仕方のないやつらめ。ふところが暖かくなったので、どこぞへ行ってとぐろを巻き、女でもからかっているのに違いない。門出は間もないというのに」

と、寺村が腹を立て、藤兵衛に、

「拙者が参って、引立てて帰りましょう。なに、まだ、時刻はございます。御懸念には及びません」

と言った。

部屋には藤兵衛と徳庵だけが残った。徳庵はいぎたなく寝そべって、肘枕をしている。目は閉じていて、時々軽いいびきをかく。

食い荒された皿小鉢がわびしい。

いつか陽は落ちて、部屋の中は暗くなっている。夕靄が漂い始めた。藤兵衛は行灯に火をともした。

寺村も陸尺たちも、一向に戻らない。藤兵衛は不安がつのり、居ても立ってもいられなくなったが、寺村と陸尺四人が、うまく藤兵衛を欺し、逃げたとまでは考えなかった。いや、

考えたくはなかった。徳庵も残っていることだ。

藤兵衛は徳庵を揺り起した。徳庵は目をこすりこすり、藤兵衛の言葉を聞いていたが、あわてるふうはない。

「てっきりあの店だ」

と、徳庵は苦笑して、

「こりゃあ、寺村様もあの四人に引き留められたんでございますよ。ちょいとした小料理屋がございまして、そこに渋皮のむけたいい女がおりますので。あいつらはその女が目当てで、よく行っております。寺村様はご存じで、そこへ連れに行って、まあまあというので、つい腰を落着けたのでございましょう。酒も肴も存分にいただいた上、また飲み直しとは、いやしい人たちで。その店に決まっておりますから、待っていりゃあ帰ってきます」

「いったい、屋敷に行くのか行かないのか」

「そりゃあ参りますが、急ぐことはございませんよ。それにしても、少々暇がかかり過ぎるようでございますな。やれやれ」

と、徳庵は大儀そうに立ち上った。

「わたくしが行きましょう。途中で出会うかもしれませんが。近くでございますから、すぐに戻ります。御支度をなさっておいてくださいまし」

徳庵はおぼつかない足取りで、出て行った。

藤兵衛はさらに半刻（一時間）ほど待っていた。それから表に出た。乗物は消えていた。

夜になり、家々はもう雨戸をとざしている。

帰ってくる人影はさらに見えない。

藤兵衛は部屋に戻り、崩れるように坐った。ようやくはっきりした。六人の悪党は、乗物もろとも消えたのだ。乗物は借りたのだろう。

絹夜具は残っているが、おそらくは使い古しで、買っても安いものだったろう。

衣服と大小も、古物か盗品を買い叩いたものに違いなかった。ひっくるめた代金は五両にもなるまい。五十両、娘を売ってまでこしらえた金を、まんまとかたり取られたのだ。

藤兵衛は、良賀のことまで思い至らない。良賀は金もほしいが、千代もほしい。かねてから目をつけていて、徳庵らの仲間に加わり、筋書を作ったのだろう。あるいは良賀が、首領株かもしれない。

良賀は藤兵衛からかたり取った金を使って、存分に千代をなぐさんでいるのだ。

藤兵衛は何をする気もなく、指一本動かす元気もなく、空家同然になった家の中に坐り続けている。

大家をはじめ、近所の者は、どこかの家に集まって、お見送りしようと待っているはずだった。それがあまりおそいので、不審を起しているはずだ。

藤兵衛は彼等に顔向けができない。「かたり」に一切を剝ぎ取られただけならともかく、娘さえ手放してしまったからだ。

死んでしまうか、夜逃げをするかだ。

しかし、藤兵衛は動かなかった。そのうちに、奇妙に気持が落着いてきた。自分は仕方のない馬鹿だ。やつらをいまさら怨んでみても仕方がない。

だが、やつらはどうして、選りに選って、自分のような貧乏人に目をつけたのだろう？

あれほどの細工をするのなら、どうしてもっと金のあるやつを狙わなかったのだろう？

それが藤兵衛にはわからなかった。

あるいは、自分を「御落胤」だと信じているおめでたい男を、ほかに探し出せなかったのかもしれない。

狙いの半ば以上が、千代にあったことを、藤兵衛はまだ悟っていない。

かなり夜更けになって、藤兵衛からなんの音沙汰もないのを怪しんだ者が、煙草屋の店から入って、奥の部屋をのぞき込むと、藤兵衛がただ一人、端然と坐っていた。その姿はすっかり「若殿様」に見えた。

隣りも妾宅

一

隣りの庭とこちらの庭との境に竹垣がある。その根元に、ずっと杉を植えてあるが、みな丈の低い若木で、枝もよく伸びていないから、まずお互いに、丸見えという工合になっている。

なんとかしたほうがいいのだが、さし迫った必要があるわけではないので、そのままに放ってある。

隣りの庭の奥に、隠居所という体裁の離れがあって、縁側がこちらを向いている。戸障子は春からこっち、いつも明け放ってある。

離れに寝起きしているのは、品のいい老人で、かなり足が不自由になっているらしい。……と言うのは、庭に降りることもなく、離れを出て、どこかへ行くという様子もないからだ。大抵は部屋の内に腹這いに寝そべり、坊主枕を胸の下にあてがい、庭を眺めている。

つまり、こちらを向いているのだが、垣根越しに、ジロジロとこちらの様子をのぞき見ることはない。目は常に伏せられている、と新吾は観察していた。

あきはやはり女で、気味悪がっている。見ないようにして、見ているに決まっているとも言う。

あの老人はちゃんとたしなみがあり、のぞき見のような、いやしい真似はしないだろうと、新吾は弁護してやるのだが、確かにそうだと言い切るまでの自信はない。

「いったい、ああやって日がな一日、何を考えているんでしょうね。それとも、何も考えていないのかしらん。人間はもうろくすると、あんなになっちまうものでしょうか」

「わからんな」

と、新吾は苦笑するほかなかったが、彼にしても、あきと同じように感じることがある。終日、そして来る日もああしているのは、退屈を通り越して、死ぬより苦しいのではあるまいか。

あきは、老人がもうろくしていると決め込んでいるが、案外そうではないかもしれない。……そんな気もする。しかしそれならば、苦痛は一層耐え難いものだろう。

隣りに住んでいるのは、老人と若い娘であった。老人の年は七十を越していると思われるが、娘はまだ、十七、八という年頃だろう。老人の一切の世話を、その娘がしているようだ。目に立つほど美しいというのではないが、色白の、いやみのない顔立ちで、化粧もほとんどしていまい。

娘は昼間、離れに老人といっしょにいることは、あまりない。食事は、娘が母屋から運んで、その時はさし向いだが、打解けた話を交している様子でもない。

後架に立つ時は、老人が紐かなにかを引張るらしく、母屋のほうで鈴の音がする。すると娘が現われ、老人に肩を貸して、ゆっくり歩かせる。後架は離れに付いている。

老人が娘を、必要以外の時には遠ざけている気配もある。そばにいられるのが、わずらわしいのかもしれない。

「お妾さんでしょうよ」

と、あきがくすぐったそうな顔をして言う。あき自身がそうだから、面映ゆいのだろう。

「まさか。女中さ」

「年寄りと言ったって、わかりませんよ」

「よせよせ」

と、新吾は笑っているほかない。

母屋は、板羽目の壁がこちらを向いており、格子のはまった小窓が一つあるきりなので、娘が一人でどうしているのかわからない。

佐山新吾は御広敷添番という役目に就いている。御広敷は、千代田城大奥の玄関口で、表と奥との連絡所でもある。表の役人と、奥の役人（女）が会い、打合わせなどをするのはここで、奥に用のある種々雑多な人間が、ここへやってくる。そういう御広敷全般の警備、取締りに、添番は当っている。そのほか、大奥女中の代参など、外出の時に随行もする。

添番は御家人で、役高は百俵、それほど微禄というのではなく、ほかに役得もあるので、浪費さえしなければ、まずまずの暮しはできる。

新吾は養子で、実親は同じ御家人でも、無役の貧乏暮しだった。佐山の家を嗣いで、暮しは楽になったが、妻のいとが病身で、あまり食指の動かないような女だった。

いとはいつも塞ぎ勝ちで、陰気である。それだけならまだいいが、おそろしく片意地だった。また、新吾を貧乏御家人の息子とあなどっている気持が、どうかした折りに出てしまう。

新吾は悪いと思いながら、だんだんいとをうとむようになった。

夜の床でいとを抱くのは、よほどの努力が要る。夫の勤めと思いながら励んでいたが、それも次第にばかばかしくなった。

いとは少しも喜びを示さない。夫だから仕方なく、体を任せているのだという態度である。自分を嫌いなのか、好きな男でもあったのかと疑ったこともあるが、どうやらそうではなく、夫婦の営みが嫌いなのだとわかってきた。喜びが全くないのではなさそうだが、苦痛のほうが強いようだ。

それでも、長男が生まれて、すくすくと育ったのは拾いものだった。いとは子育てにかまけた振りで、新吾を拒みだした。

新吾にとっても、そのほうが好都合だった。

ちょうど、いととの体の接触が絶えた時期に、新吾はあきと知り合っている。あきは根津の水茶屋の女で、気の合った友人と、ぶらりと立ち寄った時、すぐ目に付いて、ひきつけられた。好みの女というのかもしれない。

大柄なほうで、肉付きも豊満である。浮世絵で賞美される柳腰ではないが、新吾にはそのほうがいい。かぼそいのは、いとで沢山だった。

丸顔で、頬も豊かだった。笑うと口の両横が深くえぐれて、笑くぼになる。

新吾はそれからせっせと水茶屋に通った。あき目当ての客も大分いるようだったが、あき

は新吾に特別な目付きをした。

枕を交したあとで話し合った折りに、あきは新吾に最初から気をひかれていたと言った。あきは明るい性格だが、素直でおとなしい。よく気を使ってくれる。床での取りなしは申し分なかった。どうしてもあきを囲いたい気になったのは、自然の成行である。

小石川白山の屋敷には、いとと、母親のみねがいる。新吾は二人に、あきのことを包まずに話した。離縁になっても構わないと思ったからだ。

添番という役を棒に振るのは惜しいが、あきには替えられない。思い切って刀を捨て、なんでもする気だった。長男は七歳になっていて、後見を付ければ、なんとか家は絶えずに済む。

その悲壮な決心も、決心だけに終ってしまったが、それはみねが離縁のことを全く口にせず、あきの存在を黙認したからだった。

みねはいとから、夫婦間の交渉が絶え、それもいとがそう望んだからだと聞かされたろうから、弱味がある。その上、離縁は家の体面にかかわることだ。また、長男の養育の上からも、男親は必要だ。

公認の形になった。あきは水茶屋奉公をやめ、しばらく駒込吉祥寺裏の父親の許に帰っていた。父親は駒吉といい、植木職で、六十過ぎのやもめだが、娘が新吾の妾になることに、別に異を称えはしなかった。

駒吉は肴町に空家があったのを借り、心安い大工に頼んで、あばら家同然だったのに手を

入れさせた。費用は新吾が出したが、駒吉も何かと、あきのために金を使ったようだ。

あきはその家に移って、小間物商いを始めた。これも、駒吉が出入りの問屋に頼み、問屋のほうで、いろいろ世話を焼いてくれたという。

新吾は白山の屋敷から、肴町に通いだした。

添番の勤務はけっこう忙しいが、人数がかなり多いので、非番で、出なくていい日がよく回ってくる。それに泊り明けもあるから、四、五日に一度ほどは、ゆっくり肴町でくつろげる。午後から屋敷を出ても、いとやみねはちょっと険しい顔はするものの、文句は言わない。

新吾の気持は、すっかり屋敷から離れていて、あきの家が我が家のような気がしている。ごくたまには屋敷にいて、ずっと長男の相手をしてやることもあるが、なにしろ息が詰まりそうで、一刻も早く逃げ出したくなる。

手伝いの女を一人雇ったが、これが骨身惜しまずに、なんでもやってくれ、小間物のことは、あきよりも心得ているくらいなので、あきはただ新吾の相手をしていればいいことになった。

手伝いを雇うのはもったいないと、あきははじめ渋っていたが、新吾は取り上げなかった。その辺はやはり、新吾にも体面という気持がある。元来、店を出させるということも、乗気ではなかったのだが、これは思い直した。何もせず、ただ新吾を待ち暮すのは、たまらないだろうし、みいりがあるのは、こちらも助かるというものだ。

駒吉も時たま、顔を出すようになった。口の重い、偏屈なところのある男だが、新吾を気

に入っているのは、なんとなくわかる。

駒吉がくると引き留め、酒を汲み交す。駒吉は酒が入ると上機嫌になり、都々逸をうなったりして、あきに途中まで送られて帰るのだが、打解けたようで、どこかに遠慮がある。それも仕方がないと、新吾は思っている。物言いから何から、町人同様にくだけているはずだが、町人そのものになれるわけではない。

二

あきがいまの家に引き移った時、近所にあいさつに回ったが、隣りの老人の家にも行った。娘が出てきて、尋常に応対したが、あるじは立居が不自由で、失礼するということだった。

それ以来、隣りとは交渉がない。道で娘に会うということもなかった。おそらく、めったに外へは出ないのだ。

近所の者も、隣りのことをよく知らない。うわさはしているのだろうが、老人と娘は近所付合いがないので、わかっているのは、老人が武家の御隠居だというくらいのもので、娘が老人とどんな関係の者かについては、臆測するほかない。

新吾は隣りの老人に、なんとなく興味をもった。近付きになりたいような気もするが、こちらは世を忍んでいる形だし、向うもそうかもしれない。それで、いつも老人の所在なげな姿を目にしながら、全く没交渉でいるのだった。

「あのおじいさん、御旗本の御隠居ですとさ」

と、あきが寝物語に告げたのは、新居に移って半年経った頃だった。移ったのが九月末だったので、翌年の晩春になっていた。新吾はあきの体にのめり込んでいた。

あきの話によると、老人の姓は岩元といい、七十三歳になるそうだ。屋敷は小石川柳町にあり、家を嗣いでいる息子は、小十人組だという。子供も男女数人ある。

屋敷はかなり広く、隠居所も立派なのがあった。老人は三年前まで、妻と共に隠居所に住んでいたが、妻が病死したのを機に、息子が止めるのを振り払うようにして、隣りに引越してきたらしい。息子夫婦との折合いが悪い、などということではないようだ。

娘の名はたのと言い、このほうの素姓はわからないが、屋敷から連れてきている。たのも武家の娘かもしれない。あるいは老人の遠縁にでも当るのだろうか。

「お妾じゃあないんですかね」

と、あきは小首をかしげていた。

月に一度か二度、屋敷からの使いが、様子を見にたずねてくる。その際、金を置いて行くのかもしれないが、新吾には無駄な費えだと思われてならない。広い屋敷で、ちゃんと隠居所があるのなら、そこに住み続ければいいので、わざわざ町中の家に移るのは浪費だろう。

隣りはうちと同じ借家らしいが、それにしても家賃が馬鹿になるまい。離れがあるくらいだから、かなり大きな家で、以前は黒門町辺の老舗の道具屋の番頭が、両親と妻子七人家族で住んでいたという。離れの隠居所には両親がいたのだろう。

それが二人住いになったのだから、広さをもて余しているはずだ。

番頭が住んでいた頃は、手もあったので、掃除その他、庭の手入れなども行き届いていたのだろうが、いまは荒れた感じになり、庭も雑草が茂り放題になっている。

盆栽もなく、鳥籠もない。岩元老人はいつも庭を眺めているようだが、観賞するに足るようなものはない。四季それぞれに、草木が花を咲かせはするが、植えっ放しが自然に咲くだけのことで、一向に見映えはしないのだ。

やはりもったいない、と新吾は思う。

屋敷の庭はずっと立派なものに違いないし、孫がいるのだから、退屈はまぎれるはずだ。もっとも、岩元家は内福で、金に困らないのかもしれない。小十人組は、大番、書院番、小姓番などのうち、最も格の低い軍役で、番士の家禄も少ないが、旗本には違いない。あきは岩元の家禄までは聞いていないが、たぶん添番の百俵よりは上だろう。その上、貯えなどもあれば、新吾よりは金が自由になるはずだ。

岩元老人は、自分の持ち金があるのだろうと、新吾は推測した。だから、家族の意向にもかかわらず、好き勝手ができるのだ。

しかし、好き勝手の中身はなんだろう。そう考えてくると、わからなくなる。極端な人嫌いになっているのか、妻のいなくなった、屋敷の隠居所にとどまるのが耐え難いのか、それとも……たのという娘は、やはりあきが言ったように、妾なのか。

四月半ばのある夜更け、新吾は酒を過して、酔い覚しのために、庭に出ていた。福松という若い大工に、家の内外の小さな仕事を頼み、終ってあきが酒を出したのへ、新吾も加わっ

た。そこへ駒吉が、すしの折りなどを持って来合わせたので、にぎやかな酒宴になった。

福松は以前から駒吉と親しい男で、あばら家だったこの家を、新築同様にしてくれたのも福松だ。二十六になると言ったが、年よりは落着きがあって、話も面白かった。

新吾は酒に弱いが、この時は釣り込まれ気味で、思わず過してしまったわけだ。

庭に出ると、涼しい夜気が全身を包んで、こころよい。広くもない庭だが、新吾はぶらぶら歩いた。空は曇って、月が煙っていた。

隣りの家を、見るともなく見ていると、母屋で手燭の明りらしいものが動いた。

隠居所のほうへ動いて行く。母屋と隠居所は、短かい渡り廊下でつながっているが、その渡り廊下で、手燭を持ったたのの上半身が見えた。白っぽい下着の上に、長着か、羽織をひっかけているだけのようだった。

たのは隠居所の中に消え、岩元老人の寝ているらしい部屋が、明るくなった。

手燭の火が母屋から動き出す前に、微かに鈴の音が聞えたような気もする。すると、老人がたのを呼んだのだ。

時刻はもう、四ツ（午後十時）を過ぎているだろう。

老人がたのを呼んだのは、後架に行くためかと思ったが、夜更けに娘を呼び起すこともあるまいと思われる。当然、溲瓶の用意がなくてはならないだろう。

新吾は火照った顔が、さらに熱くなるのを感じた。血管がズキンズキンと脈打っている。

しばらく待ったが、隠居所は静まり返ってしまった。たのが老人を、後架に連れて行く様

子はない。もちろん、老人の体になにか異変があったというのでもなかった。

新吾は妙な気持を持て余しながら、部屋に帰った。あの年で、まだ色欲があるのかという驚きもある。浅ましい気もするが、同時に老人の精気盛んなことを喜びたいような気もする。しかしいずれにしても、たのが老人の妾であるのは、十中八、九、動くまい。

あきは床をのべたあと、鏡台に向って、ざっとした寝化粧をしているところだったが、新吾が見たことを話すと、

「だからそう言ったでしょう。わかっていたんだから」

と、笑顔を向けた。今夜はばかに色っぽいな、と、あきのくつろげた襟足を見ながら、新吾は思った。

「しかし、あの年でなあ。寝たっ切りの一歩手前じゃないか」

「この道ばかりは、いくつになっても衰えないって言いますよ」

「おれなんぞは、とても駄目だな」

「そうでもないでしょう、旦那。そのことはわたしが一番よく知っているんだから」

「ばか」

新吾はあきのうしろに回り、指先であきのうなじから耳たぶをなぶった。

「お前も大分酒が入っているんだな。女は酒が入ると、実に工合がいいそうだ。試すぞ」

新吾はたかぶっていた。おそらく意外な光景を見たせいだろうと思う。

あきは金だらいに湯を汲んで、手拭いで新吾の体を拭いてくれた。そのあとで、あきも腰

のもの一つになり、体を拭いたが、新吾は床の中でそれを見ていて、脂の乗り盛りという言葉を思い出した。肌の白さ、艶やかさが冴えている。

「お前に言い寄るやつはいないかい」

と、いつもより激しい営みのあとで、新吾は聞いてみた。

「急に、どうしてそんなことを？」

「男ならみんな、おれと同じように、お前を欲しがるだろうと思ってね」

「厭ですよ。止してくださいな、ばかばかしい。わたしはそんなふしだらな女じゃ……」

「怒るな怒るな。お前がふしだらだとは、思ったこともない」

「わたしが旦那のものだとわかっているから、言い寄るやつなんて、いやしませんよ。わたしは元来、男嫌いのほうだから。旦那は別」

と、あきは肌をこすり寄せるようにした。

あきは最初の亭主でしくじっている。当人も駒吉も、その話にはあまり触れたがらないが、要するに亭主は道楽者で、口先のうまい、かたりも働くような男だったらしい。その後、世帯を持つのが厭になり、水茶屋奉公で過していたのだが、その時分にも、好きな男がいたという話はない。駒吉の目も光っていた。

「娘がそうだとわかってみれば、じいさんが住み慣れた屋敷を出たのも、不思議はないな。屋敷じゃあ、孫のような女を引き入れるなんぞ、できた話じゃない。ここなら何をしようが自由だ」

「またその話？　それでも、おじいさんはいいかもしれないけれど、たのさんがかわいそうじゃありませんか。きっと、死ぬ思いで年寄りの相手になっているんですよ。それだけのお給金はもらっているでしょうが、まだ若い娘ですもの、何もかもおっぽり出して、逃げ出したいのじゃないかしらん」

「しつこい男よりは、反っていいだろう。なんと言っても七十三だ」

「よっぽどのわけがあるんでしょう。背に腹は替えられないようなわけが。どうせ、お金がからんでいるんだろうけれど。たのさんに比べたら、わたしは仕合せだ。……旦那、もうお眠む？」

笑いのさざ波が、あきの体から伝わってくる。

三

それからしばらく経った夜、あきも隣りの庭に、たのの姿を見た。あきは雨戸を少しあけて手水を使っていたが、たのがひとり、庭の中程に、ぼんやり立っていた。夜中に近い頃で、月の光もない暗がりだから、はっきりと見ることはできないが、寝間着を着ていて、その着様がひどくしどけない。前がはだかり、膝小僧から下の素足が白かった。

それよりドキッとしたのは、髪の乱れだった。まげの形も崩れている。寝間着にしても、髪にしても、静かに寝ていたのなら、そうはならない。

たのの表情は定かでなかったが、悲しそうだとあきは思ったそうだ。

たのは、自分をうかがっているあきに気付かず、時々空を見上げていた。空は曇って、ただ暗いばかりだ。

たのはまた、隠居所に戻って行った。

「ね？　厭で厭でたまらない勤めなんですよ、きっと。だからああして、いっときでも息を抜こうと、庭に出たんですよ。よくはわからなかったけれど、泣いていたのかもしれませんよ」

「そんなに厭なら、逃げ出せばよさそうなもんだがな。じいさんはあんなふうだから、いつでもプイと出られる。女に食いっぱぐれはないんだ。ことに、あの若さと器量なら……」

「逃げられない義理があるんでしょう。当人か、家の人が、一方ならぬ世話になっているとか。目をつぶるより仕方がないから、またおとなしく隠居所に取って返したんですよ。うしろ姿のトボトボとしていたこと……いったい、おじいさんはどんなかわいがり様をするんだろう？」

あきはそう言うと、新吾の胸に顔を押しつけて笑い出した。

岩元老人には、たった一つ、残された楽しみ、生き甲斐がある。それがたのなのだな、と、新吾は納得した気持になった。まさしくそれは、掌中の玉だ。それがあるために、はた目には抜け殻のような暮しでも、意外に充実しているのだ。腹這っている時にも、本式に床の中で昼寝をしている時にも、思いはいつも、たのの上にあるのだろう。たのを愛撫した折りのあれこれを、次々に回想して飽きないのだろう。

一応、そうわかってみると、老人と娘への興味は少々薄れてきた。無理をせぬよう、せいぜいお楽しみなさい、という気持だ。

じいさんは長い命ではないから、厭だろうが辛抱して、お終いまで見てあげるのだな、とたのに言いたくもある。

新吾とあきの間には、なんの風波もなかった。ちょっとした衝突はあるが、みな痴話喧嘩に類したもので、あとの仲直りが、言うに言われない味だった。

たのは辛い勤めをしているが、あきはそうではない。もともと好き合ってこうなったのだ。飽きる、中だるみといった気配は、毛ほどもない。

手当は、多いとも言えないが、十分足りているはずで、その上に店の売上げもあるから、あきが暮し向きについて不満を洩らすことはない。

着物を買ってやろうと言うと、手許の金で買えるからと、あきは断わるくらいのものだった。

店を出させたのは、やはりよかったらしい。仕事をする張りがあるのだ。売上げも少しずつふえている。新吾はあきの口から、商売の話を聞くのが面白かった。相談にも乗ってやっている。それにくらべると、添番の勤め方などは、くだらないの一語に尽きる。だが、あきたちとは別世界なので、奥女中のことやなにかを話してやると、あきは目を輝やかして聴き入っている。

「添番なんぞ、棒に振っても惜しくないんだ。蔵米百俵の御家人が、している仕事はまるで、

ままごとさ。白山の家にも、ほとほと愛想が尽きている。刀を捨てようと、何度も思ったもんだがな。どうだあき、おれが商人になって、そろばんを持つというのは。いまの商売を広げるのもいい。いや、本気だぜ」

「そうはゆかないでしょうよ」

と、あきは笑って相手にしない。なるほど、冗談と思うだろうな、と、新吾は気勢をそがれ、話はそれまでになってしまう。

岩元老人が、夏布団で昼寝をしている。きちんと仰臥して眠っているのが、こちらからでもわかる。軒端にすだれがかかっているが、巻き上げられていて、様子がよく見える。梅雨に入って急に蒸し暑くなった。これから藪蚊がうるさくなるが、まだ蚊遣りをたくほどでもない。

老人のお株を奪って、腹這いになっているのは新吾のほうで、所在なくたばこをのみながら、あきがどこからか借りてきた草双紙をひろげていた。すぐ見てしまい、眠気のさしてきた目を庭に向けてみた。老人の目になったつもりだ。

こちらの庭も、隣りと五十歩百歩で、紫陽花の色が濃くなったくらいのものだ。あとはざくろが朱色の花をつけている。所々にあきが植えた草花も、みな咲き終ってしまった。

狭い狭い世界だと思う。新吾はすぐ見飽きてしまった。老人の真似はできない。

その時母屋で、男の声がしたようだった。最初は空耳かと思ったが、念のため母屋を見る

と、格子窓の内で、人の姿が動いた。格子窓には、日頃は引き違いの小障子が立っていて、中は見えないのだが、この時は蒸し暑いせいか、戸が一方に片寄せてあり、それで人の姿が見えたわけだが、それはたのではなさそうだった。着ているのが、男の綿服のようだった。新吾は目を凝らしたが、それっきり人の姿は見えなくなった。低い窓で、首から上は切れている。

男が母屋にいるとすれば、いまの男の声は空耳ではなかったのだ、と新吾は思った。もっとも、男がいて不思議はない。その男が屋敷からの使いの者なら……しかし、使いであれば隠居所にあいさつに行くはずだし、その前にたのが、老人を起しに行っただろう。新吾は待っていたが、たのも男も、隠居所には行かなかった。老人はさっきから身動きもしないから、よく眠っているのだろう。

老人は、ああして眠っていることもけっこう多い。眠っているか、腹這いで庭に頭を向けているかだ。坐って書見をしたり、手紙をしたためたり、あるいは小謡い、浄瑠璃のたぐいをうなったり、という姿を、新吾は見たことがない。

もしや、という疑いは当然だった。たのに男があり、母屋に引き入れても、老人にはなにもわからない。眠っているのであれば、密通の二人にとっては、一層安全だ。老人は半刻（一時間）から一刻（二時間）足らずという間、よく眠る。

あきはちょっとした用で、駒吉の家に行っていたが、暮れ方近くに帰ってきた。

「おい、妙なものを見た」

と、新吾は早速話した。あきはそれを聞いて、かくべつ驚くふうでもなかった。知っていたが、新吾には言わなかったのだと、あきは困ったような顔で白状した。

たのには、確かに男がいる。見た人の話だと、年はまだ若く、丸腰で、町人風にしているが、髪が侍だ。人目をはばかり、夜になってから、表の木戸からやってくる。たのは男を迎えるため、戸締りをしていないようだ。

男は夜更けてから帰るのがふつうだが、泊ることもある。その時は早朝に帰るのに違いない。

男は頻繁に通ってくるわけではない。月に二、三度だろう。

「たのがじいさんに呼ばれて行っている間、そいつは母屋の寝床で、天井の桝目を数えているのか。回し部屋だな」

「悪いことには違いないけれど、たのさんも辛いでしょう」

「よく見ているやつがいるもんだな。お前はだれに聞いたんだ？」

「だれに聞いたのだっけ。そうそう、そば屋の若い衆だったと思いますよ。通りがかりに、その男がお隣りへ忍び込むのを見て……その後は岡焼き半分で、探っていたんでしょうよ。たのさんに気があったのかもしれませんね」

「こいつは不義だな。妾と言ったところで、女房同然だ。じいさんのために、放ってはおけない」

「お止しなさいよ、旦那」

と、あきは新吾に取りすがるようにした。

「よそ様のことじゃありませんか。知れたらどうなるかわからないけれど、知れなけりゃあそれまでで、騒ぎは起こらないんですからさ。なまじ飛び込んで、引き掻き回したら、旦那はおじいさんとたのさんと、両方から怨まれますよ。たのさんは、駈落ちまでするつもりはないんでしょうから」

ムキになっているな、と新吾は思いながら、あきの意見通り、老人には知らせるのはやめにした。知らないほうが仕合せかもしれない。

それにしても、たのが男を家に引き入れるほど、すれた、不敵な女だとは、新吾にはどうしても思えない。

大工の福松が、裏の物干し造りにやってきた時、新吾は仕事を眺めながら、あきから聞いたのだと、その話をした。

福松は苦笑しながら、

「人に吹聴するようなことでもねえんですが、仕事帰りに、つい見ちまったんです。ええ、男が入るところを。こっちも物好きで、一回りしてまた、お隣りの近くに来るてえと、娘さんが門口で、男を送り出しているんです。その様子が、どう見たって恋人同士の愁嘆場……」

「なんだ、見たのはお前かい。あきは、そば屋の若い衆から聞いたなどと言っていたんだが」

「あっしがおあきさんの耳に入れたんです。そば屋の……そりゃあ思い違いでしょう」

仕事が終り、あきが縁側で茶を出したが、

「おや、あれはお前さんだったのかい？　そう言えば思い出した。陽気のせいで、わたしもおかしいね」

と笑っていった。

四

たのが突然いなくなった。たのに入れ替って、十五、六の娘が住み込み、岩元老人の世話を焼いている。新吾が白山に帰っている間の出来事だった。

「わたしもちっとも知らなかった。スーッと、消えるようにいなくなったんですもの。あいさつにも来やしません。それでも、逃げたのじゃなさそうですよ。その証拠に、すぐ後釜が入ったんだから。おじいさんが暇を出したんですね」

と、あきが言った。不義がバレて追い出されたのか、それとも暇を願って許されたのか、詳しいことはわからない。老人はいつもと同じである。腹這いでジッと庭を見ているか、布団に寝ているかだ。

替った娘の素姓はわかっている。同じ町内の八百屋の末娘で、ふじという。その八百屋から御用聞きに来ているから、老人が頼んだのかもしれない。あるいは、頼んだのはたのかもしれない。

娘は働き者らしく、身なりもあまり構わない。赤い頬っぺたをしているのが、子供っぽい。まだ妾の勤まるような娘ではなさそうだった。

新吾はわからなくなった。唯一の楽しみ、掌中の玉を失なって、老人はガッカリと気落ちしそうなものだが、そうは見えないのだ。

岩元老人とはじめて言葉を交すことになったのは、ふじが入って間もなくの、六月初めの天気のいい日だった。

駒吉の使っている若い者が、薪用に古材木を運んできたので、庭に出て久し振りに薪割りをした。そのあと、肌脱ぎになって風を入れていると、老人がふっと顔を上げて、ニッコリした。新吾は思わず頭を下げた。

「ご精が出ますね。どうです、ちと話においでなさい」

と、老人はしっかりした声で言った。境の垣根に出入口はないので、新吾は一旦表へ出て、大回りをしなければならなかった。隠居所へ案内してくれたのは、ふじである。

老人は、足がままにならぬので失礼すると断りながら、ふじの助けを借り、両足を横に投げ出して坐り、脇息にもたれた。

新吾はバツの悪い思いをしながら、隣り合わせで、常々お顔も拝見しながら、ごあいさつにうかがわず、と詫びた。

「それはお互い様です。われわれは、あまりほめたことをしているのではないからな」

と、老人はくつろいだ笑顔で言った。そばで見ると、顔色こそよくないが、想像していたより元気のようだった。目が生気を持っており、もうろくどころではない。

ふじが茶をいれに、母屋へ去った。その後姿に目をやりながら、前にいた娘さんはどうしたのかと、新吾は聞いた。いいキッカケだった。

「暇をやりました。あれには好きな男がいてね。前々から言い交していた。この辺で手放してやろうと思ってね。気に入った娘だったが」

「では、ご存じだったんで？　男が母屋へ……」

新吾は勇を鼓して口にした。老人はほんの少し、うなずく動作をした。

「実は、お知らせしようかと思ったこともありましたが、うちのやつに止められまして」

「おあきさんとか言ったかな。いい女っぷりだ。あなたが入れあげるのも無理はない。それに気立てもよさそうだからね」

老人の微笑は複雑だった。

「たのさんの身の上が、人ごとは思われなかったようです。黙っていたほうが、お二人のためにはいいと……」

ふじが茶と軽い菓子を運んできて、すぐ立ち去った。

ここからわが家を眺めるのも、妙な気持のものだ。やはり、縁側と、部屋の中がよく見える。あきは店にいるのだろう。部屋は無人だった。

「毎日ご退屈でしょう。庭を眺めてばかりおられるようですが」

「庭など見てはおりませんよ。こういう年になると、目の前の何もかもが、薄紙をへだてた

ように見える。夢のようなものさ。むしろ古い昔のことが、生き生きとよみがえってくるものです。現在がまぼろし、昔が眼前だ。それも古いほどはっきりしている。十年前より二十年前、二十年前より三十年前……わたしは恋い焦れた女がありましてな。名をりよと言ったが、わたしはりよの面影を、いつも見て、りよと話している。つまらない恋物語かもしれないが……」

岩元老人の家は、やはり小十人組で、老人は組頭を勤めていた。家禄は百五十俵で、組頭役中は、足し高が百五十俵ある。

りよは同じ小十人組番士の娘で、ふとしたことから二人は知合い、当時部屋住みだった老人は夜も眠れないほど夢中になった。りよも老人の熱意に応じてきた。相思相愛で、自由に会うわけにはゆかないが、老人が頭を絞り、なんとか手段を考え出して密会を続けた。その危険をおかした密会が、最も甘い、楽しい思い出になっている。

恋が破れたのは、りよを息子の嫁にと望んだのが大身の旗本で、りよの父は旗本に頭が上らなかったからだ。彼を引立ててくれた恩人で、金銭的にも世話になっている。彼は娘と老人の仲を知っており、むしろ縁組に気が進んでいたのだが、恩人がぜひりよを、と言うのであれば、話は別である。老人は因果を含められた。どうする暇もないうちに、りよは旗本の息子に縁付いた。従順な娘で、父の言い付けに背くなど、思いも寄らなかったのだ。ただ、老人が決死の覚悟で、引っさらって逃げるというのなら、付いてくるはずだった。りよはひそかに、そう願っていたに違いない。

老人は何もかも打ち捨ててりよを奪う決心をした。りよのほかは、一切が無価値であると割り切った。

旗本の息子は怠け者で、女たらしという悪評がある。そんなやつにりよは渡しておけない。老人はりよをけがした息子を斬るつもりだった。

「一生の不覚というのだな、あれは」

と、老人は言った。いざという時になって、世間智が働いてしまった。分別がよみがえったということにもなるのだろうが、家がつぶれ、肉親、縁辺が苛酷な罰を受ける結果を考えると、夜陰にその屋敷の塀を乗り越えまでしながら、にわかに気がくじけた。一旦そうなると、再びふるい立つことはできない。

「以後、りよには会わぬ。りよが三年目に病死したのは、風の便りに聞いたようなものでした。りよは心待ちにしていたろうと思うと、気が狂いそうになった。……それからのわたしは、とんと死灰だわ。なるほど、平穏無事に何十年、やってはきたが、生きていると思ったことはない。お笑いになるかもしれぬが、頭の中、夢の中でりよと会い、語らう時だけ、わたしは生き返った。老いぼれてもまだ、わたしはそうしている。そのりよに、たのがよく似ている。あれも小十人組の者の娘さ。父親が上様のお成り先で何かしくじり、小普請に落されて苦労していたのを、私が骨を折って元に戻してやった。お分りでしょう。あの、昔の旗本の立場が、わたしの立場になった。それでわたしは、末娘のたのを妾に出してくれとせがんだ。もうそろそろ、年貢を納めてもいいと思ってね」

「は？」

「実はたのに、末を誓った男があるのを知っていた。知りながら仲をさいた。男は御徒を勤める家の次男で、確か名は誠次郎……名などはどうでもいいが、誠次郎が昔のわたしだ。どうでもたのを取り戻したければ、わたしを斬らねばなるまい。わたしはそれとなく、知っているぞと、たのにほのめかしたからね。誠次郎はわたしを憎んでいる。いや、憎んでいなければならぬ。わたしのように、くじけてはならぬ。しくじりを繰り返してはならぬ、と誠次郎に言いたかった。こうと決心したら、盲滅法にやれとね。わたしはこの足腰だが、相手になる。手加減はしない。老いぼれて、みじめったらしく死ぬより、武士らしく戦って斬り死にするほうが、サッパリしている」

「そうでしたか」

新吾はしばらく、言葉がなかった。

「ご存知のように、誠次郎はやはり、わたしの轍を踏んでしまった。分別が働いたのだね。恋は一時のもの、と悟ったようなことを考えたのかもしれぬ。残念ながら、あきらめましたよ。そうなればもう、所詮、たのを引き留める気はない。似てはいるものの、たのはりよではないからね。連れ添うがいいと言って、暇をやった。いい夫婦になるでしょうよ」

「たのさんは、ただあなたのお世話だけを……つまり」

と、新吾は言い淀んだ。

「あれは妾でした。お疑いはもっともだが、わたしはまだまだ、枯木のようにはなっておりません。老人には老人なりの、女の味わい様があるものでね。これは計略抜きで、わたしにはうれしい御馳走でしたよ。たのは多少、うしろ髪を引かれたかもしれない。いや、これは年寄りにも似ぬうぬぼれかな」

老人は枯れた声で笑ってから、ことのついでのように、こう言った。

「不義を知らせてやろうとのご親切に、わたしもお返しをしなければなるまいね。あきさんが言うように、胸に納めていたほうがいいのかもしれないが、あなたの温厚なご気性なら、大事あるまい。お宅にくる若い大工がおりますな。あの者は……」

新吾の胸が早鐘を打ち出した。先は聞かなくてもわかっている。言われてみると、疑いの芽のようなものが、ずっと前からきざしていた気がする。

あきは、たのの不義のことを、そば屋の若い衆に聞いたと、つかなくてもいい嘘をついた。これは福松の名を出しなくなかったからであろう。福松から聞いた、では連想を誘う。たのに寄せる関心も、強過ぎた。

たのが悪い女ではないのと同じように、あきも悪い女ではない。しかし、恋はどうにもならない。

福松とそうなったのは、いつ頃からかわからないが、新吾への接し方が、お座なりになったことはなかった。女郎のように欺していたのとは違う。あきは実のところ、どうしたらいいのかわからないでいるのだろう。

「どうなさる」

と、老人が聞く。

「考えてみます。正直なところ、たっぷり未練がありますから。しかし、あきのためには、暇をやったほうがいいのかもしれません。父親も、わたしには悪いが、福松のほうがと思っているでしょう。しっくりした夫婦になりましょうからね」

新吾は礼を言って、家に引揚げた。手先、足先がふるえているが、心は意外に落着いている。通うのを、次第に間遠にするのが無難かもしれない。とにかく、角を立てたくない。あきとの恋など、岩元老人の恋にくらべたら、物の数ではない。

「珍しいこともあるもんですねえ、おじいさんに呼ばれるなんて。どんなお話をなすっていたんです？」

と、あきが明るい顔で新吾を迎えた。

みれん

一

瓜生太助は九州のある小藩の軽輩で、徒という身分であった。徒は足軽の一つ上くらいの階級である。

役目は勘定方の下役であった。重要な仕事は与えられず、走り使いのようなことばかりである。領内各所に郡の役所があり、太助は命ぜられて、役所とのさまざまな連絡に当る。それもつまらない用が多く、忙しさだけは人一倍であった。

しかし太助は実直に勤めていた。付合いがうまく、人を逸らさないほうである。従って同僚の受けがよく、上司に重宝がられている。

太助はまじめ一方、正直一途というのではない。精励恪勤を続けているのは、どうにかして上へ這い上りたいという野心のためである。

身分制が動かないから、能力があっても出世できないのが、太助の不満の第一であった。おのれの能力には自信がある。

第二に、瓜生は徒などに終る家柄ではないと太助は自負している。系図によると、出は平氏であり、いわゆる落武者であったのが、この国に土着し、相当に勢力を張っていたと伝えられている。国の支配者は何度も交替し、有為転変を繰返したが、瓜生氏は常に彼等の重臣であった。少なくとも系図ではそうなっている。

瓜生家がいつどんな理由で落ちぶれたのか、明らかではないが、とにかく現在の領主になってからは、ずっと徒に甘んじているのだ。

家を興すのはおれしかいないと、太助は十代の頃から思い、なんとしても出世を遂げようと決心していた。家名を上げ、先祖の霊をなぐさめるためであるが、具体的にはより豊かな暮しと、優越した地位がほしいからであった。

太助はきわめて現実的な、冷静な性格の男である。仕事も計算ずくでやるのが性に合っている。忠義にしても、褒賞があっての忠義ということになる。

太助は二十四歳の時、きせという娘を妻に迎えた。きせは椎名大膳という神主の長女で、太助に嫁いだのは十九の時であった。その社は土地の名を取って池尻神社と言うが、社内に薬師堂があるので、お薬師様という名のほうが通っている。領内でも小さなお宮で、わずかな田畑を、社領として許されている。

神主の椎名の家と、瓜生の家とは遠縁に当り、同じ平家の落武者の末なのである。そして、先祖が同じなのは、瓜生と椎名だけではなく、領内にはかなり同族がいるのだが、多くは百姓、町人で、中には財を成して城下で商売をしている者もいる。ただ、侍は太助の家だけであり、苗字帯刀を許されているのは、椎名大膳だけであった。

大膳の住居は神社の裏にあり、太助の家とは一里も離れていない。

太助ときせは幼馴染であった。太助は子供の頃によく大膳の家に遊びに行き、きせをかわいがったり、いじめたりしたものだ。

きせはおとなしく、素直な女の子であった。小柄であまり活発でなく、顔は整っていたが

色が黒く、やせていたので、太助はきせに異性としての興味を持ったことがなかった。

もっとも、太助の記憶に強く刻みこまれた出来事が一つある。

お医者ごっこは昔もあったので、ある時太助は医者になり、神社の小暗い森の中で、きせを素っ裸にむいてしまった。それからどうしようというつもりはなく、何もしなかったのだが、太助がいまも鮮やかに思い出すのは、きせがほとんど拒まなかったことと、ベソをかきはしたが、泣かなかったこと、またきせの体が意外にも真白で、それほどやせてもいず、実にきれいだったことである。

その時きせは、ジッと太助を見た。怨むでもなく、とがめるでもなく、と言ってひどく悲しそうでもなかった。そのくせ、きせの目付きは不思議に、少年だった太助の胸を掻き乱した。

太助は成長するに従って、大膳の家に行かなくなり、きせと会うことも少なくなった。きせは太助にとって、関心外の存在になっていた。どうしているのか、とふと思い出すことがあっても、それだけのことである。

縁談は急に起った。仲人は立ったが、縁組を希望したのは、大膳であった。遠縁で、昔から二人は知り合って気心が知れており、釣合もいいからというのが、大膳方の意向である。

当時太助の両親は健在で、ひとまず返事を保留したが、太助の身辺に縁談はなく、太助自身にこれという希望もないので、大膳の娘なら間違いあるまいと、承諾した。太助にも異存はなかった。よほど妙な女でない限り、だれでもよかったのである。女がどうのこうのと言うより、二十四にもなっては、妻を迎えるのが当然で、いつまでも独り者でいては、外聞もよくない。

太助の両親は、あるいは同じような身分の侍の娘と、きせとを天秤にかけていたのかもしれない。軽輩の娘をめとったところで、大した利点はない。きせも同じようなものだが、どうやら支度や持参金を奮発するらしい。それならきせのほうがマシである。

両親がそう判断したかどうか、太助は知らない。母親は婚礼の二年後に死に、父親はその二年後に軽い卒中を起して以来、ひどく記憶力が鈍っているので、太助は両親からその辺のことを打明けられずにしまったのである。

昔からそうであったように、きせは従順で夫の太助の意に逆らわない、いい妻になった。骨身を惜しまずに働きもする。小造りでなんとなくかぼそく見えるきせだが、夜の床で太助が抱く裸身は思いの外に豊満であり、柔らかな弾力を持っていた。

色が白いのは少女の時以来で、それにしっとりと脂が乗っている。

きせは美しくなっていた。それはおとなしい美しさとも言うべきもので、最初のうち太助は、どこにでもあるような顔だと思っていたものだった。実は人に抜きんでて美しいのだと気付いたのは、結婚後一年も経ってからである。そして他人がまた太助同様、その頃になってようやく、きせの際立った容姿に気付き始め、太助に羨望の目を向けるようになった。

きせの目立たない美しさが、次第に内から輝き出したのは、夫の太助に愛されて次第に開花し成熟したせいなのかもしれない。

結婚当初、太助はきせに対して、どちらかと言えば冷淡なほうだったが、それが一年経って、まるで夜毎、きせの体にのめり込む有様になった。飽きがくるどころか、どれほど求めても底が知れないような良さが、きせの体にはある。いつも何か、新しい魅力が見付かる。おれは望外の拾いものをしたわいと、太助はきせを抱きながら、よく思った。それに、きせは太助の求めを決して拒むことがなく、太助と同じように、いやそれ以上に燃え立ってくれる。昼間のしとやかさ、つつましさが嘘のように取り乱しもする。

二年目にきせは男子を出産した。

きせとの夫婦仲は、この上もなくうまく行き、父ときせの間も良く、言うことはないようだが、貧しさと下積みの苦労は相変らずである。家禄が十五石足らずでは、手も足も出ない。庭を畑にし、果樹を植え、暇を見ては畑仕事をし、魚は釣ってきたフナやドジョウを食って間に合わせる暮しをして、なんとか借金をせずにいるが、安価な衣類一枚を調える余裕がない。夫としての見栄から、せめてきせを身ぎれいにしてやりたいが、それもかなわない。

きせが全く不平を言わず、粗衣粗食と労働に甘んじているのを見るにつけ、太助の不満は増し、焦燥に駈られ勝ちになる。

太助の勤めにはなんの変りもなかった。ただ、勘定奉行が替り、それにつれて、上役のほうにも少し異動があった。太助の直属上司である組頭に、安原久三郎という男がなった。安原はその前は寺社奉行配下の上席の与力であった。

勘定所で組下の者との対面があった時、安原は末座の太助にわざわざ声を掛け、

「お前のことは知っているぞ。いい嫁御をもらったそうだな」

と、なにやら意味ありげな笑顔で言った。

どうして自分のことを知っているのかと、太助は妙に思った。太助は安原についてほとんど知らず、言葉を交した覚えもない。二百石くらいの上士で、勢力のある用人の甥かなにかだというのが、太助のおぼつかない知識であった。

「ちと、屋敷に顔を出せ」

と、また安原は言った。これらの言葉はみな、この地方の方言が使われるのだが、それは一種独得のもので、一般にはなかなか理解し難いから、標準語に直して記述する。

太助は安原の屋敷にあいさつに出向いた。屋敷は城の曲輪外の高台にあり、身分のいい家臣の屋敷が並んだ一廓である。その辺りから城下町が広がっている。

太助は苦心して釣り上げた鮎数尾を、笹の葉に乗せて持参した。もう夕刻近かったが、安原は機嫌よく、太助を招じ入れた。書院ではなく、安原の私室である。

「これは何より。妻が喜ぼう。精が付くかもしれん」

と、安原は鮎の礼を言った。安原の妻はとみと言い、病弱で寝ていることが多い。

先日はお言葉を掛けられてうれしいが、自分をどうしてご存じなのかと、太助は勇を鼓して聞いてみた。

二

椎名大膳の娘をめとった男だと聞いたからだ、と安原は答えた。安原は寺社奉行の配下であった時、役目上時々大膳の家を訪れ、饗応を受けたことがある。そんな時に給仕に出たのがきせで、その控え目の美しさと、ういういしい色気にひきつけられたという。

安原は用にかこつけて、大膳宅を訪れることがあったが、それはもっぱらきせに会いたいからであった。

しかし、気に入ったからと言って、どうにもできるものではない。親は神主で、苗字帯刀であり、一応の家格がある。安原とて、身分がある上に、妻はいい家の出なので、めったな浮気は禁物であった。

つまり、安原はきせを恋したが、それは実るはずのない恋なのである。

そういう安原だから、きせがどこのだれに嫁ぐのか、非常に気になっていた。

安原が耳にした噂によると、きせははじめ、城下でも一番という呉服屋のあるじから、後妻にと懇望されていた。呉服屋は四十半ばの男で、椎名大膳はかねがね、金銭その他で呉服屋に恩義を蒙っている。従って、きせを望まれて、断わるのは困難であった。だがきせは気が進まず、大膳も同じである。その上、呉服屋は女癖が悪いという評判がある。

安原はその縁談の噂に腹を立て、場合によっては大膳へ意見を言いに行こうかとさえ思っていたが、急転直下、きせは太助に嫁ぐことになった。

「お前は果報者だぞ。棚から牡丹餅という言葉があるが、その言葉通り、きせのようないい女をわがものにしたのだからな。打ち割って言えば、おれはお前が憎い。だが一方、きせの夫なら、なんとなく身内のような気がせぬでもない」

と、安原は言った。太助は意外なことばかり聞かされ、あいさつに困った。安原がきせに恋心を抱いていたとは、夢にも思わなかったが、呉服屋の件もはじめて聞くことだった。どうやらそれで、急に縁談が起った理由が呑込める。大膳は、実は娘にはすでに決まった者がいるという口実で呉服屋の申し出を断わり、太助との婚儀を急がせたのに違いない。

太助は安原に求められるままに、婚礼以来のきせとの夫婦生活について、かなり詳しく話した。暮しが楽でないので、きせはいつも煤だらけのようなかっこうで立ち働いていると言うと、安原は痛ましそうな顔をした。

「それはいかんな。おれがなんとか骨を折って、引上げてやろう。お前の御奉公振りは、上の者の目に留っているから、事を運びやすい。だが、おれが骨を折るのは、お前のためではなく、きせのためだぞ」

と、安原はやや冗談気味に、太助に釘を刺した。確かにその通りであろう。

とにかく、太助は恐縮し、何分よろしくと平身低頭した。この時から、きせをうまく使えば……と太助は考え始めた。

「こんどは夫婦でこい。女房にも引合せる。きせは女盛りで、さぞかし美しさが増したろうな。会うのが楽しみだ」

「恐れ入ります。必ず参上いたします」

そういうやりとりのあと、太助は安原邸を辞した。

帰宅して、安原のことをきせに話すと、きせは明るい表情で、安原様ならよく知っている、さっぱりしたいいお方だと言った。安原がきせに懸想している点については、少し顔を赤らめ、なんとも答えなかった。

「お前もまんざらではなかったのだろう」

と、太助は思わず聞いてしまい、嫉くなどおれらしくもないと後悔したが、きせは、

「何をおっしゃるやら」

と軽く受け流してしまった。

「呉服屋から縁談があったそうだな。おやじ殿は呉服屋を嫌って、おれにめあわせたというが、なぜかな。呉服屋と縁がつながれば、金の融通がよくなったろうに」

「あの呉服屋さんは放蕩が過ぎて、身代がとっくに傾いておりましたそうな」

と、きせは簡単に、そっけなく答えた。それが事実なら、呉服屋にはなんの取柄もなかったわけで、大膳が彼を袖にするのも当然だった。大膳も太助に似たところがあり、勘定に合わぬことはしない。

冬近い頃だったが、ある晴れて暖かい日、太助はきせと息子の松太郎を安原の屋敷に連れて行った。太助は泊り明けで非番、安原は鼻風邪というので、早く勘定所をさがっていた。通されたのは、安原の妻のとみが寝所にしている部屋で、とみは大儀そうだったが、着替

えて寝床の上に坐っていた。安原が三十五歳、とみが二十八歳で、夫婦の間には七歳と五歳の幼い娘の姉妹がいる。

三歳の松太郎は姉妹に珍しがられ、仲よく遊びだした。

とみは美人ではないが、上品で厭味のない顔立ちをし、その物言いから、思慮深さが感じられる。

とみはきせが気に入ったようで、きせもすぐ打解けた。

「なるほどきせ殿なら、このお方が思いを掛けられても不思議はありません」

と、とみは安原に戯れ、安原はばかを言えと笑いとばしたが、大いに照れているのが、手に取るようだった。

きせはただ控え目に、笑顔でいるだけである。迷惑そうにも、はずかしそうにもしない。この女は、ちょっとわからぬところがあるな、と太助が思うのは、こんな時である。

きせと、これといった話は交さなくても、会えたことで、安原は満足そうだった。もともと赤ら顔のほうだが、この日は特に赤く見えたのは、興奮していたせいであろう。

「ところで瓜生、元山がいよいよ勤めを退くことになってな。せがれはまだ年少で、しばらく席が空く」

と、安原が言った。元山弓之進は安原の組でも席次は上のほうで、家禄は七十石ほどである。元山はそろそろ五十歳で、持病の喘息が重くなって勤めに差支えるようになり、致仕は遠くないと見られていた。その勤めを、いずれは長男が嗣ぐことになるが、ここ数年は見習

いであろう。

もし太助がその席に坐ることができれば、相当の出世になる。元山の跡を襲う形になるので、現在の身分や禄のままでは、同役との釣合いが取れない。そのうちに必ず加増があり、身分も徒から脱却できるだろう。元山は末席ながら馬回りである。安原の強力な推輓があれば、それらのことは可能だと考えられる。

「お頭、それでは」

と、太助は身を乗り出した。

「ところがその」

と、安原は言いにくそうにした。要するに、元山の後釜を狙っているのは何人もおり、いずれも有力者の後押しを得ているので、かなり難かしい情勢になっているのだ。

「そのようなことなら、あまりご無理をお願い申しても、ご迷惑をかけることに」

太助はあきらめるという語気でそう言った。

「いや、骨を折ると約束した以上は、なんとかするつもりだ。ただ、易々とは参らんと承知していてくれればいい」

安原はややあわてたように、声を高めた。

引留められるのを辞退して、太助たちは帰宅したが、安原の恋心が少しも醒めていないことを、太助は確信した。安原は頑固者で、家柄を鼻にかけて威張るところがあり、酒を飲めば粗暴になり、身持もあまりいいほうではないというふうに、癖のある男だが、お人好しで

飾り気がない美点も持っている。嘘が言えず、かくしごとなどは不得手で、思っていることがすぐ顔に出る。

安原の顔色を読んだところでは、きせへの思いは生半可なものではなかった。機会さえあれば、安原はきせに本気で言い寄るに違いない。

思い過しかもしれないが、元山の席を襲うのが難かしいと、安原が言ったのは、取引を暗示したのではないか。

ひそかにきざしていた太助の企らみは、次第にふくらんできた。

その後太助はきせを、しばしば安原の屋敷に行かせた。もちろん安原の許へではなく、とみの身の回りの世話、家事の手伝いにである。

元山の席が得られるかどうかの瀬戸際だから、なんとしても安原や家族のために働き、覚えをよくせねばならぬと、太助はきせに言い含め、きせも得心しているようだった。

とみは心臓が悪く、気休めのように薬は飲んでいるものの、病状が好転する見込はなかった。静かに寝たり起きたりしていれば、急変はないというだけのことだったが、次第に弱ってきているのは、顔色の悪さや、やせ方でわかった。

とみはきせが手伝いに訪れると、いい話し相手として喜び、また松太郎を連れて行くと、菓子をくれたりしていつくしんだ。

年の暮には太助も出向いて手伝い、年始には親子三人であいさつに行った。きせには精一杯着飾らせ、化粧に念を入れさせた。

きせはとみの寝所へ行くとは言え、同じ屋敷内で、安原と顔を合せるのは当然であり、他の部屋で安原と話込むこともあるはずだ。

太助の狭い家とは違い、部屋数も多いから、安原がきせを口説こうとすれば、できないことはあるまい。力ずくなら、きせが抵抗しても無駄である。

安原がとみや家人や、太助をはばかって、きせに手を出すことができないとしても、きせを身近に見て、思いが増すのは間違いのないところだ。

きせを安原の家にやるため、太助は女中を雇い、父と松太郎の面倒を見させることまでした。大へんな出費だが、この際はやむを得ない。

きせが安原家へ行って帰るたびに、太助はきせの様子をうかがった。安原となにかあれば、嗅ぎつける自信がある。髪や服装に乱れがあるとか、太助の目を避けるとか、ことさら明るく振舞うとか、それでわからなければ、夜抱いてみればいい。昼間安原に抱かれたなら、きっと肌を太助の目にさらすのを厭がるだろうし、口実をもうけて拒んだりもするだろう。そういう態度で見当がつく。

だが、よくよく注意しても、太助が期待したことは起らないようだった。安原家で何をしたか、行った度ごとに詳しく話させるが、不審に思われるようなところがない。

これはやはり、きせに言って因果をふくめなければなるまい、と太助は思った。

三

きせにどう切り出そうかと、太助はしばらく迷っていた。よほどうまく話を持って行かぬと、手きびしく突っぱねられてしまう恐れがある。悪くすれば、離縁していただきますなどと、開き直られるかもしれない。

だが一方、案外素直に聞入れてくれるのではないか、という思いもある。太助の言うことには決して逆らわなかったきせだ。這い上れるか上れぬかの境目だからと強調すれば、折れてくれるのではないか。暮しもグンとよくなることだし、女は、自分に好意を持ってくれる男には、ついほだされるものだろう。ことにきせは、安原様はいいお人だと言っているのだから、厭々ながら、ではないはずだ。

晩春の一夜、松太郎が寝入ってから、太助はきせに、折入ってお前に頼みたいことがあると切り出した。

話の順序を間違えてはならない。太助はまず、元山弓之進の後釜に入らねば、永久に出世の機会が失なわれること、安原は骨を折ってやると言ったが、そうさせるにはよほどこちらが安原に尽し、喜ばせてやらなければ、本気で奔走してはくれないだろうという見込から始め、安原が遠回しに匂わせた、言わば交換条件に話を進めた。それから、安原が真剣にきせを思い続けていることを言い、きせの女心をくすぐる配慮も怠らなかった。

「おれがどんなに苦しい気持で話しているか、お前にはわかるまいが……」

「安原様の意に従え、とおっしゃるのですね」

太助の回りくどい言葉をさえぎり、きせは沈んだ口調で聞いた。太助は悲痛な顔をし、腕組をしてうなずいた。

「承知してくれぬか。おれのため、家のため、いやお前や松太郎のためでもある。子孫はおれたちに感謝するだろう。この通りだ」

と、太助は畳に手をつかえ、頭を下げた。

「あなたはそれでよろしいのですか」

「そんなふうに言わないでくれ。最愛の女房を上役に抱かせようとするのだ。……しかし、それが最良の手段なのだ。おれのお前に対する気持は変らない。一生恩に着る。三拝九拝だ。……そうだ、こう考えたら気が楽になろう」

女郎と間夫がいて、相愛だとする。女郎は商売柄、客と枕を共にするが、それは、客に体は売るが心は売らないと、双方とも割り切っているからで、お互いの愛情は少しも変らず、むしろ逆境に遭って強くなる。きせを女郎になぞらえるのは悪いが、例えばの話だ。

あまり重大に考えないほうがいい。実際、大したことはないではないか、体を痛めるわけではなし。ただし、人に知られぬことが肝要だが。特にとみに。それから、誤って妊娠せぬように……

「密通をせよとおっしゃっているのですよ」

「大げさに言うな。そんなことはよくある。表に出ないだけだ。出かかっても、大抵はもみ

消されるもんだ。まあ金で済む」

「こればかりは、どうおっしゃっても厭でございます。家に戻らせていただきます」

と、きせは小声でつぶやくように言った。泣きもわめきもせず、ただ少し悲しそうな表情を見せていた。太助はそんなきせの顔を見て、昔きせを裸にむいた時のことを思い出した。

きせは言葉通り、松太郎を連れて、椎名大膳の家に帰ってしまった。

当て外れの失敗で、太助は弱り切った。女郎の話などは、調子に乗りすぎた。うかつに本音を洩らすべきではなかったと後悔したが、おそかった。

しかし、ここで挫折しては、元も子もない。あと一押しも二押しもすべきだ。ひょっとして、大膳がこちらの話に乗ってくれるかもしれないではないか。大膳は話のわかる男である。もしきせがあれを承知すれば、大膳にも利益が回ってくるだろう。

太助はようやく、一道の光明を見つけた気がした。

太助は頃合いを見計らい、それから十日ほど経った頃、大膳の家を訪れた。きせが、太助の許を去った理由を大膳に打明けたかどうかは、大膳に会ってみなければわからない。

玄関に立って案内を乞うと、きせは顔を見せず、大膳みずから、仏頂面をして出てくると、太助を座敷に案内した。

大膳が事情を知らないのは、すぐわかった。

「よほど堪忍ならぬことがあったと見えるが……」

と、大膳は不機嫌で、やや当惑気味である。

「確かに堪忍ならぬことであったでしょう。とんでもないことを頼んだと悔いております」

と、まず太助は言って、恐縮の様子を見せ、事の次第をゆっくり話し始めた。大膳には残らず話したほうがいいと、太助は判断している。まだ実現していない計画も、打明けることにした。

太助は失敗を取り戻すのに必死で、話に熱が入った。きせの決心一つで、大膳も償いの金を得るほか、社領の増加、寄進の便宜など、寺社関係で顔が売れている安原のことだから、いろいろ有利な計らいをしてくれるに違いない。安原は、いずれは用人になる男だ。

「お社が老朽して、建替えたいが、それができようかな」

と、大膳は目を輝かし、太助はホッとした。大膳が協力してくれるという見込みが当ったのである。

奥の部屋にいたきせや、大膳の妻は、座敷で威丈高に太助を叱りつける大膳の声を聞いたはずだが、すでにこの時、大膳・太助は馴れ合いであった。

太助が謝罪して、夫婦は和解したが、しばらくきせの手がほしいので、連れ帰るのを延ばしてくれと大膳が言い出し、太助は承知した。松太郎も祖父母の家にいるのを喜んでいる。

翌日の夕刻、太助は安原の屋敷を訪れ、舅の椎名大膳が、日頃御恩になっている礼に、一献差上げたいと言っているが、と誘った。

その際、奥様の御病気平癒の祈禱もしたいそうだ。なお、ちょうどきせも里帰りをしているところで、何かとお言いつけくだされればいい。

「きせ殿が？　ふん、そうか」

と、安原は何気ないように言ったが、けげんそうでもあり、うれしそうでもあった。

「久しぶりに行ってみるかな」

太助は、あとは待っていればいいのだった。宙を飛ぶようにして、安原は大膳宅に出向くに違いなかった。とみの平癒祈願という理由なら、大っぴらに屋敷を出られる。

安原は非番の日に、ゆっくり大膳宅を訪れるだろう。酒食の用意があり、きせが世話を焼くことになる。以前、家には大膳夫婦と長男夫婦、孫一人が同居していたが、孫が三人になり、手狭になったので、長男たちは別棟をこしらえ、それに移っている。大膳の妻はそちらにいることのほうが多く、安原の相手をするのはまず大膳ときせだけになる。大膳は適当な時に座を外し、別棟に行っていればいいだろう。

もし安原が酔い倒れれば、介抱するのはきせしかいない。

大膳がきせを説得したか、それとも知らぬ振りでお膳立だけをするつもりか、その辺のことは太助の知る限りではないが、大膳のことだから、ソツはあるまいと安心していた。

安原が大膳宅を訪れた二日後に、きせは家に帰ってきた。きせの様子は、ふだんと少しも変らなかったが、太助にはなにかピンとくるものがあった。どこがどうと指摘はできないが、大ざっぱに言えば、きせの女っぷりが上り、なにか湯上りのように冴えて見えるし、腰から裾にかけて、暖かく透明な霧のようなものが感じられる。

太助が聞きたいことを口に出しかねていると、きせのほうから、

「お望みの通りになりました」
と、落着いた口調で言い、うわの空のように漠然とした表情をした。ほんの少し笑いを含んでいて、その笑いがどういう意味のものか、太助はつかむことができなかった。
安原が好きになり、交わった時のことを思い返しているのかと、ふと胸を突かれたりもした。まさか、そんなことのあるわけはない。
「よくやってくれた。済まぬ」
と、太助は言い、自分でも思いがけなく、きせの手を取って引寄せ、抱きしめた。
「それでこそ女房だ。おれの心は変らんぞ。いいか、変らんぞ。一層お前がいとしいぞ」
と熱っぽく言いながら、こうしてなだめておけば、万事安心なのだと、太助は思っていた。

四

「内々でご相談が」
と、太助は思い詰めた顔で安原に言った。夜もかなり更けた時刻の、突然の訪問である。
太助の顔色は青ざめているはずであった。
「わかった。まあ上れ。こっちへこい」
と、安原は声をひそめ、やたらにまばたきをしながら言った。太助が何しにきたか、当然わかっている。
「きせ殿のことだな。言訳の仕様もない。みなおれが悪い」

安原は太助の先回りをしてそう言い、改まって頭を下げた。
「どうにも、おのれが抑えられなかったのだ。どうか許してくれ。どんな償いでもする」
「椎名が激昂しております」
「椎名殿にも詫びを言って、相当に償う。お前から取りなしてくれぬか。お前への償いだが、さきごろの約束、これは天地神明にかけて必ず守る。近いうちに御沙汰があろう」
「はあ、実現の暁には、水に流しましても……」
そういう問答の間中、太助がふところに小柄でも忍ばせていて、それを抜き出して飛びかかってきはせぬかとでも、安原は恐れていたらしく、落着きのないおびえた目の色をしていた。これで昇進は間違いあるまいと、太助は長大息したいところだった。
太助が馬回りの末席に加えられたのは、思ったより早く、安原との話合いがあってからひと月後であった。禄は五十石になった。七十石には足りないが、いずれそのうちに加増される見込がある。
太助は示談金のようなものはもらわなかったが、大膳は五十両ほどを手にしたようだ。そのほかの便宜供与についても、確約したという。
「瓜生、もう一度でいいから、きせ殿に会わせてくれぬか。おれはこのままでは、どうしてもきせ殿をあきらめられぬ。お前も男なら、おれの胸の内の苦しさがわかるだろう。もう一度会えたら、思い切る。どうか頼む」
と、ある機会に安原が太助に訴えた。そうくるだろうと、太助は予期していた。きせさえ

承知すれば、さらに安原に恩を売ることができる。

「安原殿は、おれの出世の手づるだ。この手づるを是が非でも握っていなければならん。もう一度だけ会ってやってくれ。最後の頼みだ、きせ」

と、太助は懇願した。

「安原様がそうおっしゃるのですか」

と、きせは聞いた。実はそうだと答えると、きせはチラと妙な笑いを見せて、

「どうせ一度、安原様に許した体です。あなたのご出世のためなら、仕方がありますまい」

と言った。二度が三度になり、度重なることを、この時太助は予見していたが、あるいはきせも、そうであったかもしれない。

安原ときせが忍び会う場所は、やはり大膳宅であった。月に数度、太助は安原の意を受けてきせに伝え、大膳宅に行かせた。

安原はそれでも物足りなくなったらしく、妻のとみの看病にと、きせを屋敷に呼び寄せるようになった。とみは病気が重くなっており、看護は確かに必要だったが、安原の目的はきせを抱くことである。とみはほとんど夢うつつの状態になっているので、密会を悟られる恐れがない。

一年過ぎ、とみが息を引取った。あまり間を置かずに、太助の父も死んだ。太助は七十石になり、それまでよりやや広い家屋敷に移転した。椎名大膳は首尾よく社殿を改築した。

そして安原ときせは相変らず会っていた。

とみの一周忌が済んで間もなく、安原の屋敷を訪れた太助に、

「瓜生、きせをおれに譲ってくれ。妻にする」

と、安原がおそろしく真剣な面持ちで言った。

「滅相もないことを。きせを離縁する気など、毛頭ありませぬ」

太助は取りあえず断わったが、安原がそこまで言い出すとは思っていなかった。

「そうでもあろうが」

「できることでもございません」

しかし安原はひるまず、これはとみの遺言でもあるのだと、また太助を驚かせた。とみはすべてを知っていて、お気に入りのきせ殿を後添いに、と言い残したそうだ。

「手段がある。聞いてくれ」

安原が考えている手段とは、勘定方である太助に、藩金横領の疑いを着せることであった。諸商人が納めた冥加金について、現金と帳面記入の額とが合わず、百両近く穴が空いている。それを掛りの太助の横領と極めつけ、太助の家禄を没収して、藩外に放逐する。

二年後、記入の誤りで食い違いを生じたことがわかり、太助の冤罪が晴れて、帰参がかなう、という段取りになる。記入の食い違いについての責任の所在は、不明である。安原はどうにでも数字を操ることのできる立場にある。

太助は放逐されるに当って、きせを離縁し、きせは椎名の家に戻るが、椎名も親類としてとがめを受け、すべての収入を押えられるので、にわかに貧窮になる。そこで安原が救いの

手を差し伸べ、きせをめとり、松太郎を引取る。

「おれに任せろ。お前が迎え入れられれば、罪滅ぼしで処遇がまたよくなるのは必定だ」

と、安原は言った。遠からず安原は、番方の組頭に登用されるはずで、帰参した太助を組下の番士にするつもりだ。番士となれば、家中でも中堅である。加増があり、大手を振って歩ける身分になる。太助の願いが成就するのだ。

「無理にとは、おれも言い兼ねる。どうしてもきせを手放さぬ、それほどほれている、と言うのなら、きせを妻にするのをあきらめるほかはあるまいが、よく考えてくれ。晴れて帰参し、出世すれば、嫁にやりたい、妻になりたいと望む者がぞろぞろ出る。中にはきせよりいい女がいるだろう。きせにあくまでもしがみ付くのは、愚策ではないかな。お前は腹を立てるかもしれないが、現在きせは半分はおれのものになっているではないか。その有り様を、おれが変えるつもりはないのだ」

安原はさらに、自分のほうが、太助より強く、きせを恋いこがれているかもしれないと言った。

太助はしばらく考えさせてくれと言って帰宅した。そしてひねり出した結論は、きせをあきらめ、出世を選ぶということであった。

きせは惜しいが、宿願である出世には替えられない。きせは確かに得難い宝だが、もう十分に賞玩している。そもそもきせは、太助が熱愛してもらった妻ではなかった。安原の思い者になっているということもあり、この辺が見切り時だろう。女に未練を残し、出世を棒に

振るのは、おれらしくないし、ばかげている。恋情というものは、いずれは醒めてしまうのだ。

安原の案については、きせには一言も洩らさなかった。

筋書通りに事が運んだ。太助は無事、藩金横領者として放逐された。切腹という罪一等を減ぜられてのことである。

太助は領外の山近い寒村で遠縁の者が百姓をしているところへ頼って行き、閉じこもるようにしてひっそり暮した。暮しに必要な金は、安原が持たせてくれたので、働く必要はなかった。

だが、その二年はおそろしく辛かった。安原が裏切るのではないかという不安にさいなまれ、いまは公然と安原の思い者になっているのに違いないきせの事を思いもしたが、きせへの思慕はそれほど強いものではなくなったようだった。村の器量よしの女が、けっこうそのほうの渇をいやしてくれるのだ。

考えてみると、安原とあの様になってからのきせは、以前ほど太助を熱中させてくれなかった。きせが変ったのではない。そろそろ飽きていたのだと思えば、それも納得が行く。

ようやく二年経ち、安原は裏切らなかった。太助は晴れがましく国へ迎え入れられ、主君に目通りを許され、親しく言葉を掛けられた。安原は番方の組頭になり、太助はその組下に入ることを命ぜられ、禄高は百石に上げられることになった。

安原は祝宴を開いてくれ、さらにとがめの処分を解かれた椎名大膳も一席を設けてくれた。太助ひとりの住いに、元の同僚や上役が、ぞくぞくと祝いに訪れた。ただ、きせの姿だけは見ることができない。

家臣の間で、きせのことが話題になっていた。だが悪評ではない。太助が帰参したところで、安原の正妻におさまっているきせが、いまさら安原に離縁を求めて、太助の許に戻るべきではないという意見が一般であった。

太助はきせをあきらめ切ったつもりでいたが、それにしても一度、きせの無事な姿を見たいと思った。松太郎にも会いたい。

城内で安原をつかまえ、そのことを言うと、安原は難かしい顔をし、

「それは会わぬがよかろう。おぬしに厭がらせするつもりはないが、会えばみれんが出るぞ。きせも松太郎も健やかにしているから安心せい」

と言った。

「みれんはございません。とうの昔にあきらめております。ただ」

「いや、会わぬがいい。それがおぬしのためだ」

と、安原はきびしく断わった。その時太助は軽い目まいを起した。

その日、太助が安原の屋敷に行ったのは、ちょっとした用務のためであった。きせや松太郎に会おうとしたのではなかったが、ちょうど塀外を歩いていると、邸内で子供たちの声と、

それに混って聞き覚えのある声がした。きせの声であった。

初秋の午後で、空はよく晴れ、微風がさわやかだった。きせの声を聞いて、太助は非常に楽しく、軽い気持になっていた。望みは遂に達せられたのだから、早速きせと松太郎を連れ帰らなければなるまい。きせは屋敷にとどまって、何をしているのか。きせが安原に心を寄せてしまってはまずい。連れ戻さねばならぬ。

太助は正面のくぐり戸から入ったが、玄関には行かず、声のした庭のほうへ回った。勝手はよく知っている。

陽の降りそそぐ庭で、きせが三人の子供を遊ばせていた。その中に松太郎もいる。

きせは最初、近付いてきたのが家の若党か小者だと思ったようで、太助に目を向けなかった。きせは身なりが以前よりよくなっているほかは、それほど変っていない。

呼ぶとはじめてきせは顔を太助に向け、

「あなた」

と言って呆然となった。

「何をぐずぐずしている。帰るぞ。松太郎もこい」

太助のきせを見る目が血走っていた。

「奥様のお工合はどうだ？　あいさつをしてこい。松太郎、こっちへこぬか」

と、太助が呼びかけると、松太郎はおびえ、きせにしがみついた。

「あなた」

ともう一度きせが言った。驚きとあわれみと、そして一抹の冷笑かもしれない陰が、きせの表情に見える。

「さあ、早くしないか。家では父上がお独りだぞ」

太助はきせの手を取ろうとし、きせは身を引いた。娘二人が金切り声を上げ、家の者が飛んできた。侍一人、若党、小者で、侍は抜刀した。

「なにをなさる。理不尽な。わたくしは勘定方の者で、手伝いに参った妻を迎えにきたのだ。きせを閉じこめてどうするつもりだ」

全く理不尽な、と怒りながら、太助は刀を抜いた。

きせは若党と小者に護られている。太助はきせを取り戻すために前進した。きせがなにか叫んだが、太助の耳には入らなかった。

「きせ、どうしたことだ。お前は……」

と言いかけた時に、侍が斬りかけた。太助は一旦太刀をかわし、こいつはなぜおれを斬ろうとするのかといぶかりながら、防ぐために刀を横に払い、その切先が侍の肩先を裂いた。侍が逆上し、真向うから振りおろした刀が、太助の脳天を裂いた。

何がどうしたのか、さっぱりわからない、というのが、太助の最後の意識である。目は失神して倒れかかったきせの姿を、もう映していなかった。

渡し場

一

「いい日和だのう。眠うなる」
と、渡し船の客が言った。船頭は黙って櫓を漕ぎ続けている。
「澄んだ川水じゃ。思うたより流れが強い」
と、客がまたつぶやくように言った。これにも船頭は答えない。口の重い男である。だが、陽焼けした顔は、おだやかな表情を浮かべている。
山里の川渡し場である。川幅は狭く、声を高めずに対岸の者と話ができるほどだが、谷間の川なので、川の真中は人の背丈くらいの深さになっている。元気な子供や若者はともかく、歩いて渡るのはちょっとむずかしい。
川の両側には土地が開け、田畑があり、藁葺きの百姓家が点在する。しかしその背後はすべて山の連なりである。もっとも、それほど高い山なみではない。
どこから飛んできたのか、桜の花びらが、雪片のように船の中に降ってきた。山は若緑に装われている。
「のどかだのう、船頭。戦さのない世の中はいいのう。そう思わぬか、船頭」
と、客はこんどははっきり、船頭に呼びかけた。
「は、ああ。その通りで」
船頭は困ったような答え方をした。

「そうか。この辺りは戦さもなかったか」
客はそう言って笑った。
「それなら、戦さのない世、などと言うてもわからぬな。ふん、昔も今も、この先も、ここらはこのようにのどかか」
ふなばたに戯れる水の音、櫓のきしり。鳥の声。時折り渡る風の音。ほかはただ底なしの静けさと言っていい。
旅姿の客は武士である。中年という年頃で、恰幅はいい。脱した両刀を胸の前に抱き、船頭のつい足許にうずくまっていた。主命を帯びての旅かもしれない。
対岸はもうすぐだ。川幅が狭いとは言え、流れに逆らいながら漕ぐので、乗ればすぐ着くというわけではない。
「船頭、おぬしの年はよく分らぬな。何歳じゃ？」
客が船頭を見上げながら聞いた。聞きながら、客の目が少し驚いたように見開かれた。
「そろそろもう、五十でござります」
と答えながら、船頭は船付場と船の距離を計りながら、櫓の漕ぎ様を加減している。
「いつから、この渡しの船頭を？」
「昔からずっと」
船頭の答えぶりは、やや面倒臭そうだった。
「そうか。要らざる詮索のようじゃが、名はなんと言う」

「藤吉で」
「江戸に住んだことはないか？」
「いいや。ここばかりで」
「女房、子がおろうの」
「女房はあれに」
と、船頭はうしろを向き、指さしたが、指の先に小さな茶店が見える。客がさっき、休んだところだ。
「亭主が船頭、女房は茶店をか。なるほどいい暮しだの。じゃが、さきほどおったのは娘……」
「女房はいま山でな。留守番の娘は村の者でござります」
「子は？」
船頭は首を振った。いないのだ。
「それは寂しいのう」
船が着いた。客はこの武士ひとりである。
「のう、おぬし、八束群兵衛ではないか？」
客はゆっくり立上り、両刀を腰に差しながら、ためらい勝ちにそう聞いた。
船頭は無邪気な驚き様を示したばかりである。それから不機嫌に手を振った。
「とんでもねえ」

「いや許せ。昔のことじゃが、そういう名の男がおっての。浪人の、無法者よ。当時江戸は、そのような者が多かった。八束群兵衛は強いやつであった。なにかの出入りで、一度渡り合うたが、いやはや、命を落すところであった。刀を引っかついで逃げた」
客はなかなか船を降りようとしなかった。
「お客様、着きましたで、降りてくだせえ」
「うん、その声も群兵衛に似ているが、やはり人違いか。群兵衛はいつしか消えてしもうたが、なんとなくなつかしいやつじゃ。喧嘩で死んだか、どこぞに生き長らえているか。じゃが、山里の渡しの船頭ということはあるまい。許せよ」
客はようやく船を降りた。
三人ばかりの客が船を待っていた。母と娘らしい二人連れと、行脚僧である。親子はどこか祝いの席にでも行くのか、晴れがましい身なりをしている。行脚僧はほこりまみれで、足を引きずっていた。
船頭はすぐ船を出した。旅の武士は岸に立って、船が離れて行くのをしばらく見送っていたが、笠をかぶり、背を向けて歩きだした。陽はやや斜めになり、川面の陰になったところが広がりはじめている。
かよは平たい岩の上に坐り、魚を釣っていた。岩は渓流に突き出した形になっており、そこからなら、左右、前方、手前と自由に竿を出すことができる。

かなり急な山腹を縫い下ってきた渓流は、やがて渡し船の川に注ぐことになる。

青い淀みがあると思えば、水が岩間を噛んで白く泡立つところもある。ほんのせせらぎに過ぎないが、水面は変化が多く、鮎、イワナ、鯉、フナの類が住んでいる。

かよは竿を無造作に振る。糸を垂れるのはどこでも構わぬというふうだ。ほんの少し待つと当りがくるようで、また無造作に竿を上げる。すると糸の先に細長い銀鱗がひらめいているのだ。

いくらでも釣れるらしい、それなら自分も、とお光が竿を借り、釣ってみたことがあるが、二倍の暇をかけて、かよの半分も釣れなかった。

かよが気の毒そうな笑顔でお光に、やはり釣れる場所があるということ、合わせがうまくゆかないと逃がすということを、ボソボソとした口調で教えた。お光は茶店の番をしているという娘である。

かよは釣るのを止めた。夕餉の膳には、これまでに釣り上げた分で足りる。魚は串に刺して炉端で焼いて食べる。

渓流は枝を差し交す樹林の中にあり、昼間でも薄暗いが、空がそろそろ暮れてきたので、暗さが一層増した。

かよは竿とビクを手に、平たい岩を身軽に伝い降りた。野良着姿は男のようだが、全体に華奢で小柄であるし、頬かぶりの下の顔は、おとなしく整っている。ただ、亭主の藤吉と同様、陽焼けで肌は黒い。

かよの持竿は三間以上もあり、強く振ればいまにも折れそうなのだが、上手に使うせいか、折れない。腰のしっかりした、質のいい竹であろう。

細道をくだると、ほどなく茶店の裏手に出る。ささやかな畑が作ってあり、柿の木、みかんの木もある。

裏口から店の表まで、土間が通っているので見透かされる。藤吉が渡しを止め、もやい綱を杭に結びつけているのが見えた。一面に夕靄である。

茶店の客ももうあるまい。店の上り框に腰をおろしたかよへ、お光が熱い番茶をいれてきた。

「伊助はおそいの」

茶を一口すすってから、かよは話しかけた。お光はうなずくともなくうなずいただけで、川べりの藤吉のほうへ、

「おじさん、お茶をいれたで」

と呼びかけた。それに応じて、藤吉がゆっくり戻ってくる。大柄でよく均整のとれた体軀をしている。かよと並べば、一尺は違うだろう。

二人がどこでどうしてめぐり合い、夫婦になったのかと、お光はしきりに聞きたがるのだが、二人ともはかばかしい返事をしてくれないのだ。この上なく似合いのようでもあるし、そうでないような気もする。ただ、現在は水も洩らさぬ仲であることは確かで、お互いに口数は少ないが、通じ合うものは、口数以上であるに違いなかった。

行く行く、伊助とそうなれるかどうか。

藤吉が入ってきて、腰をおろした。

「骨折りであったの」

と、かよが小声で藤吉をねぎらった。

「なに、きょうは客が少のうて、軽かったわ。わしをだれぞと人違いをしたお侍がおった」

藤吉が口辺にわずかな笑みを浮かべて、そう言った。かよは黙ったまま、藤吉の顔を見守った。

「じきに人違いとわかったがの。空似じゃ」

かよはうなずき、お光に、

「早う帰るがいい。夜になるぞ。魚でも分けてやろうかの」

と聞いた。

「いいえ。そんなら……」

きょうは伊助に会えず、気を落しているに違いないが、お光はことさら元気そうに、別れを告げた。家は遠くではない。

お光は十六で、器量よしである。そろそろ村の若者たちに目を付けられ始めているが、お光の心は伊助のものである。

その伊助は朝から、川向うのかなり遠くの百姓家に手伝いに行っている。帰りがおそくなっても、川向うから提灯を振れば、藤吉が迎えの船を出してやるのだが、今夜は帰らないかもしれない。

伊助はちょうど一年前から、藤吉夫婦の厄介になっているが、茶店の前で行き倒れたのを、店に入れて介抱してやったのが縁で、その後ずるずると居付いた。

年は十九という。色白で、年の割に体が出来ていなかった。わけがあって家出をしてきた、二度と家に帰る気はないので、なんでもして働くから置いてくれというのが、伊助の頼みだった。

お光と知合い、たちまち恋仲になったが、お光には親の目があり、伊助には藤吉夫婦への遠慮があって、なかなか思うに任せないようだ。

藤吉夫婦は別段伊助の身の上を知ろうとしない。置いてやるのが迷惑そうでもない。と言って、この上どうしてやろうという気もないようだ。

お光との仲については、静かに見守っているだけである。

二

夜に入ると急に冷えるので、炉端はありがたい。鉄串に刺して並べた魚は香ばしく焼け、まぶした塩が白く浮き出している。かよはよく焼けたのを取って藤吉に渡し、濁り酒をついでやる。酒は自製である。

二人の姿は薪の赤い炎に照り映えている。かよは化粧など構いつけないから、昼間は藤吉と同年ほどに見えるが、炎の明りの中では、ずっと若く見える。

「伊助も力が出てきた」
と、かよが言った。藤吉は魚を頬張りながら、ただうなずく。
「あの時分は鍬を持たせても、すぐ脂汗を流して」
「青うなってへたりこんでの」
藤吉が珍しく、声を出して笑った。だが伊助についての話は、それ以上には進まない。
酒は湯呑に一杯だけで、あとは飯にする。飯は黒いが米である。酒をかよも飲むが、湯呑半量であった。
外は少し風が出てきた。
「人違いと言えば」
かよはふっと、さっきの話をむし返した。
「どこぞで人違いの騒ぎがあったと」
店で休んだ旅人に聞いたことを、かよはつかえつかえ、ゆっくり話した。口下手である。
その旅人はある街道で若い男と道連れになった。子供から抜け切っていないような、ういういしい美男で、身なりはよかったが、いかにも旅慣れず、疲れ切っているので、つい面倒を見る形になったのだが、この男が、うしろから駆け寄ってきた三人連れにかたき呼ばわりをされ、囲まれてしまった。
旅人が胆をつぶし、田圃の中に逃げて見守っていると、三人連れは刀を抜いた。三人のうち、一人は女だったが、男二人と同様の服装をしていた。

追手はいずれも逆上気味で、口々に男へなにかどなりつけているのだが、旅人は聞き取ることができなかった。
若い男のほうは茫然自失で、言葉も出ず、うつろな目をして棒立ちであった。
人違いだとわかったらしいのは、若い男に斬りかけようとする女の腕を、連れの男が抑えたからである。
その後はあっけなかった。人違いを確かめた三人は、人心地もないような若い男に、ろくろく詫びもせず、急ぎ足で先へ行ってしまった。
「やさ男であったそうじゃ。京の大きな商人のせがれで、親に勘当を受けたと。伊助もそんな家のせがれであろうか」
寝そべって聞いていた藤吉が、
「知らぬわい。空似が多いの」
と、つぶやくように言った。
かよが微笑みを見せながら、
「船の客は、お前様を群兵衛と言いはせなんだか」
と聞いた。
「言わぬ。さて、かよ」
藤吉は大儀そうに起上った。
「なぐさみをするか」

天井の梁へ、糸が渡してある。それは一方に傾斜していて、その糸に滑車付きの的を下げると、的はかなりの速さで低いほうへ移動する。

二人の手には玩具の弓矢があり、九尺の距離で、径一寸もない、動く的を射当てるのだ。的を下げる役、射る役を交互にする。双方外れがなければ、何度でも繰り返すことになる。明るい昼間でもむずかしいが、夜は光の乏しい行灯と、炉の火が頼りなのだ。

かよが十度目に射損ねて負けた。

相変らず二人の語らいは少ないが、どちらも楽しみ和んだ顔になっている。

なぐさみはもう一つある。小さな人形を的に、釘を投げて当てるのだが、その釘が的に当たる前に、相手が自分の釘を投げ、妨害する。間一髪で先行の釘を打ち払うわけだ。

釘は三寸くらいのものを、平たく打ちのべてあり、さながら玩具の短剣である。

この勝負は動く的当てよりもむずかしい。この夜は藤吉のほうがやや勝った。

「寝るか」

藤吉はあくびをしながら言った。

小雨の日である。こんな日は山里のどこにも、まず人影がない。旅人の姿も絶える。

だが藤吉は客を一人乗せていた。深編笠をかぶり、合羽にくるまり、船の中程に坐っている客は、終始藤吉に背を向けて、無言だったが、どうかした折りに、チラと藤吉へ目を走らせるようだった。

蓑と笠の藤吉は、客を気にしていない。いつもの通り、正確に櫓を漕いでいるが、やや川の水嵩が増している分だけ、余分の力を使っている。

一度、船がギクッと揺れたことがあった。岩や浅瀬に触れるはずはないので、漕ぎ様なのだろうが、客はあわてて船べりに両手を突き、体を支えた。

この時も客は物を言わず、藤吉に顔を向けなかった。岸に着くと、客は背を前屈みにし、急ぎ足で去ったが、かなり先へ行ってから振り返り、船を漕ぎ戻そうとしている藤吉の後姿をジッと見ていた。

かよは山へ行かず、畑へも行かず、店の中にいた。雨の日はなにもかも休みである。あくせくすることはない。家内の仕事と言っても、ぜひせねば、というものはない。

かよはさっきから、一人の客を渡す藤吉の船を、見るともなく見ていた。船が揺れた時、ちょっと小首を傾けたが、それだけである。

また客が来たら、こんどは藤吉に代ってやらねばなるまい。かよもよく船を漕ぐのだ。そのうち、伊助に船の扱い様を教えてやろうと思っている。

その伊助は、骨休めで奥に寝ている。このところ、方々に頼まれて、力仕事の手伝いに行き、重宝されているのだ。人柄が優しく素直で、女房たちに好かれる。だが、見違えるほどたくましくはなったものの、まだ本当の鍛えが足りず、なにより気が小さすぎる。お光にさえタジタジと押されている始末だ。

藤吉が戻ってくる。昼支度にかからねばなるまい。そこへ、お光がなにかあわてた様子で、小走りに店へ入ってきた。顔色が普通でない。

「伊助さんは？」

「よう眠っているが、どうしたのじゃ」

「追手……」

早口で言うのがよくわからない。落着かせて聞き出したところでは、三人の妙な武芸者が、伊助を追ってくるというのだ。

「武芸者」

と、かよはつぶやいた。今時、耳慣れぬ言葉になっているが、いつぞやの客の話に出た、あれらしい、一人が女で、二人ともどこか当り前でないところがある。回り回って、やってきたのか。お光があちこちで耳にして知ったのは、彼等が追っている男の特徴が、伊助にピッタリだということである。

「弟の仇じゃから、討ち果すと」

「仇討？　三人はきょうだいかの」

「さあ」

お光は急にいら立った。

「伊助さん、逃げねば。いまにもやってきそうな……隣り村に、もう来ておるとも聞いた」

藤吉が入ってきた。かよは手短かに、伊助の追手のことを告げた。

「ふうん。どうしようの」

と、藤吉にあわてる様子はない。

「わたしがする。見ていなされよ」

と言ってかよは面白そうに笑った。

「そんな、のんきな」

お光は腹を立て、顔を真赤にしている。

「任せなされ。お前は伊助を起すのじゃ」

それから半刻（一時間）ばかり経った。見張りに出ていたお光が戻ってきて、三人がくると知らせた。

かよが伊助を船に乗せるのと、三人が渡し場へ駆け寄ってくるのが、同時だった。かよは船を出した。

伊助はさきほどからの震えが、まだ止っていなかった。小さく、丸くなり、頭をかかえ込んでいる。

三人は口々に怒鳴りだした。尋常に勝負をしろ、卑怯者、などと言い、かよには船を返せと命じたが、もちろんかよは構っていない。

「ここに立っておればよい。逃げることはないでの」

伊助を向う岸におろしてから、かよが言った。

「おばさん、どうするのじゃ」

「まあ見ていなされ。なんのことはない。ところで伊助は、駆け続けに駆けたことがあるか？」

「な、なにを……それはないが、命のためなら」

「そうか」

とうなずいただけで、かよは船を返し始めた。伊助はただ操り人形で、心細げに立っているばかりだ。

三

三人の「武芸者」の目が一様に血走り、釣り上っている。かよが船を戻し、岸に上ると、最も年若に見える男が、いきなりかよに飛びかかり、首をかかえ込むと、脇差を抜いてかよの喉元に擬した。かよはされるままになっている。

「女、伊助を逃がしたな」

と、その男が言った。

「逃がしはせぬ。伊助はあれにおるわ。お前様たちが伊助を追うているとは知らなんだでの。追いなさるのは勝手じゃ。船を渡してあげようほどに、乗りなされ」

かよはごくゆっくり、そう言った。

「伊助は討ち果さねばならぬ。かわいい弟を斬って立ちのいたやつじゃ。伊助ごときに斬られる弟ではなかったが、欺し討ち同様にされて果てた。それが口惜しい」

男装の女は姉であろうか。歯噛みをせんばかりにして、そう言う。

「うちはの、武芸の家じゃ。仇は日本国中、隅々まで探しても討つ。伊助をかばおうとすれば、命はないぞ。船を出せ」

と、最年長らしい男が言った。

三人が乗り、かよは静かに漕ぎ出した。対岸に伊助が立っている。かよに指図をされたまま、動きもならず、膝頭はまだ震えているに違いなかった。

かよが妙な動きをせぬようにと、女が刀を抜き、かよの側にいる。

川の中程まできた。その辺が深みである。

船はわずかに横揺れを始めた。揺れはかよが両足を使って与えているのだが、三人は気付かない。

揺れがひどくなった時は、もうおそかった。女が奇声を上げて、かよに斬りかけたが、その体はもう宙に浮いた工合で、頭から川の中へ落ちた。

横揺れはいよいよひどい。残る二人も弾き飛ばされた。客のなくなった船を向う岸に着けると、

「乗るのじゃ。帰ろう」

と、かよが言った。伊助は口も利けず、流れて行く三人を見ていた。三人とも溺れ死んでくれれば助かるが、そうもゆかないだろう。

「帰ると言うて、おばさん」

「逃げるあてもあるまいがの。ほう、一人は溺れたか」
頭が一つ、どんどん遠くへ流れて行っている。深みから脱する動きがなく、これはやはり溺死に終るだろう。ただ、あとの二人は、どうやら脇に這い出ることができたようだ。
「これからどうなる」
と、船の中で伊助が聞いた。
「二人を見に行くのじゃ。追うてくるであろうから、逃げる。駆ける覚悟をしなされ」
かよはそれだけしか言わなかった。
こちらの岸に戻り、川原におりて下流へ歩いて行くと、二人の男がようやく川の中で立ち上り、岸へ寄ろうとしているところだ。
かよと伊助がそれを見物している。流れてしまったのは女であった。
「執念の深いことよの」
と、かよがつぶやいた。
二人の男は目を見交すと、水を蹴立てて駆け足になった。一人は刀を失なっていない。一人は脇差を残し、刀は落としたようだ。どちらも疲労の様子を見せないのは、健気であった。
「さて、よかろう。山に入るぞ。あとに続きなされ」
と、かよが言い、歩きだしたが、追手との距離を見計らい、小走りになった。
「おばさん、もっと早う」
「いや、引きつけるのじゃ。怖いか」

かよは笑いながら、伊助を振り返った。伊助の引きつった顔には、恐怖と驚きの表情がある。
追手は健脚で、懸命に駆け寄ってくる。かよは軽い足で、なんのこともないように先へ行くのだが、伊助は全力で続かなければならない。
山に入り、登りが次第に急になった。道が絶え、足場が悪く、茂みや樹木が邪魔をする。雨のため、足は滑る。伊助はあえぎだした。追手も少しおくれた。かよは走りを止め、待ってやっている。
その追い駆けっこは、どこまでも続いた。伊助はへたばり、かよがあとに回り、伊助の背を押してやる始末になった。
二人の追手が遂にくずおれたのは、山の尾根近くである。精も根も尽き果て、蛙がつぶれたように倒れ、気を失ってしまった。
これは伊助も同じである。気は失わないが、苦しさにのたうち回る。
かよだけは息が切れていない。三人の男が正気付くのを待ってから、
「お前様らは、わたしらに殺されているはずじゃが、命を助けて進ぜる。その代りには、もう伊助を追いなさるな」
と、二人の男に言った。返事はなかったが、すっかり牙を抜かれ、仇を討つ気をなくしたことが察しられる。
かよは追手の刀と脇差が落ちているのを拾い上げた。

「これは川に沈める。刃物はよくないで。帰ろう、伊助。もう歩かれるであろう」
かよはまだ倒れ伏している追手に目もやらず、山をくだり始めた。
「おばさん、待ってくれ。おばさんの足は、どうしてそのように軽うて早いのじゃ」
「慣れればのう」
とだけ、かよは答えた。

真夏になった。山の濃緑、炎天の青さが美しい。暑さで道中が難儀なので、渡しに乗る旅人の数はめっきり減っている。
駈落者が船に乗ろうとしたところへ、追手が来て、一騒ぎあったが、駈落者が連れ戻されたあと、行商人らしい二人の客を向う岸へ渡し、帰ってくると、どこにかくれていたものか、侍五人が四方から藤吉に駆け寄り、囲んだ。
「八束群兵衛、覚えがあろう。多くは言わぬ。朋友の仇を討つ」
と、中の一人が声を掛けた。藤吉に狼狽は全くない。
「昔のことじゃ。いまは見る通りの、渡しの船頭で生き長らえておる。船頭を斬ってどうなさる。助けてくれぬか」
と、藤吉は沈んだ声で言ったが、聞いてくれそうにない。気が高ぶる一方のようだった。
「尋常の勝負をせい」
と、だれかが叫んだ。

「刀を持たぬ。代りのものならあるが、取りに戻らねばならぬ。家はあの茶屋じゃ」
店ではかよが様子を見ていて、
「来たの」
とつぶやいた。あの人違いをしたという男が、おそらく江戸であろう、帰ってだれかに伝え、その者が確かめにやってきた。雨の日に乗った客がそれだ。この客は船の中で、抜打ちに藤吉を斬ろうとしたが、藤吉はさりげなく防いだ。船の動きを瞬間、止めたのである。微かだが鋭い衝撃で、人の動きを確実に封じる。その場合の櫓の使い様は、かよにもわからないが、いずれは多勢でやってくると察していた。
伊助とお光は連れだって山に入っている。山菜採り、枯枝集めが名目だが、実は何をしているかわかったものではない。ちかごろは伊助もすっかり落着き、土地の者になろうとしているようだ。昔なにがあったか、それはどうでもいいことだ。かよにもいろいろあった。しかし、とうの昔の夢にすぎない。
藤吉が家に入ってきた。侍たちは入らず、表、裏に分れて見張っている。
藤吉は天井に吊ってある棒をおろした。長さ六尺余、径一寸五分ほどの、なんの変哲もないただの棒である。永らく使わないので、ほこりをかぶっていた。
「助太刀をしましょう」
と、かよが言った。藤吉はどうでもいいという顔だ。

「汗の出が少のうて済む」
かよがきて言った。
藤吉は侍たちに囲まれ、また出て行った。
戦いが始まった。かよは店先から見ている。激しい斬合いは起らず、むしろ間延びしているのは、攻め手が藤吉を警戒するあまりと、藤吉が動かないためである。
かよは自分の用意にかかった。
ようやく戦いが目まぐるしくなってきていた。藤吉の戦いぶりは変っていて、棒を相手に投げ、素手になってしまう。そこに付け入ればいいはずだが、それができない。藤吉は悠々と、また棒を拾い上げる。
そのようにして棒を当てられ、二人が地面に倒れた。おそらく当った場所の骨を折られている。
かよはあの長い竹竿を持って戦場へ出てきた。これはもちろん武器にはならないが、有効な妨害になる。
攻め手の残る三人は必死になり、急調子に斬りかかりだした。それぞれ、腕に覚えはあるはずで、動きもよくなっている。
かよが竿を振りだした。鉤は十本付けてある。これが攻め手を襲うと、十本の鉤を引っかけられ、皮や肉をむしられ、倒されもするのだ。かよの竿振りを止めさせようにも、彼等の手の届かない後方にいるのだ。

鉤を避けてのけぞったところへ、藤吉の棒が飛んでくる。
残るのが一人になった。これはよほど出来る男らしく、藤吉の危機が一度だけあった。それは思わず窪みに足を入れて、一瞬体が崩れたからだが、占めたと突き入ろうとするのへ、キラリと光るものが飛んできて、その男の右目に突き立った。いつの間にか近付いていたかよが投げたもので、例の玩具のような、平たい釘である。うめき声を上げ、男は地上に伏した。
藤吉とかよは並んで立った。
「体がなまった。おぬしは変らぬの」
と、藤吉が言った。
「いえ、体が重うなっている。お互い、年じゃな」
と、かよは答えた。
「刀を川に捨てなされ。さすればおとなしく帰るであろう。わたしは魚を採りに行く」
「もうおっつけ暮れるぞ」
「なに、すぐじゃ」
渓流の、平たい岩の上とはまた違った場所である。かよが手にしているのは長い竿ではなく、二尺ほどの竹の先に細い鉄の棒を取りつけたもので、先端が尖っている。泳ぎ寄る魚を刺して取るのだが、敏捷な動きの魚を一尾も逃さない。

「これでよしか」
と言いながら、かよは獲物のビクをかかえあげて立った。
このような魚の取り方を、藤吉も知らないはずだった。
あたりは暗くなってきた。

酔眼の友

一

彼との初対面は厳冬の夜半、路上のことであった。本所の患家からの戻り道、両国橋を渡って、矢ノ倉の堀沿いの真暗な道にさしかかると、駕籠の先棒がおかしな声を出して、人が死んでいるという。行き倒れでもあろうか。ふつうの者なら、面倒を避けて、知らぬ振りで行き過ぎるところだが、ともかくも私は医者、見過しにはできない。生きているか死んでいるか、まだわかってはいない。

それに、これが縁とでもいうのだろう。道ばたで死んでいるという人間に、私はなんのわけもなく心ひかれてしまったのだ。

私は駕籠を止めさせて降り、刺すような夜風に胴震いをしながら、その人間のそばに行った。

死んでいるとはとんでもない。酔い倒れて大いびきなのだ。提灯の灯にすかし見たところ、年の頃二十七、八の浪人者であった。いかついひげ面で、美男とは言い兼ねるが、どこやら端正で好もしいところもある。

着古した服には綿も入らず、下着はわずか一枚。大の字になり、手足はニョッキリと四方に突き出し、夜霜にさらされていた。

このままだと凍死しよう。すでに体は冷え切っているようだ。だが胸に手を当てると、よほど心の臓の強い男と見え、拍動はゆっくり、しっかりしている。

私は村松町に住む本道の医者で太田養順。尤もらしい名前だが、実は本名堅次郎で、御家人月村伊平の次男だ。二十歳の時、太田宗順の養子に来た。養父宗順は健在で、サジ加減の評判もよい。養子の私は代診だが、ろくすっぽ、医学修業などはしていないのに、見様見真似で、患者の見立て、扱い方も一通りは覚えた。

近頃では犬の患者もふえた。犬医者というのがいるから、それへかかればよさそうなものだが、金持の馬鹿者なぞが見栄を張り、人間相手の医者に口をかけてくる。そのほうの診察、往診は、もっぱら私に任されている。

「なおさんでもよろしい。殺してしまいなさい。そうすれば犬の数が減って人助け、太田はだめだと、犬を見せにくるのも居なくなる」

と、養父はひどいことを言う。その晩行った本所の患者というのも、患者は白黒ぶちの犬であった。

私は酔払いを駕籠に乗せ、自分は歩くことにした。大迷惑だが、仕方がない。ところが、駕籠かきと私とで、男の大きな重い体を抱え上げようと苦労している間に、男はぽっかりと大きな目を見開いた。

「お気がつかれたか。大丈夫か」

と聞いても、男はしばらく返事をせず、真上の夜空を無心に見ていたようだ。闇夜で、凍てついた星屑が散らばっている。

「ここはどこだろうな」

と言う。ろれつがいささか怪しい。酔いよりも、寒気で体がしびれている証拠だ。
「矢ノ倉だよ。あなたはこのまま凍死するところだったぞ」
「そうか」
男はうなずいてニッコリした。
「すこぶるいい気持だった。こんなふうに楽に死ぬのはいいな」
「何をくだらぬ。あなたはまだ歩けはせん。駕籠にお乗りなさい」
「いや、もう大丈夫。歩いて行く。お前さんたちは行ってくれ」
しかし、立ち上りかけて、また横倒しになった。駕籠に乗せるまでが大変だった。
家に着いて駕籠の戸を開けると、男はまたもや大いびきで、正体がなかった。
その晩は暖かくして寝かせた。
「お手前は、命の恩人ということになるな」
と、その翌朝、寝足りた顔の男は、別に礼をのべるでもなく言った。朝飯は遠慮なく、よく食べた。これまでに、路上に酔い倒れて、朝方に目を覚ましたことは、何度もあるそうだ。
「とんでもないことだ。命を粗末にしてはいけませんぞ」
「惜しい命でもないが、医者としてはそう言うだろうな。気をつけましょう。では、これで」
「まあいいではありませんか。お見かけしたところ、忙しそうでもない」
私はなるべく引き留めて、もっと話し合いたかった。どことなく人を引きつける男だ。

名前は、長兵衛とでもしておこう。そう、長井長兵衛。いい名だ。本人がぬけぬけと、そう言う。ずっと浪人暮しで、どこぞへ仕官したいとも思っていない。米沢町の裏長屋に住み、希望者に剣術を教えている。だが、希望者はあまりない。第一、道場というものがない。生計の道としては、むしろ看板書きのほうが繁昌している。その日暮しで、稼いだ分はそっくり、酒になってしまうらしい。
「剣は何流です」
「馬庭念流というものだ」
と言ってから、
「おぬしは」
と聞いた。
「いや、剣術などはろくに……私は医者ですからな」
「医者にくる前さ。おぬしは養子だろう。部屋住みから養子に来たのだろう」
本人の名乗りの通りに呼んでおくと、長兵衛はケロリとした顔でそう言った。なるほど、養父と私は顔の造作がまるで違う。それに、大小を捨てた男は、様子でわかるのだろう。
「おやじの手ほどきで、一刀流を少しやったが、なに、一向モノになっていない。そんなことはもう、忘れてしまった」
「なるほど、それもいいな」
どうして浪人暮しをしているのか、親兄弟のこと、妻のことなど、長兵衛は何も語らぬし、

私も聞きそびれた。

長兵衛はこれを縁に、私と友人付合いをしようなどとは全く考えていないようだ。

「お父上によろしく言ってくれ」

と、あとも見ずに出て行った。飲んだくれで、やもめの浪人が、これからどうするつもりなのだろうと気にかかりながら、私は長兵衛のことを、忘れるともなく忘れた。

次に長兵衛にひょっくり会ったのは、堺町の「いばら木」という茶屋である。大きな店ではなく、まず居酒屋とでも言ったほうがいい。あるじが長患いで、養父がずっと診ていた。それを私が引き継いだのだ。病人に先の見込みはない。病人を診、薬を与えてから、先方が出すままに軽い馳走にあずかり、さて店の間へ出てくると、来た時にはいなかった長兵衛が、入口近い縁台に腰をかけ、悠々とまた黙々と酒を飲んでいた。

あれから二月経ち、梅が終り、桃になろうという頃だ。そそけ立った髪、伸び放題の月代、不精ひげに酒焼けの童顔は、あの時と変っていない。連れが一人あって、利発そうな少年だが、これは煮しめかなんぞを食べている。思わず声をかけようとしたが、その時に店で喧嘩が持ち上った。

客同士で、一方は一目で知れる町奴が二人。他方が武士で、これも二人。仰々しい風体だから、いずれ徒党を組んでいる乱暴者に違いなかった。畳敷きの奥まった席に、隣り合わせにでも居たものだろう。

店の者も、他の客も片隅へ難を避けたり、表へ逃げたりしている。

ののしり合いから、双方刀を抜いた。ところが長兵衛は縁台から動かず、喧嘩のほうを見もせず、前に変らぬ手付きで、盃を傾けている。少年も落着いている。

私は一旦奥へ引込んでから、成行を眺めていたが、喧嘩の連中は、相手よりも長兵衛が平気でそこに腰を据え、知らぬ顔なのが気に障りだしたらしい。喧嘩の前にこいつを、という様子で、双方から一人ずつ長兵衛の前へ出てくると、邪魔だから外へ出ていろ、と難癖をつけだした。長兵衛はチラと苦笑を見せたきりで、相手にならない。二人は次第に猛り立ってきた。

「邪魔はきさまらだろう。喧嘩をするなら、きさまらが表に出て、存分にやれ。だれも止めはせん」

と、長兵衛はうるさそうに言った。それから先のことは実に目まぐるしく、私はただ呆れていただけだが、長兵衛は全く出しぬけに、先手を取って二人に躍りかかり、刀を叩き落し、足蹴にし、手刀で首を打ち、そのほか、応対の隙を与えずに、たちまち土間に這いつくばらせてしまった。

残る二人が、喧嘩も忘れて棒立ちになっているのへ、

「命の惜しくないやつは、かかってこい」

と、長兵衛は時候のあいさつでもするような調子で言い、少年が差し出す刀を受け取ると、ゆっくり抜いた。店の表は、そろそろ人だかりがしている。最初に叩きすえられた二人は、

表へ逃げ出し、姿を消してしまった。こうなれば、男を売っているはずの町奴と武士は引込みもならず、同時にわめき声を上げ、長兵衛に斬りかかった。

私は長兵衛の沈着さと、身のこなしの敏捷さに舌を巻いた。ほとんど動きもしないが二人の太刀先はすべて空を斬る。程よくあしらっておいてから、ビシビシと峯打ちを食わせる。勝負はあっけなかった。斬り殺しこそしないが、長兵衛の峯打ちは容赦がなく、二人は悶絶してしまった。一人などは鼻から血を噴いている。

私はその時になって、ようやく長兵衛に声を掛け、倒れた二人を診た。どちらも、あばら数本が折れているようだが、命に別条はなさそうだ。

「太田養順か」

と、長兵衛は私の名を憶えていた。

「妙なところを見られたなあ」

「いや、みごとな腕前だった。場所柄もわきまえずに暴れるのがいて困るて」

「なに、わきまえているのだ」

「え？」

「あいつらは馴れ合いでな。騒ぎを起して、茶屋から金を出させ、飲み食いも無料にさせようというのだ。よくある手合いだ。だから遠慮なくこらしめた。……どうだ、一杯」

「いただこう」

そんなことか。油断も隙もない世の中だが、長兵衛はそういう連中を一睨みして見抜くのか。おかしな男だと思った。なんにせよ、再会できたのはうれしかった。

「その子はなんだ」

「これは与作と言って、おれの弟子だ。いや、弟子と称してくっついてくるのだ」

長兵衛は柔和な目で与作を見やった。

「長屋の子だよ」

「……先生」

と、その与作が言って、目くばせをした。おかみのお米が、長兵衛に丁重なお辞儀をし、紙に包んだものを与作に手渡した。

「おかげ様で」

「なに。やつらはもう、この店には現われまいよ。馳走に相成ったな。それでは」

長兵衛は徳利に残った酒を、あおむいた口に流し込み、グイグイとうまそうにのどを鳴らすと、立ち上った。

「養順、折あらばまた会おう」

「おいおい」

と止める間もなく、長兵衛はまだ正体のない二人の襟首を両手につかみ、軽々と引きずりながら、店を出て行った。

「先生、あのご浪人をご存知でございますか？」

「うん。前に一度……道に倒れていてね」

と、私はお米に話した。
「まあ、さようで。へんな人ですこと」
「へんと言うことはあるまい。きょうは助かったじゃないか」
「いえね」
と、お米は笑くぼを片頬に浮かべた。
「ありゃあ、こっちから頼んだのですから」
「頼んだ？」
「客の様子がおかしいから、来てもらったんですよ。くっついていた子供が走り使いで、喧嘩を取り鎮めてくれるのが、あの人の商売ですから。でも、きょうの喧嘩が馴れ合いだったとは、ちっとも知りませんでした。すぐわかるんですねえ」
「商売とはおどろいたな。看板書きとか、剣術指南とか言っていたが」
「名が売れていますよ、重宝で。なんてたって、強いんですから。それでも先生、先生のようなお方が、あんな妙ちくりんな人とお付き合いをなさるのは、どうでしょうねえ」
「いけないかね？　私は好きだが」
「そりゃあ、さっぱりして、出したものだけを黙って持って行きますが、わたしはやっぱり怖くて……」

二

私は銘酒一樽を土産に、米沢町の長兵衛の住居をたずねた。「いばら木」の一件から、さらにひと月経っていた。急に長兵衛に会いたくなったのは、身辺に面白くないことが多すぎて、気を腐らせていたためだ。理由とてないが、長兵衛の顔を見れば、胸のつかえがおりそうな気がする。
家主に聞いて、長兵衛の家はすぐわかった。どぶと大小便の臭いが鼻を衝く、九尺二間の貧乏長屋で、私と供の者の姿は異彩を放ったと見え、子供らや女房共が、目引き袖引きしているので、恥かしい思いをした。
「先生は寝ていらあ」
と、鼻汁を垂らした腕白坊主が言った。まだ朝方である。おそく行けば、長兵衛はどこぞへブラリと出て不在かもしれない。
戸締りなどはない。入るとすぐ、長兵衛がこちらへ足を伸ばして寝ているのが見えた。腹の上に何か掛けているだけで、着のみ着のままだ。ふとんを持っているのかどうか。だが、見渡したところ、思いのほかに室内は荒れていず、古ぼけた障子にも紙の破れはないし、畳も汚れていない。ガランとして何もないのが、却ってサッパリしている。
「養順か。どうした」
と、向うから声を掛けられたのには驚いた。いつの間に目覚めていたものだろう。

酒樽は大いに長兵衛を喜ばした。凍死寸前を助けられた時よりも、よほどうれしかったようだ。ひとつ、飲みに行こうと言う。

「何を言うやら。せっかく酒を持ってきたのだ。出かけることもあるまいが。肴なら、だれぞに頼めばよい」

「いや、この酒はおれが楽しみに、独りで飲む。おれがいつも行くところへ案内してやる。懐は当分暖かいぞ、養順」

「喧嘩の扱いで、またせしめたのか」

「聞いたな」

と言ったきりで、気にするふうもなく、長兵衛は早速綿服を着直し、大小を腰に差した。私は着るものを不相応に多く持っているから、いずれ数着を長兵衛に贈ろうと考えた。粗服はいいが、縞目もわからぬほどに汚れて、異臭を放つのでは困る。当人は困らなくても、他人が困るだろう。

居酒屋は、長屋の木戸口を出て一町ほど歩いた、横山町の裏通りにあった。軒先に「酒」とだけ墨書した白張りの丸提灯が下り、入口に縄のれんを垂らしている。

「そいつはおれが書いたのだ」

と、提灯を指さして、長兵衛が言った。

陽射しが狭い土間にさしこんでいる。

「おや先生、もうお出ましかい」

たすき掛けで、掃除でもしていたらしい、四十余りと見えるおやじが、奥から出てきて言った。

「これは、お連れ様が。いらっしゃいまし」

「上るぞ」

と、長兵衛は勝手慣れた様子で、ちびた草履をぬぐ。酒を飲むと言っても、店には飯台も腰掛けもありはしない。客は上り框に腰を掛けて、するめなどを肴に、桝酒を飲むだけのものだ。むろん、女っ気などもない。

「どうした、医者殿。女にでも振られたか」

と、長兵衛は私の顔色を、とっくに読み取っていて、店のすぐ奥の小部屋に落ちついたところで、聞いた。

「いや。艶話なら、いっそ愛嬌なのだが」

愚痴は言わぬほうだが、相手が長兵衛だと、口がほぐれるのだ。医者は裕福で、威張れてよさそうだが、内情をよく知ると、いやなことが多いものだ。患家はつまり得意先だが、医者はその機嫌を損じてはならぬ。よい得意先ほどわがままで、病気を首尾よく治すのはもちろん、幇間に類することまでしなければならぬ。そうせぬと、当節はやりの医者にはなれぬ。養父宗順などは世渡りのうまいほうで、私などはとても、真似ができない。悟ればいいのだと言うが、どうも私は、なまじ武家育ちが邪魔になっているようだ。

「いまのさばっている医者は、みなそういう手合でね。人柄も腕もいいのは、大抵世渡りが

下手で貧乏している」

「それは医者に限るまい。いまさららしいことを言う。そんなことは承知で養子になったのだろう。父上の仰せ通り、悟ることだな。おれはおぬしが、俗事にひたり切った上で、そいつを抜けたところで遊んでいると思っていたがな」

「おれのような凡人に、それができるわけはない。まだ他にもいろいろと、悩みの種はあるのだ」

おやじはさすがに、桝酒は出さないが、大きな土瓶に燗をつけたのを置いて行った。湯呑み茶碗が二つ。肴は焼のりにゆず味噌だ。

長兵衛には、酒は茶と同様のようで、グイグイと流しこむ。私はあまりいけぬほうだが、つい連れ拍子になった。

酔いが急に来て、私は不平不満をしゃべりまくった。その中身は、述べるに及ばないが、要するにつまらぬことだ。しゃべっているうちに気が晴れて、浮世のしがらみというやつも、面白いものだと思えてきた。私も幾分かは、俗事と大まじめに取り組みながら、それを片方で茶にしているところがあるのかもしれない。長兵衛は世捨人の一種だろうが私もふとその気になれば、裸一貫で飛び出して、悔いないかもしれない。

「おぬしはいつまでそうしているつもりだ、長兵衛」

「知らん」

ぶっきらぼうだが、愉快そうに長兵衛は答えた。いい程に酒が回ってきたに違いない。

「おぬしのような男なら、抱えてくれるところがありそうなものだぞ。どうせ、このままではなるまい。なんなら、私が父に話して、骨折ってもらってもいい」

「止しにせい。無駄なことだ。いまの暮しで、おれは不足もないからな」

どこの者で、なぜ浪人しているのか、それを聞いても話さないだろうから、私も聞かずにいるが、いずれ主家を見限ったのではあるまいか。町人になった私から考えても、いまの世の大名などにろくなのは居ず、長兵衛などが仕えて悔いない主はあるまい。

与作という少年が現われたのは、私がすでに酔眼もうろう、長兵衛はいよいよ面目躍如で、顔から広くくつろげた胸板は風呂上りのように紅らみ、調子外れのはやり唄などを低唱している頃であった。

「先生……こんなに酔払っちゃあ仕方がないな。お客を連れて来たんだのに」

与作は眉をひそめ、こましゃくれた口を利いた。なるほど、客が二人。与作のすぐうしろに、年の頃三十四、五の町人、そのうしろに女だ。

私は何気なく、その女を見ているうちに、吸い寄せられるような気がしてきた。美しい。この世の女とも思えぬほど、神韻縹渺として美しく見えるのは、私が深酔いしているせいか。しかも、女はどうも、左右に揺れている。いや、揺れているのは私なのか。だが、町人が女を、そっと支えているようにも見える。

冴えわたった眉、涼しげに、しかもうるおいのみなぎった目、象牙細工のような鼻、花を摘み取ったような朱唇、それに、夢の中にぽっかり浮かんだとも見える色の白さ。

「なんだか知らんが、二人とも坐って飲め。女はいける口のようだな。まだ飲めるだろう」
と、長兵衛の落着き払った口上が、ずいぶん遠くから聞えるようだった。だが長兵衛も、大分舌ったるい言い様になっている。そうとも見えないが、女はしたたか酔っているのだ。
私はおやじを呼びつけ、不粋ながら冷水を一杯もらって、酔いざましに飲んだ。もう酒は、これ以上はいけない。
長兵衛は二人の客を坐らせ、おやじに酒の追加と客の盃を命じた。
町人があいさつをして、何か話し出そうとするのを、
「あとじゃ。黙っておれ」
と、長兵衛は叱り、半ば閉じたような目で、女をしげしげと眺めているようだった。
「しばらくそなたと、差し向いで飲もう。それ、酒が来た」
「いえ先生、この人はもう十二分に飲んでおりますので、もう……」
と、町人があわてて止めようとするのを、歯牙にもかけない。女もまた辞さず、手にした朱塗りの木盃に、なみなみと注がれた酒に、しばしうっとりと見入ったのち、一滴余さず、従容と乾した。濡れた朱唇が一きわ映えて、あるかなしかの微笑み。なにやら深沈たる趣きもある。
「よし、面白い。注いでくれ、女」
と、長兵衛が湯呑みをさし出す。
「ねえ旦那、お二人を止めてください。先生はともかく、このまま飲み続けじゃあ、おれんさんが死んでしまう。やけ酒の無茶飲みを、すでにやっているんですからね」
と、やきもきして町人が私に取りすがった。
「やけ酒？」
「へえ。日頃は一滴も飲まない、堅い一方の女房ですが」
「堅い……」
私はまるで、うつけであった。これが堅い町女房であろうか。なるほど、髪型から化粧の淡さ、渋好みの着衣まで、言われればそうも見えるが、全身に匂い立つなまめかしさは、ただごとではないのだ。
「どうしたことだい。この男に頼みがあって来たという以上このご婦人に関して喧嘩でも起っているのか」
「さようで。二人の男がおりまして、この女を取り合い、果し合いをすることになっておりまして……ええい、仕方もない。旦那にひとつ、お聞き願いましょうか。なに、果し合いはきょうということじゃないので。それにしても、いい加減に酒は」
だが、おれんという女と長兵衛は、互いに相手の目に見入るような風情で、とめどもなく酒を汲み交している。
与作はどこへ行ったか、もう居ない。町人の名は越後屋忠兵衛、唐物、小間物を商って店は日本橋本銀町にあるという。

三

忠兵衛のかいつまんだ話はこうだ。

おれんは忠兵衛と同じ本銀町の油屋の娘で、仕事に来ていた庭師の息子、玉吉を見染め、玉吉もまたおれんに一目ぼれで、忍び会う仲となった。おれんが十六、玉吉が十八だったという。かくすよりあらわるるのたとえ通り、二人の仲は近辺で知らぬ者もなくなった。おれんが美女なら、玉吉も若竹のようないい男で、双方の親をのぞいては、ケチをつける者もないほどだった。

玉吉は親の意見を受付けず、おれんもまた降るような縁談に目もくれない。月日が経てばという親の願いも空しく、一年二年と二人の恋は燃え盛るばかりだ。無理に引き離せば、駈落ち、心中もしかねないとあって、やむなく許すということになりかけた時、降って湧いた禍いが、玉吉の犬殺し一件だった。

それも、野良犬がおれんに噛みつこうとしたのを、玉吉が棒切れで追い払おうとした、尤も至極のことが発端だった。

犬が怒って玉吉に襲いかかり、玉吉も身を防がねばならなかった。大きな赤犬だったそうだ。

一件の一部始終を見ていた者がいない。だが、赤犬は稲荷の境内、奥まったところで死んでいた。なぐり殺されたのだ。横に棒切れが転がっていた。稲荷の境内というのは、二人の

逢引きの場所なのだ。そこで二人の姿を見かけたことのある者は、何人もいる。

赤犬はどこから来て住みついたのか、だれかれ構わずに噛みつく気の荒いやつで、町内では持て余していた。なにしろ、野良犬を見つけたら、その町内で大切に養えというお上のお達しで、いまいましくとも、殺せば大罪だ。

二人の忍び会っている場所へ、その赤犬が暴れこんだと、だれにも察しはつく。それにおれんが、はじめ犬が死んだとは思わず、家の者に、玉吉が追払った話をした。死んだと聞いて、しまったと思ったが後の祭り。玉吉が犬を叩き殺したとみな考える。おれんも、実際はどうだったのか、わからなくなった。玉吉にあとを任せて、ひとり逃げ帰ったのだから。

玉吉は家出をし、行方知れずになった。おれんにおとがめはなかったが、玉吉の親兄弟は、江戸十里四方お構いになった。

玉吉は最後の別れに来て、おれのことは忘れてくれと言ったが、おれんは承知せず、いつまでも待っているからと約束した。玉吉も、それでは必ず、いつか戻ってきて、添い遂げようと誓った。

三年経った。おれんははたちを過ぎ、やはり玉吉を待っていた。

だが、悪い知らせが、油屋出入りの小あきんどの口から、おれんに伝わった。数年前に江戸で犬を殺し、姿をくらましたという男が、甲州街道布田の宿外れで、役人に囲まれ、手向いをしたので斬り殺された。二十四、五のいい男で、なんでも植木職人だそうだった。

……それでも万が一、男が別人だということもあろう。おれんはもう二年待った。だが玉

吉は現われず、消息は全く知れない。

思い切らねばならぬ時、決心しなければならぬ時が来た。玉吉とはじめて会った時からすると、両親も老いている。

もしも玉吉という男がいなかったら、おれんは辰之助にすんなりと縁付いていたかもしれない。辰之助は裸一貫の担い売りから、手広い呉服、帯地の店を表通りに出すほどになった男で、二十八歳という年で独り身だった。昔からおれんに思いをかけていたようだが、玉吉がいるために、心の内にずっと秘めていたものだ。おれんも顔なじみの辰之助を頼もしがって、好いていた。

玉吉が死んだという話ののちも、なお辰之助はじっと待っていた。自分のところへ来てくれと、油屋に乗りこんだのは、人のうわさで、おれんにあきらめの色が出た、と読んだからである。

おれんは辰之助の女房になった。一年経って男の子、二年経って女の子が生まれた。おれんの顔に憂いの陰はなくなり、まぶしいほど美しくなった。呉服屋は繁昌を続け、子供には乳母が付き、夫婦連れで遊山や芝居見に出かけたりする姿が、よく見られるようになった。

死んだはずの玉吉が、ひょっくりおれんの前に姿を現わしたのは、半月ほど前である。

生類憐みの令はまだ生きてはいるものの、ひと頃ほどの気違いじみた、処罰はなくなった、とは言え、追われる身には違いない。玉吉は横山町の目立たぬ旅宿に荷を解き、取るものも取りあえず、おれんに逢いに、油屋を訪れると、油屋ではびっくり仰天し、お前さんは死ん

だものと思い、辰之助に嫁いだと知らせた。

玉吉がその足で呉服屋へ出向いたのは、最初は腕ずくでおれんを取り戻そうというのではなかったようだ。なんでもよい、夢にも忘れぬおれんに、一目でも会いたかったのだろう。子まで成し、仕合せにしているものを、当時の約束を楯に、現在の夫辰之助から引き離すなど、出来た相談ではない。江戸を追われた自分が不運なのだ。

そうは思っていたが、いざ目の前におれんを見ると、分別などものみごとにケシ飛んでしまった。横たわった歳月もなくなった。そこにいるのは、ついきのう別れたばかりのような、美しいおれんだった。

どうして軽はずみに、噂などを信じてしまったのか。なぜ確かめようとしなかったのか。いや、それは格好の口実で、本当は待ちくたびれ、飽きが来て、次第におれのことなど、どうでもよくなっていたのだろう、生きていたところで、どうせおれはしがない庭師の伜、それより、裕福な辰之助に嫁ぎ栄耀栄華をしたかったのだろうと、玉吉は子供のように思慮も忘れて、あまりのことにうつけのようになったおれんをかき口説いた。

辰之助は辛抱して聞いていたが、キッパリと、おれんは現在おれの女房だ、おれもお前に負けず劣らず、おれんを恋い慕っていた身だし、いまもその気持に寸毫の変りはない、気の毒には思うが、お前の言い分は無理で身勝手だ、きょう限り、われわれの目の前に出ないでもらいたいと言い渡した。

いや、現在どうであろうと、恋仲であったのはこっちが先だ。おれに何かの引け目があれ

ば知らぬこと、犬殺しは濡れ衣で、いま思えばお前が殺し、役人に嘘を申し立て、おれを罪に落そうとしたのじゃないか、とまで玉吉は言った。お前が呉服屋なら、おれは上方でいくらかは知られた庭師になっている。おれんにはお前に負けぬぜいたくもさせられるのだから、おれんを戻してくれと玉吉が言うと、子供二人もある夫婦に、夢のような世迷いごとをぬかすな、と辰之助は腹を立てた。

子供がなんだ、子供はどうにでも育つ、それより夫婦が大事だ、おれんが真実ほれているのは、おれだけなのだ、と玉吉がやり返す。

おれんの心中は、連れ添ったおれのほうがよく知っている、うぬぼれもほどほどにしろ、と辰之助がきめつける。

その日はうやむやのうちに、玉吉は引揚げた。

おれんに一目会えさえすれば、あきらめようと思っていた玉吉だが、成行でこうなってみると、あとへは引けなくなった。意地で、押し通すほかはない。玉吉が男の意地を張るなら、辰之助もなおさらで、恋女房を横合いから引っさらわれるのなど、我慢ができない。

どちらかが譲って、あきらめるというのは、できない相談になった。おれんは、男が命のやりとりをしても争う値打がある。

おれんは板ばさみになった。正直で、情の深い女である。心にもないことは言えなかった。辰之助は立派な亭主で、何一つ不足はない。だが、玉吉は初恋の男だ。めぐり合って、それまでの歳月が消えたように思ったのは、玉吉ばかりではない。辰之助は夫、玉吉はただ昔の

男、とあっさり片付けるほど、おれんの心は当世流にできてはいなかった。二人の男の真心がわかるだけに、そのどちらへ傾くこともできなかった。だから、おれんは口を閉ざした。果し合いということになっても、止めなかった。ほかに手段がないのなら、止めてもなんの詮もないのだ。

果し合いは、明後日明六ツ（午前六時）、場所は和泉橋袂の神田川原、双方とも加勢なしと決まった。

越後屋忠兵衛は、見るに見かねた。忠兵衛はおれんも辰之助もよく知っている。おれんの親に頼まれ、玉吉との仲を裂くという不粋な役目を引き受けたこともある。それも、おれんの身を思ってのことだった。

「わかった。果し合いを止めさせ、仲裁をしてくれと言うんだな？」

「さようで。先生のような人が、力ずくで双方を押えてくれるんでなくっちゃあ、この喧嘩は止められそうもありませんからね。おれんさんをどうやら承知させて、ここへ連れて来たんでございます」

四

おれんは酔いつぶれ、いつの間にか寝入っているのだ。それも、驚くべきことに、長兵衛の膝枕で。おれんがみずから長兵衛の膝を借りたのか、それとも長兵衛がおれんの頭を膝にのせたのか、その辺はうかつに見過した。しかもおれんの両手は快げに、長兵衛のあぐらを

組んだ毛脛を握っているではないか。体は左脇を下に、くの字なり。裾からちらとのぞいた小さな足指がほの紅い。当人はうっすらと微笑を浮かべ、眠っているのだが、長兵衛に甘えかかっているとも見える。その長兵衛が、どうしたことか、さもいとしげに、おれんの顔にかかった乱れ髪の幾筋かを掻き上げてやったり、円い肩をさすってやったりしているのだ。……まことにだらしなく、ふらりふらりとしながら。

それを見て、忠兵衛が実に厭な顔をした。それはそうだろう。長兵衛のは、女にほれた男の所作なのだ。朴念仁と思っていたが、おれんほどの女なら、この男の心も乱れるのか。おれんの後見役をもって任じているらしい忠兵衛にとっては、苦々しい限りだろう。長兵衛に仲裁を頼みに来たのを、後悔しているかもしれない。

「おい、長兵衛」

と、私は少々いかめしい声で呼びかけた。たしなめる意味もあるが、忠兵衛の話を取り次いでやらねばならない。あの様子では何一つ耳に入っていなかろうから。

「長兵衛、聞いているか？　この忠兵衛の話では……」

「いい女だ。好きな女だ。この無心な寝顔を見ろ」

とつぶやく。

「おい長兵衛！」

「こりゃあ、出直したほうがよさそうだ。聞きしに勝るお方だね」

と、忠兵衛は皮肉を言い、おれんを起して帰ろうというのか、手をさし伸ばすのを、長兵

衛が払いのけた。

「寝かしてやれ。喧嘩は止められんぞ、忠兵衛とやら。ほかに結着の付け様がないからの喧嘩だろう。おれの顔でも、聞くはずはないわ」

おや、すると長兵衛は、この泥酔の有り様にもかかわらず、忠兵衛の話を聞いていたのか。

「……それを止めろと言う。止めたあと、きさまはどうしようと考えているのだ」

「そりゃあ先生、あとはなんとでも。ともかくも果し合いとなれば、どっちかが死んでしまうんです。第一にそれを」

「それでいいではないか。両名とも、おれんを得るか、さもなければ死ぬかの覚悟であれば、死んで悔みもあるまい。仲裁などは要らぬ世話というものよ」

「どうにかしなければ、おれんがかわいそうでございます」

「どうにもならん。だからおれんは酒をくらった。好きな女だ」

「先生、こうなれば言ってしまいましょう」

「何をだ？」

長兵衛はトロンとした目を忠兵衛に据えた。

「辰之助には加勢が付くかもしれません」

「ほう？」

「玉吉には知るべもなし、味方は一人もございませんが、辰之助にはございます。あぶれ者を雇う金もありましょう。相対の勝負ならば、なるほどわたくしも手を引きましょうが、玉

吉は欺し討ちをされるかもしれません」

「辰之助はそういう男か？」

「疑いたくはございませんが、元手なしの裸一貫から、大店を築いた男で、一筋縄ではゆかぬところがございます。玉吉の犬殺しについても、本音を申せば、わたくしは疑いを持っておりますので。昔からおれんさんに、ひそかに思いをかけておりましたところへ、玉吉があっさりさらってしまい、折あらば陥れようと狙っていたのではありますまいか。……それに、玉吉が殺されたという噂でございますが、これも小商人に金をやり、油屋に行ってそう言わせたのではございますまいか。ちょうどおれんさんに、このままでは、と迷いの出始めた時機で、よく頃合いを見ております。その辺がなかなかの巧者と存じますが」

「なるほど。辰之助に加勢が出れば、戦わずして、辰之助は負けだな。おれんがそのような男に付くはずがない。たとえ四年五年、連れ添ってもな」

「はい。どうでしょう、先生。仲裁をお願いは致しませんが、加勢が出た時に、その者らを追い払うなり、斬り捨てるなりしていただくということでは。さらに、辰之助が破れかぶれで打ちかかってくれば、玉吉のほうに助太刀をしていただくのでございます。玉吉を死なせては、なんにもなりませぬ」

「よかろう。だが、手を貸すのは玉吉の命が危い時だけだ。それで決まった。忠兵衛、いくら出す？」

「前金で五両さしあげましょう。喧嘩の始末がうまく付きましたら、さらに五両。いかがでございます」

「よろしい。だが貴様は、なんにも得はせんな」

「なに、おれんさんさえ無事で、仕合せになれば、言うことはございません。実の妹のようにかわゆうございますので」

「おれんはしばらく置かんか、忠兵衛。このようによく寝入っているものを、起すのもふびんだ。使いを寄越せばよい」

「滅相な。とんでもないことで。この上飲みっくらをやられちゃあ、おれんさんは死んでしまいます」

と、忠兵衛が血相を変えるのへ、長兵衛は呵々大笑した。おれんは目下、辰之助の家を出て、油屋へ戻っている由だ。二人の子供は、辰之助のもとへ置いたままだという。

庶民が駕籠へ乗るのは禁制になっているが、病人ならば構わない。おやじが呼びに行き、あんぽつが来て、おれんのぐにゃぐにゃした体を、みなで抱え入れた。

おれんはただ一こと、どこへ？　と言った。

五

夜明け頃はまだ冷える。神田川からは靄が立ちのぼっていた。やがて朝焼けの赤い光の中から、与作が歩いてきた。

「やっぱり加勢がいるよ、先生」

と言う。与作はわれわれより先に、様子を探りに行っていたのだ。長兵衛を先生、私をも与作は先生と呼ぶ。だが、私をそう呼ぶのは、心服しているからではなく、医者だからだ。

果し合いなどにかかり合うのは真平御免の私だが、今回だけは成行きを見届けたい。おれんのことが気にかかってならないのだ。

「そいつらが出てくるまで待とう」

と、長兵衛は言った。与作の話だと、三人ほどが橋の袂の物陰にしゃがんでいるそうだ。おれんは前夜忠兵衛の家に泊り、連れ立って出向いて来ている。われわれは浅草御門前で落ち合った。忠兵衛が止めたが、おれんはどうしても来るのだと承知しなかったそうだ。おれんはほとんど、一言も口を利かなかった。化粧もしていないが、天成の麗質は冴え返り、目はどこか遠くの一点を見てばかりいる。

そろそろ時刻になった。われわれは和泉橋を見すかす、町家の軒下に身をひそめて待った。最初に玉吉が姿を現わした。橋の袂まで来てあたりを見回すと、土手下へおりて行った。尻を端折り、たすきを掛け、腰には長めの脇差。落着いた物腰だった。辰之助の加勢には気が付かない。

「やつらはいま、玉吉を襲いはすまいか、長兵衛」

と、私が聞くと、長兵衛は、

「襲わぬさ」

とキッパリ言った。

辰之助が来た。これは当り前の着流しだが、腰のものは大刀のようだ。

「双方脇差のはずだが。先生、辰之助はどうもいけません」

と、忠兵衛が小声で言った。おれんは相変らず無言。ひたと前方を眺めているだけだ。

辰之助も土手をおりた。下は狭い川原である。

この軒下からは、加勢のひそんでいる場所は見えないが、動きを感じ取ったのだろう、アッと言う間もなく、長兵衛が走り出た。ちょうど、加勢の三人が、それぞれ抜き身を手に川原へ駈けおりようとするところで、長兵衛の姿を見ると、非常に驚いた様子で、言い合わせたように立ちすくんだ。

私も長兵衛に続いた。自分で気付かず、私はおれんの手をしっかり握っていた。

「だれに頼まれた加勢だ。辰之助か。言え」

と、長兵衛は三人に聞いた。だれも答えない。

「言えぬなら強いては聞かん。怪我をしたくなければ、この場を立ち去れ。それとも、おれに立ち向うか」

浪人が一人、あとは無頼の博奕打ちかなんぞであろう。

忠兵衛は臆病風に誘われた故か、まだ軒下を動かずにいるようだった。

「ええい、邪魔をしやがるな」

と、一人が言いざま、力一杯に長兵衛に斬りかかった。長兵衛はまだ抜刀もしていないはずだったが、ひょいと身をかがめたと見える一瞬、大きく振りかぶって斬りかけた男が、長

兵衛におっかぶさるかっこうをしたまま、二、三歩進んで、朽木のように倒れ伏し、長兵衛の手には刀が光っていた。

残る一人は逃げ出し、浪人が残った。

「ご同様の身分のようだが、つまらぬことはせぬものだ。もう一度聞くが、だれに頼まれた？　それを言ってから帰ってもらおう」

と、長兵衛はおだやかに促したが、この浪人は意外に小心者で、逆上しているらしく、何かわめきながら、突きかかった。勝負は言うまでもなく、浪人は刀を叩き落された。

私は長兵衛が、無益の殺生はしないものと思っていた。だが長兵衛は、刀を拾えと命じた。逃げようと背を見せれば一刀を浴せられる。浪人は刀を拾い、いま一度勝負をいどむほかはなかったようだ。

ほんの二、三合。私は浪人の首から胸にかけ、血がほとばしるのを見た。私は倒れかかるおれんを抱き止めた。忠兵衛が走り寄ってきた。

「先生、こいつらは辰之助の加勢だと白状しましたか」

「いや、何も聞かぬ」

と、長兵衛は地に這った二人の男を、冷たい目で見た。

「浪人者は死んだが、いま一人は助かるだろう。養順、見てくれ」

「わかった。だがそれより、川原は」

「先生、辰之助はけしからぬやつだ。おれんさんも辰之助の性根はわかったろう。お願いします。玉吉に勝たせてやってください。玉吉が危なくなったら……そういう約束でしたね、先生」

と、忠兵衛が必死の面持で言いかけるのに耳も貸さぬふうで、長兵衛はずかずかと川原のほうへ歩きだした。

玉吉と辰之助が、およそ十歩ほどをへだてて向い合っていた。辰之助は衣服をぬぎ捨て、腹巻と下帯だけの裸になっている。どちらも刀を中段に構え、ピクリとも動かずに相手の動きを見ている。玉吉のほうが若く、背丈もあるが、辰之助のがっしりした体付きには沈着さがある。

長兵衛は無造作に、間に割って入った。

「忠兵衛に頼まれた者だ。一応聞くが、果し合いを止めるつもりはないか？　女ひとりのために命を落すとは、酔狂が過ぎはせぬか？」

「どなたか知らないが、口出しは無用だ」

と、玉吉から最初に応答があった。

「こっちも同じだ。引いてくだせえ」

辰之助も言った。

「お前が辰之助か？　加勢を呼んだのはお前か？」

「そんなものは知らねえ」

「加勢だと。辰之助、てめえって男は」

玉吉が言いかかるのを、長兵衛は止せ止せと制した。

「加勢はもうおらん。女のために命を張るのも、またよかろう。もう止めはせぬから、十分に戦うがよい。玉吉、お前の脇差は不利だ。これを貸すから使え」

長兵衛はおのれの刀を玉吉に渡した。

「おれんはここにいる。女に見届けてもらうのだ、戦う甲斐があろう」

長兵衛はうしろへさがった。おれんは、いつか私の手を振りほどき、両名のにらみ合った近くまで来ていた。さきほどは倒れかかったが、いまはシャンとしているようだった。忠兵衛は私のうしろに及び腰でおり、しきりに先生先生、と呼びかけていた。玉吉に助勢してくれと言うのだろう。

両人はふたたび構えを立て直し、にらみ合った。長兵衛に止める気はない。おれんにもない。なんというばかばかしいことだ。おれんはどうして、身を投げ出しても二人をとめようとはしないのだ。

一度、両人は寄ったが、刀を合わせ、火花を散らしただけだった。

不意に、長兵衛が目にも止まらぬような動きをし、何が起ったのかわからなかったが、おれんが、どこにかくし持っていたものか、手にした懐剣を取り落し、川原に崩れるように坐った。

のどを突こうとしたものらしい。長兵衛が一飛びし、玉吉の脇差の背で、おれんの手首を打ったのだ。右手首から、みるみる血がにじんできた。

だれもが茫然となった。長兵衛だけが、何事もなかったように、おれんの肩に手をかけた。

「いい覚悟だ。きさまらが意地を立て通す限り、おれんの採る道はほかにない。おれんを死なせるか」

玉吉、辰之助両名とも棒立ちだった。おれんを死なせたくない。と言って、譲ることはできない。

「そうか。おれん、やはり死ぬほかはなさそうだ。それとも、両名は捨てて、こちらの先生の女になるか。大分ご執心と見えるからな」

その言葉に、おれんはかすかな笑みすら洩らした。ゆるく首を振った。男は玉吉か辰之助、ほかにはないのだ。

「介錯してやろう。楽に死ねるぞ。女をおれが介錯するなど、前代未聞だが、お前にはその値打ちがある。余念なく、恋一筋は見上げたものだ」

おれんは軽く頭をさげた。両手を合わせた時、忠兵衛が転ぶように駈け寄った。

「先生、約束が違う、約束が……」

「どかぬと斬るぞ。冗談でしていることではない」

玉吉が、刀を投げ出した。

「おれの負けだ。おれんを死なせちゃあ、元も子もない。辰之助、おれんは改めて、呉れてやる」

辰之助は黙然としていた。玉吉はそれなり、おれんのほうを見ようともせず、背を向けて

ゆっくり、川原を歩き出した。だれも止めなかった。
「辰之助、おれんを連れて帰れ」
長兵衛はおれんを助けて立たせた。
「お前様、わたしの加勢がなんとか、言いなすったが」
と、辰之助が、かすれた声で聞いた。
「それはもういい。なに、加勢は忠兵衛が出したものだ。おい養順、忠兵衛を押えてくれ……ほい、逃げたか。駄目な男だなあ、おぬしは」
忠兵衛は、こけつまろびつ、土手を駈け上って行くのだった。
「忠兵衛が出したと……斬られた浪人が白状したのか？」
「いや、当然そうなのだ。忠兵衛はおれんがほしかった。辰之助を片付ければ、あとは玉吉だが、これは訴え出れば難なく事は済む。それで辰之助を悪人と見せかけ、おれに斬らせようとしたのだな。忠兵衛がおれんにほれ切っていたのは、膝枕の時の様子ではっきりした。刀がどうのこうのと言っていたのも、やつの小細工だよ。犬殺し、玉吉が死んだという噂も、忠兵衛から出ているはずだ。ところが、おれんを辰之助にさらわれた。怨み骨髄に達していたものだろう。おれんが、玉吉を思い切ってもほれるほどの辰之助だ。卑怯未練はない。現に、恋仇の玉吉のことを訴え出ておらん。捕えさせず、あくまで尋常の勝負をのぞんだのだからな」
辰之助、おれんは、寄り添って道へ上り、すでに姿を消した。どこかへ見えなくなってい

た与作が、川へ石を投げこんでいる。
私は去った玉吉の傷心を思った。玉吉ほどではないが、私も耐え難いほどさびしかった。
「忠兵衛をどうする。斬るか」
「おれは犬は斬らぬ。刀がけがれるからな。怪我のやつの手当をしてくれ。応急には与作がしているだろうが」
「心得た。だが長兵衛、あの浪人は、こらしめるだけでよかったろうに」
そう聞いた時だけ、長兵衛は少し暗い顔をした。
「あいつは浪人とは言え、武士だ。武士に容赦は加えぬ。……さて、おれは帰って一寝入りする。さらばだ」
あっけにとられている私を残し、長兵衛は大股で、土手を上ってしまった。
与作がニヤニヤして寄ってきた。
「へんな先生だろう？」
「ふむ。長井長兵衛か。人をコケにした名だの」
「本名は安兵衛と言うんだ。中山安兵衛って言うのさ」
与作は水っぱなをすすり上げながら教えてくれた。

夜逃げ家老

一

まさか、と思っていたことが、起ってしまった。

春眠暁を覚えずで、昨夜はよく眠った。今朝はまだ明けやらぬ頃から、藪うぐいすの声を聞いたが、さわやかな目覚めであった。きょうは城から帰ってから、何をしてやろうかと考えていた。用はいろいろとあるが、いずれ風流、稽古事、手すさびに類するものだ。さし当り、政治向きにむずかしいことはない。

その楽しい思いが、奈落へ急転直下しようとは、神ならぬ身の、夢にも知らなかった。手水を使い、茶を喫していると、城の太鼓が鳴り出した。総登城の触れだ。

「なんでございましょう」

と、妻が気掛りそうに言ったが、私は、

「江戸から知らせでも参ったのだろう。殿が無事に御役目を果されたというのかもしれぬ。あれは十四日で終るのだからな。そろそろ使いが戻ってもいい頃だ」

と答えておいたが、虫の知らせか、実は胸が騒いでいたのだ。早朝の触れが異例であるし、使いが戻ったとすれば、早すぎる。江戸から赤穂まで、わずか五日でくるというのはおかしい。私は妻を心配させまいと、平気を装っていた。太鼓が鳴り出してから間もなく、城からの使いがやってきた。

大石が遣わした者だが、この者も詳しいことは知らない。会って聞くと、殿の御身の上に、

何か変事があったらしいと言うだけだ。

私は総身の力が抜けて行くような気がした。想像がつく。変事があったというなら、それは、何か殿がしくじりをなされたのだ。してはならぬことをなされたのだ。奇禍に遭われたとは思えない。急病にかかられたとも思えない。勅使接待役で寸暇もないのだから、例えば江戸の町中で、乱暴者に襲われたなどということが起るわけがない。また、殿は御体が弱く、思い詰めたり、癇癖が起ったりするが、病気という病気はない。

登城の道すがら、私の考えはいよいよ悪い方へ傾き、心は暗くなった。家臣のあいさつにも、ろくに答える気にならなかった。

胸に浮かんでくるのは、例の吉良殿のことだ。私はもちろん、会ったことはないが、名家である上に、代々の高家衆、しかも上野介殿はその筆頭で、柳沢の寵を得ているとも聞いている。

絶えず金品を贈り、茶、俳諧、踊りの席にも同座しているのだろう。

有職故実に通暁していれば、京の殿上人とも交りがあり、われわれ田舎者と違って、まず並びなき風流人、文人なのであろう。

そういう人物は、とかく癖があって、気難しいものだ。金銭に汚ない、意地が悪いという噂もあるが、老人でもあろうし、我も強くなっていようから、人をいじめるというのも、本当かもしれぬ。

なにしろ厄介な人物だが、吉良殿にしてみれば、近頃の無作法者、物知らぬ武骨者の振舞

に我慢ができぬということもあろう。私は何も、吉良殿の味方をしているわけではないが、ただ悪賢いひねくれ者、金銭をむさぼる者、弱い者いじめをする者、とばかり考えるのは、やはり公平ではなかろう。

吉良殿のような人と、うちの殿とは、真反対の人柄で、気が合わぬ。それはだれでも知っていた。吉良殿は武家ではあるが、実は文人だ。殿は昔ながらの武人だ。吉良殿がぜいたくを好まれるなら、殿は質素を好まれる。吉良殿が何事もわきまえた老巧者なら、殿は生一本、言わばお山の大将で、世間にもまれておらぬ。諸役人、大名方との交際もなさらぬ。主家、親類筋へも、あまりよくなさらぬ。むしろ付合いなどは余計なことだと思っておられる。ところが吉良殿にとって、これほど大事なことはなかろう。高家筆頭とは言え、禄高は言うに足らず、小藩の浅野にも遠く及ばぬから、伝えられるような財を得るためには、権勢者との付合い、取入りによる外はなかろう。ところがそういう世渡りを、殿はお嫌いなのだ。……これは内心だけのことだが、殿はわがまま一杯の子供が、そのまま成人したようなものだ。私もこれまで、殿の機嫌をとり、事を思うように運ぶのに、一方ならぬ苦心をしたものだ。

その吉良殿が指南役なのだ。うまくゆくはずがなかった。

やはり、吉良殿と何か争いを起されたのではあるまいか。そういう気がしてならぬ。

城内はざわめいていた。家臣がぞくぞく登城してくる。みな、私と思じようなことを考えているのがわかる。そこここで、ひとかたまりになり、声をひそめて話し合っている。

大石たち重職の者と同座する前に、私は家来のだれかれから、事の真相らしいものを聞い

た。恐れていた通り、殿はこの月十四日、勅使饗応の最後の日に、理由は何かわからぬが、江戸城中において、吉良殿に刃傷に及ばれたらしい。その後のことは不明である。

それは大石の話で、いよいよ明らかになった。

それによると、殿は御白書院の廊下で吉良殿と行き合い、小刀を抜いて斬りかけた。吉良殿は手向かいをしなかったそうだ。ちょうど止めに入る者があって、殿はさえぎられた。傷を負った吉良殿は、駆けつけた者が介抱して、連れて行った。傷は額と、もう一箇所だそうだ。外科医などがすぐ手当をしたようだが、深手なのかどうか、命を取りとめるかどうか、その辺のことはわからない。

殿は蘇鉄の間の一隅に、御目付などが監視して控えさせられた。

事は上聞に達し、上様は烈火の御怒りで、殿を田村右京太夫殿へ預けられる旨、直きに御下知、なお追っ駆けて、殿の即日切腹を申し付けられた。

一方吉良殿は、場所柄をよくわきまえて、手向かいをしなかったのを賞められたそうだ。むろん、御構いはない。

殿は申の刻ごろ（午後四時ごろ）、田村殿の屋敷に入られたが、夕刻にはもう検使が到着、御庭先において切腹なされたという。江戸の家来共のうち、片岡源五右衛門ただ一人、いまわの際の対面がかなったそうだ。

赤穂の領地は召し上げられる。御舎弟浅野大学様は閉門。屋敷は上、下両屋敷共即日引払いを命ぜられた。別に御老中土屋相模守様から、浅野の親類戸田采女正殿へ、城地召上げ

については、家中、領民共騒がず、心得違いをせぬよう、諭すべしという御達しがあった。これがみな、その日のうちのことだから、疾風迅雷と言うべきだろう。上様の御怒りが察しられる。

到着した使者は早水藤左衛門、菅野三平が最初の組、原惣右衛門、大石瀬左衛門が次の組である。

大石はさすがに色蒼ざめ、目の縁が落ちくぼんだ様子だったが、態度も物言いも、いつものように落着いていて、彼が四人の急使に問いただし、聞き得た限りのことを、われわれに淡々と話した。

大石は人物で、私はかねがね、首席家老に人を得たことを喜んでいた。人をそらさぬ、度胸のある男だ。上にこういう男がいると、仕事がしやすい。風雅も解するし、理財にかけても、なかなか心得ている。武骨一点張りではないのが、私の気に入っているのだ。それに、うるさく口を出さない。

私と大石が不仲だと思っている連中が多いが、そうではない。

それはともかく、書院に参集したわれわれは、しばらく言うべき言葉もなかった。一朝にして、われわれ一同は浪人になり、食を失うのだ。失望落胆とも、切歯扼腕とも、言い様がない。

広間には家臣が集まっている。もうみな、大体のことを知っているのだ。それぞれが大声で言い合っている声が、書院まで響いてくる。

善後策を、まずわれわれ重職の者で決めておいて、その後家臣一同に事実を知らせ、徴すべき意見があれば徴すべきだと私は言ったが、大石は、善後策と言っても、ここで簡単に出せるものではあるまい、このような大事だから、最初から家臣一同を交えて評定すべきだと反対した。

それもそうだと思ったのは、重臣共がみな茫然自失、余りのことに思慮も何も働かぬ様子だったからだ。これでは仕方がない。それで大石の言に従ったが、善後策など、簡単ではないか。起ったことは起ったことで、取り返しはつかない。なぜ殿が刃傷をなされたか、いまさらその理由を問うたところで、仕方がないのだ。当藩が召上げになったのは厳たる事実だから、そこから考えなければならないのだ。

つまり、善後策とは、一同の身の振り方をどうするかということだ。倉の金の分配のこともあり、領民のためには、藩札の引替のこともある。それに、出来得る限り、藩士を浅野本家其他、親類筋などへ再仕官させる仕事もある。いや、それよりもまず、家中から仇討のなんのと、血迷った者が出ぬよう、よく教えさとさねばならないのだ。大石は広間において、事実を語り、かくなった上は恭順を専らにし、あわてず騒がず、今後の各自の身の振り方を考えるようにと、言い含めねばならなかった。

果せるかな、広間での評定は喧々囂々で、泣く者あり、怒号する者あり、食ってかかる者あり、そうかと思えば、肩を落して黙然たる者もあり、なんの収拾もつかなかった。

どうしてそう騒ぐのか。もう少し落着けぬものか。

二

つくづく考えたところ、形勢は非だ。きゃつらは常軌を逸している。全く血迷ってしまっている。きゃつらとは、過激な連中のことだ。その連中に、大石は担ぎ上げられてしまった。どうも、大石を買いかぶっていたかもしれぬ。私をはじめ、穏健な意見の者は、目の敵にされている。

仇を討つ、つまり、江戸に下って吉良殿の首を取り、殿の御無念を晴らそうなどというのは、とんでもないことだ。一藩全部が押しかけてみたところで、そんなことができるものか。公儀において人数をくり出してきて、一網打尽は目に見えている。江戸に達することすらできまい。そんなことが、どうしてわからないのか。

藩中にも血迷っていないのがいるから、仇討の企てには参加すまい。江戸へ攻めのぼろうという人数は、四、五十人もいればいいほうだ。犬死だ。

それどころではない。本家の浅野家ほか、近い縁辺のだれかれにまで累が及んでくる。浅野は全滅になり兼ねない。大学様はもちろん、切腹だろう。これほどの不忠はあるまい。

仇を討つということが、そもそも解せぬ。

吉良殿が殿に斬りかけ、そのために殿がお果てなされたというのなら、仇討もわかるが、反対ではないか。斬りかけたのは殿のほうだ。吉良殿は何もしていない。どんな意趣があったにしろ、天下の大法を犯された殿が、切腹を命ぜられたのは、当り前だろう。

殿に抱きついて支えたのは、桂昌院に仕える梶川という者だそうだが、人が斬られそうになっているのをさえぎるのは、これも当然だろう。江戸にも妙なのが多いと見え、風聞では、梶川は武士の情けを知らぬ者と、取沙汰されているそうな。迷惑な話に違いない。

殿が意趣ある吉良殿を討ち果せなかった。無念である。だから臣下たる者は、その主君の御無念を、どうあっても晴らさねばならぬというのだが、これは本末顚倒だとしか、私には思えない。

私は、殿の御無念など、どうでもいいと思っているわけではない。さぞかしと察してはいる。吉良殿は殿に、真綿に針をくるんだようなやり方で、チクリチクリと意地悪をし、嘲弄したのであろう。礼儀知らず、世間知らずの殿を、いいようにあしらったのであろう。吉良殿は指南役の立場である上、柳沢の庇護がある。田舎大名に何ができようという油断もあったのだろうが、吉良殿も思慮が足りなかった。殿の人となりがわかっていなかったのだ。

殿は吉良殿などから恥辱を受けるのに耐えられないお方であるし、隠忍できぬとなれば、何も構わず刀を抜くお方だ。まして殿は昔から、人のあなどりを受けたことがない。軽い冗談、からかい、座興を解せぬお方でもある。

それに、いろいろ家来から言われて、吉良殿に対して恭敬の態度に出ておられたとは言え、内心では小禄の旗本風情とさげすんでおられたろうし、権勢を笠に着たお上手者と、苦々しい思いでおられたろう。そういう者から見くだされ、嘲弄されては、前後を忘却されたのも無理はない。忍びに忍んだ挙句、わずかな行き違いで、この上は忍べぬ、ということになっ

たのは、刃傷が勅使饗応の最後の日であったことからも察しられる。私も、おいたわしいと思うのは、人後に落ちない。

たとえ腹を切り、領地は没収され、家臣一同が路頭に迷うことになろうとも、相手を討たねば、男子として一分が立たぬ……そう思われたかもしれぬし、そのお心もよくわかる。だが、詮ずるところは私怨だ。

殿はもっと大きく物事をお考えになれなかったものだろうか。役目が第一だということにどうして気付かれなかったのか。怨みなどはあとで、どうにでもして晴らす手段があったのではないか。と、こう言うのも愚痴で、所詮は殿の御人柄だ。覆水は盆に返らぬ。

愚痴ついでに言えば、江戸詰の安井、藤井の両名がもっとしっかりしていてくれたら、災いも未然に防げたろうに。

吉良殿への音物が少なかったと言うが、私はあの程度でいいと思っている。もちろん、私も相談にあずかったが、あんなものだろう。

私が江戸にいたら、殿にくれぐれも短慮をなさらぬように申し上げると共に、ひそかに吉良殿の屋敷へ行き、殿は直情径行で、甚だしく癇癖の強いお方であるから、よく御留意あるように、と家来衆に釘をさしておいたろう。

いまさら言っても始まらぬが、殿は終始、何事も気の付かぬ馬鹿殿様になり済ますか、知らぬ振りばかりする横着者になっていればよかったのだ。その辺の知恵が、江戸の家来にはなかったのだ。

過激の連中は、お上のなさり方が、甚だ片手落ちだといきまいている。なるほど、片手落ちの気味があるとは、私も思う。吉良殿になんのおとがめもなしというのは、よくない。非は専ら殿にあるようだが、種を蒔いたのは吉良殿だからだ。減知、致仕くらいのことはあって然るべきだった。それがないから、いたずらに当藩の血の気の多い者共を憤激させてしまった。

しかし、はっきり言えば、殿の切腹、領地召上げは理の当然だ。殿中での刃傷はそのきまりであるし、ましてや年中行事中、最も重いと言える勅使饗応の式典中、外ならぬ饗応役の殿が、刃傷に及んだ。理由はなんと言っても、私怨からだ。弁明の余地はない。仇討など、狂気の沙汰だ。私怨の報復は私闘ではないか。

大石もさすがに、仇討を呼号する連中の取扱いに困じ果てている様子だ。と言って、その不可なる所以を懇々と教え諭すでもなく、頭から叱りつけるでもない。態度があいまいだから、きゃつらが付け上って、自分らの陣営に大石を引き込もうとする。

大石はどうも、八方美人のところがあり、その辺が狡猾だ。なかなか、はっきりした意見を出さない。それで、いろいろな考えを持った者が、大石を取り込もうとする。だから、にわかに人望が出てくる。

私には到底、そんな器用なことはできないので、はじめから恭順論だ。騒いでみたところで、どうなるものでもない。目下は、いたずらに公儀の心証を害することを極力避けるべきであるし、そうすれば後日、何らかの恩典に浴する機会がないでもあるまい。

この私の考えに、どんな誤りがあるというのか。

私は評定の席で、だれはばからず、持論を吐いた。要するに仇討は論外、籠城も不可、かくなる上は御老中のお指図に従い、ひたすら謹慎すべきだというのだ。

片手落ちは私も認める。吉良殿のなさり方も、臣下として腹に据えかねる。だからと言って、仇討その他、公儀の御措置に抗することが正しいとは言えない。忠義とも言えない。なぜなら、大筋において、御措置は正しいからだ。服するほかはないではないか。

恭順することはまた、浅野家再興の捷径でもある。殊勝と認められ、なんらかの御沙汰があることが考えられる。もしこの際、われわれが不穏の動きでもしようものなら、その望みは断たれる。

私の意見に同ずる者は多い。家中の半数以上と言ってもよかろう。正論であるから、そうあるべきことだが、残念ながら、過激派よりも勢がよくない。無理が通って、道理が引込みそうだ。物のよくわかった者たちは、おとなしい。これに反し、頑愚の徒は狂犬さながらに吠え、噛みつく。

それに、きゃつらの中には不平派が多い。重く用いられぬのは、自分たちに器量がないせいであるのに、われわれに不当におさえられてきたと思いこんでいる。自分たちだけが正義の士で、忠義者で、われわれはへつらい者、奸臣だと考えている。全く馬鹿者は仕方がない。殿が亡くなられた今、自分たちが頭を出す時機だというので、ことさらにカサにかかっている。

騒ぐのは、これら不平派のほかに、軽輩がいる。彼等の心事を推しはかるのに、何事もなければ鳴かず飛ばずだが、主君の仇討とでもいうことになれば、名を売ることができる、というのではあるまいか。由来、復讐は世人の喝采を博する。君の仇、父の仇を討つのは斉しなみに美挙とされていて、道理にかなっていようがいまいが、そのところはどうでもいいのだ。

万一、彼等が潜行して吉良殿を討つことに成功すれば、武士の鑑として、あるいは一命を助けられるのみではなく、青天白日の身となり、諸家から高禄で召し抱えられることもあるだろう。浪人して屏息しているのとは、天地の違いだ。ただしこの挙は、まかり違えば、死なねばならぬ。

彼等はひそかに、このようなことも考えているのではあるまいか。

ところで、われわれ正論派は、腰抜け、卑怯者と見られる。立派なことを言っているが、実は死にたくないのだろう、命が惜しいのだろう、一身の安穏を計りたいのだろうと、露骨に言いのしる者もいる。

確かに、そう見られる弱点はある。だからいま一つ、気勢が上らないのだが、それは見当違いというものだ。私は物の道理を言っているのだ。私の同意者も、もっと自信を持って、堂々としてくれればいいのだが、なにやら、うしろめたい様子がある。これが残念で仕方がない。

だから過激派の攻撃は、私に集中してくる。原惣右衛門などは、私に血相を変えて詰め寄

り、刀を抜き兼ねぬ様子で、われらと大野殿との考えは、根本から喰い違うから、今後話合いの余地はない、評定に加わられるだけ無駄だろうと言う。同席をいさぎよしとしない、などとも言う。私は恐れをなし、またばかばかしくもなってきて、同意の連中と共に退席してしまった。狂犬は避けるに限る。大石は私を止めるでもなく、原を叱るでもなく、いささか困ったように黙りこんでいた。

三

そろそろ、退散の用意をしておかねばなるまい。伜の郡右衛門に話すと、同意だと言った。家中でも用意のいい者は、家財の整理を始めているそうだ。退転先がすでに決まった者もいるらしい。私の屋敷は家財その他、かなり多いから、早目に手当をしておかねばなるまい。

私はいよいよ、城内の様子に失望した。私の出る幕がなくなってきた。大石をかついだ過激派の連中が、自分たちでなければ人でないといった様子で、藩論を牛耳ってしまっている。私などが下手に口を出そうものなら、殺気立っているやつらに斬られ兼ねない。だから私は、評定の席に出はしても、持論を主張することをあきらめてしまった。

大石は、仇討論を軽挙としておさえたのはいいが、大学様の御取立を多方面を通じて嘆願すべきであり、それがどうしてもかなわねば、籠城すべきだという。城を枕に討死しようというのだ。

大石が籠城などを持出すとは思わなかった。なんのつもりだろう。意地を通してなんにな

る。いたずらに死人を出すだけではないか。それに、大学様が御取立になればいいというのも、おかしな話だ。打ち割ったところ、大学様がどうなろうと、所詮はわれわれとかかわりのないことだ。御舎弟は御舎弟。江戸育ち、江戸暮しの大学様は、赤穂とは縁の薄い方にすぎない。たとえ御家再興が許され、大学様が跡を嗣がれたとしても、それで遺恨が散ずるであろうか。家中の憤懣はおさまるであろうか。

過激派のだれであったか、大学様は殿ではないと言っていたが、その点は私も同感だ。

それでも、再興が成れば言い分はない。ところが、その望みは皆無。私の見通しでは、大学様は許されても、元通り旗本、それも禄を減らされてのことだろう。そんなことがなんになるものか。出来ぬことを強請がましく公儀に申し立て、聴かれぬとあらば籠城というのは、児戯に類すると言わねばならぬ。賢明な大石が、いったい何を考えているのか、私には一向わからないのだ。

私は大石に、その真意をただした。私の言い分は、まず指図通り、城を明けて一同退散した上で、大学様御取立などのことを嘆願すべきが筋であるというものだ。大石は、

「お言葉ではござるが、御取立なければ、止むを得ず籠城というのは、策と申すもので、これも、御取立がなかなかむずかしかろうと存ずるからで、どこまでも退いてしまうのは、あまりに無策ではござるまいかな。御取立の望みが必らずあっての順序でござろう。無策ばかりではなく、腰抜け、臆病とそしられましょう」

と言った。一座で当てつけがましく笑う者もいる。そんなことは無益だと言ったところで、

いまの大石は聞く耳を持つまい。すっかり過激派に乗せられてしまっているのだ。どうも、籠城説に一決しそうな気配が見える。

私は大石が、大勢の前では言い難いこともあろうかと思い、あとでひそかに大石に聞いてみた。大学様のこと、籠城が本心なのかどうか。大石は笑ってこう言った。

「大野殿ならお解りであろう。血気の者は、即刻復仇を主張して、どうにもおさえ切れぬから、大学様一件を持ち出し、止むなくば籠城と申すことにしたので、これでようやく一時はおさまりました。実は籠城を致すかどうか、一寸先のことは、それがしにもわからぬ」

「一時の方便ということですかな」

と、大石の苦心の一端に触れた思いで、私がそう聞くと、大石は答えた。

「方便のみというのでもござらん。万策尽きて、籠城の運びになることもありましょう。その時は手筈通り、討死いたすまで。もっともこれは、有志の者のみで、意見を異にする者は、加わらずとも構わぬから、あとでおとがめを受けることもござるまい。要はおのおのの所存通りにすればよいのでな。それがしは殿の亡きあと、一藩を預かる身として、籠城に加わるほかはありませんな。君辱かしめらるれば、臣死すと思い定めている者の心は、やはり汲まねばなりますまい」

「説得できぬものでござろうかな。時勢が昔とは違う。忠義忠義と考えて、あたら一つの命を失なうこともあるまいに」

大石は黙って首を横に振った。どうにもならぬとサジを投げた風情にも受け取れるし、命

を助かれと説得すべきものではない、彼等の心情は武士として立派だと思っているようでもある。しかし私はふと、大石は実のところは、仇討だの籠城だのをしたくはないのではないか、家中がこのように騒ぎさえしなければ、おだやかに城を明け渡して済ませたいのではないかという気がした。もともと、武士気質に凝り固まり、死に急ぐような人柄ではないと思っていた。……最も困っているのは、大石かもしれぬ。

「それがしは自説を曲げませんぞ。復仇はもとより、籠城も殉死も不可。ただ開城、退散あるのみと存ずる。従って勝手に御城下を去ることになりましょう」

と、私は言ってみた。大石は、

「それは御自由」

と、答えて笑った。

「……ただ、あまり急いで、目に立つことをなされぬがよろしかろう。気の立っている者もおりますから」

私はそうしようと言っておいたが、ぐずぐずする気にはなれない。藩論が私の意見を容れないとあれば、踏み止まっても無益だ。おくれればおくれるほど、出にくくなるだろう。この地を去るのに、なんの未練もありはしない。大坂には知るべも多く、縁辺の者もいるから、ひとまずそちらに落着くことにしようかと思う。

家は然るべき空家を見つければいい。大きな住居は要らぬ。当分は何もせずとも暮せるだろう。そのうち、商売でも始めればよい。こういう時は、かねて出入りの諸商人と親しいの

が便利だ。力になってくれるだろう。

貯えは十分とはゆかないが、ささやかな店を構えるだけのものはある。私が商人と結託し、財をむさぼったと非難する者があるが、とんでもない濡れ衣だ。私はこれまで、御家の事専一に尽くしてきた。商人から賄賂を差し出させたこともなく、藩金を私したこともない。きゃつらは、私という人間を、一体どう思っているのだろう。あなたは真正直すぎて、なんでも思ったことをポンポン言い、あたりに斟酌なしに事を行うから、他人に嫌われ、損をするのだと、よく妻は言うが、その通りなのだ。私は曲ったことは嫌いだ。

私が一般よりも多少財を貯えているのは、職掌柄である。吉良殿と似たような話だが、商人からの音物を、みな賄賂だとするわけにはゆかない。それは当然の礼儀であることが多いから、昔かたぎにいちいち突返していては、角が立ち、仕事がうまくゆかぬことになる。厳格は禁物である。

金を動かして利を得ているという非難も当らない。動かしているのは私財であるし、動かせば利を生むのは自然だ。その金が役に立つからこそ、利が付くのだ。それは慾張りとは違う。そういうことが、頑迷の徒にはわからない。

金が大事だと言うと、武士の心を忘れたやつとののしる。しかもやつらは、金が大事だということを、知らぬわけがないのだ。うわべは金に手を触れたこともないような顔をした男が、勘定の係りに借金を持ちかけたり、藩金をうまくくすねたりしていた例を、私はいくつも知っている。やつらは不正直であるだけに、罪が深い。そして、私などを非難攻撃するのは、決まってこの連中だ。

私は浪人をしても、仕官などをする気はない。年も年だし、二君に仕えるのは気が重い。仕置家老という職は、心労ばかり多く、報われるところは少なく、しかもあらぬ誤解を受ける。

つくづく、武士というのは窮屈で、偽りが多く、厭なものだと思う。余生を妻と共に、ひっそりと暮せれば、私は満足だ。

しかし、郡右衛門はまだ若く、前途ある身だ。子も幼ない。生来、孝行で素直な息子であるし、嫁も人柄がよく、琴瑟相和している。郡右衛門は私に従順で、気質は私に似ているから、まず物の考え方は、両者齟齬することがない。だがこのたびの大変は別で、馬鹿な連中には与しなかったものの、大小を捨てるかどうかという点では、どう思っているかわからない。一夜、郡右衛門を呼んで聞いてみると、予想通り、何事も父上のおっしゃるようにするというので、安心した。武士は捨てるという。

「仲間は大勢おりますから、心配はありません。今後、仕官の望みはまずありますまいから、大方は刀を捨てましょう。当てにならぬことを当てにして、浪人暮しを続けるのは、愚の骨頂だと思います。商人のほうが、安気でようございます」

と、郡右衛門は言ったが、屋敷に商人はよくやってきたし、こちらから家へ招ばれて出向くこともあり、郡右衛門は商人に慣れ、彼等の暮しぶりも知っている。安気だと思うのは、よくわかる。商人には主君というものがなく、義理立ての要もない。おのれの才覚だけで世

を渡って行く。浮き沈みは激しいが、それだけに自由に腕をふるえる。知恵や力の勝った者が栄える、正直な世界だ。

「打ち明けて申しますが、殿の御短慮のために死ぬのは厭でございますよ。重恩でも蒙っていれば格別、ろくにお目通りをしたこともありませんからね。扶持をいただいているのが恩ならば、それは日頃の働きでお返ししているはずです」

と、郡右衛門の言い草は、若いだけに歯に衣を着せない。武士が好きではないのは、私の評判がよろしくなく、その累が息子に及んで、同僚などから白い目で見られているということもあるのだろう。武骨な連中とは、肌が合わぬはずだ。幼時からあまり大事に育て過ぎた嫌いがあり、柔弱のそしりは多少免れぬかもしれぬが、言うところに私も同感せざるを得ない。

戦国の昔と、当節とはまるで君臣の関係は変ってしまっている。昔は、大名の領地というものは、君臣が一体となり、死を賭して戦い取ったものだ。君は臣を頼り、臣は君に命を預けなければ、何事も行われなかった。関係はそれだけ緊密で、臣は一身をなげうって働き、代りに扶持を得た。討死しても、子孫が厚く報われる。それで成り立っていた。

ところが現今は、何もかも出来上がってしまっている。自然に事が運ぶから、家来は与えられた役目を無事に勤めていれば、それで済む。家禄も決まっているから、それだけの働きをして、目立たぬほうが、賢い処世である。

主君もまた、みずから乗り出して庶政に当ったり、特定の者に目をかけたり、しないほうがよい。一切を家臣に任せたほうが、万事支障がないのだ。従って、君臣の関係は非常に淡くなってしまっている。扶持をいただいているので働く……それだけのことだ。郡右衛門の言う如く、ろくろく御目通りもせぬ者のほうが多いのだ。まして、御側近くの者は数えるほどしかいない。それにしても、昔ほどの深い情誼はない。

領民にしてもそうだ。国替えがある。そうすれば、他国から別の殿様が来る。これでは親しみの湧く道理がなかろう。私はそれも仕方がないと思っている。時の流れというものだ。士道が地に落ちたと、よく昔流の者は嘆くが、では戦乱の打ち続く世のほうがよかったと言うのか。そんなことはあるまい。

なるほど、昔は君臣の交りは深かったかもしれぬが、その反面、主君が一時の怒りに任せ、家臣を造作なく手討ちにしていたということもあるのだ。

亡君を悪く言いたくはないが、殿がもし乱世に在られたら、手討ちに遭う家臣は、さぞかし多かったことであろう。だが、いまはそれができない。世は暴君を上にいただけない仕組みになっている。

だから、君臣の関係は新しい目で見なければならない。臣下が主君に多くを頼まないと同様に、主君も臣下に多くを望んではならないのだ。殉死や仇討においてをや。

しかも、こんどの一件は、なんと言っても、無思慮極まる癇癖の爆発にある。言わば、あとは野となれのわがままである。そこまで義理立てする要はあるまい。私は殿に御恩を蒙ること大なる者だが、その恩顧には答えていると思う。赤穂藩の内証がよいと言われ、塩田の

事業が円滑に運んでいるのは、だれの功績か。むろん、私ひとりの功績とは言わないが、その大なる者であることは疑いを容れない。だから、仇討の、城を枕のという世迷い言に同ぜず、おだやかに退去することについて、なんらやましいところはないつもりだ。

四

家を空けて退くとなれば、急に行えることではない。武具、家財道具、衣類そのほか、永年住むうちに、相当な品数になってしまっている。われわれ夫婦の分と、郡右衛門夫婦の分とある。これをいちどに運ぶことは、できもしなければ、すべきものでもない。人目に立ってはならない。このところ私は、おびやかされ続けている。城内でも過激派の憎しみの的にされ、ともすると喧嘩を売られそうになるし、屋敷の近辺にも、怪しい者共がうろついている様子だ。道具を大掛りに運び出すところを見られようものなら、それ大野が逃げるぞとばかり、邪魔立てをされるに違いない。悪くすれば、捕えられるか、斬られるかということになりそうだ。

私と同様の、他の者は見逃しながら、私ばかりを狙うのは怪しからぬ話だが、物の道理のわかるやつらではない。

そこで、郡右衛門とも相談の上、少しずつ荷造りをし、できたものから、夜中に一旦他家へ移すことにした。

懇意な商人で大津屋十右衛門、木屋庄兵衛という者がある。この両名に掛合い、私の分と

郡右衛門の分と、二つにして預けることになった。日頃目をかけていた者たちであるから、否やはないものの、主家が没落して、立場が逆になったこともあるから、相当の金子をつかわした。両者にひそかに預けておけば、身一つでどこへなりとも行き、日を置いてから取りにくることもできる。

どれほどの品数になるかはわからぬが、いずれ大小二百個近くにはなろう。倉にでも入れさせるほかはあるまい。浪人の身となるからには、金銭と諸道具は大事にしなければならぬ。一部を捨てて行くなど、もってのほかだ。荷造りなどは私も手伝った。大津屋、木屋へ運ぶのは中間、小者であるが、提灯もつけさせなかった。

大石とその一党が、何を話し合い、何を画策しているのか、私には一向わからなくなってしまった。私のみならず、私と同じ立場の穏健派の者も同様だ。全く仲間外れにされてしまった。

だが、大体の様子は見当がつく。現在大石に付いている者のうちにも、私に親しいのがいるし、大石の親類で、止むなく大石に与しているような者がいて、知らせてくれる。

どうやら大石は、考えを変えたらしい。籠城はせぬことになったようだ。いや、城受取りの軍勢と戦いを交えることはせず、城に立て籠って腹を切るのだと言う者もいる。

腹を切るとは何の謂か。公儀には逆らいはせぬが、意地は立てるということであろうか。

私にはわからない。籠城して一戦を交えるほうがまだしもではないか。公儀の指図に従うのなら、いさぎよく開城すべきであるし、さもなければ公儀をはっきり敵に回すべきだ。吉

良が敵なら、これを庇護し、片手落ちの処分をした公儀も敵というわけだ。大逆も仕方がない。切腹とは腑に落ちぬ。

あるいは切腹は誤聞で、大石は実は開城に傾いたのかもしれぬ。それならば大いに喜ばしいが。

このような雲行になってきたのも、浅野本家ほか親類諸家、また大学様からも、次々に説諭の書状が届き、しきりに妄動をいましめたからに外なるまい。大石たちも、無下に斥けるわけにはゆかない。さらに、赤穂城受取りの段取りが、着々と進められたこともある。すでに正使副使が決まり、副使たる御目付荒木、榊原、石原の三名は江戸を発しており、近辺諸大名も軍勢を催すことになっている。正使は播州竜野城主脇坂淡路守、備中足守城主木下肥後守の両名だ。これまた軍勢を率いてやってくる。いかにも峻厳と言おうか、堂々としたもので、わずか数十人が籠城してみたところで、鎧袖一触に過ぎないのだ。この眼前の事実が、さすがの頑迷連中をためらわせているのだろう。……しかし、まだどう変るかわからぬ。

城中における大評定は、四月十一日に開かれ、これにはわれわれも皆出た。さきに大石が江戸に遣わした使者、多川、月岡が帰着した当日である。伝聞によると、両名は大石が大学様御取立の嘆願書を、直接その筋へ差出し、藤井、安井の両家老、ならびに大学様に見せてはならぬと言われていたにもかかわらず、失念してまず家老に見せ、家老が驚いて、これを大学様、戸田采女正殿へ知らせたらしい。そこで嘆願書は公儀へ渡らず仕舞いになり、反って説諭書をことづけられたのだ。内容は、恭順こそ、常日頃公儀を重んじられた殿の御存念

に沿う所以で、それが奉公の道だというもののようだ。

私は内々喜んだ。多川、月岡に入知恵をしたのは私ではないが、およその見当はつく。恭順派の重職であろう。これでうまく暴派の意図をくじいてしまった。大石が持たせた嘆願書というのは嘆願に似て嘆願にあらず、御取立なければ、当方は田舎者ぞろい故、及ばずながら一戦するぞという含みを持たせた、甚だゆすりがましいものであったらしい。多川、月岡が、言いふくめられた大切な件を、失念するなどということがあるものではない。

ところで、その日の評定では、まるで口論など起らず、止むを得ざることとして、開城に決まってしまったのは、あっけなかった。硬派が猛反対をするかと思っていたが、黙っている。大石は一切余計なことを言わず、開城の手続きを滞りなく行うよう、抜かりなくしなければならぬとか、御取立一件は、今後も嘆願を続けるつもりだとか話していた。

穏健派には安堵と喜びの色があったが、私はどうも妙だという気がしていた。きゃつらが開城を異議なく受け入れたのが納得行かぬ。内々に、大石を交えて談合し、盟約でもしたのではあるまいか。盟約とはすなわち、復讐のことだ。大石は遂に、巻込まれたことになる。

それとも、一旦は彼等に与して首領に立てられておき、追々に彼等をなだめ、結束をゆるめ、潰してしまおうという魂胆だろうか。大石なら考えそうなことだが、本人に聞いても、もちろん言わぬだろうし、この男のことはやはり見当がつかない。

それはどうであれ、私の気は軽くなった。当初予想した通りになった。私の予想、推測は、自慢ではないが、まず当る。これでなんの遠慮もなく主家を去れる。仇討をしたい者はすれ

ばいい。こちらのあずかり知らぬことだ。成功は覚束なく思われる。復讐に備えて江戸表では吉良殿、御親類上杉殿、また公儀においても手を打っていようし、隠密なども目を光らせているに違いないから、個々に忍んで行っても、搦め捕られるのが落だ。

一体復讐など、江戸ではやらぬに違いないから、同情する者、力を貸す者もあるまい。

さて、十二日の評定では、城明渡しについて諸準備の一件、藩札引換のことなどが議せられた。私は一切の事務から手を引いている。これまで、細かな事務などは見なかった大石が、どうやるのかと思っていると、取さばきがなかなか堂に入っているのに驚いた。腰を上げるのには暇が取れるが、いざ上げてしまうと、意外に働く男だ。こういう男が、頑愚派に惑わされているのは、全く惜しい。

藩札の一件では、私と大石の意見は喰い違った。藩札は他藩でも出している。諸事不如意はいずこも同じで、一時のがれには藩札を出すにしくはない。だが、出しすぎると混乱を来す。物の値が上り、藩札の値は下ってくる。下ればまた出すという繰返しになる。その運用はむずかしい。

国替えや、こんどのように領地召上げとなれば、藩札を金銀と交換せねばならぬが、その率は四分一五分が通り相場だから、私は異議もないものと思って、そう建言したのだが、大石は六分にするという。そして領民に厚くし、人心の動揺を防ぐと言うのだが、相場でなぜ悪いのか。領民も承知のはずなのだ。極言すれば、いくばくかの金になりさえすればいいのだ。非常の時には、しばしば藩札のごときは反古になる。六分替にするのと、五分替にするのとでは、剰余金の額が大幅に違ってくるではないか。それは直ちに、藩士に分配する金額の多寡にかかわってくる。分散する藩士にこそ厚くすべきではないか。浪人の身には、金銭こそ頼りなのだ。

まず町人百姓が困窮することのないよう、配慮せねばならぬと、大石は言うのだが、その辺が彼の物を知らぬところで、困窮しているのは武士である。町人百姓はなんとでも融通が利く。彼等は武士ほど馬鹿正直ではなく、財をかくす術を知っているものだ。

私が言い募っていると、

「御家老の取り分が減りますからな。無理もない」

と、あからさまに嘲笑したやつがいた。あまりあほらしいことを言うので、一顧もしなかったが、ここまで悪く思われていれば、腹も立たない。私は自分一個の利益を考えて物を言っているのではない。翌十三日にも、同じような喰い違いが起った。

五

……思い出したくもないが、あれから様々なことが起った。こうして縁側に端居していると、なにもかもが嘘のようだ。

この住いは街中にあるが、通りからはかなり引込み、小庭もあって静かだ。身分をかくして、町家を借り受けたものだが、赤穂の屋敷とは違って手狭だとは言え、捨て難い好さがある。なによりも、武家屋敷の仰々しさがなく、ささやかだが、心楽しく住める。本当に上下

を脱いで、くつろいだ気がする。私はもともと華美を好まない。辺幅を飾るのは嫌いだ。

郡右衛門夫婦も共に住んでいる。夫婦は少々気落ちしているようだが、それはあのどさくさで、孫の娘を連れ出す暇がなかったからだ。しかし、風の便りによれば、孫は大石の家に養われているそうだから、そのうちに引取りにも行けよう。……全くあの時は、虎口を危うく脱したのだった。

大津屋、木屋に預けた道具も、まだそのままで、きゃつらに横領されたような形だが、これもなんとか手を回し、取り戻すこともできよう。人のものを渡さぬとは言語道断だが、狂人共に道理を説いてもわからない。ただ、大石はわかった男だから、部下に滅多なことはさせまい。

道具類など、当座間に合いさえすればよいのだ。あれをみな運びこんだところで、反って置き場所に窮するだろう。戻らねば戻らぬで、あきらめるほかはない。私はそれほど執着は持っていない。ただ、わがものはわがものと思っているのを、きゃつらが、私を貪欲の性だと勘違いしているだけのことだ。

城の明渡しは無事に終ったらしい。家中では、赤穂をすでに引払った者もあり、残っている者もある。大石は近辺の召使いの家に寓居し、何か出来物を患って寝ているそうだ。妻子は実家へ帰したという。

四月十三日、剰余金の分配について、大石は藩士一同へ均等にという意見だが、われわれは反対し、禄高に応ずべきだと主張した。

どうも大石は、人気取りをし過ぎるようだ。これは一つには、大石を擁する過激派に、軽輩が多いという理由のためだ。均等にすれば、味方に多く取込める。

しかし、これは無茶というものだ。身分、格式を無視してはならない。千石取りは、千石取りだけの出費を要する。必らずしもぜいたくというのではない。召使う者の人数を考えてもわかることだ。下の困窮者に手厚くすべきだというのもわかるが、貧者の世帯は小さいのだ。また、奉公の仕方が、重職と足軽の如き者とでは違う。仕方に応じて禄を喰んでいたのであれば、藩金の分配もそれに準ずべきなのは、自明の理ではないか。

結局、折衷案となったが、これには別に異存もなかった。下に厚くという大石の言い分にも、一理はあるのだから。

ただこの際、札座の役人で、藩金をいくばくか横領し、逐電した者のあることが判明したので、私は年甲斐もなく激怒した。このような時に、公金に手をつけるとは、許されざることだ。同時に、札奉行たる岡島八十右衛門の怠慢のそしりは免れない。日頃の出精が悪いから、こんなことになる。不行届だと私は岡島を面罵したが、それは当然だろう。ところが、岡島は血相を変え、わなわなとふるえ出し、私にいまにも飛びかかろうとするような構えで、にらみつけた。さすがに言葉を返しはしなかったが、これは逆怨みというのだろう。

あとでわかったのだが、岡島は私の言葉を勘違いして受取ったのだ。私は不行届を言っただけなのに、お前も同腹なのだろうと言われた、と思い込んだらしい。岡島は粗忽者である上、かねて私を佞奸邪智の者と決めてかかっているから、誤解してしまう。

私が夜逃げをしなければならなかったのは、この岡島の誤解が元である。

金子の分配が終って、私は帰宅したが、夕刻になって岡島がやってきた。取次が、様子がだならぬと言う。これは、斬りに来たなと私は察した。いまさら誤解だと説いたところで、岡島は言い逃れとしか取らないだろう。

不快だと言って通すな、と私は命じた。ところが岡島は帰らず、是非面談しなければならぬことがあるという口上だ。取次が止めるのを押し返し、茶の間近くまで踏み込んできた。

「大野殿、大事な用があって参ったというのに、なぜお会いなされん」

と大声で声をかける。言い方が切迫している。妻はふるえ上った。私も身の危険を感じた。こういう男に斬りかけられ、命を失なっては、たまったものではない。私は剣の道に長けていないので、岡島を相手にしては、斬られるだろう。人間、だれしも死にたくはないのだ。

「お目にかからぬうちは帰りませんぞ」

と、岡島は戸口で言い募る。いまにも戸を蹴破って入ってきそうだ。正直なところ、生きた心地がしなかった。郡右衛門もその場にいたが、色を失なって動けないでいる。

腹痛で寝ていて、話ができない、あす必らず会おうと取次に言わせ、押し問答がしばらく続いたが、やっと引取って行った。

私が恐れたのは、岡島一人のことではなかった。この模様では、岡島は同腹の者を誘い、奸物とでも称して、私を血祭りに上げようとするかもしれないのだ。そうすれば、きゃつらは気勢が上るし、穏健派への腹いせにもなる。迷っている者は、過激派に鞍替えするかもしれない。今夜にも襲われるかもしれない。

家族一同との話し合いは、すぐついた。とにかく即刻脱出しようということになり、一刻を争うから、手回りの品と金子だけを、おのおのが持ち、別々に家を出ることにした。奉公人も散り散りである。一同、命さえつつがなければ、体裁などは構っておられない。私は女乗物に乗る。私たち夫婦が先に出た。すみやかに赤穂を離れ、一時奉公人の家にかくれる手筈にした。夜陰であるし、うまく人目を逃れることができた。郡右衛門夫婦も、あとから無事に逃れてきた。見ると孫と乳母がいない。どうしたと聞くと、父上たちと一緒だったのではありませんかと言う。

大変なことになった。乳母は孫と添寝をしていたので、いよいよとなるまで起さずにおいたのだが、取りまぎれて、お互い、相手が帯同しているものとばかり思っていたのだ。

嫁は連れに戻ると言うが、それは危険だ。長い夜道でもあり、不慮の災難に遭わぬとも限らない。郡右衛門では尚更危険だ。奉公人をやろうにも、捕えられてわれわれの行方を言わされるかもしれない。

私は嫁をなだめ、乳母も付いていてくれることだから、なんとかしてくれるだろうとさとした。嫁は泣く泣く納得したが、いまだに手許へ帰らぬので、多少私を怨みに思っているようだ。しかし、そうするほかはなかったのだ。思い返して、われわれはよほど周章狼狽していた。恥辱には違いない。言いつくろおうとは思わない。

六

一年余り経った。元禄十五年八月になった。旧藩士の消息は、次第にわからなくなった。赤穂にはもう、ほとんど住んでいない。

大石は京の山科に居を構えたという。孫娘は昨年秋、女の使いを赤穂近辺の大石の寓居にやり、首尾よく取り戻した。大石は私が無事でいるか聞いたそうだ。

仇討の一件がどうなっているか、一向にわからない。山科に人が集まっているとも聞かぬ。大石は京にしばしば出て、遊所に通っているそうだ。その辺から考えると、一件の企ては挫折したのではあるまいか。殿の切腹の日から一年数ヵ月も経過し、しかも何も起らないのだ。私が思った通り、大石は過激派を上手に引き回した末、潰してしまったのではないかと考えられる。そうだとすれば、やはり大石は食えぬ男、物のわかった男だ。

大学様は広島浅野家へ御預けになった。御取立は実らなかった。最初からわかっていたことだ。

この二十六日に、私は郡右衛門を連れ、ひそかに赤穂に入った。家財を取り戻すためだ。近藤、渡辺という、気心の知れた者共に会い、様子を聞くと、大津屋、木屋の荷物はそのままにあるが、封印して、われわれに渡さぬことになっているという。理不尽も極まれりと言うべきだが、商人両者が大石らにそう命じられているなら、渡してくれる気遣いはない。また、このような有様では、強いて受取ったとしても運ぶことができまい。

私は一応荷物はあきらめ、金を持ち出すことにした。あらかじめ近藤、渡辺をやり、その旨を言わせた。人の心は計り難いので、それぞれに金を持たせてやった。夜に入って、まず大津屋に駕籠で乗りつけ、主人十右衛門に会った。十右衛門は迷惑そうにしていたが、三百両ばかり取り出すのを黙って見ていてくれた。

このあと、木屋に回るはずだったが、駕籠に乗るところを、町人に見られた。一、二度は会った男だったかもしれぬ。男が尾けてきたので、逃れようとしたが、他の町人共が次第に集まってきて、追い始めた。町人共は私に何の恩誉もあるわけはないが、大泥棒でも見付けたように騒ぎ立てる。私も郡右衛門も、町人のなりで、刀を帯していない。彼等は得物などを持っている。……これほど恐しかったことはない。なぜそのようにわれわれをさげすみ憎むのかわからない。

われわれ親子は大勢に囲まれ、悪口を浴せられた。金を吐き出せと言う。自分の金だと弁解しても、聞き入れない。おそらく大津屋が、わが身可愛さで、盗まれたとでも言ったのだろう。渡さねば袋叩きに遭いそうだった。

それから町方に引渡され、さらしものにされた挙句、赤穂を追い出された。赤穂はすでに他国、役人も他藩の手の者だが、私たち父子のことは聞き知っていたと見え、雑言の限りを尽して、われわれをはずかしめた。

だが私は、自分の持物をあきらめる気はない。もう仇討は夢となり、過激派も穏健派もなくなってしまったではないか。きゃつらはどこまで私の邪魔をすれば気が済むのか。

私はきっと家財、金子を取り戻す。大石に言ってやることにしよう。大石も自由の身になったはずだから、快く引受けてくれるだろう。いや、それより、私の荷物が商人の家に渡り、封印をほどこされていることなど、とうの昔に忘れているかもしれない。

七

旧赤穂藩、浅野内匠頭家来、大野九郎兵衛につき、お尋ねがありましたので、赤穂、大坂天満、丹波亀山等へおもむき、探索いたしました。そのあらましを申し上げます。

四十七士の一挙以来、仕置家老であった大野九郎兵衛の評判はすこぶる悪しく、武士にあるまじき卑怯未練の者、貪欲の者と言われ、志士中においても、かの者に筆誅を加えている者、悪し様に申した者もありますが、果してどうであったか、にわかには断じがたいように存ぜられます。

赤穂などでは、大野の評判はやはり悪うございますが、これは大概、大野をよく知らず、親しく出入りをしたことのないような町人の申すことで、物堅く信用もあり、大野と親密であったという商人は、これはきわめて少数でございますが、大野を悪くは申しません。遠慮勝ちながらみな賞めております。おだやかな、公正な人物で、下情にも通じ、極めて聡明であったと、口をそろえたように申します。収賄の沙汰などは全くなかったと申しております。

大野が真先に赤穂を退去する際、家財などを預けたという大津屋、木屋は引続き商売をしておりますが、やはり悪くは申しません。その家財については、大石殿の口添えで、大野が

無事受取り、いずこへか持ち去ったそうでございます。息子郡右衛門の分と共に、大小百六、七十ほどもございました由。いずれも厳重に封印の上、何人にも中を見せず、近付けもしなかったと申します。

かくのごとく、大野の評判は区々にて、大坂天満においても同様でございました。大野は大坂では米屋をしておりました由ですが、いや米屋ではなく、金貸しであったとも申します。住居は質素な町家で、ただ小さな倉がありました由。現在はなくなっておりますが、おびただしい家財は、その倉に納めてあったかと思われます。大野は同地の商人少数と交りがあり、金貸しをしていたのは確かなようで、かなり裕福であったと見えます。

大野は四十七士の討入後間もなく、丹波亀山に移転しておりますが、その理由は明らかではございません。ただ、大野の前身を知っている者が、討入りのことを話しますと、大野は苦笑いをしながら、あれだけは予想が外れたと語っておりました由。

亀山では、何も商売のようなことはせず、大野はただぶらぶらと致し、息子郡右衛門は寺子屋を開き、近在の子弟に読み書きなどを教えておりましたと申します。

同地での評判は少なく、これは大野を知らぬ者が多かったせいでございましょう。あのおびただしい家財はどういたしましたものか、亀山には運んでいないようでございます。大坂で売り払いましたものか。

大野はいかにも武士らしき人で、しばしば野山を歩き、また庭で槍を振り、刀を使っているのを見たと申す者もおり、おとなしい気の弱そうなただの年寄りであったと申す者もあり

ます。郡右衛門もまた同様で、格別の評判は残っておりません。

亀山を引き払いましたのは、いつ頃のことか、しかとはわかりませんが、同地に二、三年も居たでございましょうか、以来行方は杳として絶えております。

赤穂の旧家臣においても、大野の評判は二分されております。もちろん腰抜けなどと申す者が多うございますが、中に、大野は大石が最も信を置いた人物なりと申す者がおりました。この者の言によれば、万一大石一党の復讐が水泡に帰した時、大野とその同志の者が、二番手に控えていたのであるということでございます。率先夜逃げなどを致した振舞は、まず味方を欺くための狂言にて、大野は同志と共にいかにも卑怯の武士の如く振舞い、実は後備えとして控えると同時に、大石らのため、経費の調達などにも当ったのだと申します。

もしその者の言が真実であるとしますと、四十七士が欺かれたのもわかります。また、夜逃げ等における、あまりにも武士らしからぬ様子、見苦しき捕われ様なども、さてはと思われます。また、百六、七十にも及ぶ家財と申すものが何であったか、封印せられていたのはいかなるわけか、この辺の事情も推察できようというものでございます。経費調達については、理財に長けた大野には、全く似合わしき任務でありましたろうし、そもそも藩金分配の際の引責騒ぎなども、何やら謀計らしく思われて参ります。

大石一党が本懐の上は、最早用なしであり、家財が武器などであったとすれば、売払いは当然でございましょうし、金貸しなどをする要もなくなったはずでございます。大野父子はいま、いずこの空の下におりますか、おそらく心にかかる雲もなく、風日を共に悠々自適し

ているのではありますまいか。大石らの本懐を聞いて、喜ぶと同時に落胆致しました心の裡、さこそと思いやられます。

さて、そうは申すものの、大野の後備えの件は、確証も何一つ無く、真実と申すわけではございません。たまたま、大野が折りに触れて書きしるした心覚えを、大野の親類家より借り受けることができ、それを筆写いたしましたものを御高覧に供しますが、これにて考える限り、大野はとても後備えとして主君の仇を報ずるような人物ではなく、一風変った侍であるにもせよ、要するに骨無し、未練者と称すべきかと存ぜられます。

しかしながら、この心覚えにして、敵を欺く偽りのものであるとすれば、何をか言わんやでございます。

大野九郎兵衛に関する探索は、かくの如きもので、正体は遂につかめなかったと申すほかはございません。任を全うせず、誠に面目次第もございません。

権八伊右衛門（ごんぱちいえもん）

一

長い間の浪人暮しで、年も三十を過ぎると、伊右衛門は焦らざるを得なかった。これ以上年を取れば、養子の口はいよいよなくなるだろう。然るべき武家の養子に入るほかに、仕官の道はない。学問、武術、あるいは理財の道でもいいが、そういうもので認められ、大名、旗本に抱えられる浪人もないではあるまいが、それは例外であり、よほど、才能と運に恵まれていなければならない。

伝手も必要だ。父親なり、自分自身なりに、頼むべき目上、知友があまたいてくれたなら、根気よく足を運び、頭を下げているうちには、ふっと禄に有りつくこともあるに違いない。だが、伊右衛門には人にぬきんでた才芸がない。また伝手も皆無である。父子二代にわたって、市井に埋もれていれば当然のことで、武士との接触すらほとんどない。

亡父の生国は摂州で、さる大名に仕えていたと聞かされたが、それも夢のような昔の話である。

武士を捨てて町家に婿入りしようにも、これはこれでむずかしく、ひとかどの町人ならば、得体の知れぬ浪人などを相手にしはしない。町娘に思いをかけられるという話はよくあるが、事実めったには起らないことだから、話にもなるのだろう。

伊右衛門は別段様子のいい男でもなく、派手な動きのない、おとなしい浪人である。

……相手の家は、代々御先手同心だという。御先手のうちの、鉄砲組である。あるじは田

宮伊織といい、病気で、もしものことがあれば家が絶えるので、早く養子をほしがっている。娘は二十一歳になり、お岩という。

伊右衛門は秋山長左衛門という男に会った。彼は田宮伊織と同役で、伊織に頼まれ、適当な婿がねを探しているのだと言った。

話を聞いていると、秋山は仲立ちのことを、半ば仕事にしているようだ。養子、または婿養子をあっせんして、双方から礼金に有りついていると思われる。

伊右衛門がもっと若く、気持にゆとりがあったら、この話は断わっていたかもしれない。御先手同心は、れっきとした役職ではあっても、家禄はやはり低い。手内職でもしなければやってゆけないだろう。どうせ養子に行くなら、同心よりも家格が上であるほうが、いいに決まっている。

それに、お岩という娘が、二十一になるまで婿を迎えることができなかった点も、気掛りである。なぜ婚期を失したのか。

父と娘の二人暮しで、父の世話をするかたわら、家の切り盛りに忙しかったのだ、と秋山は弁解したが、伊右衛門の得心のゆかぬ顔色を見て取ると、

「あまり美女というわけには参らん。少々あばたがあり、目なども細いという難はあるが、そのくらいの女は世に多いじゃござらんか。化け物面というじゃなし」

と言ってから、

「めでたく縁組みをしたあとのことは、それ、なんとでもなる。そこはお主の働きというも

のじゃ。なに、伊織殿もその辺のところは心得てござろう。田宮の家を無事嗣いでくれさえすれば、伊織殿としては満足なのでな」

と付け加えた。浮気は大目に見るというのだ。そういう譲歩をしないと、婿の来手がないらしく思われる。

伊右衛門は迷った末、ともかく田宮伊織に会ってみることにした。

四谷左門町に、御先手の組屋敷がある。同心たちの住む一角は、全く同じような門と塀が立ち並び、その中に田宮の家もある。これだけ同役の家がかたまっていて、お岩の婿になろうという男がいなかったのかと、伊右衛門は気が沈んできた。

秋山が同道している。あらかじめ知らせてあったので、門内も家の中も、掃除が行き届いている。小家ではあるが、むろん、伊右衛門の住む下谷の裏長屋とは、まるで違う。

迎えに出たのは中年の女で、親類か、近所の妻女に手伝いを頼んだものだろう。

伊織は病床にあったのを、起きて衣服をあらため、伊右衛門に会った。伊織は、伊右衛門が独り身で、身持もよく、子供に手習いを教え、手紙の代筆、届書の代筆、看板書き、または傘、凧張りなどの手内職をし、時には日傭に出などして暮しており、渡り奉公などはやらず、酒、博奕に手は出さないと、秋山から聞かされているはずだ。

伊右衛門は髪を結い、さかやきを剃り、身なりを整えている。そうしてみると、いかにも尋常に、おとなしやかに見え、容貌も立派なほうである。

伊織は満足した様子だった。秋山の仲人口をどのくらい信じたかはわからないが、予期していたより、印象がよかったのだろう。事実伊右衛門は、無理をしておとなしく造っていたわけではない。

お岩の姿はずっと見えなかったが、四方山の話も尽きた頃に、茶を捧げて出てきた。着飾ったというほどではないが、色どりのいい服装をし、顔にも薄化粧をほどこしているようだったが、決して顔は上げなかった。伊右衛門も、のぞき込むわけにはゆかず、チラと流し目にした程度にすぎないが、秋山が口にしたように、お化け面ではなさそうだった。あばたと言っても、化粧でかくれるほどのものかもしれない。

伊右衛門はホッとし、それ以上はくわしく眺めないことにした。人並みでありさえすればいいのだ。人並み以下としても、不細工というだけなら構わない。そんな弱味があれば、反ってよく尽してくれるかもしれない。

お岩はとうとう、ろくろく顔もみせないで引込んだ。背丈、肉付きなども普通のようだったが、どことなく堅い感じがある。それが、おずおずとして、身を堅く縮めているのとは違う。立居は非常に静かで、落着き払っており、娘らしい羞恥を示すような物腰は見せなかった。……だれにも気を許さない、身を鎧っているとも思われる。

生れ付きかどうかはわからないが、かたくなな気性なのかもしれない。あるいはひがみ根性などもあるかもしれない。その上気位でも高く、浪人上りの婿をさげすむようなところでもあれば、とても夫婦として暮せたものではあるまい。伊右衛門の気持は重くなった。

だが結局、伊右衛門はお岩の婿になることを承知した。考えてみれば、もうこの上の浪人

暮しは厭である。貧しくとも、明日のこともわからないその日暮しよりはいい。食うことに身をすり減らすのは沢山だ。田宮の家に入れば、一応は身分も出来、世間も広くなる。独り者の苦労をせずに済む。

お岩は案外、いい妻になるかもしれない。姿形が美しいことを望むのは、ぜいたくというものだろう。

伊右衛門にはそれほどの欲がなかった。浮気をしたいとも、暖衣飽食したいとも思わない。落着いて暮したいと思うだけだ。

二

式は田宮宅でごく内輪に行われた。媒酌が秋山夫婦、田宮の親類数人、伊右衛門のほうには近親者がいないので、仮親のようなものを頼んだ。伊右衛門の支度は、すべて田宮が金を出して調えさせている。

伊右衛門が、お岩の顔を見たのは、床入りの時である。しかし、行灯の明りが乏しいので、やはりはっきりとは確かめられなかった。お岩も、まともに顔を合わせるのを避けているようだった。もっともこれは、初夜の新妻ならだれしもそうだろう。

お岩は髪を解かし、白無垢の寝衣を着て、神妙に床に入り、伊右衛門と並んで横たわった。伊右衛門は、もしお岩が怖じ恐れているようであれば、心配することはない、などと慰めるつもりでいたが、どうやらその必要はなさそうだった。お岩の体は震えず、縮こまりもせず、静かに落着いていた。呼吸も乱れていなかった。まないたの上の鯉のようだ。

伊右衛門はなんとなく、物足りない思いをした。彼は好色な男ではないが、独り身の男の常として、抱いた女はかなりの数にのぼる。ほれて続いたような女もいた。だが、それらはみな女郎か、それに近いような女で、素人の、生娘というのは、お岩が初めてなのだった。従って、それなりの期待があったのだが、どうもお岩は落着きすぎている。

伊右衛門はしばらく、お岩に手を触れずにいた。ひょっとして男を知っているのかとも思ったし、いやそうではあるまい、こんな場合に取り乱さないのも、武士の娘の覚悟であろうなどとも思った。なんにしても、多少気まずかった。

それに、顔のこともまだ気になっている。一つ床の中にいても、案外相手の顔は見ないものである。

一儀に取りかかっても、同じような感じは付きまとった。お岩はあくまでも従順で、どう扱われても御自由だというふうだ。そうは言っても、本能的な抵抗とか拒絶のような動作はありそうなものだが、これもない。新鮮な手答えというものが感じられない。

伊右衛門は独り角力を取っているような形になり、なんとか事は済ませたが、興醒めであり、少し薄気味悪くもなった。

むつごとなどというものを、交せる雰囲気でもなかった。お岩はそのあとしばらく、呼吸を整えていたが、だれに教えられたものか、要領よく後始末をし、伊右衛門の寝衣まで直してやり、それから静かにしていると思ったら健康な寝息を立てはじめた。

伊右衛門は、お岩が目を覚さぬように体の向きを変え、こんどこそじっくりと、彼女の顔を見た。それから複雑な溜息をついた。

お岩は、恐れていたほど、みにくい女ではなかった。丸顔のほうで、顎が張っていたり、頬骨が出ていたり、ということもない。目、鼻、口は小さいほうだ。これも、難というほどのものはない。強いて言えば、開いている時の目が細すぎ、ことに左目がそうだ。だがこれも、不具と呼ばれるようなひどさではない。

確かにあばたはあった。顔の右半面に多いが、ごく浅いものである。

伊右衛門の溜息が複雑なのは、これならけっこう満足すべきはずなのに、満足の情が起ってくれないからであった。なぜかはわからないが、ひどく物足りなく、せっかくの気がそがれたようだ。

お岩は間違いなく生娘であった。体はさすがに、若い張りを持っていた。薄暗い中で、肌も白く見え、餅肌というのではなかったが、手触りは思いのほかになめらかだった。

人形を抱いたようでもない。できるだけ慎み深く、刺激に反応しないようにと心掛けても、そこは生身で、体は敏感に反応してしまう。そういうところもあった。

だがそれにしても、やはりつまらない。初めて肌を合わせたという、心の弾みがない。伊右衛門にないばかりではなく、お岩にもなかったのではないかと思われる。

妙に男の気を引かない女というものがあるようだ。要するに、つまらない女ということになる。

伊右衛門は、それ以上あれこれと考えるのはやめにした。ぜいたくを言ってはキリがない。おとなしく、目立たず、従順で逆らわず、まめまめしく仕えてくれる女なら、これに越したことはないではないか、と思い直した。妻というものはそれでいい。なにしろ、家に風波がないのが第一だ。女狂いをしてやろうなどという望みはない。

祝言は内輪に済ませたが、田宮伊右衛門として一家のあるじになれば、それだけでは済まず、近隣の者を招いての振舞い、組頭以下、同役を呼んでの宴席、さては、方々へのあいさつ回りと、物入り、多忙の日が続いた。

伊右衛門の評判はいい。長い浪人暮しの垢は、染みつくほどにはなっていなかったし、腰が低く、適当な世辞も言える。万事控え目にもしている。

それに、幾分かは同情もあったかもしれない。浪人の足を洗ったにしても、それほどいいこともないのだ。義父の伊織が小金でも溜めていたのならともかく、そういう才覚のある人物ではなく、ことに病気勝ちになってからは、当然ながら、薬礼そのほかの出費がかさむ。蔵米三十俵にわずかの扶持米では、爪に火を灯しても足りない道理だ。

妻が美女であったり、美女とまでは行かなくても、男心をそそる、女盛りであったら、埋め合わせはつくというものだが、お岩は男がだれも言い寄らなかった女だ。つまらない、物足りないという感じを持ったのは、伊右衛門には限らないようである。

「お岩どのは、どんな工合じゃ」

と露骨に聞く者もいる。寝屋での工合は、意外にいいものだ、といったようなことを聞きたいのだろうが、伊右衛門は笑ってごまかしていた。実際のところ、いいとも悪いとも言えなかった。

お岩はずっと家にくすぶって、父の面倒を見ていたのではなく、奉公に出ていたこともあるのだという噂も、伊右衛門の耳に入る。なるほど、そういうこともあったろうと思われるが、彼にはどうでもいいことだった。

ともかくも伊右衛門は、田宮家での暮しに次第に慣れてきた。

伊織は伊右衛門には遠慮気味で、頭ごなしに物を言うことはなかった。なるべくお岩の手をわずらわさないように、そして婿に常に気を付けて仕えるようにと、気を回しているようだった。

だがお岩は、父の看病に手を抜くこともなく、伊右衛門の世話をないがしろにすることもなく、黙って働きずくめに働いていた。

お岩はもともと口数が少なく表情の変化にも乏しい女である。ねぎらいの言葉を掛けてやろうにも、なんとなくためらわれるようなところがある。

新婚ではあり、伊右衛門は三日にあげず、寝屋でお岩を抱いた。だが、初夜の頃と、あまり変化はない。お岩のほうに、男女の交わりの楽しみが、いくらかわかってきたような気配はあるものの、それをお岩は率直に出そうとせず、慎しみ深さで押し殺してしまう。いや、慎しみ深さではないかもしれない。快さが湧き起るのを嫌っているようにも思われる。ある

夜、お岩が常にないほどの乱れ様をしたことがあったが、あとで彼女は、まるで怒ってでもいるように、伊右衛門に背を向けて動かなかった。伊右衛門が気にしてのぞき込むと、珍しく拒むような態度を見せ、それから顔を反けて、ニヤッと笑った。

どういう意味の笑いなのかわからなかったが伊右衛門はゾッとした。

ベタベタしたことは一切ないが、まず夫婦の生活は普通で、伊織は安心しているようだった。伊右衛門がお岩を抱く度数は、少しずつ間遠になった。

三

御先手組は、戦陣では将軍の先手をうけたまわる役目だが、平時では江戸城中の諸門の警衛に当っている。江戸城には大手門、内桜田門ほか、城門が六つ、城中諸門は六十あったとされており、それぞれに警衛の分担がきまっているが、御先手組の受持は蓮池、平川口ほか五門と言われる。

御先手組は弓組八組、鉄砲組二十組ほどからなり、各組頭の下に、与力五、六騎、同心三十人がいる。各組が一昼夜交替で、受持の諸門を守るわけだ。五門以外にも受持つことがあったらしいので、かなり多忙なほうだったと言えそうだ。このほか、寛永寺、増上寺へお成りの時にも警備の任に就く。

役目はそんなものだが、仲間同士の付合いがうるさく、支配の与力の御機嫌伺いもしなければならない。茶屋酒に招いたり招かれたりということもあり、遊所に出入りすることもあ

る。出費を惜しんでいては、爪弾きされる。

世帯の苦労は、お岩が背負いこんだ。質物にするようなものもなくなると、縫物、つくろい物、細工物などの内職をどこからか仕入れてき、一心に手先を動かす。一言も不平を洩らさず、むしろそうして働くことに張りがありそうな様子だ。得た賃銀は、みな伊右衛門のものになりどう使おうが勝手だ。

お岩自身は、着古したものを、つくろいなどして着続け、帯一本買うことがない。伊右衛門は気の毒には思うものの、世帯の苦しさはわかっているので、何か買えなどと言えたものではない。言えばニヤッと笑われそうな気がする。

伊織は、伊右衛門が婿入りした翌年、跡嗣ぎが来て安心したせいか、他界した。二人きりになった。しかし、暮しは目立ってよくもならなかった。

父親の生前も死後も、お岩の態度は全く変らなかった。伊右衛門に献身的である。

いったいお岩は、自分にほれているのだろうかと、伊右衛門はいまさらしく考え込むことがあった。わからないのである。ほれ切っているからこそ、こうまで尽してくれるのだとも考えられるが、それならもっと、それらしい親しみ様、甘え様があってもよさそうなものだ。仲間と一晩、廓で過ごしたことがわかっていれば、りん気を起し、怒ったりすねたりするのが一般だろうが、お岩は毛ほどもそんな気配を示さない。

夫婦の交わりも相変らずで、お岩は何事も伊右衛門の意のままになるものの、努めて平静を保ち、まないたの鯉になっている。もしほれているのなら、感極まった折りにでも、しが

みついたり、頬や唇を付けてきたりするのが自然だろうが、そんな動作をはしたないと思うのか、それともいまいましいと思うのか、喰いしばった歯の間から、声を洩らすことはあっても、必死に押し殺してしまう。終ればゆっくりと溜息を洩らすくらいのものだ。

枕を交しながらの、他愛のない語らいなど、二人の間にはない。

そういうお岩を見ていると、どうやら、ほれているのではないらしいという気がしてくる。妻の勤めと考えて、何事もやっているのかもしれない。いったい、お岩には夫があって情人はない。つまり恋慕の情というものがないのかもしれないとも思われる。抱かれることも勤めの一つで、夫に満足さえあればいいというつもりだろうか。

一年、二年と経った。毎日何事もなく、同じ日常がくり返される。さらに一、二年と経つうちに、伊右衛門は御家人に成り切り、勤めにも通暁した。仲間付き合いは円滑であり、上司の覚えも悪くない。

お岩には子ができなかった。どうしたわけかわからないが、大したことではない。彼女は伊右衛門にとって、そろそろ空気のようなものになりかかっていた。

お岩の顔の造作も、胸の内がよくつかめないということも、いまはほとんど気にならなくなっている。顔はやはり不器量なほうに入る。体つき、肌は普通だが、女として物足りない。ことに、交りの喜びがあまり味わえない。と、そうはっきり言えるが、だからといって、飽きたとか、面を見るのも厭だとは思っていない。

また、胸の内がつかめないことについても、強いてつかもうという気はなくなっている。何を考えていようと、表に現われているのは、妻として申し分のない内助である。そのおかげで、まず不自由なく過せている。自分にほれているかいないかなどと、くだらぬことにこだわったのも、当初のことである。

しかしそれでも、非番の時に、一日中お岩と顔をつき合わせていることはできなかった。なにしろ、自分から話し掛けることの少ない女であるし、また有りふれた世間話、茶のみ話などには興味もなさそうである。冗談や軽口を言っても通じないから、どうしても気が詰る。それに、いつも仕事をしている。家の仕事が片付いている時には、手内職を一心にやり出す。伊右衛門としては、寝転がってでもいるほかはなくなる。

たまたま、同僚がぶらりと訪れでもすれば、酒を出し、四方山の話をしたり、碁を囲んだりして気をまぎらす。だが、お岩をなんとなくはばかってか、訪れる者は少ない。

伊右衛門は釣りを始めた。これは金もかからず、暇も潰れる。家にいて、辛気臭い思いをせずに済む。小川や溜池に釣糸を垂れ、水面を眺めながら、お岩はいったい、何が望みなのだろうか、いまの暮しをどう思っているのだろうかと、ふと考えることもあるが、それは胸に浮かんでくるというだけのことで、突きつめて考えてみようというほどではない。いまのままでいいに違いないのだ。極り切った世の中、暮し方である。何か途方もないことを考えたり、望みを持ったりするのが無理なのだ。おれなどはまあ、いい夫の部類だろうから……

と伊右衛門は苦笑を洩らす。

とても楽だと言えたものではないが、かつかつに暮せはする。お岩の働きで、貧ゆえに人に笑われることもなくやってきている。家の中は楽しいものではないが、夫婦のいさかいというものは、一切ない。不平と言うならすべて不平だが、取り立てて腹に据えかねるようなこともない。人の一生はこんなものだと、悟った気持になれば、太平無事である。

お岩が草双紙のたぐいを好んで読むらしいことに、伊右衛門は気付いた。遊芸とは無縁で、茶も花も知らず、歌俳諧などは別世界という感じのお岩が、草双紙が好きとは意外だったが、おそらく父の伊織が、他の書籍と共に買い集めておいたのを、珍しがってのぞいているうちに、読むようになったものだろう。

もちろん、伊右衛門がいる時には、手にも取らない。彼はたまたま、外出先から帰った時、お岩が草双紙を手にしているのを見たのである。お岩は素早く、草双紙をかくしてしまった。その時は、いつまでも水臭い女だ、かくすこともなかろうに、と思っただけだった。

お岩が何を読んでいたのかは、すぐわかった。伊織が残した文庫の中に、あわてた様子で乱暴に突込んであったのがそれだ。お前はこれを読んでいたのか、と聞くのは、ためらわれた。真剣にかくしたがっているようだったからである。だから伊右衛門は、お岩が用事で家を出ている時に、その草双紙を取り出して読んだ。何度も読み返したものらしく、表紙は手ずれでひどく、外題もわからないようになっている。だがすぐに、平井権八、小紫の物語だとわかった。

こんなものを読むのかと、伊右衛門はちょっと頬笑ましくなった。世上に流布した悲恋の物語であり、色男権八の胸のすく悪党ぶり、小紫の心中立てが大受けに受け、草双紙がいくつも出、芝居にもなっている。

伊右衛門も知らないわけではない。昔の出来事ではなく、権八が鈴ヶ森で刑死したのは、伊右衛門が田宮の家に入った年である。平井権八という凶賊が、鈴ヶ森ではりつけになったという噂は、いち早く江戸市中に広まり、同じ浪人者の伊右衛門が、無関心でいることはできなかったのだが、時代はほぼ同じであっても、世界が違う。権八は太く短かく生きようという男で、辻斬り、強盗と悪事も大胆で派手なら、恋人の小紫は華やかな吉原のおいらんである。歌や物語で、もてはやされるのは当然だが、伊右衛門が身につまされるということはない。そういう男もいるものか、と半ば感服、半ばあきれるくらいのことだった。

四

それでも、草双紙を読みだすと、引き込まれた。平井権八は因州鳥取の浪人だという。伊右衛門の父が摂州の浪人で、その地の大名に仕えて浪人したというのは似ている。ただ、伊右衛門父子は、格別のこともなく、食い詰めて江戸に流れて来て、次第に零落したようだが、権八はそもそもの出始めから、動きは派手だ。

嘘かまことか、とにかく伊右衛門には初耳だが、権八は父をはずかしめた男を斬り殺して逃げている。

草双紙によれば、権八の父平井正左衛門は、池田家に仕えて、家禄は六百石の上士であったという。権八は総領で、成人して身の丈五尺六寸という美丈夫、しかも剣術、柔術の奥義を極め、血気盛んな伊達者であった。

権八が斬った相手は、本庄助太夫という者で、ある時本庄は、正左衛門が仲間に、武士は犬猫などを養って愛玩すべきではないと話しているのを聞き、自分が犬を飼っているのを、暗にそしられたのだと思い、正左衛門に向かって悪口した。それは、正左衛門の犬と、自分の犬とが追手門の先で喧嘩をし、正左衛門の犬が負けて、見苦しく尻尾を巻いた、犬は主人の気性を受ける者で、強い者に飼われた犬は強く、弱い者に飼われた犬は弱い、というものである。他愛のない悪口だが、武士の口から出れば重大になる。言われたほうも、聞き捨てにはしない。

だがこの場合、正左衛門は老巧で、適当にあいさつして、受け流してしまった。

正左衛門は事を荒立てるのを好まなかったが、権八は承知できなかった。斬ろうと思えば即ち斬り、前後の顧慮はしないのがかぶき者、男伊達といった者たちである。権八は本庄の屋敷に乗込んで、たちまち本庄を斬り倒し、その場から逐電した。

追われる身の権八は、江戸を目ざした。寛文十二年秋のことだという。権八は十七歳の若衆である。当時すでに、江戸は繁華の地で、江戸にさえもぐり込めば、まず探索の手は及ばなくなる。また、浪人者が身過ぎをするにも、便宜がある。

ただ、鳥取から江戸までの路銀はもとより無く、追手のかかっている身であれば、大びら

な食い扶持稼ぎもできないから、勢い悪事に走ることになる。追剝ぎ、辻斬りなどの味は、この頃から覚えたのだろう。どうせあぶく銭である。酒や女に使い捨てては、また稼ぐことを繰り返し、年も暮れる頃に江戸に着いた時には、いっぱしどころか、ずいぶん凄味のある悪党が出来上っていたに違いない。あすも知れぬ命で、世に望みは絶っている。世の掟というものは、彼にはないのだ。

権八はふとしたことから、口入屋の近江屋庄助という者と知り合い、庄助の世話で武家奉公を始めた。一時的に扶持を受けるので、いわゆる渡り奉公である。徒、用人などというのがあるが、権八は徒のほうであったらしい。権八のような男が供先にいれば、見栄えがする。腕が立つのもたのもしいわけである。

伊右衛門も、渡り奉公をしている者たちを知っているが、一季、半季、あるいは数日、一日というような勤め方で、雇うほうで長く置く意志はなく、本人もまた、居着くつもりがない。口入屋などを通じて、求めがある都度に出向くから、結局渡り歩きになる。

彼等の暮し様は、一様に荒れていて、酒、賭博、女に明け暮れるのが多い。

権八もその類のようだが、もっと動きは大きく、悪に徹している。

近江屋庄助は口入屋というばかりではなく、男伊達、俠客といった男であったらしい。慶安の頃に殺された幡随院長兵衛と同じ商売、同じような気質であったろう。権八は庄助の気に入られ、権八もまた庄助に同類の匂いを嗅ぎつけた。

権八の運命は、庄助に会ったことによって決まったのであろう。権八は庄助の無法で豪勢

な渡世ぶりに巻き込まれる。主取りをする気はもともとなく、武家奉公はあくまで一時の腰掛けで、仕事のない時は庄助の家に居候をし、喧嘩でもあれば、喜んで加勢に出る。吉原での遊びも習い覚え、覚えれば男振りもよし、気っぷもよしで、女が下にも置かないので、いよいよ入りびたり、そうなれば金に事欠くことになる。

権八は、もしその気なら、一生奉公もできる身だったろう。武州忍八万石の阿部の屋敷に勤めている時、賊が入ったのを難なく取り押え、徒が普通、五両三人扶持であるところを、十三両五人扶持に上げられたということだ。それほど勇武を認められ、上役の目に適ったのだ。

だが権八は、最早武家奉公に何の未練もない。十三両五人扶持に縛られる男ではなかった。不羈であり、放れ駒であった。自分の命が軽ければ、人の命も軽い。斬取り強盗を働けば一攫千金は目前ではないか。かつ使い、かつ散じて、この世の快楽を極めれば、末は獄門台に首が乗っても構わないのだ。

博奕で金が転がりこめば、それでよし、反対に元も子もすってしまえば、荒稼ぎになる。あれこれ術策を弄し、人を欺して金を取るのは、権八のすることではない。金のありそうなやつを斬って、ふところから取り上げるのが簡明である。殺伐だが、悪びれていない。

悪の道は一筋である。権八は奈落に向かって、まっしぐらに進むだけだ。近江屋庄助も、おそらく中途で手を焼き、袂をわかったであろう。

斬った数が百数十人と草双紙には書いてある。まずその何分の一かとしても、おびただし

い数だ。場所は吉原に近い日本堤、大恩寺前といったところで、なまぐさい匂いのする金をふところに、そのまま大門をくぐったのかもしれない。

権八がなじんだ女は、三浦屋の小紫といい、全盛の太夫であった。権八が打ち込んで不足のない相手である。

……いまも三浦屋には、小紫という太夫がいるそうだ。おそらく、権八のあとを追って死んだ小紫の名を襲ったものだろう。伊右衛門は吉原の小店なら知らないこともない。おいらんと呼ばれる女と枕を交した覚えもあるが、その経験で権八小紫の絢爛豪華な色模様をしのぶことなど、到底できはしない。舞台と衣装が違いすぎていた。散じられる金もケタが違い、何よりも、権八、小紫は光り輝いている。

小紫の格式は、人殺しの浪人者を相手にするようなものではない。それが、命も要らないようにほれ抜いたのは、裸の平井権八という男がそれに価したからであろう。放埒無残の男が、小紫には真情を傾けたのである。

草双紙は権八、小紫の交情の有り様を、綿々と事細かに書き連ねていた。この辺が、婦女子目当ての草双紙の本領なのだろうと、いささかばからしい思いをしながらも、伊右衛門は読み進んだ。そして、お岩がこの本を彼にかくすようにして、繰返し読んでいる気持が、やっとわかったように思った。

これは、お岩の夢なのだ。才色兼備の小紫がそうなら、恋人の権八もそうなのだ。寡黙でどこやら薄気味の悪いお岩も、胸の奥にいじらしいあこがれを育てているのだ。この美しい

恋物語にひたり切って、浮世の苦しさ、味気なさを忘れたいのだ。ひとときでも、小紫になりたいのだろう。そして、伊右衛門ならぬ権八の胸に抱かれていたのだろう。

にがいものがこみ上げてくる。そいつは無理だ。お岩が小紫になれないのは、知れたことだが、おれも権八にはなれない。器量が違う。権八は十三両五人扶持に目もくれないが、おれならおんの字だろう。権八はいさぎよく、勇ましいやつで、人を斬るのをなんとも思わぬ。大威張りで地獄へ行くやつだ。

おれは人を斬るどころか、犬一匹斬れない男だ。生類憐れみというお達しが出ていなくともだ。それに、いつ死んでもいいという度胸などない。細く長く、生きられるところまで生きようと考えている。燃え盛り、一帯に燃え尽きるような恋はうらやましいが、おれやお岩のような、ありきたりの男女に出来る芸ではない。お岩もばかなやつだ……

五

権八は仲間を語らって、いよいよ悪事の限りを尽していたらしい。罪業は雪だるまのようにふくれ上って行くのである。しかも捕吏の手は次第に迫ってくるので、無理を重ねなければならない。熊谷の土手で、上州の絹商人を殺し、三百両の金を奪ったが、駈けつけた百姓たちに囲まれ、権八だけは辛うじて血路を開いたが、仲間三人は搦め取られた。その口から、権八の素姓がわかる。

権八は一旦宇都宮に逃げたが、手配が回って、そこにも身を落着けられない。ここらが年

貢の納め時と考えたのか、故郷に一旦帰る気になった。

権八には気の弱りと共に、体の弱りがある。色と酒に明け暮れた日々のたたりで、労咳にでも冒されていたと考えられる。

こっそり鳥取の故郷に帰ってみると、すでに父母はなく、養子が家を嗣いでいた。権八としては、思い残すこともなくなっている。この上は、会いたいのはただ一人、小紫である。

だが権八は、江戸へ取って返そうとする途中、大坂で病床に倒れてしまった。いつ直るか、いや、本復するかどうかもわからない。と言って小紫にはぜひ会いたい。そこで一計を案じ、奉行所に名乗り出てわざと捕われ、江戸へ送られる途中で籠抜けをし、吉原へ駈けつけようとした。

しかし、これは計略というものではなさそうだ、と伊右衛門は考えた。権八は大坂で倒れた時、万事窮すと覚悟を決めたのではあるまいか。それならば、陋巷でみじめな病死をするより、いさぎよく名乗り出て、さっぱりとはりつけにでもかかったほうが晴れがましい。ただ、逃走することが、ひょっとするとできるかもしれないが、それは万が一の望みというだけのものだ。小紫に会えればよし、会えねばそれまでのことだ。権八は小紫が彼のあとを追って死ぬとは、夢にも思っていなかっただろうし、またそれを望んでもいなかったであろう。彼の悪業は彼の勝手、小紫への恋も彼の勝手、小紫が責めを負うことは何もない。

ところが権八は悪運強く、江戸に近い藤沢の宿で、まんまと縄抜け、籠抜けに成功した。病気の上に、江戸までの押送で、さすがの権八も弱り果てていたろうが、蹌踉たる足を踏みしめ、捕方の目をかすめながら、吉原にたどり着く。心気もうろうとして、夢見心地であったろう。

小紫と今生の別れを惜しむくだりで、草双紙はまた哀切な情景を書き綴るのだが、ともかく一夜枕を共にし、望みを達した権八は、衣服を改めて、町奉行所に名乗り出た。最早逃れる道はなかった。すべてのことを悪びれるところなく申し述べ、鈴ヶ森へ裸馬で引かれ、はりつけにかかったが、槍の突き手の見せ槍が終った時に、

「しばらく」

と声をかけ、「八重梅」というはやり唄をいい声で歌ったという。

「梅が咲けがし、いよ八重梅が枝を、枝を手折るふりして、必らずござせと様を招く、夢になりとも逢いたや見たや、夢になりとも浮世じゃな、まれに逢う夜は現か夢か、まれに逢う夜は語る間もなき、さんさ短夜や、よしなの思い、浮世じゃな」

というものである。

死骸は目黒不動門前東昌寺の虚無僧で随川という者が引取り、その寺の一隅に葬って、形ばかりの塚を立てたが、その後間もなく、一人の供を連れた美しい女がやってきて、権八の塚にお詣りをしたあと、その場で自殺した。懐剣で胸を突いたのであろう。女が小紫であったことは供の者の口からわかった。これが権八小紫の比翼塚として世に知れることになる。

こういうものを、ひそかに読んでいたのかと合点すれば、それだけの話である。なんとい

うことはないはずだったが、物語が自分の心になんの痕も残さないと思ったのは伊右衛門の誤りで、よくもなし悪くもなし、うかうかと過してきた、これまでの年月が、ひどくうとましく、色あせて見えてきた。権八小紫を絵空事だときめつけてしまえたらいいが、そうではなく、飾り立てたところを捨てれば、事実が残るのだ。彼等は非運のはかない一生だったが、生き方は充実して、華麗だった。そのことが、大人気ないと思いながら、伊右衛門を焦立たせてしまう。

伊右衛門は結局、お岩には何も聞かずにしまった。聞いたところで、ろくろく答えもしないだろうし、内心をのぞかれたことで、いよいよかたくなになってしまうかもしれない。

お岩は自分のことを権八と比べながら、なんの取柄もない人間だとさげすんでいるかもしれない。あの「八重梅」の小唄を、節はわからないまでも、そらんじて、口ずさんでいるのかもしれない。そんな気もする。すると、お岩が哀れであると同時に、厄介な重荷のようにも思えてくるのだ。

お岩にはなんの悪いところもない、みなおれの身勝手な妄想なのだと、伊右衛門は思い直すのだが、お岩を見る目が、物語を読む前とは違っていた。お岩を憎むような気持になっているのに気付いて、ハッとすることもある。

ふしぎなもので、伊右衛門がそうだと、お岩のほうでは、むしろこれまでより親しみを見せ口も軽くなったような気持で、伊右衛門をあわてさせた。日頃はそれこそ、必要最小限度のやりとりで、夕食の菜は何にしようかとか、お酒をあがるかとか、ほころびがあるから着

替えてくれというようなことだが、それが突然、瓦版の噂をしたり、芝居の評判を話したり、庭で何かの花が咲いたなどと言い出す。話の種が思いつかなくても、もじもじとして動かず、時々、例のニヤッとした笑いを浮かべる。伊右衛門はやり切れない気持になった。

伊右衛門の旧友で、兵馬という男が、ある時訪れた。兵馬も当時、その日暮しの浪人者で、それほど往き来もなかったので、すっかり忘れていたほどだった。

さすがにえらいものだ、御先手の誰々組と聞くと、すぐ居所がわかった、と兵馬は世辞半分に言い、よほど値も張ったらしい鯛をみやげに出した。すっかり町人の造りになっているのでたずねると、縁があってある女と夫婦になり、いまは料理茶屋のあるじだという。名も兵左衛門と改めた。茶屋は表向き、料理などやっていないようにつくろっているが、実は内々の出入口を設け、生きのいい生臭ものなら、お好み次第だ。大っぴらに魚の食えない御時世で、上も下も大弱りでいるから、茶屋はこっそりやってくる客で大にぎわいだ。うさんくさい者は客にせず、武士なら身分のある者、町人なら大店持ち、地所持ちに限っている。面白いほど金が入る。

「何事も金だ、伊右衛門。金で買えぬ楽しみはない」

と、兵馬改め兵左衛門は言ったが、なるほど、金回りがいいのは身なりでわかる。浪人暮しの頃より顔色も艶やかで、肉が付いている。兵左衛門が久しぶりに、ひょっこりやってきたのは、現在の仕合せを見せつけるためのようだった。

いい住居だ、いいお内儀だ、御先手は名誉の役だなどとほめはするが、貧しくて陰気な、

つまらぬ暮しをしているな、という気持が顔に出ている。

「だが伊右衛門、お内儀はちょっと変ったお人のようだなあ。居るか居ないかわからんほどに静かじゃないか。よほど内気なのか」

と、兵左衛門が声をひそめるのに、まあそんなところだと答えるほかはない。まるで愛想がない、くすんでいる、とでも兵左衛門は言いたいのだろうが、それは口にしない。ただ、お岩のことで伊右衛門をあわれんでいる様子がわかるので、面白くない。

そんな商売をしていることが知れたら、打首ものじゃないかと、いまいましさもあって言うと、いや、その辺は手を回している、まず知れる恐れはないが、万一告げ口でもされ、捕まればそれまでのこと、さらに後悔はしないと、兵左衛門は答えた。

「危ない橋を渡らねば、好きなことはできんということさ、伊右衛門。どうせ浮世は夢じゃないか。行い済まして、なんのいいことがあるものか」

兵左衛門の言葉は、伊右衛門への皮肉のようだ。同時に伊右衛門は、平井権八の一生を思い出した。

権八と小紫のことは、もちろん知っているが、別段なんとも思わぬ、人は人だと、兵左衛門は笑い飛ばした。

兵左衛門の女房は、彼より年上で、物のわかった女だ。浮気沙汰も商売のうちだと考えているから、兵左衛門が遊ぶのを止めはしない。従って彼は、吉原の大まがきでも散財もするし、船宿でいい女と寝もする。そういう場所に出入りしていると、茶屋の客にいい人物とも

知り合う。そこが商売になっている。

「現在の小紫を揚げたことはないが、なに、あのくらいなら知れている。権八と御大層な濡れ場にしたところで一向うらやましくはないわ」

と、兵左衛門は言った。お主ならいつ茶屋に来てもいいし、安くしてやる、女がほしければ世話をしてやろう、金のことは心配するな、どうもお主は、羽根を伸ばしたほうがよさそうだ、このまま平穏無事では、なんのいいこともなく早々と年を取ってしまうぞ、と、兵左衛門は言いたいことを言ったというふうで、帰って行った。

「何事も金か」

と、伊右衛門はつぶやいた。田宮へ婿養子に入ったのも、つまりは金のためであった。権八や兵左衛門が使い捨てる金と、ケタの違う金のためである。

六

媒酌をつとめた秋山長左衛門の家には、盆暮のほかにも時々顔を出す。長左衛門は婿探し、養子探しの内職で忙しい男である。小まめで目はしが利いているから、それ以外にも稼ぎをしているのかもしれない。同じ御先手同心でありながら、暮しぶりは豊かで、本人もけっこう遊んでいるようだった。

ちょうどよかった、実は相談したいことがあって、お前さんの家に出向こうと思っていたところだが、お前さんの前ながら、奥方にどうも気が置けるから、渋っていたのだと、その

時長左衛門は言った。お岩はあまり長左衛門を好んでいない。長左衛門がまた、かつては伊右衛門にすすめた女であるのに、お岩をはばかっている。

長左衛門の話は、わけのある女を預かってくれまいかというのだった。

同じ組の与力に、伊藤喜兵衛という者がいる。上長であるから、伊右衛門も顔見知りで、屋敷にあいさつに出ることもあるのだが、この喜兵衛におことという妾がいて、喜兵衛の子をはらんだ。喜兵衛は伊右衛門と同じく養子で、妻は家付きの娘である。もし喜兵衛が女を囲い、子までなしたことが妻に露見すれば、一騒動起るのはもとより、離縁にもなりかねないから、喜兵衛としては、この際おことをどうにかしなければならなくなった。

おことに未練がないわけではないが、背に腹は替えられない。手切れ金を渡して、すっぱり別れることができれば、これに越したことはないのだが、少々の金で、おことが素直に引込むとは思えず、与力とて、家禄は同心よりは勝るといったくらいのものだから、おことが文句なく承知するほどの金は出せない。また、生れる子の処置にも困る。

「そこで、お前さんのことを思いついたのだがな。お前さんは、おことさんを知っていよう？」

伊右衛門はうなずいた。どういう席であったか忘れたが、彼はおことに会ったことがあり、美しい女なので、しきりに喜兵衛をうらやましく思ったものだった。細面のほうで、撫で肩、体の造りは華奢で、どこかあどけなく、それでいてしっとりした色気があり、伊右衛門の好みだった。

心にとまっていたので、何度か長左衛門におことのことを話したかもしれない。長左衛門は伊右衛門がおことに岡ぼれをしていると思い、覚えていたのだろう。

「いい話だろう。お前さんがおことさんを引受けてくれたら、八方丸くおさまるってもんだ。むろん伊藤様も承知さ。お前さんの女にしていいんだ。いや、してもらったほうがありがたいんだ。腹の子の父はお前さんってことになるがその代り伊藤様からたっぷり手当が出る。こいつは金もうけだから、お前さんにすすめているんだぜ。金は入る、いい女は手活けの花になるというんだ」

「だが、かんじんのおことさんが」

「さあ、そこだて。お前さんの腕の見せどころだよ。なあに、お前さんほどのいい男なら、うまくやれる」

喜兵衛は何も知らぬことにし、密通の形で、おことをわがものにし、おことが伊右衛門にほれるように運びたい。おことの心が伊右衛門に移れば、未練気なく喜兵衛と切れてくれるだろうし、密通の弱味があるから、金もほしがるまいというのだ。

伊右衛門はひどく心が動いた。われながらあさましいと思うほど、乗気になっていた。長左衛門の頼みを承知しさえすれば、かねて好きだと思っていた女が、わがものになるのだ。嘘のようである。しかも、金さえ手に入る。そうまで心が揺れ動いたのは、草双紙や、兵左衛門の話で、下地ができていたこともあるのだ。何か思い切ってやりたい、人並みの楽しみをしたいという望みが、激しく動いている。このままではやりきれない。あまりになさけな

い。

しかし伊右衛門は、動揺を面には出さず、それはむずかしいだろう、自分にはお岩という妻があり、お岩を悲しませることはできないと言った。

そういうお前さんの心中立ては立派なものだが、もうお岩さんには十分尽しているではないか、この辺で浮気の一つもするのは、だれしもやることだし、お前さんはまあ、よく辛抱したものだと、長左衛門は笑った。

「そんなに堅苦しく考えることはないやな。縁組の時にも言ったように、浮気は伊織さんも承知だった。お岩さんがあんな人だからな。当のお岩さんだって、浮気をされても仕方がないと観念していたはずだ。女ができたからって、お岩さんを追い出したりいびったりというわけじゃねえ。女房は女房でちゃんと守り、田宮の家を絶やさず、しくじりなく無事に勤めりゃあ、お前さんは立派に役目を果たしているんだ」

だが、さし当ってどうすればいいのか。おことをよそで養う金などありはしない。家に引き入れるわけにもゆかない。

「そりゃあおれが、お岩さんによく言い含め、なんとかする。お前さんは早いとこ、おことを物にするこった。そいつは任せるぜ」

と、長左衛門は物言いから態度から、ばかに下世話になって、そう言った。

伊右衛門は長左衛門の家を出ると、うつうつと思いにふけりながら歩いた。空中に女盛りのみずみずしいおことの幻が浮かび、心が妖しく躍っている。だが一方では、舌打ちでもしたいような、苦い思いがある。悪いことをするにしても、つまるところ、こんなみみっちく、きたならしい小細工しか、おれにはできないのか。

おことと、無理のない出会いを取り計らう算段は、長左衛門がした。長左衛門は伊右衛門よりは、おことと懇意である。水茶屋、そば屋のようなところで二、三度会ったあと、長左衛門と連れ立って、忍町にほど近い、ひっそりとした妾宅を訪れ、へだてが取れてくると、あとは伊右衛門がひとり、何やかやとみやげを持っておことをたずねた。

事は思ったより易々と運んだ。というのは、伊右衛門が本気でおことにほれ、わざとらしく言い寄る必要もなかったのと、おことも最初から、伊右衛門を特別な目で見ていたからである。おことが伊右衛門の好みであれば、伊右衛門もおことにとって、好いた男であったらしい。奇妙に、相ほれになったわけだった。おことは薄々、喜兵衛の意図を察していたのかもしれないが、口に出すことはしなかった。囲われていたというだけで、喜兵衛は好きな男ではなかったようだ。黙って乗り換えようと思案したのかどうか、喜兵衛にこだわる態度は全く見せず、床の中ではあけすけに、待ち構えていたように、弾んだ肌を合わせてきた。

同じ女でも、これほど違うものかと、伊右衛門はつくづく思った。おことは、伊右衛門が好むものを、みな持っていた。顔は見飽きなかった。子供のように柔らかく、感じ易い肌もよかった。抱きしめれば折れそうなかぼそさもよかったし、何よりも、天真爛漫に激しく燃え立ち、押えようとしないのがよかった。甘えかかり、ほしがった。寂しがり、ずっと抱か

れていたがった。気立ては明るく、のんびりしていた。伊右衛門には、お岩がぼろっ切れのように思えてきた。

彼には最初のうち、ためらう気持があり、喜兵衛と長左衛門の望み通りになりはしても、それは一年なり二年なりのこととして、あとは元通り、お岩との平凡な暮しに戻ろうと考えていた。おれは到底悪者にはなれない、女として木か石のようなお岩でも、あれだけ尽してくれるのだから、添いとげなければならぬと思っていたのだが、それががらりと変ってきた。おことなしではいられない。二日も会わないと、飢え渇いた犬のように狂おしく、気持が荒れるのだ。

お岩などに構ってはいられなくなった。哀れには思いながら、お岩を抱いてやる気にはならない。

伊右衛門は破れかぶれになった。おことへ通いつめ、淫楽の限りを尽していると、これまでより以上に、お岩のことが重く重く、胸にのしかかってくる。痛みさえ感じるほど、お岩に済まぬと思う一方では、この世のだれよりも憎くなる。みにくい妖怪に取りつかれているような気さえしてくる。

だが、これでおれも本物になったか、と開き直る思いもないわけではない。

お岩は伊右衛門に何も聞きはしないが、男の素振り、冷たさ、家に居つかない行動から、女に狂っているのは察したはずだ。だからと言って、態度は常に変らない。つつましやかで、静かである。それが伊右衛門を、わけもなくカッとさせ、夢中でお岩をなぐりつけている。

手を当ててしまったと思うと、さらに前後がわからなくなり、なぐり続けることになる。お岩は手向いをせず、悲鳴も上げず、なぐられるままになりながら、よく親身になぐってくれたとでも言うつもりか、髪の乱れかかった顔を上げて、ニヤッと笑う。

伊右衛門は茫然と手を放し、冷酒を浴びるように飲む。

彼は自分の手で、家を叩きこわしているようなものだった。金は有りったけを使い散らし、喜兵衛がくれた金も、いつか消えていた。長左衛門の思う壺にはまってきたわけだ。

七

長左衛門は老獪で、お岩の説得に当る際に、ほとんど包みかくさずに打明けたようだった。伊藤喜兵衛の苦しい立場と、頼まれて承知せざるを得なかった同心の弱味、おことを、ただ預かるだけのはずだった伊右衛門が、その色香に迷わされ、恋のとりこになってしまったことなどである。

ここはしばらく、歯を喰いしばって辛抱し、伊右衛門の熱がさめるのを待つほかはあるまい、いま二人の仲をへだてようとすれば、反って火に油を注ぐようなものだ、おことは性根のない浮気女で、恐れるようなものではない、伊右衛門もそのうちには、つまらぬ女に引っかかったと悟るに違いなく、その時期も早いだろう、この際むしろ、おことを伊右衛門の家に入れ、お岩は一旦家を出るのが上策ではあるまいか、と長左衛門は説いた。

一つは喜兵衛の依頼を果すためであり、おことがそこで身二つになれば、喜兵衛の妻も、

その子がよもや夫の蒔いた種だとは思うまいし、おことを怪しんでいたとしても、どうやら伊右衛門の女に違いないと、安心するだろう。お岩が家にいて、おことが居候というのでは、万事うまくゆくはずがない。

二つは、しばらく伊右衛門から離れていたほうが、彼の心を取り戻すのにいい手段である。長く会わねばなつかしくなり、その人のよさがわかってくるものだ。ましてお岩は、人の及ばぬほど、伊右衛門に尽している。彼が改心し、お岩をいとしく思わぬ道理がない。

三つは、家を出て奉公でもし、金を溜めることができる。それはすべて、田宮の家のものになるのだ。家の立て直しに欠かせない金になる。伊右衛門は感謝し、恥じ入り、お岩の帰りを喜んで待ち受けるだろう。

長左衛門の説得は功を奏して、お岩は身分をかくし、口入屋の手を借りて、番町の旗本屋敷に住込むことになった。

お岩はわずかな身の回りの品を持って、どこかへ使いにでも行くように、ひっそりと出て行った。伊右衛門にしたあいさつも、尋常そのもので、いつものように口数は少なく、平静だった。伊右衛門はさすがに、返す言葉にも窮して、黙って見送るほかはなかった。彼は、飛び出して行って、引き戻したくなる気持を、心死で押えつけていた。お岩とはそれで終りなのだと、信じることはできなかった。

おことは田宮の家に移った。そして夢のように日が経った。厄介者はいず、二人の天下だった。伊右衛門はおことの愛欲にひたり切り、近所付き合いも、勤めさえ怠り勝ちになった。こんな幸運が舞い込むとは思ったこともなかった。おことの肌をいくらむさぼっても飽きず、彼女は伊右衛門の宝であり、ほかには何も要らないと思えた。

おことは物にこだわらないほうである。いくらか鈍いかもしれない。伊右衛門の正妻であるお岩が、家を出ていることについても、あまり気にする様子はなく、すべて伊右衛門任せである。嫌われて出されたのだろうし、帰ってくることもあるまい、自分がここに居坐っているうちには、なんとか片がつくだろうと、のんびり構えているようだ。

伊右衛門はしばらくの間、お岩のことが案じられてならなかった。案じられたと言うより、おことに家を明け渡して、素直すぎるほど素直に出て行ったお岩の気持が不可解で、従って不気味なのだ。長左衛門は、おれがうまくやったのだと言うが、果してそうだろうか。

お岩はそれほど、おめでたい女ではなさそうだと思える。一旦退いて、何か仕返しでも考えているのではあるまいか。組頭へ直訴したり、奉行所へ駈けこむようなことはないだろうか。……それとも、怨みの遺書でも残して、くびれ死ぬのではあるまいか。

しかし、お岩から何の音沙汰もなかった。口入屋から聞いたという、長左衛門の話によると、お岩は旗本屋敷の下女として、無事に勤めているそうだ。屋敷では、お岩は町家の者になっており、御先手同心の妻だとはだれも知らない。陰日向なくよく働き、口も少ないので、気に入られているそうだ。

「心配することはない、お岩さんは辛抱強い女だからな。二、三年は我慢しろと言ってある

から、あの人なら五年も六年も働いて吉左右を待つだろうよ。ところがお前さんの気持が変らず、おことさんに何人も子ができて、男も生れるってことになれば、仕様ことなしにあきらめるさ。お岩さんには子ができねえんだからな。まあその折りに、いくらか包んで、因果を含めりゃあ済む」

と、長左衛門は言った。伊右衛門は一応安心し、長左衛門の思惑通りになればいいと思った。別れて暮していると、お岩に済まないという切実な気持も、次第に薄れてくる。その場にいない者が損なのだ。

おことは伊藤喜兵衛の子を生んだ。数年経ち、彼女は伊右衛門の子を二人生んだ。伊右衛門は中年になり、平凡な父親だった。おことは現実に伊右衛門の妻であり、それらしい落着きぶりも示してきた。おことが移ってきた最初の頃は、とかくの噂があり、白い目で見られたものだが、いまは受け入れられていた。何か引込み勝ちでよくわからなかった、お岩よりよほどいいという者もある。伊右衛門にとって、おことはもう激しい恋の相手ではなく、ごく普通の妻であった。彼にはむしろ、おことよりも子供が関心事になっている。

お岩を忘れているわけではない。だが、非常に遠々しい存在になっている。かつて何年間か自分の妻であったということが、まるで嘘のようだ。それだけ、人に薄い印象しか残さない女なのだろう。あの女は、気に入らぬから出したのだ、と伊右衛門は思いかけていた。当時の悪企み、こみ入った事情についても、そんなこともあったのか、という気持である。

お岩はどこにいるのか。最初勤めた旗本屋敷に、相変らず勤めているのか、それとも奉公

先を変えているのか、あるいは下女奉公をやめたのか、ひょっとして死んだのか、一切わからなくなっている。口入屋は代替りで、古いことは知らない。秋山長左衛門との往き来はあまりなくなり、むしろ疎遠になっているので、お岩について話し合うこともない。伊藤喜兵衛とも同様で、このほうはむしろ、近付かぬようにしているが、何か役向きのことでは力になってくれる。伊右衛門は鉄砲組のうちでも古参になり、実直さを買われている。

おことは、お岩のことをとっくに忘れている。伊右衛門も忘れていることが多くなった。お岩を捜そうという気は起らない。お岩が出て行って十年以上も経ち、向うからなんの音信もないのは、病死でもしたのだろうと思われる。そうでなければ、どこぞへ縁付いて、新しく生まれ変ったような暮しをしているのかもしれない。

八

勤めを終えて帰った伊右衛門は、軽い食事のあと昼寝をしていた。春先の、うららかな陽射しのあふれる午後である。おことは近くへ用足しに出かけ、子供たちは外へ遊びに出ていた。伊右衛門はわけのわからぬ夢を見ながら、うなされていたが、それが夢の中の出来事なのか、それとも現実なのか、縁先にお岩が立っていた。彼女は座敷に寝ている伊右衛門をじっと見、それから、なんとはなしの素振りで、家の中や庭先を見回していた。

伊右衛門ははね起きようとしたが、体が動かない。お岩ではないか、と声をかけようとして、声も出ないのに気付いた。なんだ、これは夢かと、現実でか、夢の中でか、伊右衛門は

思った。夢らしいが、そうではないかもしれない。お岩の姿は、いやにはっきりしていた。身なりは割合いにさっぱりしているが、すっかり町女房になっている。表情の乏しい、不細工な顔は昔通りで、ただ、さすがに年を取っている。

年を取っているのなら、夢ではないのではないかと思い、お前はおれを怨んでいるのか、と言おうとした。だがやはり、声は出ない。お岩は伊右衛門を見て、物静かにちょっと会釈をし、怨んでいるのではないとでも言いたそうに、ニヤリとした。

伊右衛門はそれなり、気を失なったようだったが、そうではなく、夢が切れて、眠りだしただけであったのかもしれない。

はっきり目覚めた時、もちろんお岩の姿はどこにもなかった。なにか足跡でも残っていないかと思ったが、足跡もない。

そのことを、伊右衛門はだれにも話さなかった。結局、悪い夢だったのだろうと、次第に思えてきた。

数日あと、遊びに出ていた末の子が、どこかの知らないおばさんにもらったと言って、駄菓子と風車を持ち帰った。どんなおばさんだったかという母親の問いに、子供は、おっかさんくらいの年の人で、なんにも言わず、ただ笑っただけで、これをくれたのだと話した。

妙な人だと、おことは不安そうにした。田宮の子供かとも聞かなかったという。

どんな顔をしていたか、と伊右衛門は聞いた。子供には、美しい、みにくいということは、よくわからない。目の細い人だと答えた。笑った時は、やさしい顔だったかと聞くと、怖かったと答えた。気まぐれな女もいたものだと笑い話にしながら、伊右衛門は心の動揺を押しかくすのに苦心した。

あの笑いだ。それはお岩だ。そうすると、あれは夢ではなかったのだと思った。お岩は生きていた。生きていたところではない、同じ旗本屋敷に奉公を続け、金を溜め、そして、晴れて伊右衛門の許へ帰れる日を、じっと待っていたのではないか。お岩は十年も二十年も、待つことのできる女なのではあるまいか。

伊右衛門は胴震いを始め、それはどうしても止らなかった。いま時分になって、突然現われたのは、なぜなのか。伊右衛門を深く怨み、仇をしようとする意図ではないようだ。

縁先に立ったお岩に、怨みがましいところはなかったし、怨みを晴らしたいと思っているなら、子供に物を与えるようなことはしないだろう。

様子を見に来たのではあるまいか。待つ間があまり長すぎる。田宮の家に立ち現われてはいけないと辛抱していたが、何がどう変ったかわからない。伊右衛門が病気になったかも知れず、おことの身の上に何かあったかもしれない。この辺で見に行ってみようと思い立ったのが十年以上も経ってからであったとすれば、おそろしいのは、その気の長さである。

お岩はこの上、まだ待つつもりなのだろうか。待っても無駄だ、欺されたのだと悟った時、お岩はどうするつもりだろうか。

おことの長い月日が消し飛んだ。再びお岩が、伊右衛門の心を占めるようになった。お岩を殺さねばならぬという気持がきざしてきた。

伊右衛門は、お岩がまた現われるのを、待ち受けるようになった。うまく言いつくろって機嫌を取り、人知れず亡き者にしようというのだ。そう思うと、なかなか現われてくれなかった。伊右衛門は気もそぞろな日を送りながら、まるでお岩を恋いこがれているような錯覚におちいった。

一月ほどしてから、秋山長左衛門が青い顔をしてやってきた。妻が、お岩を見たと言って、おびえているという。どこで見たのだ、と伊右衛門はせき込んだ。

「いや、それがの。所用で外へ出、夕刻帰った時に、門前に立っていたという。お岩のようじゃがと思ったら、そのまま行ってしもうたので、人違いと決めた。ところが翌日、きょうじゃが、庭で洗い張りをしていて、ひょいと顔を上げると、垣根の向うにお岩の顔があったという。妻は腰が抜けたが、お岩らしい女は頭を下げるようにして、黙って姿を消したそうじゃ。お前さんはどう思う？　わしは妻の見違いだと叱っておいたが」

その通りだろう、お岩がくるなら、ここへまっすぐくるはずだと言って、伊右衛門は長左衛門を帰し、家のまわり、組屋敷辺から、広い武家地をやみくもに歩き回り、お岩の姿を捜した。われながら気違いじみているが、そうせずにはいられないのだった。彼は汗で水をかぶったようになり、ぼんやり帰ってきた。

おれのところへなぜ来ない、と、伊右衛門は夜、床の中でつぶやいた。

おことも、とうとうお岩に出会ってしまったようだ。何事にも大して動ぜぬおことが、息を切らして外から帰ると、裾の乱れも構わぬようで、伊右衛門にすり寄り、いまお岩さんらしい人に声を掛けられたと言った。夕刻に近い頃である。

「どこにいた。言え」

伊右衛門は刀を腰にさし、立て膝になって聞いた。忍町の荒物屋の店先だという。品物を見ていると、うしろに人の気配がするので、振り向くと、お岩が立っていた。おことはお岩に会ったことがないが、即座にお岩だと思った。小じわの目立つ、やや色の黒い女で、あばたの痕があり、目が細かった。そして無表情だった。おことが立ちすくんでいると、お岩らしい女は、

「お前様はおことさんか」

と、ほとんど聞き取れないような声で聞き、答えがないのでそうに違いないと思ったのか、ニッコリした。意味の取れない笑いである。瞬間、おことは子供の話を思い出し、悲鳴を押し殺して、転ぶように逃げだした。途中で振り返ると、お岩らしい女は荒物屋の前にまだ立って、おことを見ていた。

伊右衛門はそれだけ聞くと、草履を突っかけて家を飛び出した。うしろで伊右衛門どの、伊右衛門どのと、おことの叫ぶ声がした。

伊右衛門は全力で荒物屋まで走った。道行く人がみな振り返ったが、構わなかった。荒物屋の前に、もうお岩はいなかった。血相を変えた伊右衛門の様子に、店の者はおびえていたが、こうこういう身なりの、こんな顔付きの女が店先にいたはずだが、という問いに、一向気付かない、客ではなかったと言った。

だが、つい先刻のことだ。女の足で、遠くへ行っているはずはない。伊右衛門は走りだした。草履は脱いでしまった。見付けずには置かんぞと思う。

「お岩、お岩」

と、走りながら、伊右衛門は呼びはじめた。お岩を見付けたら、斬り刻んでやろうというつもりなのだが、息が苦しく、頭が混濁してくると、お岩恋しさに駈け回っているような気もしてきた。

「お岩、お前はやっぱり死んでいるのか。そうでなければ出てこい。怨みごとを聞いてやるぞ」

伊右衛門は、そんなことも口走りながら、どうやらおれは、狂人と思われているらしいと、笑いがこみ上げてきた。彼はだんだん愉快になってきた。

欺し欺され

一

留七は茶屋女のお勝に一目ぼれした。

留七の好みは、細面、やせぎすで、後れ毛がびんに乱れかかったような、いかにも頼りなげな女である。色は白ければ白いほどいい。男にすがり付きたそうな風情が、留七をゾクリとさせる。

お勝は留七の好みにピッタリの女だった。

深い仲になるまでに、それほど手間はかからなかった。だが、乏しい財布の中身を空にし続けてのことである。

茶屋は茅場町の場末にあった。安く飲めるのが身上で、当然客種はよくない。何人かいる茶屋女は岡場所の安女郎と大して変りはなく、わずかな金で客に身を任せる。お勝も例外ではないが、見るからに寂しげで、おとなしすぎるので、口説く客はめったにいないようだった。

お勝があとで白状したところによると、お勝もはじめて留七を見た時、好きな人、と思った。自分にちょうど合った人、と思ったそうだ。

確かに留七は、お勝に似たところがあった。体付きが華奢で細面であるし、いつも気弱そうな陰を、眉宇や口許に漂わせている。物言いも柔らかで、遠慮勝ちだった。

留七は無宿者で、定職がない。力仕事、使い走りのようなことを臨時にやり、時には悪事の手伝いもして、なんとか江戸市中を渡り歩き、食いつないでいる。

なぐさみと言えば、博奕、酒だった。女は金がかかるので、岡場所へもめったに足を踏み入れない。通うほど好きになった女もいなかった。

だが、お勝は別である。留七はすっかりのめりこんだ。

お勝にはヒモがついている。惣次というならず者で、お勝に食らいついて離れず、稼ぎをみな絞り取っている。逃げようとしても逃げられない。

惣次はお勝を坂本町の裏店に住まわせている。お勝はそこから茶屋に通っているのだが、惣次がいつも亭主然と居坐っているのではなく、お勝独りということが多い。惣次は寝ぐらをあちこちに持っており、坂本町の家に舞い戻るのは、気まぐれのようなものだ。

留七がはじめてお勝と枕を交したところは、その小家であった。

「あいつは今夜帰ってこないから、留さん、うちにおいでな」

と、茶屋で体をそっと留七の背中にこすりつけながら、お勝は少し震える声でささやいた。

狭いその家は二人っきりで、だれはばかることもない。素っ裸でも寒くない五月末の夜で、乏しい行灯の明りに、お勝のかぼそい体は蒼白いほどに見えた。留七はお勝の肌の溶けそうな柔らかさと、キメの細かさに魅入られてしまった。

お勝の体は人一倍感じやすいようで、わずかな愛撫にすぐ震えが走った。快さが高まってくると、お勝はまるで狂ったように腰をくねらせ、枕を噛んでうめいた。

以後の逢引きの場所は、ずっとその家だった。茶屋へ行くと、きょうは大丈夫だとお勝が

知らせる。五日に一度くらいの割合になった。

毎日でもお勝を抱きたい留七は、それが不満で、逃げようと誘ったが、お勝は泣き笑いの顔で、相手にしなかった。惣次は顔が広く、手下も方々にいて、どこに逃げても捜し出されるというのだ。

それに、手に手を取って逃げおおせたとしても、暮しの立つ当てはない。

一思いに惣次を殺すことも、留七は考えたが、考えただけである。実行するなど、思いも寄らない。

その思いも寄らないことが起ってしまった。ずるずる、お勝と逢い続けて半年目の師走半ば、二人が抱き合ってうとうとしている時だった。惣次は帰らないから、泊って行けとお勝がすすめ、留七はその気になっていた。

裾にこたつを置いているので、布団の中は汗ばむほどで、二人とも裸であった。お勝は留七の手枕で、しがみつくようにして寝ていた。

最初にお勝が気付いて甲高い悲鳴を上げた。悲鳴で留七は人心地になったが、部屋の薄暗がりの中に、中背で肩の張った男が立っていた。

「てめえ、どこのどいつだ。人の女房を寝取りやがって」

と、大男がうなるように言った。

お勝が布団から転げ出て部屋の隅まで這って行き、手足を縮めて丸くなった。

その男は惣次に違いなかった。帰ってこないはずが、なにかの都合で立ち戻ることになったのだろう。

惣次が筋骨たくましい男だとは分かるが、顔付きなどは見分けられない。

留七は恐怖で体が動かなかった。惣次はふところを探っていたが、匕首を抜き出し、ゆっくり近付くと、足先で寝着を蹴り飛ばし、素早い動作で、匕首を逆手に、下帯もつけない留七に躍りかかってきた。

留七が横に転がって匕首を避けることができたのは、幸運というほかない。

留七は脾弱で、ふだんは動きも鈍いが、この時は格別だった。生死の境目だったからだろう。惣次は勢余って、敷布団の上にうつぶせに倒れ込んだが、瞬間、留七は匕首を持った惣次の手首に噛みついた。惣次が思わず匕首を落したのを拾い上げると、惣次の脇腹を何度か刺した。

惣次は物凄いうなり声を上げていたが、それも次第に弱くなり、のどを鳴らし始めた。

裸のままのお勝がにじり寄ってきて、震える体で留七に抱きついた。

「留さん、早く逃げとくれ、あとはわたしがなんとか言いつくろうから。つかまっちゃあいけないよ。きっとわたしは……」

それからお勝は涙声になった。

こうなったら、どこまでもいっしょで、添い遂げるつもりだ、とお勝は言った。

もしつかまったら、わたしをかばうことはない、何もかも正直に白状してかまわない、お

前がお仕置になったら、わたしも生きてはいないつもりだから、とお勝は留七の手を取って自分の胸乳に押しつけながら、泣き泣きそうも言った。

だが留七は、家の外に飛び出してすぐ、近所の若い者数人につかまってしまった。家の中のひどい物音や悲鳴、うなり声などが外に洩れ、不審に思われていたらしい。留七の支度もおそく、それにお勝と別れ難い思いで、抱き合いなどしていたため、若い者が棍棒を持って、待ち構える暇を与えてしまったものらしい。

留七は自身番屋に引っぱられた。

二

茶屋でお勝にほれ、口説いたが相手にされず、それなら力ずくでもと思い、お勝の住みかも突止めていた。あの晩も様子をうかがいに行ったところ、表戸の戸締りがしてなく、中に入るとお勝がひとりで寝ているので、ムラムラとして上りこみ、お勝を押えこんで思いを遂げようとしているところへ、亭主らしい男が帰ってきたので、逃げようとしたが男は匕首で突きかかってきた。殺すつもりはなかったのだが、はずみであんなことになってしまった。

役人の取調べに、留七はそう白状した。かばわなくてもいいとお勝は言ったが、その言葉が反って、留七をかばう気持に駆り立てたのだと言える。

役人は留七の白状を信じた。留七がひんぱんにお勝の許に通っていたのを、意外に近所の者が知らない。用心して夜おそく通ったためでもあり、お勝に言われて、いつも絞りの手拭

いで頬かぶりをし、格子か碁盤の縞のあわせを着ていたのが、惣次の身なりとほぼ同じで、たとえ近所の者が見たとしても、遠目なら惣次と間違えたはずだった。

その白状が通れば、留七自身は死罪を免れないが、お勝は助かることになる。

自分もなんとかして生き残りたいのだが、あっけなくお縄になり、殺しましたと白状したからには、万に一つの望みもあるまい。

そういう定めだとあきらめるほかないが、お勝を道連れにしようとは思わなかった。

留七は小伝馬町の牢屋のうち、大牢と呼ばれる雑居房に入れられた。五間と三間の広さで、その中に四、五十人ほどの未決囚が詰めこまれている。牢名主をはじめ、牢役人と呼ばれる連中が、それぞれ役目を持って、壁を背に、畳を何枚か重ねた上に坐っている。

留七は牢は初めてではなかった。これまでに二度、大牢に入っていたことがある。二度とも叩きっ放しで済んだ軽罪だったが、牢役人の中に留七を見知った者がいて、牢名主その他に引合わせてくれた。経験者なら、それほどいじめられない。ツルの用意ができなかった事情もわかってくれた。

それに、殺しというので、なんとなく一目置かれた形になった。

様子がわかっていることでもあり、牢内の暮しは留七にとって、それほど辛いものではない。もっともそれは、遠からず首と胴が離れるまでのことだ。

留七は目立たず、おとなしく、人に憎まれないところがあり、上の者の言いつけ通り、まめに体を動かしもするので、邪魔者にされる恐れはなかった。

真冬で、寒風が牢内に吹き入ってくる。本来なら骨まで凍るほどだが、芋を洗うような囚人たちの肌のぬくみ、人いきれで、辛抱できないように寒くはない。留七は夜寝ながら、お勝のことばかり考えていた。地獄と極楽である。どうしているか、やはり茶屋に出ているのだろうか、新しく男でもできたか、などと考える。

せめてもう一度会いたい、会って心ゆくまで、あの優しい体をむさぼりたいという思いが、だんだん募ってきた。なんとかして助かりたい。無駄な望みだと知りながら、奇蹟のようなものを待つ気になっていた。

奇蹟は火事という形を取って実現した。火は牢屋敷北の塀外の小伝馬町から出て、西風を受けて燃え広がったのだが、これがたまたま、囚人の火付けの計画と重なっていた。

その計画の頭株は文三という男で、押込みをやって家人に見とがめられ、二人を傷付けたという罪科がある。二人のうち一人は死んでいるので、獄門は間違いないところだった。

留七が似たような殺しで入ってきたというので、文三は留七に親しみを寄せているようだった。その文三が、時折留七に火付けの計画を匂わせていた。

このままおとなしくしていても死ぬ身だとすれば、なにかしたほうがマシだと言う。しくじってもともとだ。その手段が火付けだった。

牢内から火が出れば、囚人はみな解き放される。一旦本所の回向院に避難させられ、そこで役人が、三日以内に牢に戻れば、罪一等を減ずるが、逃げたやつは軽罪でも死罪にすると

言い渡してから、改めてそこで囚人を解放する……そういうこともあれば、火の回りが早く、何もする暇もない時は、牢屋敷から直接解き放さざるを得ないということもある。近火そのほか、余裕がある時には、軽罪の者は解放しても、死罪、遠島など重罪の者は、縄で縛り、モッコに乗せて役人が付き、逃亡のおそれがないようにして、適当な場所に避難するが、緊急の場合となれば、そんな処置は講じられず、軽罪の者と同様に解き放すことになる。

その緊急のドサクサを、文三とその仲間は狙っており、道具も用意していた。道具というのは火打石、モグサ、油をしませたボロ布、板切れなどである。それらを使って、牢の羽目板や格子を燃え上らせる。一箇所だけでは駄目で、大牢数箇所、ほかに二間牢や百姓牢、揚り屋などというのがあり、そこに仲間がいるので、一斉に火付けをさせると、役人たちは手のほどこしようがなくなり、囚人を焼き殺すわけにはゆかないので、全部解放せざるを得なくなる。

留七は文三から、それほど事細かに打明けられたわけではないが、まずそんなふうだろうと想像できた。仲間に加わるかどうかについては、留七はあいまいにしていた。トントン拍子に行くとは思われず、気が進まないからであった。

しかし、牢外で火事が起ったので、事情はすっかり違ってきた。

火が出たのは、正月十四日の夜四ツ刻（午後十時）である。西風は強く、燃え広がって、火の粉が牢屋敷内に降りかかりだした。

役人や雇いの者たちが右往左往し、囚人たちが騒ぎ始める。日頃真暗な牢内は火の反映で

明るい。

文三が指を輪にして口中に含み、吹いた。鋭い口笛が三度響いたが、それが他の牢への合図だったらしい。

火付けの方法は、大体留七の想像通りだった。想像になかったのは、どうして手に入れたのか、文三が油を壁の羽目板や床に垂らしたことだった。

囚人たちは暗黙のうちに文三一味に味方し、役人に見付けられないように、壁を作った。火は二箇所で、羽目板をなめながら燃え上った。他の牢でも成功したようだった。言い合わせたように、囚人たちはわめき始めた。

囚人全部を解き放すほかに、手段はなくなった。

戻ってくれば罪を軽くし、戻らねば死罪という、例の文句を牢屋同心たちが金切り声でとなえていたが、耳を藉す者はいない。みな、我勝ちに牢を出、表門から町中に駈け出して行く。

留七もその中の一人である。彼はもちろん、お勝の家をめざした。

三

留七は途中、親父橋の橋下にひそんで、一刻（二時間）ばかりを過した。火事騒ぎがおさまり、人々が家に帰って寝静まるのを待ったのである。

小伝馬町の方角の空の赤い色が、次第にあせ、半鐘の音も間遠になった。人の往来も少なくなり、夜の静けさが戻ってくる。

身を切るような風が掘割を吹き抜けてきて、留七の薄着の体を容赦なく包む。

このまま逃げたものか、それとも牢屋に帰ったものか、と留七は思案していた。逃げおおせれば、これ以上のことはない。お勝といっしょに、どこにでも行って暮せる。だが、役人共は血眼になって留七の行方を捜すに違いないし、その網の目をくぐれるかどうか、心許ない。

もしおとなしく戻れば、確実に死罪は免れるだろう。

死罪の罪一等を減ぜられれば、遠島である。二度と江戸へ帰れなくなり、お勝とも永の別れになるが、生きのびることはできる。

留七は迷い、とうとうどちらとも決めることができなかった。堀の水が闇の底で冷たく光っているだけだ。

お勝の家にようやくたどり着き、そっと戸を叩いたが、返事はなかった。中には灯りがついているようだ。隙間に耳を当てると、人の気配がある。お勝ひとりではないかもしれない。

留七はやや力を入れ、また戸を叩いた。三度目に叩いた時、土間におりる足音がした。

「どなた？」

と、お勝の声がした。その時に裏戸の音もしたようだった。留七だと言うと、お勝はえっと息を呑んだようだった。

戸があいた。呆然と立っているお勝を押し戻すようにして、留七は入った。

「留さん、いったいどうして」
と、お勝があえぐようにして聞いた。
「牢屋が火事で、おれたちは解き放しだ」
と言いながら、留七はお勝を抱きすくめようとしたが、お勝は身を引いて避け、首をうなだれてしまった。留七はそうしたお勝を見ていたが、黙って部屋に上った。牢を出た時から裸足である。
男が来ていた跡は歴然としていた。夜具が乱れ、その乱れ様が、たったいまだれかが脱け出したばかりというふうだった。留七がお勝と寝ていた時と同じように、こたつが裾に入れてある。敷布団の下から、男物の足袋がのぞいていた。銚子の酒をこぼしたものか、畳が濡れ、酒の匂いを放っている。
土間の流しの板の上に、汚れた皿小鉢の類がのせてあるが、お勝ひとりの分ではない。大あわてで片付けたのがわかる。
留七はお勝と向い合った。お勝は寝間着の上に羽織を引っかけていたが、襟や裾前がよじれている。
「帰ってくるんじゃなかった。邪魔したな」
と言っているうちに、留七の頭が火のように熱くなった。
「もう男をつくっていたのか。……あれからそんなに経っちゃあいねえのに、さすがは商売柄、早えな」

お勝は観念したのか、なんとも答えず、顔に奇妙な笑みをたたえていた。
「こっちは毎日、地獄の苦しみだったぜ。なんとか言わねえか、お勝」
「見ての通りだよ。言い訳はいたしません」
とだけお勝は答え、笑みは消さなかった。
留七はお勝を押し倒し、身に付けたものをみな剝ぎ取った。夢にも忘れない、しなやかで細い、白い体があらわれた。
留七はすっかり正気を失っており、お勝を何度も足蹴にし、胸と言わず腹と言わず、踏みにじった。お勝は悲鳴を押し殺しながら、されるままになっている。
留七は一息入れた。いくらか落着いたが、自分を裏切ったお勝への憎しみは増したようだった。こいつを道連れにしよう、と留七は思った。おれもどうせ、逃げ切れはしないのだ。
うつぶせになり、肩で息をしているお勝の上に覆いかぶさり、留七は両手をお勝の首にかけた。やはりお勝は手向いをしなかった。……どのくらいの間絞めていたかわからないが、お勝の手足が突張り、小刻みに震えはじめた。
夢から覚めたように、留七は両手を離し、飛びすざってお勝の様子を見た。お勝は身動きをしない。まげのつぶれた後髪が見えるだけで、顔は布団に押しつけられたままだ。
留七はお勝を抱き起し、時にかかえ上げてゆさぶり、頬を叩き、耳許で何度も名を呼んだ。すると、微かなうめき声がお勝ののどの奥から洩れてきた。留七はお勝の胸をさすり始めた。

これでもう、いつ死んでもいいという気に、留七はなっていた。あれから大分経ち、夜明けも近かった。暖かく柔らかい布団の中である。お勝は餅肌をぴったり留七にくっつけている。留七はお勝の体を味い尽したし、お勝は留七のどんな望みにも答えた。

留七は無精ひげだらけ、体は垢が溜りに溜ってむさいが、反ってそれが、ふるい付きたいようにいいのだと、お勝は言った。

だが、何度か抱き合ったあと、お勝は湯をわかし、留七の全身を繰返し繰返し拭いてくれた。

裏から逃げた男は、四十年輩の煙草屋の亭主で、前々から口説かれていたのだという。その男に身を任せたのは、茶屋のおかみへの義理と、男が申し出た礼金の多さのためである、とお勝は話した。お勝のほうで、心細さもあった。これからその男の世話を受けようかとも思っていた。恋しい留七は生きて娑婆に出られる見込みがない。気に染まなくても、だれか金のある男に頼るほかない身の上なのだ。

「うれしかったよ、留さん。殺されて本望だと思った。それほどほれていてくれたんだもの」

と、お勝は言った。留七がこうして帰ってきたからには、事情が一変したのだ。

「ところが、帰ったのは一時のことだ。おれはどうしようかといろいろ考えたが、ふんぎりがつかねえ」

と、留七は、牢屋に戻る、このまま逃げるの二筋道に迷っていることを言った。

命が助かっても、遠島ならなんにもならない、とお勝は舞い戻りに反対した。もう一刻でも離れたくない。解き放しの囚人はたくさんいるから、お上も十分に手が回るまい。かくれ場所なら心当りがある。

「おめえがそう言うなら」

と、留七は同意した。

甲州街道、高井戸の宿外れに、百姓で太吉というのが住んでいるが、その母親のおふじが、お勝の幼ない頃から十二、三の時分まで、面倒を見てくれた女だ。大事な人だと一筆書いて頼めば、必ずかくまってくれる。

おふじはお勝の家に永年住込んで働き、お勝には乳母の役をしていた。お勝の生家は神田多町の八百屋で、お勝は独り娘だった。

父親が悪いやつに欺され、借金の証文に判をついたところ、借りた本人が雲がくれし、父親が背負いこんでしまい、カタに何もかも取られてから、父親は重病にかかり、母親が賃仕事や行商をして暮しを支えていたが、無理がたたってこれも寝込み、父親より先に死んでしまった。その一年後に、父親もあとを追った。おふじは最後まで、よく父親やお勝の面倒を見てくれた。

いまも時々便りを出し、向うからも安否を問うてくるが、呉服屋の下請けで仕立物をしていることになっている……

この家にいつまでもいるのは危ないから、高井戸に行ったほうがいい。自分もなるべく早

く暇を取り、あとを追うつもりだから、とお勝は言った。

四

お勝の家に泊って三日目の深夜に、留七は出発した。お勝が着物をどこからか工面し、髪を結い、ひげも当ってくれた。その上、金を二分余り用意してくれもした。

ふところにはお勝の短かい手紙が入っている。おふじの家までの道順も詳しく聞いてある。夜明け前に高井戸に着き、おふじの家を探したが、それにやや手間取り、東が白み始めた頃にようやくたどり着いた。

辺りはすっかり田舎で、広々とした冬田に霜がびっしりおりている。こんもりした森を背にした藁葺きの百姓家がそれだった。

おふじは五十をすこし過ぎたと思われる年頃の女で、よく肥え、赤ら顔だった。うさんくさそうな様子だったが、お勝の手紙を読むと相好が変り、愛想のいい笑顔になった。

お嬢さんのいい人なら、粗略にはしないから、大船に乗った気でいてくれと、おふじは言った。

なるほど、食いものは粗末で、あまり口に合わないが、扱いはよかった。息子の太吉夫婦と、子供が三人いる。仕事を手伝うと言ったが、人にみられてはならないからと、おふじに止められた。留七は与えられた一室でゴロ寝するほかはなかった。江戸市中より寒さはきびしく、小さな火鉢一つでは少しも暖まらないが、牢屋にくらべれば極楽だった。

しかし、この暮しも三日と続かず、三日目の昼下り、おふじがあわただしくやってきて、手が回ったらしいから、すぐ逃げてくれと言った。子供が不用意に客人のことを人にしゃべり、それを目明しの三下が聞きとがめたらしいという。すぐにも踏込まれそうなので、留七は何を考える暇もなく、裏口から森の中に逃げこんだ。

思ったほど深い森ではなかった。森を突切って抜けたところに、三軒ばかり百姓家があり、飼い犬が二頭、留七を見て吠えだした。あわててあと戻ろうとすると、捕り方とわかる数人が、輪を作るようにして迫ってきていた。どう仕様もなく、留七は落葉の散り敷いた地面にへたりこんだ。

小伝馬町の牢屋敷は、牢屋奉行の石出帯刀の住居と、諸役人の勤務所、牢、仕置場などに大別されるが、牢は大体北側塀際の長い一棟におさまり、百姓牢と身分のある者が入る揚り座敷だけが別棟になっている。

こんどの出火で、北側の牢は焼けてしまい、戻されてきた留七は百姓牢に入れられた。

百姓牢は百姓や町人で、無宿でない者を入れるところだが、ほかが焼失しているので、立ち戻った囚人のほとんどが詰めこまれたのである。

立ち戻ったのは囚人の八割くらいだと、留七は聞いた。火付けをした文三の顔はなかった。

「文三は逃げたのか。うまくやったな」

と、留七は顔見知りの繁吉という男に聞いた。繁吉は喧嘩で人を殺している。文三とは仲

がよかった。

「うまくなんぞやるものか。文三は死んだぜ」

と、繁吉は答えた。文三は下総に落ちのびようと、大川で渡しを待っているところへ追手がかかり、川に飛込んだという。泳ぎは達者だったが、寒中ではあり、体も弱っていたから、すぐおぼれた。永代橋の下に流れ着いた時には死んでいた。

繁吉は文三と、途中までは一緒だったが、なんとなく虫が知らせて、大川へ出る前に袂をわかった。だが気になるので、あとから文三を見えがくれに尾けていたところ、やはりあんなことになった。臆病風に誘われたわけでもないが、逃げるのはとても無理だと思い、牢屋に帰ってきたのだと、繁吉は言った。

「だがな、おれはおとなしく遠島になるつもりはねえ。運任せには相違ねえが……」

繁吉は留七に耳を藉せと言い、牢抜けの計画を話した。百姓牢は身動きもならないような混み様で、役人はいつまでもこのままにしておくはずはなく、焼け跡に仮の牢を急造するだろう。仮牢に入れられた時が好機で、いかに周囲を頑丈に造ろうとも、床下の地面がヤワである。

本来、牢は地面をよく突き固め、鍬の刃もはね返すほどにしてから、その上に石を敷きつめてあるもので、これなら歯が立たないが、仮牢はそんなことをしない。床板を剝がし、穴を掘ることができる。牢の外まで掘り抜けばしめたもので、頭さえ出れば、あとの体も出るのだ。

塀はそれほど高くない。人の肩に乗れば、容易に塀の上にあがれる。忍び返しなど、物の数ではない。

牢抜けが朝まで知れなければ、よほど遠くまで逃げられる。それに、解き放しの時に、ちゃんとかくれ場所も定めてきた。

土掘りの道具は、釘を使えば十分だ。釘なら壁、床板など、至るところに打ちつけてあり、中に打ち方が悪く、引き抜けるやつが必ず見つかる。

「こうして打明けたからには、仲間に入ってもらうぜ。おめえが入ってくれると見込んでのことだ。おめえは死罪と決まった身だから、一か八かやるだろうな」

と、繁吉は誘った。ほかに同意したのが三人いる。みな死罪か遠島になりそうな者だ。同意しなければ殺されるかもしれなかった。仲間には入らないが、口をつぐんでいると言っても通らないだろう。

留七は仲間に加わった。火事の善後処置で、町奉行所の牢屋敷もごった返しており、仮牢ができるまで、死罪の言い渡しはないだろう。

留七は高井戸であっけなくつかまったことを繁吉に話した。繁吉は黙って聞いていたが、

「おめえも甘え男じゃねえか。欺されたのよ。おめえをサシたのは、そのおふじってばばあだぜ。それでなけりゃあ、追手のかかるのが早すぎらあ」

と言った。

「いや、そんなはずはねえ、おふじはお勝の……」

留七はお勝の家に行った時のいきさつも話すことになった。

「それだから甘えと言うんだ。お勝はおめえにほれてなんぞいやしねえや。邪魔だってことよ。それでおめえをおふじのところへ送り、おふじにサシをやらしたんだぜ。いってえ、お勝との馴れそめはどうだ？」

留七は仕方なく、茶屋での出会いから、お勝のヒモの惣次を殺すまでのことを物語った。

「そら見ろ。お勝がおめえになびいたのは、惣次を殺さすためだぜ。その晩惣次が帰ってくるのは、お勝にはわかっていたんだ。おめえが逃げて逃げられねえのも、先刻承知だったろうよ。お勝は派手な声を立てやがっただろう、近辺に響き渡るようにだ」

繁吉は黄色い歯を剝き出して笑った。目にはあざけりの色がある。お勝はそんな女ではないと言い返したかったが、言葉にはならなかった。思い返すと、逃げるのに手間取ったのも、お勝がわざとそうしたのかもしれないのだ。

「男と会っていたと言ったな。その野郎が正真正銘、お勝の男だ。さぞかしいい男だろう。いま時分、二人はさしつさされつで、おめえの馬鹿さ加減を笑っているだろうぜ。なあ留七、仕返しのためにも、ぜひ一件をやっつけざあなるめえぜ」

繁吉は留七の肩を叩いた。

「大罪を犯したにも似ねえ、ウブだなあ、おめえは」

五

小伝馬町牢屋敷の入牢者数は、もちろんその時々によって違うが、平均して四、五百人というところであったらしい。火事で一旦解き放され、帰ってきた囚人が三百人あったとして、牢屋の大半が焼失したのでは、収容場所に困る。軽罪の者なら浅草、品川の溜（病囚を置く）や、二箇所あったという大番屋その他に入れることができたろうが、死罪、遠島に当る者は、そうもできない。従って百姓牢に詰め込まれたのは、留七、繁吉のような重罪人ばかりである。

逃げようとして捕えられた者、おとなしく帰った者が、従前からの百姓牢の入牢者にまじっている。

捕えられた者では、留七のほかに巳之助、長助がいて、二人とも牢抜けの仲間になった。帰った者で、仲間に入ったのは、米造という男で、頭が繁吉。総勢五人になった。

仮牢は大勢の職人、大工が入って、十日ばかりで出来上り、各所の囚人が集められたが、広狭二つの牢に分けられ、重罪の者は狭い牢に入れられた。それは一味にとって好都合だった。人数も二十人に足りない。仲間に加わらない者は、役人に告げ口しないという誓約を、繁吉が取りつけた。五人はもとより命を投出しているので、裏切れば直ちにくびり殺すという脅しは利いた。

古釘、瀬戸物の破片などが百姓牢で手に入った。百人近い囚人なので、だれかがそんなも

のを持っている。

見回りの目を盗み、夜通し仕事をして、床板を剝がすのに三日かかった。板に打ってあった釘やカスガイがまた手に入った。

穴掘りは交代でやった。繁吉が言った通り、土は比較的軟弱で、仕事ははかどった。

牢外に口が開いたのは、掘り始めて十五日目である。一文銭ほどの穴があるくらいで、地表からはなんの変化も見られない。

留七は脱出前に死罪の言い渡しがありはすまいかと、それが唯一の気掛りだった。巳之助や長助もそうであったろうが、穴の口が開くと、三人は手を取り合って喜んだ。

お勝のことをどう考えたらいいのか、留七は決めかねていた。お勝がそんな女だとはどうしても思えない一方では、繁吉の言い分がピタリと当っていそうでもある。

お勝に会ってからのことだ。欺され、陥れられていたのだとわかれば、有無を言わさず殺してやる。

牢抜けを決行したのは、二月中旬の小雨の夜であった。穴はごく小さく、頭からもぐって入らなければならない。肩をすぼめなければ先へ進めない。

繁吉、留七、巳之助、長助、米造の順で、無事に抜け出した。全員土まみれである。狭く長い空地の向うに、頑丈な塀があり、高さ八尺はあろう。

留七は繁吉の肩に乗り、塀上の忍び返しに取り付いた。忍び返しは先を鋭く削いだ竹を組んだものだが、多分に装飾的で、あまり役に立たないのがわかった。

次々に塀に上り、最後の米造は帯をつないで垂らし、腰に巻付けさせて、引張り上げた。

塀外には、やはり帯にすがっておりた。

牢屋敷の周囲は堀になっているが、それを渡るのはたやすい。五人は一旦、堀の中にしゃがんだ。牢内は静まり返り、何事もないようだ。見回りがくるのは半刻（一時間）近くあとのはずである。

繁吉ほか三人は、それぞれ落ち着き先があると言う。ないのは留七だけだった。

「そうか。おめえはおれに付いてきな。おめえは見てくれがいいから、身なりをちゃんとすれば、人に怪しまれねえ。役に立ちそうだ」

と、繁吉は言った。

「いい仕事がある。あきらめていたんだが、こうなれば取りかかれる。この五人でやろうぜ。危ねえ橋だが、うまく運びゃあ二百両ほどのものだ。山分けで四十両、当分は左団扇ってもんだ。やるかえ？」

「仕事なんぞがあるものか。やつらを生かしておきゃあ、あとあとの障りになる。どうせ死ぬ身だったんじゃねえか」

と、繁吉が言った。打合せに、五人が深川洲崎の弁天裏に集まる手筈になっていた。しかしそれは繁吉の嘘で、奉行所に投げ文をし、巳之助、長助、米造を捕えさせようというのだ。三人捕えられれば、繁吉と留七への探索の手もゆるむに違いない。

繁吉は小網町の女の家にひそんでいた。女はひっそりと小間物を商っているが、その実は甲羅を経た賊で、繁吉とは二十年来の仲だという。留七は居候である。小伝馬町から近いが、それが反って探索の目をくらませている。

留七は言われた通り、投げ文の文句を書き、小石に結びつけ、数奇屋橋門内の南町奉行所に投げこんだ。投げ文の最後に、自分の名前を書き入れた。

三人が捕えられたうわさは、すぐ留七たちの耳に入った。

繁吉が留七を襲ったのは、それから数日後の夜中である。留七は酒をすすめられ、大酔した体を装ったが、実は醒めていた。留七は油断せず、次は自分の番だろうと思っていたのだ。熟睡させ、女と力を合わせて絞め殺すつもりだと悟ったので、寝床の中で眠らずにいた。ふところには台所から持ち出した出刃包丁を呑んでいた。

二人が足音を忍んでやってきて、女が留七の足をおさえ、繁吉が胸の上に馬乗りになろうとしたところで、包丁をふところから出し、右手に握りしめた。

繁吉の手が留七の首にかかり、グッと締めつける。同時に留七は掛け布団をはねのけ、出刃を思い切り繁吉の脇腹へ突き出した。

その一突きで繁吉は弱った。逃げようとするのへのしかかり、止めを刺した。女は仰天して逃げ、梯子段を転げ落ちてから、家を飛出す様子だった。

留七は南町奉行所へ自訴して出た。

留七の罪科はお勝にからんでの惣次殺しと、解き放しで逃げようと試みたこと、それに破

牢である。だがこんどは同じく破牢の三人を訴え、一人を殺している。繁吉を殺したのはいまで言う正当防衛である。留七は取調べに、繁吉に脅され、やむなく破牢の仲間になったが、その時から、罪の償いとして、四人をつかまえてもらおうと心を決めていたのだと申し立てた。

元来、惣次殺しも、自分の命が危うかったからやったことで、姦通まがいの行いは悪いが、正当防衛と見てもいい。

留七は死罪、遠島を免かれ、江戸払いを言い渡されて出牢した。

お勝は坂本町の家にいなかった。家には見知らぬ夫婦が住んでいる。近くに住む年寄りに金を与えて聞くと、男に捨てられた様子で、行き方知れずになったという。お勝と最後に肌を合わせてから、半年近く経っていた。

お勝には前々から若くて様子のいい男があった。どうせまともな暮しをしているやつではなかったろうが、お勝はほれ込んでいて、客を引入れて手にした金を、あらかたその男につぎ込んでいたようだ。ところが惣次という乱暴者が現われてお勝をわがものにし、稼いだ金も取上げるので、男と会えなくなった。

その惣次が、お勝の客と争って殺されたことがあり、邪魔者がいなくなってお勝は有頂天だったが、男にはすでに新しい女ができていたようで、お勝を捨てて行方をくらましてしまった。行きがけの駄賃に、お勝の貯めた金や、金目の衣類などを洗いざらい持ち出したらし

い。そしてお勝もいつの間にかいなくなった。……年寄りはそういう話をした。

やはり繁吉の言ったのが当っていたと留七はいまさらのように合点したが、奇妙にお勝を憎む心は消えていた。

一年経った。街道筋を転々としていた留七は江戸に舞い戻り、相変らずその日暮しだった。ただ以前よりいくらか顔も売れ、賢くもなっていた。鉄火場での運もよく、財布が空ということはなくなった。

お勝にもう一度会いたい気持はあったが、会ってどうしようというのでもない。あの頃の熱はすっかり覚めたようだった。

思いがけなくお勝の姿を見たのは、三田三角の岡場所で、見るかげなくやせ細ってはいたが、留七には遠くからでもそれとわかった。五月末の夕暮で、お勝は店の前で通りがかりの男を引張りこもうとしていた。酔客が多いが、彼等は冗談口を叩いた末に、お勝の手を振り放して行ってしまう。お勝はその後姿に悪態をついていた。お勝はもう、客を引留める力を失っているらしい。

留七はお勝に近付いた。どうしようとは考えていなかった。

お勝はぼんやりした顔で留七を見た。お勝の顔はこけ、化粧がむやみに厚く、広くくつろげた胸に肋骨が浮いて見えた。たった一年余り前の面影が消え失せている。

「見忘れたのか、お勝」

と声を掛けると、お勝はそれほど驚きもせず、目を細めるようにしてから、

「お前は留さんかえ？　ふしぎだねえ。まだくたばらなかったのかい？」

と言い、そっぽを向いて笑うと、流し目をくれて、泊り二朱で上るなら、お前に覚えのあるいい思いをさせてやるという意味のことを、もっと露骨で下卑た言葉を使ってしゃべった。留七はお勝の荒み切った様子の裏側に、あの頃の頼りなげな、物悲しげな美しさがわずかに残っているのを見た。

これが瞬時にして留七を狂わせたのかもしれない。留七は夢の中にでもいるように振舞い、お勝を押え、匕首を抜き出してその乳下を深く刺した。そしてこと切れたお勝を抱きかかえたまま立ち尽していた。

夫の首

一

きよは朝からずっと、悪夢でも見ているような気持で、ぼんやり過していた。上野で戦争が始まったのは、早朝に湯島から撃ち始めた大砲の音、豆がはぜるような小銃の音でわかった。表の通りを駆け抜ける大勢の足音がしたり、馬の蹄の音がしたりもする。一度は、つい近くで敵味方が斬り結んでいるらしい人声、物音もした。

夫の今村弥之助は、いまどこにいるのかわからない。戦争が始まった以上、上野の山に立てこもって戦っていると思われるが、あるいは彰義隊に加わらずに、仲間とどこかへ落ちて行ったのかもしれない。行った先で薩軍に抵抗しようというのだ。きよにはほとんど時世の知識もないが、幕臣の不平組が、さまざまな隊を作って江戸をあとにし、各地で戦っている様子だけはわかっている。

今村は代々、御徒の家で、屋敷もずっと、現在住んでいる下谷の二長町である。近所は軒並み、御家人の住居という一角だが、戦争騒ぎで、一家をあげてどこかへ立退き、空家になっているところが多い。

弥之助はきよに、実家へなりどこへなり、移れと言っていたが、きよは断わった。噂はいろいろ飛んでも、この辺が戦争になるとはとても信じられなかったし、身を寄せるところがないでもないが、気が重かったのだ。のんきと言えば言える。

それに弥之助も、それほど真剣には、きよの身の振り方を考えていないようだった。仮令

戦争になったとしても、きよにまで危害が及ぶことはないと楽観していたフシもある。

弥之助は平凡な男で、勤めぶりはごく普通、一応まじめな身持ちだが、堅いというわけでもない。遊芸もあれこれかじったり、ちょいとした浮気もしたりしていた。人付き合いは円満なほうだ。

弥之助に嫁いだのは五年前で、夫の上役である組頭の仲立ちだった。きよは婚儀の当日に、はじめて弥之助に会った。

きよは弥之助を好きな人だとも思わなかったが、不足というのでもなかった。夫と決まれば、どこまでも夫であった。

弥之助も同じような気持だったようだ。きよは十人並みの顔立ちをし、体は丈夫である。おっとりしたたちで、少々のことには驚かない。それだけに、気の回らないようなところはあるが、なまじ才走ったり、勝気だったりするよりも、そのほうが弥之助の好みに合ったと見える。

弥之助は元来、徳川がどうの、薩長がどうのと、額に筋を立てるような男ではなかったのだが、それが、つい近頃は変ってきていた。黙って出て行っては、家を明けるようなことが多くなった。よく飲んで帰ってくる。どうやら、仲間で集まって、相談でもしている模様だが、弥之助は話さず、きよも聞かなかった。

家に御徒の仲間数人を連れてくることもあった。そんな時、きよは部屋から締め出されてしまう。やはり戦争の相談なのだろうと、漠然たる想像をするくらいのことしか、きよには

出来なかった。いくさなどに出て、命を落してもらいたくはないが、徳川の武士として、止むに止まれぬということなら、仕方がない。

その弥之助は、三日前の夕刻に家を出たまま、帰らないのだ。金は、有り合せをみな持って行った。

家には具足や槍があるが、持ち出してはいない。しかし、鉄砲を手に入れて、それを使うつもりかもしれない。鉄砲組の仲間もいるはずである。

ばかなことはしないから、心配しないでいろ、と出て行きがけに弥之助は言った。同時に、いまさら仲間から抜けられもせず、義理で行くようなもんだ、と、上野に立てこもることを匂わせるようなことも言った。

きよは弥之助の言ったことが、よくわからなかった。戦争に行くつもりなら、心配するなは無理である。それに、戦争はばかなことどころではない。気休めなら、下手すぎる気休めだ。

気休めでないとしたら、戦争に出ても、なんとかうまく立ち回るというつもりだろうか。しかし、まさか最初から逃げ場を探すわけでもあるまい。弥之助は鼻っ柱の強いところがあり、臆病者ではない。

その辺のところがよくわからないのだが、きよはもう迷わないことにした。上野で戦争をしていると思っていればいいのだ。そして、生死にかかわらず、待っているほかはない。

戸外へは、とても出られたものではなさそうだ。

どんよりして、雨もよいの日である。このところ雨が続き、下谷、浅草などの低地では水が出ている。

大砲の音は相変らず断続し、小銃の音も絶えない。逃げおくれた町家の者たちだろう、呼び交わしながら、大八車を押してゆく様子が、騒々しい音からわかる。

別に怖いという自覚はなかったが、何事も手につかず、ただつくねんと坐り続けているのは、怖さを通り越して、うつけているのかもしれなかった。

家は手狭なほうだが、夫も女中もいず、ひとりきりでいるせいか、ガランと広く感じられる。戸締りにぬかりはないつもりだが、凶悪な賊などが、どこからか押しこんできそうで、そのほうが戦争そのものより怖い。

きよは懐剣だけは帯にはさんでいた。

二

隣家の早瀬三五郎の妻とよが、裏口からそっとやって来たのは、まだ正午にならない頃である。早瀬は御広敷番で、役目の上ではかかわりがないが、隣り同士のことで、弥之助とは親しかった。とよときよも、時々は往き来をしたり、食べ物の贈答などをする仲である。

上野のいくさはもうほとんど終って、徳川方は敗北したようだ、ととよは言った。

早瀬も山内に立てこもって戦っている。これはほぼ確実だった。ただ、弥之助の仲間ではないから、部署は違うだろう。立てこもりの幕軍は、彰義隊が主だが、別に馳せ参じたのが

大分いるようだし、中には略奪などが目当ての、無頼の者もまぎれ込んでいるそうだ。

早瀬の家には、古くから使っている下男がいて、この男が戦争の様子を見に行ってきたのだという。

「では、おたくの旦那様は」

ときよが聞くと、黙って首を振った。敵味方の死者が、御橋、黒門口のあたり、広小路、山下などにたくさん転がっているそうで、山内はなおさらのことだろう。

きよは頭から血が引いて、目まいがしてきた。死者の中に、弥之助がまじっているかもしれない。

とよも同じことを考えていたのだろう。しばらく、お互いにさしうつむくようにして黙っていたあと、とよは思い詰めたような顔を上げて、

「おきよさん、探しに参りましょう」

と言った。

「はあ……」

思いがけない提案で、きよは返答に困った。

「夫の首を敵に取られるのは、恥辱でございますよ、おきよさん」

と、とよはきよをにらみすくめるようにして言った。

とよは普通、そんなきつい、凝り固まったようなことを言う女ではない。物柔らかでゆっくりした性質は、きよに似ている。武家の女房といったところは、あまり見られないのだが、きょうは違っていた。

それにしても、とよは本気なのかどうかと、きよは少し疑っていた。戦いが終ったかどうかもわからない場所へ、夫の死骸を探しに行くような勇ましさが、本来とよにあるようには思えないのだ。

「行かれますかしらん。敵軍に捕えられたり、はずかしめを受けるようなことは、ありますまいか」

「それはなんとも申せません。それでも行かなければ」

と、とよはきよのみならず、自分自身をも励ますような調子で言ってから、夫や、親兄弟の死骸を探しに出かけた者が、いくらも居るらしいと、声をひそめた。

「首級を持ち帰るのですって。そうして、仏壇に具えて供養をするのですって」

「首を、どうやって……」

「それは知れたこと、懐剣や刀で掻き取るのですよ。一心になれば、できないことはありますまい。……実はね」

幕臣は散り散りになって、あちこちに身をひそめているので、薩長軍はその残兵探しに躍起になっている。町家はもちろん、武家の屋敷にも勝手に踏みこんで、家探しを始めているらしい。その際、家人に乱暴狼藉を働いたり、器物をこわしたり盗んだり、婦女子を襲ったりするという。

ところが、あるじがすでに討死にをし、首を置いて香華をそなえているということであれ

ば、いかに鬼か蛇のような薩長軍といえども、乱暴を働くのは遠慮するだろう。家探しの必要もないし、喪に服した妻女や娘をはずかしめることもないだろう。

きよはようやく合点が行った。夫の首を敵に渡さないという覚悟も嘘ではないが、首を持ち帰ることで、敵の凌辱を防ぐことができるというのだ。

きよは二十五歳、とよは三つ年上である。とよも器量は悪いほうではない。薩摩っぽうなどの目には、江戸の水で磨き上げた、いきな年増に映るだろう。やつらに犯されたら、という恐怖がいつもある。

「参りましょう」

と、きよは答えた。女でも、二人いれば心強い。いざという時には自害する覚悟でいればよい。なんと言っても、夫弥之助の生否は確かめたかった。上野を逃れていれば、こんなにうれしいことはないが、武運つたなく、路上で討死にしているかもしれない。その場合にはやはり、死骸を運ぶのが無理なら、せめて首を掻き取ってくるほかはない。

とよは一旦家に帰った。きよは下着もみな取り替えて、支度をした。道は水溜りやぬかるみでひどいそうだから、裾の長いのを着ては行かれない。程々の普段着で裾丈の足りないのを探した。

三

とよは夫の野袴をはいてきた。背丈があるほうなので、おかしくはないが、きよは驚いた。

なみなみならぬ覚悟の程を示しているのだろうが、きよは同じ服装をする気にはなれなかった。二人とも風呂敷と油紙を持った。きよは懐剣を身に付けているだけだが、とよは脇差をさしていた。

往来は人通りが絶えている。家々は戸をとざしている。死骸などどこにもない。

三枚橋の近くまでくると、様子が違ってきた。きよには幕軍か薩長軍か見当もつかないが、数人が一団になって歩いているのに、いくらもぶつかる。抜身を持っているのもいる。弥次馬のようなのが、目立ってふえてきた。大方は若い、目付きのよくない連中だ。女連れなどには会わない。砲声、銃声は止んでいた。

死骸をはじめて見たのは、橋手前の路上で、二人が折り重なるようにして倒れていた。刺し違えたものらしい。服装から見て、幕軍である。二人は立ちすくんでいたが、どちらからともなく手を取り合って、ガクガクする膝で、死骸のほうへ歩いて行った。

二人の死者は早瀬でも弥之助でもない。それだけをようやく確かめると、とよは坐りこみそうになった。きよのほうがしっかりしていたが、このほうも必死で吐き気をこらえている。死骸に二度と目を向ける気にならず、とよを引張るようにして歩きだした。

路上の死骸は少しずつふえてきた。筒袖にだん袋、肩に錦切れを付けた、明らかに薩長の兵とわかる者の死体もある。戦いが終った直後で、死体収容などには、まだ手が回らないのだろう。

きよととよは、そんなふうにして、それぞれの夫の死骸を求め、山下から黒門口のほうへ

歩いた。山内の建物は、焼け落ちたのもあり、まだ炎を上げているのもあり、あたり一面に薄い煙が立ちこめている。戦死者の死骸は、広い面積にわたってバラ撒かれたようになっており、求め歩くだけで、大の男でもくたばってしまいそうだった。

しかも、見慣れるというわけにはゆかない。みんな、死んだ様子が違っていて、むごたらしいのだけは共通である。

「もう、わたしは動けません」

と、とよが絶え入るような声で言ったのは、清水観音堂の裏手で、葉桜が陰を造っているところだった。この辺りにも、死骸があちこちにあった。まだ探すのは始まったばかりで、山内一円はこれからなのだが、とよは意地も張りもなくなった様子だった。これはきよも同じことで、とよが先に言い出したに過ぎない。とよは死人のような顔色で、額に汗を浮かべ、目がうつろだった。きよにしても、ずっと足許の定まらないような歩き方をしていた。倒れないのが不思議だった。そして、時々おこりのように身内がふるえた。

「やっぱり無理でした。一休みして帰りましょうか」

と、とよが普通のお詣りにでも来たようなことを言ったが、きよはおかしいどころではなかった。

「うちで待っているほかはありませんね」

と、きよも同意した。

「お前さん方、旦那を探しに来たのじゃねえかい？」

と頬かぶりの男に声を掛けられたのは、休んでいくらか人心地もつき、腰を上げようとしていた時だった。男はどこぞの木陰から急に現われたようで、二人は思わず抱き合うようなかっこうになった。頬かぶりで顔はわからないが、男は笑いだした。声からすると、若かった。頑丈な体軀をしている。町人風だが、侍かもしれない。

「おれは怪しい者じゃねえ……と言っても無理だな。確かに怪しい者だ」

男はまた笑った。

「……だが、お前さんたちには何もしねえ。助けてやりたいと思って出て来たんだ」

討死にした者の首を持って行きたいという家族が大分いる。しかし何分、死骸を探すのが大変なので、果さずに帰るのが多い。しかし、本人の首でなくとも、幕軍の首であれば、急場の間には合うのではないか、と男は言う。戦死と見せる手段のことを、男はよく知っていた。

「首を世話してあげよう。どうするね？　お前さんたちじゃあ、首は取れめえ。他人の首でも幕軍なら、とむらってやれば功徳というものだぜ」

二人は相談して、首をもらうことにした。とにかく首が必要であるのは、男の言う通りだった。男がどういう素姓の者なのか、どうして首が手に入るのか、一向わからないが、それはどうでもよかった。

「手持ちはもうねえから、切ってきてあげるよ。すぐだから待っているがいい」

と男は言った。そしてどこかへ消えた。

小半刻（三十分）もしないうちに、男は山王社の方角から出てきた。両手に白いよごれた包みものをぶら下げている。中に首が入っているに違いない。

「首実検をすることもあるまい。何か持って来ているなら、この上から包んで、さげてお帰り。なに、西瓜よりちょいと重いくらいだ」

と男は言った。二人は受取って、それぞれの風呂敷に包んだ。男に駄賃と言うか、首代と言うか、そんなものを渡すことを、二人はうっかりして考えていない。男のほうから、二朱ずつくれと要求した。

「おれも食いっぱぐれているからな。こんなことをして銭に有りついているのさ。ところで、お前さん方の旦那はどういう人だ？」

かわるがわるに話すと、やはりそうか、と男はうなずいた。

「こんなところで死ぬなんて、愚の骨頂だ。お二人とも生き延びていりゃあいいがね」

男はそれだけ言うと、奥の木立の中にまぎれ入ってしまった。上野の山は、少しずつ人がふえてきていた。官兵が幕軍の分捕り品を、タダで町民に与えているというので、たちの悪い弥次馬が、どよめきながら寛永寺の方角に駆けだしている。

四

ずいぶん長い間、上野の山をうろついていたような気がするが、帰宅したのはまだ八ツ（午後二時）前だった。とよとは家の前で別れた。なんとなく、二人ともバツが悪かった。

あの男からもらった首は、夫の弥之助とは似ても似つかなかった。弥之助は優男の部類だが、首はひげ面をしていた。頬骨、顎の骨が張り、肌はどす黒い鉛色に見えるが、生前は赤ら顔で、よく陽焼けしていたのだろう。髪はまげもさかやきもなく、短くしたのを、うしろで無造作に結んでいる。

しかし、きよは首を仔細に見たわけではない。すぐに包んでしまった。仏壇に具えるというが、どんなふうにすればいいのか、見当がつかない。とよに聞きに行くのもはばかられた。とよにしても、困っているに違いなかった。

きよは考えた末、文机を仏前に持ち出し、上に三方を置き、それに包んだ首をのせることにした。首は真新しい絹布で包み直す。

灯明や線香立て、花立てなどを用意すると、どうやらそれらしい趣になった。生首でも、二重に包んであるので、それほど怖くはない。

弥之助が上野の山でむくろになっているとは、とても信じられない。いまにもひょっくり帰ってきそうな気がする。

恐れていたことが起ったのは、それから一刻（二時間）足らずのうちである。三人の薩兵が、表のくぐり戸をこわして、踏み入ってきた。玄関に出て応対する暇もなく、三人はわらじ履きのまま、勝手に上りこんだ。乱暴な家探しが、しばらく続いた。だれもいないとわかると、空腹だから酒食を出せと要求した。

それだけで帰ってくれれば、不幸中の幸いである。物を取るような様子もない。きよはふ

るえ勝ちな手先で用意をした。と言っても酒は買置きがない。冷飯と、残りものの菜だけである。彼等は、きよには一つもわからない言葉を交わしながら、ガツガツ食った。

彼等がチラチラときよに向ける目は、危険だった。きよは聞かれぬ先に、夫はきょう上野で戦死したので、首級を持ち帰って供養をしていると言った。彼等は少し驚いた様子で顔を見合わせ、何か話し合っていたが、感心したのではないことは、一人が冷笑を見せたのでわかる。その男は立って行って首の包みを解き、髪をつかんで首を持ち上げ、顔を見ていた。彼はちょっと不審そうな様子を見せたが、そのまま首を置き、絹布をかぶせた。

彼等はそれで殊勝にはならなかった。首を見て、反って淫欲をそそられたのかもしれない。夫の首を具えて、死をとむらっている御家人の妻女……その取り澄ました肌をむさぼりたいと思ったのかもしれない。

彼等はきよのような女の扱いを心得ていた。きよが身動きできぬように、二人が両側からおさえ、一人が素早く懐剣を抜き取り、さらにきよの鼻をふさぎ、あけた口に手拭を押しこんだ。こうなれば舌も噛めない。

きよは気が遠くなりかけた。男の手で、裾がまくられたのだけはわかった。両腕は二人の男にかかえられている。胸もはだけられた。男が自分のだん袋を引下げて脱いだ。褌を取ると、毛むくじゃらの下腹に、男のものがそそり立っている。男はきよの前にうずくまり、奇声を発しながら、肢をつかんで広げにかかった。きよの力が尽きた時、両側の男たちが、急にきよの手を放し、あわてて立ち上った。肢をつかんだ男は、まだ気付かないでいた。

きよは、その男のうしろに立った人物を、かすんだ目で見ていた。若い二十五、六歳の男で、話に聞いた赤い猩々のかぶりものはしていないが三人の上官らしかった。

彼は黙って、男の襟首をつかんで引き倒し、腰の刀を抜いて振りかぶったが、思い直したように、また刀を鞘におさめ、それから、起き直った男の顎を強く蹴上げた。男は失神して長くなった。

「こやつを縛って、ひいて行け。きさまらも同罪だから、覚悟をしておれ」

と、彼は紅潮した顔で、茫然としている二人に命じた。きよに聞かせるつもりか、はっきりした言葉である。

きよはようやく衣紋の乱れだけは直したが、腰が抜けたようで起き上れないでいる。

「失礼をした。斬り捨てようと思ったが、そうもできません。わたくしから幾重にもお詫びをいたします」

と、目をそらすようにしながら、若い上官はキチンと頭を下げた。

「……ご無念でしょうが、それでお許し下さい。やつらは厳重に処罰します」

自分の油断もあったのだから、気になさらぬように、ときよは蚊の鳴くような声だが、なんとかあいさつを返した。

薩藩の者で、姓は平原だと、彼は名乗った。濃い眉と明るい目をしている。陽に焼けてたくましくは見えるが、首筋のあたりはういういしい。二十五より若いのかもしれないと、きよは思った。あられもない姿を見られているので、まともに顔が上げられない。平原もそれ

にこだわっているようで、態度はひどくぎごちなかった。
「それは？」
と、平原は三方の上のものを指さした。
「夫の首級でございます」
「ではあなたは、上野へ？」
平原の目が大きくなって輝いた。きよはうなずいた。
「それはご立派です」
と、平原は誠意をこめて言った。きよはうしろめたい思いをしながら、この見知らぬ薩摩の青年に、強い好意を感じた。平原の母親はどんな人だろうと、ふと思った。
平原は首級に向って手を合わせてから、お騒がせして申しわけなかったが、今後薩軍が来ることはあるまいと言い、唐突に回れ右をして、出て行った。
「……あの」
危急を救われた礼を述べたいと思って声を掛けたのだが、平原は肩越しに聞いたような風情をし、そのまま行ってしまった。
しばらくして、きよは泣き出した。

五

隣家のとよの動静が気にかかった。薩兵が手分けをして、戸ごとに家探しをしているとすれば、とよの家にも来たはずで、ひどい目に遭ったかもしれない。とよが恥じて自害でもしたら大変だと思った。
裏庭におりて、境の垣根のほうへ歩き出した時、おれだよ、と言って、男が物置小屋の陰から出てきた。声で、一瞬弥之助かと錯覚したが、見ると、首を売ってくれた男だった。
「錦切れは出て行ったようだね。もう来まいから、お前さんの家はまず安心。悪いが、あれから尾けて来た。実はおれも追われている身なんだ。一晩でいいから、かくまってくれまいか」
と言う。はじめて身分姓名を名乗ったところによると、小普請の御家人で、上野の戦争には参加しなかったが、奥州に落ちて一働きしようと思っているそうだ。敵方についた商人から金をゆすったり、我が物顔で歩いている薩兵と喧嘩をやらかしたりしているので、薩軍の命令を受けた岡っ引にあとを追われている。姓は春日で、自分は独り者だ。
きよはかくまえないと断わった。女ひとりである。人にあらぬ疑いをかけられては立つ瀬がない。夫弥之助の生死は不明だが、男を泊めるようなことをしては、相済まない。
「そこを枉げて頼むんだ。おれは人の女房にちょっかいを出すような男じゃない。信じてくれ。やせても枯れても直参だぜ」
きよは頑固だった。さっきのことで、男という男に怖気をふるっている点もあった。
「それじゃあ仕方がない。泊めてくれとは言わないから、せめて夜まで居させてもらえねえかな」

これは承知するほかなかった。味方と言えば味方である。妙な真似はすまいとも思った。

これが甘い考えだったのは、すぐわかった。家に上がり、茶を振舞われて一休みしたあと、春日はいきなり、きよを押し倒しにかかった。きよと弥之助が寝所に使っている小部屋である。

「いいだろう？　このドサクサだ。だれにも知れやしねえ。お前さんも堅苦しい考えはおきなよ。おれたちみんな、先行きどうなるか、わかりゃしねえんだ。実は上野で会った時から執心だった。だから隣りへは行かねえのよ。……ふふ、聞きわけがねえなあ。痛え目を見ちゃあ損だろうに」

頬かぶりを取った春日は、苦味走ったなかなかの男前だった。筋骨もたくましい。女を無理になびかせるのに慣れていると見え、きよはいつの間にか帯を解かれ、前もはだけられてしまっていた。

「子を生んでいねえのだな。まるで生娘の体だ」

と、あえぎながら、春日は耳許でささやいた。薩兵の時とはまるで違い、きよは必死にあらがいながらも、どこか、あきらめて受け入れようとするところがあった。

きよは何もわからなかったが、春日がパッと身を起し、素早く帯を締め直した。人声、物音を聞きつけたようだ。

「いけねえ。また来やがったぜ。残念だがあとのお楽しみだ。押入れに入っていよう。おめえも身づくろいを早くしな。おれのことは一ことも口にするんじゃねえぜ。まんざら、厭な

男でもなかろう？」

と、春日は笑った。

訪れたのは平原だった。さっきとは違い、暗い、怒った顔だった。きよを正面から見ていた。

「あなたのご夫君だという首を見せていただきたい。さきほどの部下のひとりが、あれは味方ではないかと言っている」

と、平原は切り口上だった。他人の首を偽って夫だと言い、しかもそれが官兵の首らしいという。平原が憤激するのも無理はない。悪くすると斬られるか、陣地へ引張られるかもしれないのだが、きよは不思議に怖れを感じなかった。心の底で、もう一度平原に会えたのを、うれしいと思っている。

平原は首を丁寧に改めた。

「これは当藩の者の首だ。頭髪でわかる。兵卒は断髪か、こういう髪だ。しかも面ずれがある。当藩の撃剣は激しいから、大抵こうなる。江戸の柔弱な侍に面ずれがあるとは思えんな。それに長い遠征で、色が真黒だ。この首はどうしたものか、わけを承ろう」

と、平原は冷静な口調で言った。きよは春日とのいきさつを話した。それは春日の命に当然かかわることだが、この場合はこちらにも生死の問題だった。平原はきよの言葉を疑わなかった。

「そいつはどこにいるか、わかりませんか」

「……ここにおります」

しばらくためらった末、きよは白状した。とうとう春日を裏切った、ときよは感じている。そのことは言わずに済んだはずだが、なぜか平原に嘘をつけなくなっていた。春日に無体を仕掛けられたのを怨んだわけではない。ではなぜ……きよ自身にもわからない。

寝所の押入れから、春日は這い出してきた。

「お前さんが断わった時に、行っていりゃあよかったな」

と、春日は苦笑した。

「……あの首は確かに、おれが斬った薩兵のだ。斬ったわけは言うに及ぶまい。ところでおれは、縄目は厭だ。尋常の立合いとゆきたいね。お前さんも武士なら、承知してくれるだろう」

「立合ってやろう」

と、平原は言った。春日は無腰だったが、きよが弥之助の脇差を貸した。平原も脇差を抜いた。

「御新造、怨みに思っちゃいねえから、気にしなさんな。どうやらおれは、敵と戦うと言うより、恋仇と戦うような気がするぜ」

と、春日は言った。

勝負はすぐついた。平原の腕は、春日よりはるかに上で、春日がやみくもに上段から斬りかけると、一瞬前に、平原は身をかがめるようにして、春日の胴を払っていた。

それからしばらく、きよは気を失っていた。夫に抱かれていると思って目を開くと、目の上にある顔は平原だった。気を失っている間に自由にされたらしい。

だるい快さが身内にひろがっている。平原のシコシコした肌が、きよの体に密着しているのだった。春日の死骸はもうなかった。

平原はきよを見詰めていた。きよは目を閉じた。きよの手は自然に、平原の背中に回された。

部屋は暗くなっていた。平原と共にいた時間はかなり長かった。

きよは平原を送っては出なかった。平原はほとんど口を利かず、悲しそうにきよを見てから、のろい足取りで出て行った。

「おい、帰ったぞ。お前も無事だったか」

と、弥之助が裏木戸から忍んで帰ってきたのは、夜も九ツ（午前零時）時分だった。きよは物も言えず、夫を見ていた。どこでどうしていたのか、やつれてもいず、身なりもちゃんとしている。

戦うのは戦ったが、なにしろ飛道具が段違いな上、裏切りが出たりしたので、早いとこあきらめ、いままで床屋の職人に成りすまし、人もあろうに薩兵のひげを剃っていたのだ、と弥之助は言った。

「犬死にはばからしいからな。今後のことはゆっくり考えるとして、とにかく寝かしてくれ。クタクタだ。ところで、本当に何もなかったんだろうな？　だれもこなかったのか？」

「はい、だれも。何もかも、ずっと悪い夢を見ているようで」

と、きよは答えながら、首をどうしたものかと考えていた。さし当って、庭にでも埋めるほかはあるまい。平原は忘れたのか、要らぬと思ったのか、首を持って行かなかった。

平原のことは、一生弥之助に知られずに済むだろう。しかし、自分の胸からいつ消えてくれるだろうか、ときよは思った。

蛇（へび）

一

寅吉は草を刈っていた。子供の寅吉の背より高い笹、萱、薄の類が生い茂り、朝露に濡れている。草は牛に食わせるものである。かたわらに、枯枝を束ねたのが二つ置いてある。

寅吉は柄の朽ちたような使い古しの鎌を軽く使っているが、草は根元からみごとに刈られてゆく。

寅吉のうしろは爪先登りになっていて、登り切ったあたりに山道がある。山道は麓から蛇行して登ってきて、先のほうで消えてしまうが、その消える少し手前に、藁葺きの庵が建っており、老人と若い男が住んでいる。老人は禿げかかった頭に白髪をわずかに残し、その少ない髪を結いも束ねもせず、背に垂らしている。筒袖の粗末なひとえの着物に、たっつけ袴をはいている。真冬も袖なしの胴着を付けるだけで過す。

若い男は家来のようだと、寅吉は思っている。何から何まで、老人の世話をしているのだ。男はごく普通の体格をし、無口でおとなしい。

寅吉は男をあんちゃんと呼び、老人をご隠居さんと呼んでいた。二人の名前は知らない。ただ、父親の話では、老人はえらい剣術の名人だということである。すると、あんちゃんは剣術の弟子なのだろうが、あんちゃんがご隠居さんに剣術を習っているところを、寅吉はまだ見たことがない。

大体、どんなことをして暮しを立てているのか、わからない。この辺りは山ばかりなので、

野良仕事をするのではない。炭を焼くのでもない。だがけっこう、朝晩の食いものはあるようだ。

人が麓から運んでくるのかもしれない。人里離れたところなのに、客が時々あるからだ。客はいろいろで、一人だったり、二人連れだったり、供を何人も連れた、えらそうな侍だったりする。

寅吉は二人のために、釣ったウグイやヤマメや、時には鮎を持って行ってやることがある。別に父親からそう言いつけられたわけではないのだが、桃、栗、柿、アケビなども、季節のものを運んでやる。いまは夏で、酸っぱい夏みかんのほか、これという果物がない。

寅吉の出入りは自由だが、遊びに行っても大して面白くない。あんちゃんはまめまめしく働いており、ご隠居さんは木偶のように坐っているだけだ。寅吉が来ても、まず口を利いてくれることはない。

ただ、目が寅吉を年少の友達として認めている。おだやかでやさしいのだ。寅吉は二人の変な大人を好いている。

寅吉は草刈りの手をしばらく休めていた。

山道をだれかが登ってくる。一人のようだ。しかし別に珍しいことではない。

姿を現わしたのは大きな侍で、顔も、はだけた胸も、陽焼けで真黒だった。袖を肩までたくし上げ、荒い息を吐いていた。野袴や脚絆がほこりまみれだ。

侍は寅吉の休んでいる真うしろで足を停め、息を整えていた。

寅吉は侍をチラと横目にしただけで、また草刈りにとりかかった。
「精が出るな、小僧」
と、侍が声を掛けた。寅吉は返事をするのが面倒なので、黙ったままでいる。
「鎌の使い様、うまいものだな」
侍はまた言い、道から離れ、寅吉のほうへ何歩か降りてきた模様だった。
少し間があり、寅吉は振り返って侍を見たが、背を向けたまま、鎌を持つ右手を大きく左へ振った。鎌は勢いよく手を離れ、横に回転しながら侍のほうへ飛んで行った。それは侍の野袴の裾をかするようにして、道の向う側で落ちた。
「無礼者、鎌をわしに投げおったな」
と、侍は怒りだした。
「小僧、それへ直れ。刃物をなぜ投げた。次第によっては許さんぞ」
侍は刀の柄に手をかけている。
「蛇をやっつけてやったんじゃねえか」
侍のほうへぶらぶら近付きながら、寅吉は言った。
「ほれ、そこだ」
「ヒャッ」
侍は飛び上った。足許に、頭を斜めに削ぎ切られた蛇が横たわっていた。頭はすぐ近くに転がっており、血は双方の切り口から、ほんの少量滴り出ている。

「マムシさ」
と、寅吉が言った。
自分の悲鳴とあわて様を、侍はひどく恥じている様子だった。
「そうであったか。いや、済まぬ。これはその……毒蛇じゃろ。わしは踏みつけようとしていたのか」
寅吉はうなずいた。踏みつければ噛みついたはずだった。
「わしは怖いものがないが、蛇だけは好かん」
と弁解がましく侍は言葉を継いだ。
「ご隠居さんのところへ行くのかい？」
「ご隠居さん？　ははは、まあそうだ。卜伝先生に一度お目通りを願いたくて、尾張の国からやってきた。小僧、きさまはまさか、先生の弟子ではあるまいな」
「そんなものじゃねえ。おらは下の百姓のせがれだ。ご隠居さん、ボクデン先生って言うのか」
「知らんのか。塚原卜伝先生は天下に鳴り響いた剣の達人じゃ。ご壮年の頃は、あまたの弟子を引き連れて日本国中を回られた。立合うて敗れたことは一度もなし。合戦に出ておくれを取らず。高名を慕うて教えを乞う者、大小名をはじめとして無数。老齢となられ、一切の名利を捨ててこの山中に隠棲しておられるが、その腕にいささかの衰えもないはずじゃ。わしは先生にお目通りして、せめて一手ご指南をと思うているが、まずそれはかなうまい。そ

れならば一言の教訓でも……」

寅吉には、侍の言うことがほとんどわからず、またわかりたい気もない。侍は自分の言葉に酔ったように、高声で話しているが、寅吉は刈った草のまとめにかかった。

「礼を言うぞ、小僧」

侍はしゃべるだけしゃべって、銭を二枚、寅吉に投げ与えてくれた。

二

それから一刻（二時間）ほど経った。寅吉は草の束を背負い、その上に枯枝の束二つを載せて山を降り、家に戻って雑炊の朝飯を食った。しばらくして、また山へ登ったが、それは仕事のためではなく、遊びのためである。細長い竹竿を手にしていたが、その先にはとりもちが付いている。

山には小鳥が多いが、焼いたり、汁にしたりして食うには、雀が美味である。雀は竿先で翼を貫いて捕獲するのに程よい大きさである。山鳩もうまいが、やや寅吉の手に余る。

寅吉は草藪の奥の雑木林に入り、雀を三羽刺して捕り、首を縄の帯にはさんで腰に下げた。もっと捕りたいが、親の手伝いがあるので、あまり遊んでもいられない。

山道へ出ると、ご隠居さんの家のあるほうから、さっきの侍が降りてくるところだった。

「小僧、また来ていたか」

と言いながら、侍は寅吉に追いついた。

「ご隠居さんと会ってきたのかい？」

と、寅吉は聞いた。

「うむ。心易く招ぜられてな。粥の馳走にあずかったわ。しかもお手ずから椀に杓子ですくい入れ、振舞うてくだされた。面目、これに過ぐるものはない」

侍は感激の面持ちであった。ご隠居さんが粥を食わせてくれた、ということらしかった。

「剣術を教えてくれたのかい？」

「いやいや、名も知れぬ修行者に、軽々しくそのような教授をなされるお方ではない。また、剣の道について、べらべらと講釈をなされもせぬ。剣は以心伝心のものじゃでな。しかしながら、わしがあれこれ教えを乞うと、うなずいたりなされた。それで十分じゃ」

「なんにもしてくれなかったのか」

「小僧、そうは言うがな。卜伝先生と向い合って坐しておるだけで、先生の偉さをしかと教えられたのじゃ。寸分の隙もない。わしは射すくめられたようで、身じろぎもできぬ。半分つぶったような目が、わしの心の底まで見通しておる。千万言にも勝る教訓であったよ」

「ご隠居さんは目があんまり見えねえよ」

寅吉はばかばかしくなって言った。

「小僧、心眼というものがある。卜伝先生は心眼をもって、何事も見通されるのじゃ」

「足腰も悪いぜ。ご隠居さんは弱いさ」

「無礼なことを言うな。弱いとは何をもて……いや、これはおとな気なかった。きさまにわ

かることではないわ」

侍はもう寅吉を相手にせぬというそぶりで、先へ行きかけた。

「おらのほうが強いや」

と、寅吉は、侍の背へ声を掛けた。

侍は足を停めて振り返った。

「大言を吐くのう、小僧。なぜ強いと言う」

「おらが物をご隠居さんに投げたら、当らあ。いつかどんぐりを額に投げたら、当ったぜ。剣術のうめえ人なら、当らせねえだろう。だからおらより弱いんだ」

「そうか」

侍は意外の思いをしたようで、首をひねっていたが、

「嘘ではあるまいな」

と、少し突出したような目で、寅吉をにらんだ。

「本当だ。お武家さん、やってみせようか」

「ふむ。まさかとは思うが……先生は目がよほどお悪いようで、あるいはきさまの言う通りかもしれんて。見たいな」

侍は声をひそめた。

「そういういたずらをして、よう無事に済んだものだの」

「あんちゃんに叱られた。ご隠居さんは何も言わねえよ」

「よし、やってみろ」

庵は密生した藪を切り開いた、わずかな空地に建てられている。前は庭めいた風情でやや余地があり、うしろには少しばかりの畑があるという。常食の野菜を育てているのだろう。垣根も木戸もなく、小道からすぐ庭に入れる。

二人は忍び足で、藪に分け入った。

「音を立てちゃあ駄目だ」

と、寅吉が侍にささやいた。寅吉の身なりは裸同然、はだしで、全く音を立てないが、侍は柄が大きいので、そうもゆかない。足音はともかく、笹を分ける際に音を立ててしまう。侍はすっかり汗をかいた。

藪と前庭の境目の、少し手前で二人はしゃがんだ。茂みの隙間から、庵の正面が手に取るように見える。戸、障子は明け放してあり、部屋は手前が板の間で、炉が切ってある。奥は一段高い畳の間で、壁を背に、藪にひそんだ二人に正対した角度で、ご隠居さんが坐っている。

あんちゃんは向って左側に、横向きに坐っている。ご隠居さんの前には食膳があり、あんちゃんの前にはない。ご隠居さんだけが中食を摂るのだろう。あんちゃんは、給仕をしているのだ。寅吉たちからご隠居さんまでの距離は、七間ほど（十二、三メートル）であろう。

師弟はほとんど言葉を交していない。ご隠居さんが静かに箸を上げ下ろししているだけで

ある。

寅吉の左の手には、十数個のグミの実がある。グミは赤く色づいているが、まだ熟れてまではいない。もち竿は道端の木に立てかけて置いてきた。

「お武家さん、見ていな」

と、寅吉が言い、中腰になって構えた。

「当って怪我はなかろうな」

「あるものか。実がつぶれらあ」

言葉と同時に、寅吉は一粒ずつ、ご隠居さんに向ってグミの実を投げつけ始めた。

十数個の実が、つながったように空中を飛んで行く。侍は息を止めた。

ほんのわずかの間である。実はことごとくご隠居さんの額に命中した。

ご隠居さんはまったく避けなかった。避けなかったと言うより、何か飛んできて、額に当ったことすら知覚しなかったように見える。何事もないように、箸を動かし続けていたのである。

あんちゃんもまた、落着き払っていた。ご隠居さんが的にされている最中、あんちゃんは一度寅吉たちのほうに顔を向けたが、坐を立とうとはせず、叱声も発しなかった。ただ、ご隠居さんに向って何か言い、ご隠居さんが短く答えただけである。

ご隠居さんの顔は、つぶれたグミの果汁で汚れたようだ。あんちゃんが布巾で、その顔をていねいにぬぐった。

寅吉は黙って引返しだした。侍もぼんやりした表情で、それに続いた。

「見たろう。あんなもんさ。おれのほうが強い」

山道を降りながら、寅吉が言った。

「みごとなものだな。みな額に当った」

「あんなこと、なんでもねえや。おらはつぶてで小鳥を落すんだから。うさぎだって、つぶてを当てて、捕ったことがあらあ」

「そうか」

侍は感じ入ったようにうなずいた。

「ご隠居さんは、もう老いぼれているのさ。よけられねえんだ」

「そうかも知れぬ。麒麟も老いては駑馬に劣るというが……しかし、のう小僧、わしはいま一つ、腑に落ちぬぞ。と言うのは、先生は相手がきさまだと知ってあえて避けなかったのではないか？　害はなし、きさまに手柄をさせて、喜ばせてやるというのじゃ」

「そんなことはねえ」

寅吉は機嫌を悪くした。

「グミをぶっつけられりゃあ、傷にはならねえが、痛えよ。昔なら、箸でよけているさ。顔を振ってよけてもいいんだ。ご隠居さんはもうろくしているんだとも」

「まあ怒るな。なるほど、きさまの言う通りかもしれぬな」

侍はなんとなく寂しそうに、そう言った。

三

「お武家さん、疑っているんだな。そんならもういっぺんやろう」
と、寅吉が言い出した。山道をずっと下り、麓の人家がちらほら見えるところである。
「もう止せ。きさまの強いのはわかった」
侍は寅吉をなだめにかかった。
「いや、わかっていねえ。こんどは蛇だ」
「蛇？　おい小僧……」
侍がひるんだ。
「さっきの蛇がまだ転がっていらあ。そいつをご隠居さんに投げつけるんだ。面白えぜ」
寅吉はうれしそうに笑った。
「それはいかん」
「ご隠居さんも蛇が大嫌えで、怖がるんだ。嘘じゃねえよ。いつかご隠居さんと山を歩いていたら蛇が出て、ご隠居さんは動けなくなった。蛇がいなくなっても動かねえんだぜ。汗をたらたら流して」
「どうもきさまの言うことは信じ難いが、仮に先生がわし同様、大の蛇嫌いとしよう。その蛇を投げつければ、どうなると思う。グミの実のようにはいかんぞ。そのような非礼を働けば、きさまは斬り殺されるかもしれぬ。わしも危ない。やめたほうがよい」

と、侍は言ったが、興味をそそられた様子はかくせなかった。
「あんちゃんが追っかけてきたら、逃げりゃあいいんだ。あんちゃんは強いが、足はおらのほうが早いからな。お武家さんはどうだ」
「逃げるのも兵法のうち。きさまなんぞには負けんぞ」
「どんなもんかな。お武家さん、行こう」
侍は寅吉に引きずられてしまった。万一の事態になったら、平身低頭して許しを乞うほかはあるまい。それでも許さぬとあれば、寅吉があんちゃんと呼ぶ若者と、真剣の勝負をすることになる。卜伝先生に近侍する弟子だから、よほどの使い手に違いないが、こちらも腕に覚えがある。尋常に立合って敗れ、命を落しても、悔いはない。
二人は山道を引返した。頭のない蛇は、元の場所に近い草むらの中にあり、すでに蠅が群がっていた。
寅吉は平気な顔で、蛇の尻尾をつまんで持ち上げ、振り回した。蠅の群が飛び散った。
侍は恐れをなしてかなり後退し、火縄のように蛇を振り回しながら進む寅吉のあとに続いた。
前のかくれ場所に着いた。庵の畳の間の、さっきとほぼ同じ位置に、ご隠居さんとあんちゃんが坐り、ご隠居さんは見台を前に、書見をしているようだったが、時々、首がお辞儀をしていた。うたた寝であろうか。
あんちゃんは石臼をひいていた。単調な動作を繰り返している。

「届くかのう、小僧」
と、侍がひそひそ声で語りかけた。
「グミは届いたが、これは重く、長いぞ」
「見ていなよ」
寅吉はニヤリと笑った。死んだ蛇に慣れて、侍はもう怖がっていないが、それでも寅吉から数歩離れたところにいた。
寅吉が立上り、蛇の尻尾を握って大きく前後に振り回し始めた。勢いが十分についたところで手を放すと、蛇はほぼ一本の直線となって、意外に早い速度で空中を飛んだ。
ご隠居さんは、寅吉が蛇を投げた一瞬後、顔を上げて目を見開いた。何か異様なものが飛んでくるのを知ったと見えたが、それを避ける動きは全くなかった。
老いて肉のそげた顔をやや上に向けたが、目は果して、飛んでくる蛇を捕えているのかどうか。侍には瞳孔が白濁して、何も見えていないように思われた。
と、ご隠居さんの口から、ヒーッという悲鳴に似た音が発せられ、その瞬間に、蛇がご隠居さんの細くしなびた首にまともに当り、一旦首を巻くような形になってから、滑り落ちた。
ご隠居さんは仰向けに倒れた。
あんちゃんがすぐ坐を立ち、蛇をつかんで庭先に投げ捨て、気を失ったのか、長くなったままのご隠居さんの肩に手を掛け、上からのぞきこんでいたが、大事ないと思ったのか、また石臼の前に戻った。

侍は大きく息をついた。お前が正しかったようだ、と言いたげに、寅吉に顔を向けた。
だが、寅吉の全身は極度の緊張を示していた。じっと正面に目を凝らすふうだった。
束の間、視野から消えていたあんちゃんが、一飛びで庭へ跳躍してきた。跳躍しながら、寅吉めがけて白く細長いものを投げつけたが、それは雑草を縫って寅吉のくるぶしの辺に当ったようだった。
「痛え、しまった」
と言い、寅吉は転がって、やられた足をかかえて丸くなった。投げられたのは擂粉木である。
あんちゃんの手には鞭が握られていた。通常の馬用の鞭より、頑丈に出来ており、また長くもある。まともに打ち据えられると、皮膚をよういに裂くに違いない。
あんちゃんは寅吉めがけて飛込んできた。寅吉は足がしびれていると見え、立って逃げることができないでいる。
「寅、いたずらが過ぎる。きょうは許さん。仕置をしてやる」
と、あんちゃんが言った。
「するならしてみろ。できるものか」
と、寅吉は憎まれ口を叩き、這ってあとずさった。
「口は達者だの。行くぞ」
あんちゃんは息も継がせぬ早さで、鞭をふるい始めた。寅吉はいつの間にか擂粉木を手に

しており、それで巧みに鞭を受止めながら、動きの不自由な藪を抜け出した。
侍はまだ藪の中に身をひそめていた。あんちゃんは侍がそこにいるのを知ってか知らずか、ひたすら寅吉を追っている。
小道のほとり、やや開けた場所に戦いは移った。
鞭はうなりを生じて、間断なく、寅吉を襲う。寅吉は前後左右に身をかわし、あるいは伏せ、あるいは飛び上り、転がって避け、ほとんどあんちゃんの鞭を身に受けない。
侍はかくれ場所から思わず出てきた。見ものであった。
寅吉の敏捷さは、目を見張らせるものがある。
一本調子では避けられる、とあんちゃんは覚ったらしく、動きが慎重になった。一方寅吉は、ようやく足が自由に使えるようになった模様で、身のこなしが活発になっている。
侍は手に汗を握った。
「あんちゃん、しっかりしろ。当らねえぞ」
と、寅吉が言った。
「いよいよ勘弁ならん。ほどほどにこらしめようと思うていたが、もう容赦せんぞ」
と、あんちゃんがじっくりした声で言った。

四

あんちゃんは寅吉の退路を断つ動きをしながら、隙を狙っていた。寅吉はいつでも前後左

右に飛べるように、中腰になり、爪先立って、あんちゃんの目に注意を集中している。
かなり長く、戦いは続いた。寅吉には擂粉木しかないわけで、防ぐ一方になる。まともな一撃は避けても、かすられるのは仕方がなく、このままでは不利なのがはっきりしている。
あんちゃんは寅吉を子供とあなどることを止めていた。同等の武芸者に立ち向うほどの気迫が、顔に現われている。
寅吉に疲れが見え始めた。子供と大人の体力の違いであろうし、くるぶしやかすり傷の痛みのせいでもあろう。
「寅、ご隠居様に手をついて謝まれ。お許しになればそれでよい。きょうのところは見逃してやる。どうだ」
と、あんちゃんが声を掛け、
「謝まるもんか。ご隠居さんの弱いのが悪いんだ」
と、寅吉は応じた。
「それなら、足腰の立たぬように打ち据えてやる。覚悟をしろ」
「てめえこそだ」
このあと、あんちゃんは鞭の先を寅吉の顔をめがけて突き出し、のけぞって危うくかわしたところへ、返しの鞭で首根をしたたかに打った。
「痛え！」
と、寅吉は悲鳴を上げ、手にした擂粉木をあんちゃんに投げつけると、あんちゃんが払い

のける間にパッと逃げ出した。
「逃げるか。待て」
と、あんちゃんが呼びかけた時、侍が、
「しばらく」
と声を掛けて出てくると、あんちゃんの前で地面に正座し、大小を脱して前に置いた。
「さきほどのことは、それがしが責を負いまする。子供はただのいたずら心にて、それがしはその尻馬に乗り、そそのかしたような気味がござる。ことにあの蛇……なんとも無礼千万のことにて、申し開き様もござらん。すべてはそれがしの罪。あの子供はお許しくだされ。それがしを如何様にもご処分くだされ。予てよりお慕い申していた先生にお目通りが叶い、天にも昇る心持ちにて、そのまま引取れば何事もござらなんだのに、愚かなる欲心を起したばかりに……」
「欲心とはなんでござる？」
と、あんちゃんが聞いた。いまのいままで、あれほど激しく寅吉と渡り合っていたあんちゃんだが、呼吸は乱れず、いかにも平静であった。しかし侍は狼狽した。
「いや、欲心とはその……、好奇の心と申すか……」
「好奇の心」
「はあ。あの子供が、先生より自分のほうが強いと申すので……まさか信じはいたさぬが、なろうことなら、一見したく存じて」

「先生が負けた。それでご満足が行きましたか」
侍は言葉に詰ってしまった。あんちゃんはそれ以上の追及をやめた。
「これからどちらへ参られます」
「は、はあ。先生にお目見得が第一の念願にて、あとはよう考えずにおりましたが、ひとまず鹿島、香取へ」
「それはよろしゅうございますな。道中、お気を付けなされて」
侍が背後に人の気配を感じたのは、その時であった。ハッと思い、振り返ると、一間余り（約二メートル）をへだてて、卜伝先生が立っていた。茫乎とした面持ちで、両手をだらりと下げ、わずかの風にでも吹き倒されそうな、頼りなげな姿である。笑っているように見えるが、そう見えるだけかもしれない。細く、光の弱い目は、何を見ているのかわからない。朝方訪れた侍のことを覚えているかどうかも不明だった。
侍はとりあえずあいさつをし、無礼の詫びを言った。理解したのかどうか、ご隠居さんこと塚原卜伝は、よろよろと回れ右をし、おぼつかない足取りで、庵へ戻って行った。
「ご無事で安堵いたしました。あの時は、いやもうびっくりいたして」
「蛇を見るとあの始末でな」
と、あんちゃんは破顔一笑した。
「なに、気絶もしておりません。癖のようなもので」
「癖……」

侍はあんちゃんにいま一度詫び、別れを告げた。

寅吉は麓で侍を待っていた。

「小僧、ほとほと感心したぞ。きさまは強いな」

「だからそう言ったじゃねえか。そのうちにあんちゃんより強くなるぜ。ご隠居さんがもうろくしているのが、よくわかったろう、お武家さん」

侍はうなずいた。

「あれほど天下にその名をうたわれた名人が……老衰というものは、避けられぬな。嫌いな蛇を、あの有様では。きさまが逃げて行ったあと、ふとうしろを見ると、卜伝先生が立っておられてな。いつの間にこられたのか、きさまらの試合を夢中で見ておったので、つい気付かなんだが、なにしろ気絶もされず、ご無事でよかった。ごあいさつをして引取ったが」

「うちに帰って話したら、ちゃんに叱られた。こんどご隠居さんのところへ行ったら、よく謝まれってよ。なにかうめえものを持って行けって」

「そうするがよい。年寄りは大事にするものだぞ。からかってはいかん。卜伝先生は、いまでこそあの通りだが、偉いお方であったのじゃ。小僧の家はここから近いか？」

「あそこに見えるだろう、ほれ」

と、寅吉が指さした。山のはざまに、藁屋根がいくつか見える。なんの煙か、脇から立ちのぼっているのもある。

「どれどれ」

と、侍が前屈みになり、寅吉に顔を寄せた時、

「あれだ」

と動かした寅吉の腕が、侍の髪に触った。侍はおのれの髪が、なにか頼りないように感じたが、気にせずに、寅吉の指さす方角に目を凝らした。

「お武家さん、どうした。髪がザンバラだ」

と、侍を見た寅吉が、目を丸くして言った。

「なに」

侍は髪の元結に手をやった。元結が切れている。寅吉がけたたましく笑い出した。

「お武家さん、ご隠居さんに仇を取られたな。切ったのはご隠居さんだぜ」

「そんなはずはない。先生は一間も離れて立っておられた」

「お武家さんが気付かねえ間に、すぐうしろに来ていたのさ。忍び寄るのはうめえんだから。そうしてお武家さんの元結を小刀で切ってから、うしろへ下ったのさ」

「いや、しかし」

侍はそう言いかけて、黙りこんだ。元結は古いものではなく、自然に切れるはずはない。とすれば、刃物で切断されたと思うしかないが、あの時は寅吉とあんちゃんは戦っていた。ほかに人はいなかった。

卜伝先生は気絶してはいなかったという。

それでは、元結を切ったのは卜伝先生以外にはない。
最後のあいさつをした時、卜伝先生は笑っているように見えた。あれは事実、笑っていたのだ、してやったりと。
全く自分に気付かせずに、真うしろまで来た。侍が歩いているうちに切れるほどに、小刀で元結を傷付けた……
「不覚じゃ。なんたる不覚」
侍は首を振った。ザンバラの髪が左右に揺れた。

解説

縄田一男

本書『江戸の一夜』の著者多岐川恭が脳梗塞のため亡くなったのは、昨平成六年の十二月三十一日、大晦日のことである。享年七十四歳。世間には、その年齢で亡くなる方も少なくはない。だが、その訃報自体が未だに信じられない気がするのは、氏が亡くなる直前まで中間小説誌の常連であり、「週刊新潮」で心ならずも遺作となった『レトロ館の殺意』を完結させたばかり、そして人気作家の常として旧作も続続文庫化されている最中であったからだ。
多岐川恭は一般には昭和三十三年、女子高生の同性愛に絡む殺人を書簡体形式で描いた技巧派ミステリー、『濡れた心』で江戸川乱歩賞を、そして同年刊行された作品集『落ちる』で直木賞を連続受賞して押しも押されもせぬ作家的地歩を築いた、ということになっている。
が、白家太郎名義で旧「宝石」に探偵小説を書いていた頃から玄人受けする書き手として知られており、戦前の『人生の阿呆』（木々高太郎）を除けば、ミステリーが直木賞に選ばれるのははじめてのこと。この後、水上勉、生島治郎、三好徹、結城昌治と、ミステリー系の実力派が次次と同賞を得ることになる、その端緒を拓いたキャリアは、一朝一夕のものではなかったのである。

その多岐川恭作品の特色を一言でいえば、〈悪の魅力〉ということになろうか。色と欲とが織り成すミステリアスな世界で展開される、悪の愉悦、甘美な背徳への誘い、そして私たちがなかなか越えようとしても越えられない世間の規範や法の枠組を、易易と乗り越えてしまうアウトサイダーたち。それらを通して語られる人生の明暗、更には人間の心の奥底にひそむ魔性や意外なところで発揮される正義感等等……。多岐川作品は常に確かな小説技巧を駆使し、罪におののく、或いは身悶える人間心理の襞にメスを入れることによって独自の世界を構築して来たのである。

『静かな教授』や『孤独な共犯者』等、事件を犯人の側から描いた倒叙ものが多いのも、作者のそうした関心のあり方を端的に示したものであろうし、多岐川恭の現代ミステリーの中でも私が最も愛読する『氷柱』――この作品の主人公は、遺産で暮らしている元中学校教師。冷やかな性格から氷柱という綽名があり、ある日、法で裁くことの出来ない悪の存在を知って、自らの手でこれを処断しようとする人物として描かれている。正義の士でありながら、明らかに社会の規範から逸脱したアウトサイダーとして設定されており、灰色のトーンの中、心の中に影の部分を抱えた人物を主役に据えることで、単なる善玉悪玉といった色分けを越えた陰翳ある作中人物の創造に成功しているのである。

その多岐川恭がはじめて時代ものに着手したのは、昭和三十四年に発表した戯曲「雲がくれ観音」だというから、こちらのキャリアも相当、年季が入っている。「国性爺合戦」異聞ともいうべき『明暦群盗図』や伝奇色豊かな『女人用心帖』を経て、昭和四十二年、「週刊新潮」誌上で質・量の双方からいってこの作者の代表作である連作『ゆっくり雨太郎捕物控』の執筆が開始された。多岐川恭は、かつて「捕物帳は半七と銭形でたくさんだ」と述べたことがあり、書くからには新機軸を打ち出さねばならない、と考えていた節がある。周知のごとく、この作品は毎回三十枚の読み切りという週刊誌連載の形式を逆手にとり、各篇の末尾に雨太郎の覚え書きを据え、その中で事件の核心や処刑の等級を明らかにして首尾を整え、更に犯罪の動機や事件発覚の経緯に焦点をしぼるといった小説技巧により、捕物帳の歴史に新たな展開をもたらした逸品だった。加えて、病弱と称して目下、休職中、愛人ありのところに転がり込んで、ぶらぶらしているという主人公若月雨太郎の設定は、通り一遍の正義感とは異なっており、こちらも、脱サラ志向の陽気なアウトサイダーということが出来るだろう。

そして、捕物帳においても、同一のパターンに縛られることを潔しとしない作者は、次次と新しい趣向とキャラクターを創造、今、思いつくままに挙げても、『岡っ引無宿』『お夏太吉捕物控』『四方吉捕物控』『目明しやくざ』『闇与力おんな秘帖』『晴れ曇り八丁堀』『紅屋お乱捕物秘帖』『情なしお源金貸し捕物帖』等があり、これに捕物帳に準じるかたちの連作『首打人左源太』や『悪の絵草紙』等を加えていくと、軽く十指は越えてしまう。多岐川恭は恐らく横溝正史や野村胡堂と並んで、最も多くの捕物帳を産み出した書き手ということが出来るだろう。

だが、これだけではない。前述の『明暦群盗図』等の他に、長崎の出島を一種の密室とし

て謎ときミステリーを構成した『異郷の帆』、幕末暗殺史の謎に迫った『姉小路卿暗殺』、虚構を排した本格的な歴史長篇『武田騎兵団玉砕す』等の長篇以外にも夥しい数の短篇が書かれているのである。

本書『江戸の一夜』は、平成元年十一月二十日、光風社出版から刊行された一巻で、そうした多岐川作品の精髄ともいうべき傑作集成となっている。

大体、この表題作からして、はじめて江戸勤番となった九州は有馬家の秋野又兵衛と、悪の世界に生きる江戸女お園の交渉を描いて、こうした余韻のある味わいは凡手には出し得ないものであろう。以下、この一巻は、この表題作に統率されるが如く、様々な男女が織り成す〈江戸の一夜〉を巧みな一幕ものの芝居にも似た筆致で描いていく。

多岐川作品の持ち味が〈悪の魅力〉にあることは既に述べたが、そうしたピカレスク風の味つけが成された諸作が、悪党どもがしのぎを削る「ペテン師たち」、零落した武士の心にかえってどん底にいることの安らぎと諦観を見る「淪落」、悪党どもの蟻地獄に落ちた主人公を描きつつも、結びの一行で誰もが「上手い！」と膝をたたかざるを得ない「ある御落胤」、一種の破牢綺譚ともいうべき「欺し欺され」といった作品であろう。

更にそうしたピカレスク風の味つけがされたものの中から、男女の愛憎にテーマをしぼって様々な逆転劇やひねりを利かせたものを挙げると、「笑くぼの女」「不義の部屋」「隣りも妾宅」「みれん」ということになろうが、多岐川恭版「裏窓」ともいうべき発端ではじまり、男二人のそれぞれの愛人に対するあたたかな眼差しで幕を閉じる「隣りも妾宅」と、この作

品と同傾向の結末ながら、シリアスな武士の哀しみをたたえた「不義の部屋」は、本書の中でも際立ったうまさをたたえた逸品ではないだろうか。

本書には、この他にも、二度目の亭主の敵を討ってから、巧みなラストの数行で、ヒロインのこれからの幸せを約束する「出戻りぐせ」、出色の仇討綺譚「渡し場」、夫を上野の山の戦いに送り出した妻の極限状況下における、一日の秘めごとを描いた「夫の首」と、まだまだ作者の小説巧者ぶりを見せつける作品が揃っているが、虚実とり混ぜた著名人物を扱った作品でも、その筆の冴えは、いささかも変わることがない。

酔いどれ浪人の正体が読んでからのお楽しみの「酔眼の友」、忠臣蔵の大石内蔵助の悪名高き同僚大野九郎兵衛を新趣向で描く「夜逃げ家老」、鶴屋南北の「東海道四谷怪談」よりは、むしろそのモデルとなった実話に重点を置き、より近代的な怪談話に仕立て上げた「権八伊右衛門」、塚原卜伝の登場する剣豪小説の秀作「蛇」等等——。

以上、十六篇、いずれも、見せかけの華やかさはないが、真に底力を持った小説の醍醐味を伝えるものばかりである。さすがはデビュー以来、一度たりとも第一線を退いたことのない多岐川恭の手になる作品と、本書を読んだ方は誰もが了解されたことだろう。安心して作品と付き合うことの出来る書き手が逝ってしまった後の淋しさは埋めようもないが、その遺された作品の多かりしことがせめてものなぐさめであると、今、つくづく思っている次第である。

（平成七年十月、文芸評論家）

この作品は平成元年十一月光風社出版より刊行された。

多岐川恭著

用心棒

過去は捨てた、未来も捨てた。色と欲の泥沼の中で、明日をも知れぬ用心棒――骨の髄まで腐った奴らを南無三宝と捨て身斬り。

多岐川恭著

色仕掛 闇の絵草紙

巽屋孫兵衛が率いる、ひと癖もふた癖もある面々が色欲に呆けた悪党どもを、あの手この手で引っ掛ける。江戸のピカレスク・ロマン。

多岐川恭著

色仕掛 深川あぶな絵地獄

巽屋孫兵衛一党が、色欲に狂った男どもを鮮やかな手口で欺き、身代残らず巻き上げる。痛快無比の8編を収めたシリーズ第二弾！

多岐川恭著

暗闇草紙

お先真っ暗な連中が肩寄せ住まう、人呼んで暗闇小路。わけありの娘から奪われた観音像は誰の手に、また観音像に隠された秘密は？

多岐川恭著

春色天保政談

御家人の次男坊、波岡進次郎は女癖の悪さが災いして江戸城内の権力争いに巻き込まれた。遊び人の進次郎が味わう地獄と極楽の顛末。

滝口康彦著

鬼哭の城

果たし合いを余儀なくされた武士の困惑、藩主の意にそわぬ娘を嫁にとった親子が迎えた悲劇……武士道無残を峻烈に描く傑作短編集。

池波正太郎著

忍者丹波大介

関ケ原の合戦で徳川方が勝利し時代の波の中で失われていく忍者の世界の信義……一匹狼となり暗躍する丹波大介の凄絶な死闘を描く。

池波正太郎著

男（おとこぶり）振

主君の嗣子に奇病を侮蔑された源太郎は乱暴を働くが、別人の小太郎として生きることを許される。数奇な運命をユーモラスに描く。

池波正太郎著

俠客

「お若えの、お待ちなせえやし」の幡随院長兵衛とはどんな人物だったのか——旗本水野十郎左衛門との宿命的な対決を通して描く。

池波正太郎著

剣客商売

白髪頭の粋な小男・秋山小兵衛と厳のように逞しい息子・大治郎の名コンビが、剣に命を賭けて江戸の悪事を斬る。シリーズ第一作。

池波正太郎著

黒白（上・下）

—剣客商売番外編—

若き日の秋山小兵衛に真剣勝負を挑んだ小野派一刀流の剣客・波切八郎。対照的な二人の剣客の切り結びを描くファン必読の番外編。

池波正太郎著

谷中・首ふり坂

初めて連れていかれた茶屋の女に魅せられて武士の身分を捨てる男を描く表題作など、本書初収録の3編を含む文庫オリジナル短編集。

司馬遼太郎著

梟の城

直木賞受賞

信長、秀吉……権力者たちの陰で、凄絶な死闘を展開する二人の忍者の生きざまを通して、かげろうの如き彼らの実像を活写した長編。

司馬遼太郎著

国盗り物語

（全四冊）

貧しい油売りから美濃国主になった斎藤道三、天才的な知略で天下統一を計った織田信長。新時代を拓く先鋒となった英雄たちの生涯。

司馬遼太郎著

関ケ原

（全三冊）

古今最大の戦闘となった天下分け目の決戦の過程を描いて、家康・三成の権謀の渦中で命運を賭した戦国諸雄の人間像を浮彫りにする。

司馬遼太郎著

花神

（全三冊）

周防の村医から一転して官軍総司令官となり、維新の渦中で非業の死をとげた、日本近代兵制の創始者大村益次郎の波瀾の生涯を描く。

司馬遼太郎著

果心居士の幻術

戦国時代の武将たちに利用され、やがて殺されていった忍者たちを描く表題作など、歴史に埋もれた興味深い人物や事件を発掘する。

司馬遼太郎著

項羽と劉邦

（全三冊）

秦の始皇帝没後の動乱中国で覇を争う項羽と劉邦。天下を制する〝人望〟とは何かを、史上最高の典型によってきわめつくした歴史大作。

藤沢周平著

用心棒日月抄

故あって人を斬り脱藩、刺客に追われながらの用心棒稼業。が、巷間を騒がす赤穂浪人の動きが又八郎の請負う仕事にも深い影を……。

藤沢周平著

竹光始末

糊口をしのぐために刀を売り、竹光を腰に仕官の条件である上意討へと向う豪気な男。表題作の他、武士の宿命を描いた傑作小説5編。

藤沢周平著

時雨のあと

兄の立ち直りを心の支えに苦界に身を沈める妹みゆき。表題作の他、江戸の市井に咲く小哀話を、繊麗に人情味豊かに描く傑作短編集。

藤沢周平著

橋ものがたり

様々な人間が日毎行き交う江戸の橋を舞台に演じられる、出会いと別れ。男女の喜怒哀楽の表情を瑞々しい筆致に描く傑作時代小説。

藤沢周平著

孤剣

用心棒日月抄

お家の大事と密命を帯び、再び藩を出奔——用心棒稼業で身を養い、江戸の町を駆ける青江又八郎を次々襲う怪事件。シリーズ第二作。

藤沢周平著

刺客

用心棒日月抄

藩士の非違をさぐる陰の組織を抹殺するために放たれた刺客たちと対決する好漢青江又八郎。著者の代表作《用心棒シリーズ》第三作。

山本周五郎著

樅ノ木は残った

毎日出版文化賞受賞(全二冊)

「伊達騒動」で極悪人の烙印を押されてきた原田甲斐に対する従来の解釈を退け、その人間味にあふれた新しい肖像を刻み上げた快作。

山本周五郎著

柳橋物語・むかしも今も

幼い一途な恋を信じたおせんを襲う悲しい運命の「柳橋物語」。愚直なる男が愚直を貫き通したがゆえに幸福をつかむ「むかしも今も」。

山本周五郎著

五瓣の椿

自分が不義の子と知ったおしのは、淫蕩な母と相手の男たちを次々と殺す。怠絶えた五人の男たちのそばには赤い椿の花びらが……。

山本周五郎著

つゆのひぬま

娼家に働く女の一途なまごころに、虐げられた不信の心が打負かされる姿を感動的に描いた人間讃歌「つゆのひぬま」等9編を収める。

山本周五郎著

松風の門

幼い頃、剣術の仕合で誤って幼君の右眼を失明させてしまった家臣の峻烈な生きざまを描いた「松風の門」。ほかに「釣忍」など12編。

山本周五郎著

風流太平記

江戸後期、ひそかにイスパニアから武器を密輸して幕府転覆をはかる紀州徳川家。この大陰謀に立ち向かう花田三兄弟の剣と恋の物語。

小松重男著　**ずっこけ侍**

主君の逆鱗に触れ「永の暇」を頂戴してしまった三毛蘭次郎。だが人生ずっこけてからが面白い。激笑仕掛人の艶福ひょうきん行状記。

小松重男著　**蚤とり侍**

主君の勘気に触れ、命に従って女客に春を売る「猫の蚤とり」侍の奇妙な運命を描く表題作など、愛すべき江戸の男たちの六つの物語。

小松重男著　**でんぐり侍**

侍、岡っ引、豪商、隠密、女……、さまざまな生きざまを艶やかに、そしてせつなくも滑稽に描いた9編を収録する侍シリーズ番外編。

小松重男著　**川柳侍**

巷に流行る川柳に魅せられた職人、公事師、無宿人。そればかりか、なんと殿様までが密かに作りはじめた。文庫書下ろし時代長編。

小松重男著　**やっとこ侍**

扶持（サラリー）は低くても、こころはいつもサムライ。江戸時代の底辺を担って生きた下級武士の心意気を、無類のユーモアとペーソスで綴る。

小松重男著　**間男三昧**

男子禁制の奥向で、女だけの芝居を上演したお狂言師。彼女たちが奥女中相手に披露したといちはいちの裏芸とは？　時代短篇9編。

南原幹雄著　**付き馬屋おえん　暗闇始末**

貸金取りたてを請け負う馬屋の跡目を町内きっての器量よし、おえんが継いだ。色街吉原に型破りのヒロインが活躍する連作時代小説。

南原幹雄著　**付き馬屋おえん　吉原御法度**

花の吉原の焦げついた勘定を取りたてる付き馬屋。悪質な遊客に対しては手段を選ばずに、美しきヒロインが活躍する痛快連作短編集。

南原幹雄著　**抜け荷百万石**

大規模な抜け荷組織を追跡する八郎太に襲いかかる謎の暗殺集団。政権転覆の陰謀と戦う公儀隠密の活躍を描いた痛快長編時代小説。

南原幹雄著　**幕府隠密帳**

尾張徳川家の陰謀を公儀御庭番が摑んだ。尾張と手を結んだ伊賀甲賀の秘術が御庭番を襲う。忍者同士の凄絶な闘いを描く連作長編。

古川　薫著　**覇道の鷲　毛利元就**

冷徹な謀略、緻密な計略を駆使して西国の覇者たらんとした知将、毛利元就の野望と大胆無比な策略を描き、意外な素顔に迫る長編。

宮部みゆき著　**本所深川ふしぎ草紙**

深川七不思議を題材に、下町の人情の機微とささやかな日々の哀歓をミステリー仕立てで描く七編。宮部みゆきワールド時代小説篇。

隆慶一郎著　**吉原御免状**

裏柳生の忍者群が狙う「神君御免状」の謎とは。色里に跳梁する闇の軍団に、青年剣士松永誠一郎の剣が舞う、大型剣豪作家初の長編。

隆慶一郎著　**鬼麿斬人剣**

名刀工だった亡き師が心ならずも世に遺した数打ちの駄刀を捜し出し、折り捨てる旅に出た巨軀の野人・鬼麿の必殺の斬人剣八番勝負。

隆慶一郎著　**かくれさと苦界行**

徳川家康から与えられた「神君御免状」をめぐる争いに勝った松永誠一郎に、一度は敗れた裏柳生の総帥・柳生義仙の邪剣が再び迫る。

隆慶一郎著　**一夢庵風流記**

戦国末期、天下の傾奇者として知られる男がいた！　自由を愛する男の奔放苛烈な生き様を、合戦・決闘・色恋交えて描く時代長編。

隆慶一郎著　**影武者徳川家康**（上・中・下）

家康は関ヶ原で暗殺された！　余儀なく家康として生きた男と権力に憑かれた秀忠の、風魔衆、裏柳生を交えた凄絶な暗闘が始まった。

隆慶一郎著　**死ぬことと見つけたり**（上・下）

武士道とは死ぬことと見つけたり――常住坐臥、死と隣合せに生きる葉隠武士たち。鍋島藩の威信をかけ、老中松平信綱の策謀に挑む！

新潮文庫最新刊

井上靖著　**孔子**

戦乱の春秋末期に生きた孔子の人間像を描く。現代にも通ずる「乱世を生きる知恵」を提示した著者最後の歴史長編。野間文芸賞受賞作。

西村京太郎著　**祖谷・淡路　殺意の旅**

殺人事件の鍵を握る妖しげな「秘密クラブ」。かつての部下に掛けられた容疑を晴らすため、十津川はその組織を操る巨悪の実態を追う！

山村美紗著　**毎月の脅迫者**

急死したその男は、月々一千万円もの大金を、受取人不明の銀行口座に振込んでいた……。混迷する難事件に〈葬儀屋探偵〉明子が挑む。

藤本ひとみ著　**ブルボンの封印**（上・下）

恋と陰謀が渦巻く17世紀半ばのルイ王朝を舞台に、運命に果敢に立ち向う若き男女を描く壮大な歴史ロマン。鉄仮面伝説を新たに解釈。

高橋治著　**春朧**（上・下）

利益や効率を優先するあまり、もてなしの心を忘れた老舗の旅館。その中で理想を追い求める若女将の一途な心とはかない恋を描く。

幸田文著　**木**

北海道から屋久島まで訪ね歩いた木々との交流の記。木の運命に思いを馳せながら、鍛え抜かれた日本語で生命の根源に迫るエッセイ。

妹尾河童著
河童の手のうち幕の内
とっておきの河童の秘密と〝覗き〟のコツを大公開！　どこを食べても楽しくおいしい、盛り沢山の極上弁当。細密イラストいっぱい。

池部　良著
続　そよ風とつむじ風
昭和10年代。僕は思春期を迎えていた。頑固者のおやじも、やっと一人前扱いしてくれる。大学を出た僕は、映画界へと進む決心をした。

池宮彰一郎著
事変
——リットン報告書ヲ奪取セヨ
昭和六年、満州。政府の方針を無視した暴挙に出た関東軍を解体する為、驚くべき〈密命〉が〝ある集団〟に下された。傑作長編小説。

多岐川　恭著
江戸の一夜
江戸勤番になった実直な侍と妖艶な女の一夜を描く表題作など十六編。江戸を舞台に色と欲に狂奔する人々の姿を活写する時代小説集。

杉浦日向子著
百物語
江戸の時代に生きた魑魅魍魎たちと人間の、滑稽でいとおしい姿。懐かしき恐怖を怪異譚集の形をかりて漫画で描いたあやかしの物語。

河野多恵子著
みいら採り猟奇譚
野間文芸賞
自分の死んだ姿を見るのはマゾヒストの願望。グロテスクな現実と人間本来の躍動と日常生活の濃密な時空間に「快楽死」を描く純文学。

新潮文庫最新刊

J・グリシャム
白石朗訳
依頼人（上・下）
秘密を話せば殺される——恐るべき情報を知ってしまった11歳の少年マークは、全財産の1ドルで女弁護士レジーに助けを求めた……。

T・クランシー
田村源二訳
日米開戦（上・下）
大戦中米軍に肉親を奪われた男が企む必勝の復讐計画。大統領補佐官として祖国の危機に臨むライアン。待望の超大作、遂に日本上陸。

Q・タランティーノ他
芝山幹郎訳
フォー・ルームス
四つの部屋からのでたらめな注文に一晩中悩まされる、新米ベルボーイ史上最悪の大晦日。四人の奇才が集まって創り上げた超話題作。

T・マクミラン
松井みどり訳
えくぼ消さないで
出会った瞬間に恋に落ちてしまったふたり。真実の愛のかたちを前向きに探る、女と男のホンネで描かれた新しいラヴ・ストーリー。

J・クランツ
小沢瑞穂訳
スクループルズ2
—愛と野望の物語—（上・下）
高級ブティック、スクループルズの変遷をめぐる女たちと男たち。失敗と成功、失意と歓喜、愛と情熱が渦巻く華やかな長編ロマンス。

フリーマントル
染田屋茂訳
嘘に抱かれた女
孤独なオールド・ミスの前に突然現れた男。セックス・スパイである彼の任務は、彼女を籠絡し、機密情報を得ることだったが……。

江戸の一夜

新潮文庫　　た－48－8

平成七年十二月一日発行

著者　多岐川恭

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話編集部(〇三)三二六六―五四四〇
読者係(〇三)三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・三晃印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Miyoko Matsuo 1989　Printed in Japan

ISBN4-10-109918-9 C0193